

ふくみつ
福満遺跡(第23次)

プロシードアリーナHIKONE (彦根市スポーツ・文化交流センター)建設工事に伴う発掘調査報告書

令和6年(2024年)3月

彦 根 市
公益財団法人滋賀県文化財保護協会

序

彦根市では、彦根市総合計画の中で『歴史と文化を紡ぎ、未来を創造する、市民一人ひとりが輝くまち彦根』を「めざすまちの姿」として掲げています。これを実現するために、4つの「まちづくりの方向性」を設けていますが、その中の1つが『歴史・文化を生かし、にぎわいと特色ある産業が育つまち』です。市内にある約200箇所の埋蔵文化財包蔵地は、まさに彦根の歴史と文化を生き生きと物語る市民共有の財産であり、彦根ならではの特色あるまちづくりと将来を担う人づくりを進める上での大切な資産でもあります。これらの資産を次世代へ守り伝えていくため、発掘調査を実施し、市内の埋蔵文化財の適切な保存と活用而努力しています。

本書は、プロシードアリーナHIKONE（彦根市スポーツ・文化交流センター）建設工事に伴い実施した、彦根市西今町および小泉町に位置する福満遺跡の発掘調査報告書です。彦根市を調査主体、公益財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として平成29・30年度に現地の発掘調査を、令和元年度から5年度に整理調査を実施し、その成果をまとめました。調査では、縄文時代から生活が営まれ、弥生時代から古墳時代まで集落を展開させ、飛鳥時代から平安時代前期には掘立柱建物を主体とする公的性格を帯びた施設が広範に展開される状況が確認されるなど、当該地域の歴史・文化を知る上で貴重な調査成果を得ることができました。この成果を、彦根市の歴史や文化を学ぶ新たな歴史資料として、また特色ある郷土の魅力を伝える新たな情報として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本発掘調査を実施するにあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様ならびに関係諸機関の皆様に、心よりお礼を申し上げます。

令和6年(2024年)3月

彦根市長

和田 裕行

例 言

1. 本書は、プロシードアリーナHIKONE（彦根市スポーツ・文化交流センター）建設工事に伴い実施した彦根市西今町・小泉町に所在する福満遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は彦根市長からの依頼により、彦根市を調査主体、公益財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。発掘調査は平成29・30年度に、整理調査は令和元～5年度に実施した。
3. 発掘調査は、公益財団法人滋賀県文化財保護協会 内田保之・木下義信（平成29年度）、辻川哲朗・阿刀弘史・田中咲子・山口誠司（平成30年度）、中川治美（平成29・30年度）が担当し、整理調査は同協会 中村智孝（令和元・2年度）、阿刀（令和3・4年度）、三宅弘（令和3年度）、中川（令和4・5年度）が担当した。
4. 本書の執筆は、第1章～第3章および第4章の木製品を阿刀が、木製品以外の第4章・第5章を中川が行った。編集は中川が担当した。
5. 木製品の樹種同定は株式会社吉田生物研究所に委託し、同定結果を掲載した。また、遺物の写真撮影は写房楠華堂（内田真紀子）に委託した。
6. 本書に用いた水準高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標・方位は平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）に基づく。
7. 本調査で出土した遺物や写真・図面類は彦根市で保管している。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 はじめに	1
第2節 調査に至る経緯	1
第3節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3節 既往の調査	8
第3章 調査と記述の方法	
第1節 発掘調査の方法	9
第2節 整理調査の方法	11
第3節 本書の記述方法	12
第4章 調査の結果	
第1節 A区	15
第2節 B区	194
第3節 C区	209
第4節 D区	222
第5節 木製品の樹種同定	227
第5章 総括	
第1節 はじめに	233
第2節 各期の様相	233
第3節 おわりに	249

挿図目次

第1章 調査の経緯と経過

図 1-1 調査地位置図	2
--------------	---

第2章 遺跡の位置と環境

図 2-1 調査地周辺の地形	5
図 2-2 福満遺跡と周辺の遺跡	7

第3章 調査と記述の方法

図 3-1 調査区位置図	10
--------------	----

第4章 調査の結果

図 4-1 調査区全体図	16
図 4-2 A 1区 平面図	17
図 4-3 A 1区 南東壁断面図	18
図 4-4 A 1区 南西壁断面図	19
図 4-5 A 1区 北西壁断面図	20
図 4-6 A 1区 溝S8 出土遺物	21
図 4-7 A 1区 河道S9北半0~20cm 出土遺物(1)	23
図 4-8 A 1区 河道S9北半0~20cm 出土遺物(2)	24
図 4-9 A 1区 河道S9北半0~20cm 出土遺物(3)	25
図 4-10 A 1区 河道S9北半0~20cm 出土遺物(4)	27
図 4-11 A 1区 河道S9北半0~20cm 出土遺物(5)	28
図 4-12 A 1区 河道S9北半20~40cm 出土遺物	30
図 4-13 A 1区 河道S9北半40~60cm 出土遺物(1)	32
図 4-14 A 1区 河道S9北半40~60cm 出土遺物(2)	33
図 4-15 A 1区 河道S9北半60~80cm・80cm~	

最下層 出土遺物	35
図 4-16 A 1区 河道S9南半0~20cm 出土遺物(1)	37
図 4-17 A 1区 河道S9南半0~20cm 出土遺物(2)	38
図 4-18 A 1区 河道S9南半0~20cm 出土遺物(3)	39
図 4-19 A 1区 河道S9南半0~20cm 出土遺物(4)	41
図 4-20 A 1区 河道S9南半20~40cm 出土遺物(1)	42
図 4-21 A 1区 河道S9南半20~40cm 出土遺物(2)	44
図 4-22 A 1区 河道S9南半20~40cm 出土遺物(3)	45
図 4-23 A 1区 河道S9南半20~40cm 出土遺物(4)	47
図 4-24 A 1区 河道S9南半20~40cm 出土遺物(5)	48
図 4-25 A 1区 河道S9南半40~60cm 出土遺物(1)	50
図 4-26 A 1区 河道S9南半40~60cm 出土遺物(2)	52
図 4-27 A 1区 河道S9南半40~60cm 出土遺物(3)	53
図 4-28 A 1区 河道S9南半40~60cm 出土遺物(4)	54
図 4-29 A 1区 河道S9南半40~60cm 出土遺物(5)	55
図 4-30 A 1区 河道S9南半60~80cm 出土遺物(1)	57
図 4-31 A 1区 河道S9南半60~80cm 出土遺物(2)	59
図 4-32 A 1区 河道S9南半60~80cm	

	出土遺物(3)	60	図 4-60	A 3 区 土坑・小穴 出土遺物(2) ...	107
図 4-33	A 1 区 河道S9南半80cm～最下層 出土遺物(1)	63	図 4-61	A 4 区 平面図	109
図 4-34	A 1 区 河道S9南半80cm～最下層 出土遺物(2)	64	図 4-62	A 4 区 西壁・北壁断面図	110
図 4-35	A 1 区 土坑・小穴 詳細図・ 出土遺物	66	図 4-63	A 4 区 河道・土坑 詳細図・ 出土遺物	111
図 4-36	A 2 区 平面図	67	図 4-64	A 5 区 平面図	113
図 4-37	A 2 区 北西・南西壁断面図	68	図 4-65	A 5 区 北東壁断面図	114
図 4-38	A 2 区 掘立柱建物SB1 詳細図・ 出土遺物	70	図 4-66	A 5 区 竪穴建物S276・S472 詳細図・ 出土遺物	115
図 4-39	A 2 区 掘立柱建物SB2・SB3 詳細図	71	図 4-67	A 5 区 竪穴建物S279 詳細図・ 出土遺物	117
図 4-40	A 2 区 溝・溝 詳細図・出土遺物 ...	73	図 4-68	A 5 区 竪穴建物S473 詳細図・ 出土遺物	118
図 4-41	A 2 区 土坑・小穴・精査 詳細図・ 出土遺物	75	図 4-69	A 5 区 竪穴建物S209 詳細図・ 出土遺物	120
図 4-42	A 3 区 平面図	77	図 4-70	A 5 区 竪穴建物S360 詳細図・ 出土遺物	122
図 4-43	A 3 区 東壁断面図	78	図 4-71	A 5 区 掘立柱建物SB7 詳細図 ...	124
図 4-44	A 3 区 竪穴建物S200 詳細図	79	図 4-72	A 5 区 掘立柱建物SB7 断面図・ 出土遺物	125
図 4-45	A 3 区 竪穴建物S200 出土遺物	80	図 4-73	A 5 区 掘立柱建物SB8 詳細図 ...	126
図 4-46	A 3 区 竪穴建物S379 詳細図	83	図 4-74	A 5 区 掘立柱建物SB9 詳細図 ...	127
図 4-47	A 3 区 竪穴建物S379 出土遺物	84	図 4-75	A 5 区 掘立柱建物SB10 詳細図 ...	129
図 4-48	A 3 区 竪穴建物S1 詳細図	85	図 4-76	A 5 区 溝S145 詳細図・ 出土遺物(1)	130
図 4-49	A 3 区 竪穴建物S1 出土遺物	86	図 4-77	A 5 区 溝S145 出土遺物(2)	131
図 4-50	A 3 区 竪穴建物S312 詳細図	88	図 4-78	A 5 区 溝S145 出土遺物(3)	132
図 4-51	A 3 区 竪穴建物S312 出土遺物	89	図 4-79	A 5 区 溝S145 出土遺物(4)	133
図 4-52	A 3 区 竪穴建物S260 詳細図	91	図 4-80	A 5 区 井戸・土坑 詳細図・ 出土遺物	135
図 4-53	A 3 区 竪穴建物S343 詳細図	92	図 4-81	A 5 区 小穴 出土遺物	136
図 4-54	A 3 区 掘立柱建物SB4 詳細図・ 出土遺物	94	図 4-82	A 6 区 平面図・北西壁断面図 ...	138
図 4-55	A 3 区 掘立柱建物SB5 詳細図	95	図 4-83	A 7 区 平面図	140
図 4-56	A 3 区 掘立柱建物SB6 詳細図	96	図 4-84	A 7 区 南東壁断面図	141
図 4-57	A 3 区 溝S3 詳細図・出土遺物	98	図 4-85	A 7 区 掘立柱建物SB11 詳細図 ...	142
図 4-58	A 3 区 土坑 S319 詳細図・ 出土遺物	101	図 4-86	A 7 区 掘立柱建物SB12 詳細図 ...	143
図 4-59	A 3 区 土坑・小穴 詳細図・ 出土遺物(1)	103	図 4-87	A 7 区 溝 S367・S368 詳細図 ...	145

図 4-88	A 7 区 溝 詳細図・出土遺物	146	図 4-110	A 8 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(9)	182
図 4-89	A 7 区 土坑 詳細図・出土遺物	148	図 4-111	A 8 区 河道S9 下層有機質層20~40cm 出土遺物	183
図 4-90	A 7 区 小穴・精査 出土遺物	150	図 4-112	A 8 区 河道S9 下層有機質層40~60cm 出土遺物(1)	185
図 4-91	A 8 区 平面図	154	図 4-113	A 8 区 河道S9 下層有機質層40~60cm 出土遺物(2)	187
図 4-92	A 8 区 北西壁断面図(1)	155	図 4-114	A 8 区 河道S9 下層有機質層40~60cm 出土遺物(3)	188
図 4-93	A 8 区 北西壁断面図(2)	156	図 4-115	A 8 区 河道S9 下層有機質層40~60cm 出土遺物(4)	190
図 4-94	A 8 区 南西壁断面図	157	図 4-116	A 8 区 河道S9 下層有機質層60~80cm 出土遺物	191
図 4-95	A 8 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 遺物出土状況	158	図 4-117	A 8 区 河道S9 下層有機質層 120~140cm・精査 出土遺物	193
図 4-96	A 8 区 河道S9 上層粘土層・ 中層砂層 出土遺物(1)	160	図 4-118	B 区 上層 平面図	195
図 4-97	A 8 区 河道S9 中層砂層 出土遺物(2)	161	図 4-119	B 区 下層 平面図	196
図 4-98	A 8 区 河道S9 中層砂層 出土遺物(3)	163	図 4-120	B 区 南東壁断面図	197
図 4-99	A 8 区 河道S9 中層砂層 出土遺物(4)	164	図 4-121	B 区 北西壁断面図(1)	198
図 4-100	A 8 区 河道S9 中層砂層 出土遺物(5)	166	図 4-122	B 区 北西壁断面図(2)	199
図 4-101	A 8 区 河道S9 中層砂層 出土遺物(6)	168	図 4-123	B 区 井戸S2 詳細図・出土遺物	200
図 4-102	A 8 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(1)	170	図 4-124	B 区 溝S46 出土遺物	201
図 4-103	A 8 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(2)	172	図 4-125	B 区 河道S40 出土遺物(1)	203
図 4-104	A 8 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(3)	173	図 4-126	B 区 河道S40 出土遺物(2)	204
図 4-105	A 8 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(4)	174	図 4-127	B 区 河道S47 出土遺物	206
図 4-106	A 8 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(5)	176	図 4-128	B 区 土坑・小穴・精査 出土遺物	207
図 4-107	A 8 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(6)	177	図 4-129	C 区 平面図	210
図 4-108	A 8 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(7)	178	図 4-130	C 区 南西壁断面図	211
図 4-109	A 8 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(8)	180	図 4-131	C 区 南東壁断面図	212
			図 4-132	C 区 竪穴建物S134 詳細図・ 出土遺物	213
			図 4-133	C 区 掘立柱建物SB13 詳細図	214
			図 4-134	C 区 井戸・溝(1) 詳細図・ 出土遺物	216
			図 4-135	C 区 土坑・溝(2)・河道・精査	

出土遺物	218
図 4-136 C区 河道S270 出土遺物	220
図 4-137 C区 河道S271 出土遺物	221
図 4-138 D区 平面図	224
図 4-139 D区 北西壁断面図	225
図 4-140 D区 河道S9 出土遺物	226

第5章 総括

図 5-1 福満遺跡23次調査 主な遺構の変遷	234
図 5-2 福満遺跡1～30次の調査位置	236
図 5-3 福満遺跡25次調査の方形周溝墓群	238
図 5-4 竹ヶ鼻廃寺遺跡の官衙建物群	245

表目次

表 5-1 建物遺構一覧	243
--------------	-----

付表目次

付表 1 土器・土製品一覧	253	付表 3 金属製品一覧	287
付表 2 石製品一覧	286	付表 4 木製品一覧	288

写真図版目次

図版 1 遺構

- (上) 調査前状況 (南東から)
- (下) A 1区 北西部 (南東から)

図版 2 遺構

- (上) A 1区 南東部 (南東から)
- (下) A 1区 河道S9 断面 (北から)

図版 3 遺構

- (上) A 1区 河道S9 遺物出土状況
(W46/南西から)
- (下) A 1区 河道S9 遺物出土状況
(W76/南西から)

図版 4 遺構

- (上) A 1区 河道S9 遺物出土状況
(W17/南から)
- (下) A 1区 河道S9 遺物出土状況
(M1/西から)

図版 5 遺構

- (上) A 2区 北部 (南西から)
- (下) A 2区 南部 (南から)

図版 6 遺構

- (上) A 2区 掘立柱建物SBI・欄SA1 (南東から)
- (下) A 2区 欄SA1 S199 断面 (北東から)

図版 7 遺構

- (上) A 3区 (南西から)
- (下) A 3区 (南東から)

図版 8 遺構

- (上) A 3区 竪穴建物S200 (北東から)
- (下) A 3区 竪穴建物S200 焼土断面 (北東から)

図版 9 遺構

- (上) A 3区 竪穴建物S200 遺物出土状況
(土器435・445・451/東から)
- (下) A 3区 竪穴建物S260 (北西から)

図版10 遺構

- (上) A 3区 竪穴建物S379 遺物出土状況
(土器461/北東から)
- (下) A 3区 竪穴建物S379 遺物出土状況
(土器461/北から)

図版11 遺構

- (上) A 3区 竪穴建物S379 炉断面(北東から)
- (下) A 3区 竪穴建物S379(北西から)

図版12 遺構

- (上) A 3区 竪穴建物S1(南東から)
- (下) A 3区 竪穴建物S1 遺物出土状況
(土器469・470/北から)

図版13 遺構

- (上) A 3区 竪穴建物S343(南東から)
- (下) A 3区 竪穴建物S312(北西から)

図版14 遺構

- (上) A 3区 竪穴建物S312(南東から)
- (下) A 3区 竪穴建物S312 北西辺カマド
(南東から)

図版15 遺構

- (上) A 3区 竪穴建物S312 北西辺カマド
(東から)
- (下) A 3区 竪穴建物S312 北西辺カマド断面
(南西から)

図版16 遺構

- (上) A 3区 竪穴建物S312 北西辺カマド
(南東から)
- (下) A 3区 竪穴建物S312 南東辺カマド
(西から)

図版17 遺構

- (上) A 3区 掘立柱建物SB4・SB5(南東から)
- (下) A 3区 掘立柱建物SB6 S397 柱痕断面
(南東から)

図版18 遺構

- (上) A 3区 溝S3(南東から)
- (下) A 3区 溝S3断面(南東から)

図版19 遺構

- (上) A 3区 溝S3 遺物出土状況(西から)
(土器494~496・498・505/西から)
- (下) A 3区 溝S3 遺物出土状況(南西から)
(土器992・993, 漆器W196~W199/南西から)

図版20 遺構

- (上) A 4区(南西から)
- (下) A 4区 河道S24(北東から)

図版21 遺構

- (上) A 5区(南から)
- (下) A 5区 建物群(南東から)

図版22 遺構

- (上) A 5区 竪穴建物S276・S472(西から)
- (下) A 5区 竪穴建物S276 遺物出土状況
(土器562/東から)

図版23 遺構

- (上) A 5区 竪穴建物S209(南から)
- (下) A 5区 竪穴建物S209(南東から)

図版24 遺構

- (上) A 5区 竪穴建物S209 カマド(南東から)
- (下) A 5区 竪穴建物S209 カマド(南から)

図版25 遺構

- (上) A 5区 竪穴建物S279・S473(南西から)
- (下) A 5区 竪穴建物S473 カマド(南から)

図版26 遺構

- (上) A 5区 竪穴建物S279・S473(南西から)
- (下) A 5区 竪穴建物S279・S473 カマド
(南東から)

図版27 遺構

- (上) A 5区 竪穴建物S360(南西から)
- (下) A 5区 竪穴建物S360 カマド(南西から)

図版28 遺構

- (上) A 5区 竪穴建物S360 貼床(北西から)
- (下) A 5区 竪穴建物S360 貼床断面(南西から)

図版29 遺構

- (上) A 5区 建物群(北西から)
- (下) A 5区 掘立柱建物SB7・SB8(南東から)

図版30 遺構

(上) A 5区 掘立柱建物SB7 (南東から)

(下) A 5区 掘立柱建物SB8 (南西から)

図版31 遺構

(上) A 5区 掘立柱建物SB10 (西から)

(下) A 5区 掘立柱建物SB7 S318断面
(南東から)

図版32 遺構

(上) A 5区 溝S145, 掘立柱建物SB7・SB8
(南西から)

(下) A 5区 溝S145断面 (南西から)

図版33 遺構

(上) A 5区 土坑S376断面 (南から)

(下) A 6区 (南から)

図版34 遺構

(上) A 7区 北西部 (北西から)

(下) A 7区 南東部 (北西から)

図版35 遺構

(上) A 7区 掘立柱建物SB5 (南東から)

(下) A 7区 掘立柱建物SB12 (南東から)

図版36 遺構

(上) A 7区 掘立柱建物SB12 S431 (南東から)

(下) A 7区 掘立柱建物SB11・溝S378 (南東から)

図版37 遺構

(上) A 7区 掘立柱建物SB11・溝S378 (北西から)

(下) A 7区 掘立柱建物SB11・溝S378 (北東から)

図版38 遺構

(上) A 7区 溝S378 (南西から)

(下) A 7区 溝S45 (北東から)

図版39 遺構

(上) A 7区 溝S367 (北東から)

(下) A 7区 溝S367断面 (南西から)

図版40 遺構

(上) A 7区 溝S367 遺物出土状況
(土器649・651・654/北から)

(下) A 7区 溝S367 遺物出土状況
(土器649・651/西から)

図版41 遺構

(上) A 7区 土坑S397 遺物出土状況 (南西から)

(下) A 7区 土坑S397 (南西から)

図版42 遺構

(上) A 8区 (北から)

(下) A 8区 河道S9断面 (南から)

図版43 遺構

(上) A 8区 河道S9 遺物出土状況 (南東から)

(下) A 8区 河道S9 遺物出土状況
(W140/南東から)

図版44 遺構

(上) A 8区 河道S9 遺物出土状況
(W138/西から)

(下) A 8区 河道S9 遺物出土状況
(W143・147/南東から)

図版45 遺構

(上) A 8区 河道S9 遺物出土状況
(W171/北東から)

(下) A 8区 河道S9 遺物出土状況
(土器857/北東から)

図版46 遺構

(上) B区 南西部 (北西から)

(下) B区 北東部 (北東から)

図版47 遺構

(上) B区 河道S40 (南東から)

(下) B区 河道S40 断面 (北西から)

図版48 遺構

(上) B区 井戸S2 (北東から)

(下) B区 小穴S44 (北東から)

図版49 遺構

(上) B区 下層 河道S47 (北西から)

(下) B区 下層 河道S47 遺物出土状況
(土器927・928/北西から)

図版50 遺構

(上) B区 下層 河道S47 遺物出土状況
(土器926/北東から)

(下) C区 (南東から)

- 図版51 遺構
(上) C区(北東から)
(下) C区 掘立柱建物SB13(南東から)
- 図版52 遺構
(上) C区 井戸S52(南西から)
(下) D区(北東から)
- 図版53 遺物(土器)
A1区 溝S8, 土坑S10
- 図版54 遺物(土器)
A1区 河道S9 北半0~20cm, 20~40cm
- 図版55 遺物(土器)
A1区 河道S9 北半20~40cm, 40~60cm
- 図版56 遺物(土器)
A1区 河道S9 北半40~60cm, 60~80cm, 80cm
~最下層
- 図版57 遺物(土器)
A1区 河道S9 北半80cm~最下層, 河道S9 南半
0~20cm
- 図版58 遺物(土器)
A1区 河道S9 南半0~20cm
- 図版59 遺物(土器)
A1区 河道S9 南半0~20cm
- 図版60 遺物(土器)
A1区 河道S9 南半0~20cm, 20~40cm
- 図版61 遺物(土器)
A1区 河道S9 南半20~40cm
- 図版62 遺物(土器)
A1区 河道S9 南半20~40cm
- 図版63 遺物(土器)
A1区 河道S9 南半20~40cm, 40~60cm
- 図版64 遺物(土器)
A1区 河道S9 南半40~60cm
- 図版65 遺物(土器)
A1区 河道S9 南半40~60cm
- 図版66 遺物(土器)
A1区 河道S9 南半40~60cm
- 図版67 遺物(土器)
A1区 河道S9 南半40~60cm, 60~80cm
- 図版68 遺物(土器)
A1区 河道S9 南半80cm~最下層
- 図版69 遺物(土器)
A1区 河道S9 南半80cm~最下層
- 図版70 遺物(土器)
A2区 溝S2, A3区 竪穴建物S200
- 図版71 遺物(土器)
A3区 竪穴建物S200, S1, S5
- 図版72 遺物(土器)
A3区 竪穴建物S379, S312
- 図版73 遺物(土器)
A3区 土坑S319, 小穴S9, 溝S3
- 図版74 遺物(土器)
A3区 溝S3
- 図版75 遺物(土器)
A5区 竪穴建物S279, 溝S145
- 図版76 遺物(土器)
A5区 溝S145
- 図版77 遺物(土器)
A5区 溝S145, 土坑S359
- 図版78 遺物(土器)
A5区 土坑S359, 小穴S118, A7区 溝S378,
S367
- 図版79 遺物(土器)
A7区 土坑S397, S409, A8区 河道S9 上層
粘土層, 中層砂層
- 図版80 遺物(土器)
A8区 河道S9 中層砂層, 下層有機質層0~20cm
- 図版81 遺物(土器)
A8区 河道S9 下層有機質層0~20cm
- 図版82 遺物(土器)
A8区 河道S9 下層有機質層0~20cm
- 図版83 遺物(土器)
A8区 河道S9 下層有機質層0~20cm
- 図版84 遺物(土器)
A8区 河道S9 下層有機質層0~20cm

- 図版85 遺物 (土器)
A 8区 河道S9 下層有機質層0~20cm
- 図版86 遺物 (土器)
A 8区 河道S9 下層有機質層20~40cm, 40~60cm
- 図版87 遺物 (土器)
A 8区 河道S9 下層有機質層40~60cm, 60~80cm, 120~140cm、B区 河道S40
- 図版88 遺物 (土器)
B区 河道S40, 溝S46
- 図版89 遺物 (土器)
B区 溝S46
- 図版90 遺物 (土器)
B区 土坑S36, 河道S47
- 図版91 遺物 (土器)
C区 井戸S52, 溝S199, S226, 河道S270
- 図版92 遺物 (土器)
C区 河道S270, S271
- 図版93 遺物 (木製品)
鍬未製品, 曲柄鍬, 鍬曲柄, 斧柄
- 図版94 遺物 (木製品)
横槌, 竖杵
- 図版95 遺物 (木製品)
杵型田下駄, タモ杵, アカスクイ
- 図版96 遺物 (木製品)
錘, 軸受台
- 図版97 遺物 (木製品)
杵, 杵, 布巻具, 曲物底板
- 図版98 遺物 (木製品)
曲物底板, 容器蓋, 皿
- 図版99 遺物 (木製品)
槽
- 図版100 遺物 (木製品)
(上) 槽
(下) 漆器, 土器
- 図版101 遺物 (木製品)
下駄
- 図版102 遺物 (木製品)
下駄, 櫛, 丸木弓, 壺鏡, 扇骨
- 図版103 遺物 (木製品)
ささら, 鳥形, 舟形, 刀形, 弓形, 齋串, 串
- 図版104 遺物 (木製品)
細工物, 柄, ヘラ, 滑車, 作業台
- 図版105 遺物 (木製品)
蹴放, 柱材, 板材, 角材, 残材
- 図版106 遺物 (木製品)
残材, 用途不明
- 図版107 遺物 (石製品)
(上) 石鍋
(下) 磨製石斧, 棒状石製品
- 図版108 遺物 (石製品)
(上) 石鍬, 剥片, 管玉
(下) 磨石・敲石, 砥石
- 図版109 遺物 (石製品)
(上) 磨石・敲石, 砥石
(下) 砥石
- 図版110 遺物 (石製品)
(上) 砥石
(上) 砥石
- 図版111 遺物 (金属製品・動植物遺体)
鍬・釘・鉸具, モモ核, ウシ脛骨

第1章 調査の経緯と経過

第1節 はじめに(図1-1)

本書は、「プロシードアリーナHIKONE(彦根市スポーツ・文化交流センター)」建設工事に伴い実施した、彦根市西今町から小泉町にかけて所在する福満遺跡の発掘調査報告書である。本調査は、彦根市長からの依頼により、彦根市を調査主体として、公益財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。発掘調査は平成29年度・同30年度に行い、整理調査は令和元年度から令和5年度まで行った。

工事予定地は埋蔵文化財包蔵地(福満遺跡)として周知され、これまでの調査から、縄文時代～中世にかけての複合遺跡であることが知られている。今回の調査は第23次となり、縄文時代～鎌倉時代にかけての遺構を検出し、これらに伴って、土器・土製品・石製品・金属製品・木製品といった豊富な遺物が出土した。

第2節 調査に至る経緯

今回の調査は、対象地に「プロシードアリーナHIKONE(彦根市スポーツ・文化交流センター)」を建設することによるものである。昭和56年(1981年)以降、福満遺跡の範囲内では開発に伴う発掘調査がしばしば実施され、遺構・遺物が確認されていて、今回の工事対象地においても遺構の広がりや確実視されたため、調査を実施することとなった。

平成29年6月15日に、彦根市教育委員会新市民体育センター整備推進室、同委員会文化財課、公益財団法人滋賀県文化財保護協会の三者で現地協議を行った。ここでは調査範囲、安全管理、調査方法、契約などについて確認した。その後、同年8月24日に、再度新市民体育センター整備推進室と公益財団法人滋賀県文化財保護協会の二者で現地協議を行い、調査日程、安全フェンスの設置、調査対象地内に存在する水路部分の調査方法などについて確認した。以上の経緯をふまえて、発掘調査を平成29・30年度にわたり、10,550㎡を対象として実施することとなった。

第3節 調査の経過

(1) 発掘調査

彦根市長から、調査機関である公益財団法人滋賀県文化財保護協会に調査が依頼された(平成29年7月24日付彦教委文第329号「(仮称)彦根市新市民体育センター等建設工事に伴う埋蔵文化財(福満遺跡第23次)発掘調査について(依頼)」)。依頼に基づき、公益財団法人滋賀県文化財保護協会は調査計画を策定・提出した(平成29年7月26日付滋文保協局第920号「埋蔵文化財(福満遺跡第23次)の発掘調査について」)。これを踏まえ、現地調査を平成29年8月24日から着手した(平成29年8月24日付滋文保協局第920号「埋蔵文化財(福満遺跡第23次)の発掘調査について(報告)」)。発掘調査を進めるなかで、遺構の深度や密度などが当初見込みを上回ったため、当該年度の調査面積を減じる必要が生じたので、計画を変更し、変更計画書を提出して協議した(平成30年1月26日付滋文保協局第920号「埋蔵文化財(福満遺跡)の発掘調査の契約変更について(協議)」)。この変更で減じた面積分については、平成30年度に繰り越して調査を実施することを彦

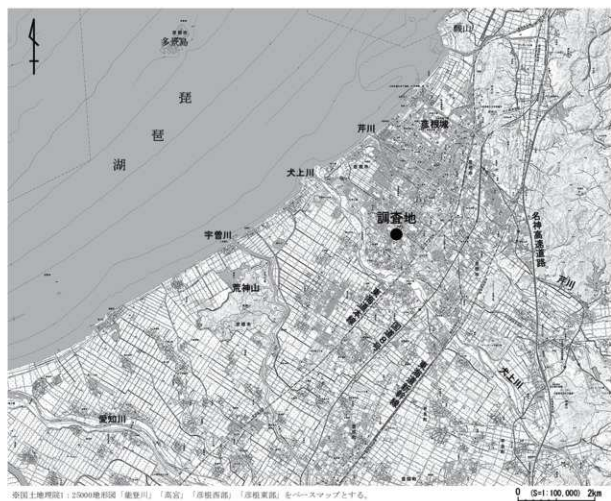


図 1-1 調査地位置図

根市教育委員会から承認を受け(平成30年3月22日付彦新体整第10027号「埋蔵文化財(福満遺跡)の発掘調査の契約変更について(承認)」、平成30年3月30日に、調査が終了した部分について一部引き渡しを行った(平成30年3月30日付滋文保協局第920号「埋蔵文化財(福満遺跡第23次)の発掘調査の一部終了について)」。平成29年度の変更で繰り越した面積分については改めて依頼を受け(平成30年4月25日付彦教委文第200号「(仮称)彦根市新市民体育センター等建設工事に伴う埋蔵文化財(福満遺跡第23次)発掘調査について(依頼)」、継続して調査を実施した。調査は平成30年9月20日で完了し、平成30年度新規依頼分と併せて平成31年3月29日付で現地を引き渡した(平成31年3月29日付滋文保協局第816号「埋蔵文化財(福満遺跡)の発掘調査の結果について(報告)」)。

平成30年度新規依頼分の現地調査については、彦根市長から調査機関である公益財団法人滋賀県文化財保護協会に調査が依頼された(平成30年4月25日付彦教委文第200号「(仮称)彦根市新市民体育センター等建設工事に伴う埋蔵文化財(福満遺跡第23次)発掘調査について(依頼)」。依頼に基づき、公益財団法人滋賀県文化財保護協会は調査計画を策定・提出した(平成30年5月8日付滋文保協局第816号「埋蔵文化財(福満遺跡第23次)の発掘調査について)」。これを踏まえ、現地調査を平成30年6月25日から開始した(平成30年6月25日付滋文保協局第816号「埋蔵文化財(福満遺跡)の発掘調査について(報告)」。現地調査は平成31年3月29日で完了し、同日付で平成29年度の繰り越し分と併せて現地を引き渡した(平成31年3月29日付滋文保協局第916号「埋蔵文化財(福満遺跡)の発掘調査の結果について(報告)」。出土遺物は遺物収納用コンテナ99箱である(平成30年3月30日付滋文保協局第920号「埋蔵物発見報告」および平成31年3月29日付滋文保協局第816号「埋蔵物発見報告」)。

(2) 整理調査

彦根市長から調査機関である公益財団法人滋賀県文化財保護協会に調査が依頼された(令和元年9月25日付彦新体整第19号「埋蔵文化財(福満遺跡)の整理調査について(依頼)」。依頼に基づき、公益財団法人滋賀県文化財保護協会は調査計画を策定・提出した(令和元年11月1日付滋文保協局第720号「埋蔵文化財(福満遺跡)の整理調査計画書の提出について)」。令和元年11月1日から整理調査を開始した(令和元年11月1日付「委託業務着手届)」。令和元年度に実施した整理作業工程は、土器については一部の台帳作成・選別、注記、接合・復元、木製品・石器・金属製品についてはすべての台帳作成・選別、注記、接合・復元である。

令和2年度は彦根市長からの依頼(令和2年4月6日付け彦新体整第1号「埋蔵文化財(福満遺跡)の整理調査について(依頼)」)に基づき、公益財団法人滋賀県文化財保護協会は調査計画を策定・提出した(令和2年4月10日付滋文保協局第615号「埋蔵文化財(福満遺跡)の整理調査について)」。令和2年度に実施した整理作業工程は、土器については令和元年度未実施分の台帳作成・選別、注記、接合・復元、木製品については実測、写真撮影、理化学的分析、石器については実測、金属製品については実測、写真撮影、遺構については原因作成、製図である。

令和3年度は彦根市長からの依頼(令和3年4月2日付け彦新体整第4号「埋蔵文化財(福満遺跡)の整理調査について(依頼)」)に基づき、公益財団法人滋賀県文化財保護協会は調査計画

を策定・提出した（令和3年4月2日付滋文保協局第918号「埋蔵文化財（福満遺跡）の整理調査について」）。令和3年度に実施した整理作業工程は、土器については一部の実測、遺構については一部の実測図版編集、一部の執筆・編集である。

令和4年度は彦根市長からの依頼（令和4年4月7日付け彦新体整第1号「埋蔵文化財（福満遺跡）の整理調査について（依頼）」）に基づき、公益財団法人滋賀県文化財保護協会は調査計画を策定・提出した（令和4年4月12日付滋文保協局第820号「埋蔵文化財（福満遺跡）の整理調査について」）。令和4年度に実施した整理作業工程は、土器については未実施分の実測、木製品・金属製品については保存処理、遺物すべてについて製図、実測図版編集、一部の写真図版編集、遺構については実測図版編集、写真図版編集である。

令和5年度は彦根市長からの依頼をうけ（令和5年4月6日付け彦新体整第4号「埋蔵文化財（福満遺跡）の整理調査について（依頼）」）、依頼に基づき、公益財団法人滋賀県文化財保護協会は調査計画を策定・提出した（令和5年4月6日付滋文保協局第720号「埋蔵文化財（福満遺跡）の整理調査について」）。令和5年度に実施した整理作業工程は、土器・石器の写真撮影、未実施分の写真図版編集、報告書執筆・編集、報告書校正、成果物取納・登録である。

(3) 調査成果の公開

発掘調査では弥生時代～鎌倉時代の建物・溝などを検出し、土器などの遺物が出土しており、犬上川流域の当該期の集落の様子を知るうえで貴重な成果を得た。これらの発掘調査成果を公開し、埋蔵文化財調査の必要性について理解を得ることを目的として、現地説明会の開催を平成30年9月30日に予定していた（平成30年8月1日付滋文保協局第816号「埋蔵文化財（福満遺跡）にかかる地元説明会の開催について（通知）」）。しかし、当日は台風24号の影響が予想されたため、中止することとなった。

(阿刀)

第2章 遺跡の位置と環境¹⁾

第1節 地理的環境 (図2-1)

福満遺跡が所在する彦根市は琵琶湖の東部に位置している。彦根市は北部から西部にかけて琵琶湖に開けており、湖上の多景島も市域に含まれる。北東部は米原市、南は甲良町、豊郷町、愛荘町、東は多賀町、南西部は東近江市に接し、面積は196.84km²を測る。

福満遺跡は鈴鹿山系から琵琶湖へ注ぐ犬上川の下流右岸に位置する。この周辺地域は、多賀町橋崎付近を扇頂とする犬上川扇状地の外側にあたり、氾濫原の自然堤防あるいは後背湿地上に立地している。扇状地の扇端に近いこの周辺には、湧水地が多く見られる。これらの湧水地は下流の水田の重要な水源となっている。

過去の発掘調査ではこの周辺で旧河道が確認されており、犬上川ないしその分流がたびたび流路を変えていた可能性が指摘されている。そのため、犬上川流域には多数の低湿地が形成され、

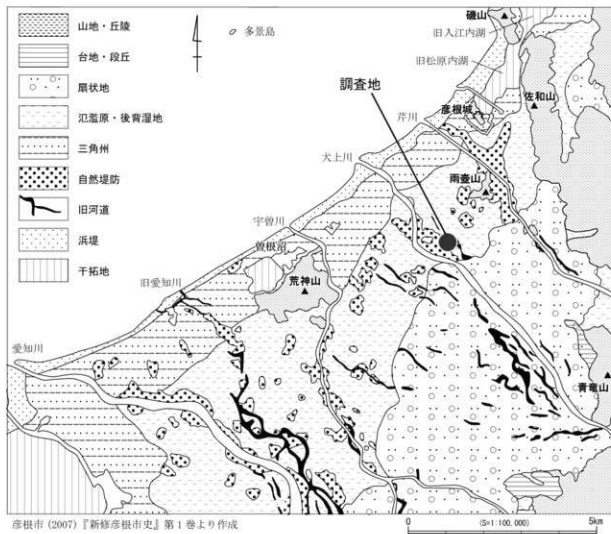


図2-1 調査地周辺の地形

網状に流れる河川の間に微高地が点在する、という地形が想定されている。

このような地形においては、大規模な集落は発展しにくいと考えられる。過去の福満遺跡の調査や周辺の遺跡の調査成果では、弥生時代後期から古墳時代初頭のものともみられる方形周溝墓や堅穴建物が検出されていることから、少なくともこの時期までには沖積作用が進行して、低湿地や河道がある程度埋没し、集落や墓域が成立しうる氾濫平野が形成されていたのであろう。

第2節 歴史的環境（図2-2 同図記載の遺跡のみ遺跡番号記載）

(1) 縄文時代

屋中寺廃寺遺跡では早期の高山寺式土器が、福満遺跡（202-015）では前期の大歳山式土器が確認されている。このように早期から遺物の出土はみられるが、遺構を伴い遺物量が増加するのは中期末以降である。犬上川流域では福満遺跡を中心に、彦根市の屋中寺廃寺遺跡、多賀町の土田遺跡（443-019）・敏満寺遺跡、甲良町の小川原遺跡・北落遺跡・金屋遺跡などが当該期の遺跡である。土田遺跡や小川原遺跡では、甕棺墓や集石遺構などが確認されている。

(2) 弥生時代

福満遺跡では前期の遺物は出土しているが、集落の様相は不明である。市内では竹ヶ鼻廃寺遺跡（202-014）や稲里遺跡で前期の土器が出土している。他にも芹川流域では多賀町の大岡遺跡、犬上川流域では甲良町の尼子遺跡・北落遺跡・金屋遺跡などで前期の土器が出土している。

前期までは、遺跡は主に扇状地上に展開していたが、中期以降は琵琶湖に近い氾濫平野に分布が広がる。宇曾川流域には中期の集落遺跡である川瀬馬場遺跡や、中期～後期の集落遺跡である妙楽寺遺跡がある。犬上川流域では、後期の方形周溝墓が確認された堀南遺跡（202-131）や、同じく方形周溝墓や堅穴建物が確認された福満遺跡があり、福満遺跡に隣接する品井戸遺跡（202-012）でも方形周溝墓が検出されている。

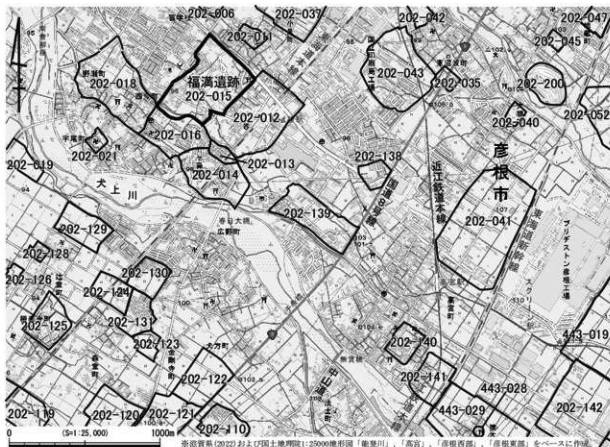
(3) 古墳時代

古墳時代前期末に、荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。この時期の周辺の集落遺跡としては、市内では藤丸遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡・堀南遺跡・横地遺跡（202-130）・段ノ東遺跡、多賀町の本曾遺跡・土田遺跡などがあげられる。

中期以降には、正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡（202-123）・段ノ東遺跡（202-122）・荒神山古墳群・鞍掛山遺跡（202-200）などに古墳が築造されるようになる。また、JR南彦根駅と犬上川橋梁の中間に「椿塚」という地名の数があり、鉄道敷設の際に石室が発見され須恵器が出土したと伝わっており、古墳が存在したとみられる。さらに犬上川河口に近い八坂東遺跡では中期の埴輪が出土しており、この付近にも古墳が存在したと考えられている。

(4) 飛鳥～奈良時代

飛鳥時代の集落遺跡の状況は不明だが、奈良～平安時代になると品井戸遺跡・竹ヶ鼻廃寺遺跡・福満遺跡・法士南遺跡などで掘立柱建物が検出されている。奈良時代には竹ヶ鼻廃寺遺跡の南東



遺跡番号	遺跡名	所在地	種類	時代
202-006	木戸口遺跡	彦根市 平田町	散布地	縄文～中世
202-011	小泉館跡	彦根市 小泉町	城館跡	中世
202-012	品井戸遺跡	彦根市 小泉町	集落跡	縄文～中世
202-013	椿塚遺跡	彦根市 竹ヶ鼻町	古墳	古墳
202-014	竹ヶ鼻廃寺遺跡	彦根市 竹ヶ鼻町	社寺跡・官田跡・集落跡	弥生～中世
202-015	福満遺跡	彦根市 西寺町・小泉町	集落跡・古墳	縄文～中世
202-016	西今遺跡	彦根市 西今町	集落跡	古墳～中世
202-018	須川遺跡	彦根市 野瀬町	集落跡	弥生～中世
202-019	上沢尻遺跡	彦根市 野瀬町	散布地	古墳
202-021	大字城跡	彦根市 字尾町	城館跡	中世
202-035	沼波館跡	彦根市 沼波町	城館跡	中世
202-037	山之脇遺跡	彦根市 山之脇町	集落跡	弥生～中世
202-040	大堰城跡	彦根市 大堰町	城館跡	中世
202-041	藤丸遺跡	彦根市 大堰町・高宮町	集落跡	古墳～中世
202-042	東沼波遺跡	彦根市 東沼波町	集落跡・古墳	古墳～中世
202-043	道ノ下遺跡	彦根市 東沼波町	集落跡・古墳	古墳～中世
202-045	地蔵城跡	彦根市 地蔵町	城館跡	中世
202-047	五反田遺跡	彦根市 正法寺町	散布地	古墳
202-052	竹ヶ下遺跡	彦根市 野田山町	散布地	古墳～平安
202-110	葛籠北遺跡	彦根市 西葛籠町	古遺跡群	古墳～中世
202-119	西海道遺跡	彦根市 西瀬町	散布地	古墳～平安

202-120	天田遺跡	彦根市 極楽寺町	集落跡	古墳～平安
202-121	極楽寺遺跡	彦根市 極楽寺町	集落跡	古墳～奈良
202-122	段ノ東遺跡	彦根市 森堂町	集落跡	古墳～平安
202-123	神ノ木遺跡	彦根市 金剛寺町	集落跡	古墳
202-124	石原遺跡	彦根市 辻堂町	散布地	古墳～奈良
202-125	辻ノ東遺跡	彦根市 辻堂町	散布地	古墳～奈良
202-126	蓮台寺城跡	彦根市 蓮台寺町	社寺跡	中世
202-128	堀城跡	彦根市 堀町	城館跡	中世
202-129	門田遺跡	彦根市 堀町	集落跡	古墳～奈良
202-130	横地遺跡	彦根市 堀町	古墳	弥生～奈良
202-131	堀南遺跡	彦根市 堀町	集落跡	弥生～奈良
202-138	遊行塚遺跡	彦根市 高宮町	散布地	奈良
202-139	丁田遺跡	彦根市 高宮町	集落跡	縄文～中世
202-140	高宮城跡	彦根市 高宮町	城館跡	古墳～中世
202-141	カットリ遺跡	彦根市 高宮町	散布地	古墳～平安
202-142	塚本遺跡	彦根市 高宮町	散布地	古墳～平安
202-200	鞍掛山遺跡	彦根市 正法寺町	古墳	古墳
443-019	土田遺跡	多賀町 土田	集落跡・木の根遺跡	古墳
443-028	猿蓑氏館遺跡	多賀町 猿木	城館跡	中世
443-029	猿木遺跡	多賀町 猿木	散布地	奈良～中世

彦根資料集(2022)より作成。

図 2-2 福満遺跡と周辺の遺跡

2 km付近に推定古代東山道が存在しており、交通・流通の要衝であった。この時期、竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡では大型の掘立柱建物が検出され、硯・石帯・銅匙など官衙的遺構・遺物が確認されている。これらのことから現在のJR南彦根駅周辺は犬上郡の郡衙比定地ともなっており、古代犬上郡の中心地だったと考えられている。

また、古代寺院への瓦の供給元と想定されている瓦陶兼業窯の烏龍山遺跡や製鉄遺跡であるキドラ遺跡などといった生産遺跡も確認されている。

第3節 既往の調査

福満遺跡の調査は、今回が第23次となる。最初の調査は昭和56年（1981年）であった。これまでのおもな調査成果の概略を出土遺構・遺物から振り返ると、まず第2次調査、第3次調査で前述の縄文時代前期の大歳山式土器が出土している。この時の調査では、流路から縄文時代中期末から晩期にかけての土器も多く出土しており、遺物包含層も認められた。明確な遺構は発見されていないが、当時の集落がこの付近に存在したと想定される。

弥生時代については、前期の遺構や遺物は確認されていない。第4次調査や第7次調査で庄内式並行期の土器が出土しており、第4次調査では同時期の竪穴建物も検出されているので、古墳時代初頭には集落があったことがわかっている。また、第5次調査・第8次調査では古墳時代初頭の方形周溝墓が検出されており、墓域も存在していたことがわかる。

古墳時代については、後期の竪穴式住居が第1次調査・第4次調査で検出されており、土坑から須恵器とともに子持勾玉が出土した。

奈良～平安時代には、第1次調査で奈良時代後半の須恵器が出土し、第4次調査では掘立柱建物が数棟検出されている。

(阿刀)

註

(1)本章の記述は以下の文献を参考にした。(滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会1936、県教委2022、滋賀県立安土城考古博物館2006、彦根市1960・2007、彦根市教育委員会1985・1987・1991・2008・2013)

文献（著者名・刊行機関名 50音順、刊行年次順）

*滋賀県教育委員会→県教委、(財)滋賀県文化財保護協会→財協会、(公財)滋賀県文化財保護協会→公財協会
滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会（1936）『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』

滋賀県（2022）『令和3年度 滋賀県遺跡地図』

滋賀県立安土城考古博物館（2006）『扇状地の考古学-愛知・犬上の古代文化-』

彦根市（1960）『彦根市史』上冊

彦根市（2007）『新修彦根市史』第1巻通史編 古代・中世

彦根市教育委員会（1985）『竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡（第4次）』彦根市埋蔵文化財調査報告第9集

彦根市教育委員会（1987）『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告書第13集

彦根市教育委員会（1991）『福満遺跡第7次調査』彦根市埋蔵文化財調査報告書第20集

彦根市教育委員会（2008）『福満遺跡X・XI』彦根市埋蔵文化財調査報告第40集

彦根市教育委員会（2013）『竹ヶ鼻廃寺Ⅷ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第54集

第3章 調査と記述の方法

第1節 発掘調査の方法

(1) 調査区の設定と呼称(図3-1)

今回の調査では、彦根市立(以下市立)城南小学校南東側をA区、「ひこね燦ばれず」南東側の水路を挟んで南方をB区、同北方をC区、市立城南小学校校庭部分をD区として設定した。A区については、調査対象地内を流れる水路や暗渠等でさらにA区をA1～A8に分けて、調査を実施した。

(2) 表土等除去作業

0.45m級のバックホーを用いて、遺構検出面まで慎重に掘削を行い、表土とそれ以下の土を分けて排土とした。

(3) 排土処理

重機掘削によって生じた排土は、調査対象範囲内において排土置き場を随時設定して運搬した。これらの排土については、可能な限り重機によって転圧することによって、降雨などによる土砂流出を防止するように留意した。調査完了後は、埋め戻して現状に復元した。

(4) 遺構検出・掘削作業

人力によって、片手ねじり鎌・両刃鎌・移植ゴテ・手掘・鋤簾・剣先スコップ等を用いて遺構検出面上を精査して遺構を検出し、引き続き遺構の掘削を行った。

(5) 記録作業

遺構検出・掘削によって得られた情報を写真撮影と実測図の作成により記録化を図った。遺構名は、調査区ごとにSiteを表すSを冠した数字による通し番号を付けた。

遺物の取り上げについては、遺構に伴うものは遺構ごとに行なったが、壁面や遺構面の精査時に出土したものは「精査」として、調査区ごとに取り上げた。遺物は整理・収納用コンテナ(60cm×40cm×15cm)に、土器・石製品・木製品・金属器類等が併せて99箱出土した。

測量・実測作業は、まず国土座標を光波測量機により調査区に設置した杭に移設し、光波測量機を用いて、もしくは手測りで図化を行い、A2版方眼マイラーに記入した。水準高は自動レベルを用いて測量し、平面図・断面図に記入した。現地において作成した実測図は、計172枚である。

写真は35mmカラーネガフィルム、プロニー判モノクロネガフィルム・同カラーポジフィルム、APS-Cデジタルカメラを併用して撮影を行なった。

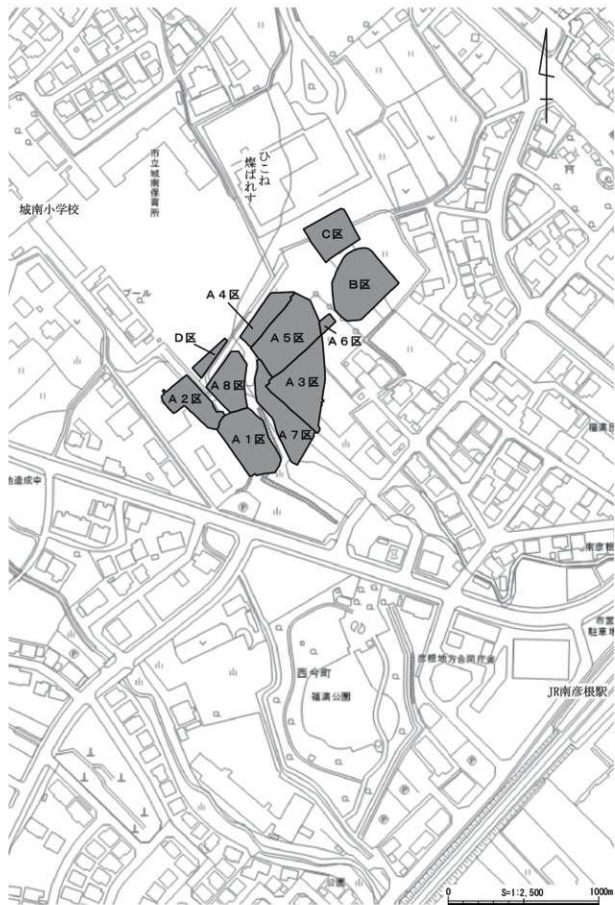


図3-1 調査区位置図

第2節 整理調査の方法

(1) 対象

整理調査対象の総計は遺物99箱（土器76箱、木製品19箱、石製品3箱、金属器1箱）、遺構実測図172枚である。現地調査の期間中に、暫定整理として出土遺物の洗浄などを行い、本格的な整理調査に向けて成果物の内容、整理調査対象遺物と作業量を把握した。本格的な整理調査は、現地調査終了後の令和元年11月から令和6年3月にかけて実施した。

(2) 遺構

現場で作成した実測図をスキャナーと画像ソフト（Adobe Photoshop）を用いてコンピュータに取り込み（原図作成）、描画ソフト（Adobe Illustrator）によってデジタルトレース（実測図製図）・レイアウト（図版編集）を行った。遺構写真は、フィルムカメラで撮影したものの中から遺構の特徴を示すカットを選択し、それらをフィルムスキャナーでスキャンすることでデジタル化し、描画ソフト（Adobe Illustrator）上でレイアウトし、図版作成を行った（遺構写真図版編集）。

(3) 遺物

出土遺物は地区・遺構ごとに分類し、遺物袋に通し番号を付して、遺物の内容などを袋台帳に記載した（台帳作成・選別）。土器類には出土地点などを墨汁などにより面相筆を用いて注記した（注記）。接着剤を用いて接合し、石膏などを用いて欠失部を適宜補填した後（接合・復元）、図化可能遺物を抽出し、実測・探拓を行った（実測）。抽出に当たっては、土器については型式判断が可能な程度に残存するものの中から、完形に近い資料や口縁部・底部等の形態的特徴を示す資料を抽出した。石製品・金属製品・木製品については、人為的加工の認められるものを抽出した。土器類の色調の記録は『新版標準土色帖』（小山・竹原2004）に依拠した。木製品については、実測後に樹種同定を実施し（理化学的分析）、保存処理を行った（保存処理）。実測図はスキャナーと画像ソフト（Adobe Photoshop）を用いてコンピュータに取り込み、描画ソフト（Adobe Illustrator）によってデジタルトレース（実測図製図）・レイアウト（実測図版編集）を行った。また、委託によりデジタル一眼レフカメラで撮影した後（写真撮影）、遺構と同様に画像ソフト（Adobe Illustrator）でレイアウトして図版作成を行った（遺物写真図版編集）。

(4) 執筆・編集・校正

A4版（43字×37行）の本文仕様に基づき、パーソナルコンピュータのワープロ・表計算ソフトを用いて執筆した（執筆）。仕様に合わせて印字した原稿と作成した図版類をまとめて編集作業を行った（編集）。校正は本文校正3回、検品1回である（校正）。

(5) 成果物整理・登録・収納

遺構図面は図面ファイルに収納した。写真類はネガアルバム・スライドファイルに分類・注記して収納した。遺物は、遺物収納用コンテナに種類別に分類して収納した。成果物には、調査原因・遺跡名・所在地・調査などの項目を記載したラベルを貼付した（成果物収納・登録）。以上

の成果物（出土遺物・図面・写真類）は、彦根市において保管している。

第3節 本書の記述方法

(1) 前提

調査区を単位として、遺構は種別ごとに記述し、複数の調査区に広がる遺構については、いずれかの調査区で記述することとする。遺物は遺構との有機的関係を重視し、遺構ごとに記述する。

(2) 遺構

遺構番号 調査区ごとに1から番号を付し、S (Site) を冠して遺構番号とした。建物遺構など複数の要素から構成される遺構については、それらをまとめた番号を付し、掘立柱建物には前に「SB」を、欄には前に「SA」を付した番号としている。

記述の順序 堅穴建物、掘立柱建物、棚、井戸、溝・河道、土坑、小穴の順で記述する。また、層ごとに記載する場合は、原則として上層から下層へ順に記述する。複数調査区にかかる遺構については、いずれかで詳述することとする。

遺構の主軸 世界測地系による平面直角座標系第VI系の座標北から東西に振れた角度で記述した。座標北から東西のどちらに振るかを東「E」・西「W」の区別で示し、振れた角度と合わせて、例えば「N〇°W」と記した。

土層の記述 土層の色調は、『新版標準土色帖』（小山・竹原2004）のマンセル表示法に基づいて記述した。

遺構の法量 m単位で記述することを基本とした。遺構の深さは、検出面から最低部位までの距離を示した。

(3) 遺物

遺物の記述 法量・色調・残存部位等は付表に示し、本文には図表で表しにくいものや特記すべきものを中心に記述する。なお、遺物の法量はcm単位で記述することを基本とし、土器類の色調については『新版標準土色帖』（小山・竹原2004）のマンセル表示法に基づいて記述した。また、年代観等は次の文献を参考にした。縄文土器（小林編2008）、弥生土器（兼康1992）、土師器（庄内式土器研究会1994a・1994b、小森2005）、須恵器（大阪府近つ飛鳥博物館2006）、中世土器・陶磁器（中世土器研究会1995、藤澤2008）、木製品（奈良国立文化財研究所1985・1993、奈良文化財研究所2019、能登川町教育委員会1994、県教委・財協会1998、山田2003、東村2004・2011、伊東・山田2012、県教委・公財協会2014・2019）

なお、木製品については、次のように分類して記述した。

<農具> 農業に用いる道具。鍬・鋤は農業の場面に限らず広く土木作業に用いられるため、「農具」としてまとめることに異論もあるが、ここでは「農具」に分類する。

<工具> 工作作業に用いる道具。材料の切り出しや加工に用いる道具などである。

<漁具> 漁撈作業に用いる道具。ここでは広く「水上作業において用いられるもの」と定義し、分類する。

<紡織具>紡織作業に用いる道具。同じ「編む」作業ではあるが俵やムシロ編みに用いられた道具は主に農作業に用いられるものを作成するためのものなので、「農具」として扱う。

<容器> 食器に限らず、広義の「器」を「容器」とする。

<食事具>人間の食事において用いられる道具。ここでは箸を「食事具」とする。

<装身具>身体を飾るもの。下駄などの履物は「身に着けるもの」であるので、広義の「装身具」として扱う。

<馬具>乗馬の際に馬に取り付けて用いる道具。

<武器>生物を殺傷するための道具。弓は狩猟具でもあるが、ここでは武器として分類する。

<楽器>音を奏でることを目的とする道具。ここでは「音を出すことに特化している」と思われるものに限るので、弓などは含まない。

<祭祀具>祭祀儀式に用いたと思われる道具。判断が難しいものが多いが、ここでは刀などの形状を模した「形代」、板や棒を加工した「斎串」を「祭祀具」とする。

<申>一端を尖らせた樺材あるいは角材。「祭祀具」の可能性もある。しかし木製品が多く出土する遺跡ではよく見られるものであり、他に「祭祀具」と見なせるような遺物が無くても出土することがあるので、別の一群として分類した。

<柄>何らかの柄と見られるもの。農具・工具など様々な可能性が考えられるが、確定するには至らない一群である。

<細工物>用途は不明であるが、特に丁寧な細工を施しているもの。

<用具>単独で何らかの作業場面で用いられた道具と思われるものだが、その作業がどのようなものか想定が困難なもの。

<部材>数の材を組み合わせて用いられた道具・構造物などの一部と思われるが、本来の用途は不明であるもの。

<用材>杭など、何らかの構造（護岸や畔など）の一部と思われるもの。

<端材>木材加工時に排出された端材と思われるもの。

<用途不明品>加工は認められるが、用途がわからないもの。

遺物番号 土器・土製品は数字のみ、石器は数字の前に「S」を、金属製品は数字の前に「M」を、木製品は数字の前に「W」を付して、それぞれ通し番号とした。

観察表 本書に掲載した遺物については、一覧表を作成して本文末に付した（付表1～4）。

（阿刀）

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年次順）

- *滋賀県教育委員会→県教委、(財)滋賀県文化財保護協会→財協会、(公財)滋賀県文化財保護協会→公財協会
- 伊東隆夫・山田昌久(2012)『木の考古学-出土木製品用材データベース-』海青社
- 兼康保明(1992)『近江地域』『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社
- 小林達夫編(2008)『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 小森俊寛(2005)『京から出土する土器の編年の研究』京都編集工房

- 小山正忠・竹原秀雄編著（2015）『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社
大阪府近つ飛鳥博物館（2006）『年代のものさし』
県教委・財協会（1998）『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書2 赤野井湾遺跡』
県教委・公財協会（2014）『蒲生スマートインターチェンジ設置工事（県事業区域）に伴う発掘調査報告書 蛭子田遺跡2』
県教委・公財協会（2019）『大川総合流域防災事業に伴う発掘調査報告書1 塩津港遺跡1』
庄内式土器研究会（1994a）『庄内式土器研究会』Ⅵ
庄内式土器研究会（1994b）『庄内式土器研究会』Ⅶ
中世土器研究会（1995）『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
奈良国立文化財研究所（1985）『奈良国立文化財研究所史料 第27冊 木器集成図録-近畿古代篇-』
奈良国立文化財研究所（1993）『奈良国立文化財研究所史料 第36冊 木器集成図録-近畿原始篇-』
奈良文化財研究所（2019）『奈良文化財研究所史料 第92冊 木器集成図録-飛鳥藤原篇Ⅰ-』
能登川町教育委員会（1994）『能登川町埋蔵文化財調査報告書27 斗西遺跡（第2次）』
東村純子（2004）『古代日本の紡織体制-枠・総かけ・糸枠の分析から-』『史林』87巻5号 史学研究会
東村純子（2011）『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房
藤澤良祐（2008）『中世瀬戸窯の研究』高志書院
山田昌久（2003）『考古資料大観 第8巻 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館

第4章 調査の結果

調査対象地は数条の水路が流れる畑地・草地・雑木林・造成駐車場・グラウンドで（図版1）、対象面積は10.550㎡である。

今回の調査では、縄文時代後期～鎌倉時代の複数時期にわたる遺構・遺物を確認し、検出遺構には、竪穴建物13棟、掘立柱建物13棟、柵1列、井戸3基のほか、複数の溝・河道・土坑・小穴がある。

第1節 A区（図4-1）

市立城南小学校のグラウンド南東側の調査区である。調査区は水路等を勘案してA1～A8区の8つに分けて調査を行った。検出遺構は、竪穴建物12棟、掘立柱建物12棟、柵1列、河道1条、溝複数条のほか、複数の土坑、小穴を確認した。

(1) A1区（図4-1～34、図版2～4）

位置 A区のなかで南部に位置し、北側をA2区・A8区に接する。

基本層序・遺構面 層厚約0.9mの造成土の下に、層厚約0.4mの黄灰色粘質土、層厚約0.2mの褐灰色土がおおむね水平堆積し、その下の黄褐色土上面が遺構面（標高94.60m前後）となる。造成土は当該区の中央付近でさらに厚くなり、その厚さは約1.5mとなる。

検出遺構 河道・溝・土坑・小穴を検出した。

A. 溝・河道

溝S8（図4-2・5・6、図版2～4）

位置等 調査区の西半で検出された。南北に走り、南半は河道S9の削平を受ける。

形状・規模 幅1.5～3.9m、深さ約0.5m、断面U字形を呈し、N42°W前後の方向に走る。

堆積状況 上位から褐灰色の土・シルト・粘質土が堆積する。

出土遺物 土器・木製品が出土した。

〔土器〕

須恵器杯蓋(1)・平瓶(2)、緑釉陶器碗(4・5)、山茶碗(3・6～12)、山茶碗小碗(13～15)、白磁碗(16・17)が含まれる。3・12は底部外面に墨書がある。判読不明である。7は見込みに墨が付着する。転用碗と思われる。1は6世紀、2は7世紀頃、4・5は10世紀、3・6～17は12～13世紀の所産。

〔木製品〕

<食事具>箸(W1)が出土した。W1は片方の端を尖らせた、断面が五～六角形の角材である。木芯は持たない。

時期 出土遺物から12～13世紀以降に埋没したと推定される。

河道S9（図4-1～5・7～34、図版2～4）

位置等 調査区の北東3分の2ほどを占めており、南東から北西へ流れる河道の東岸が確認された。

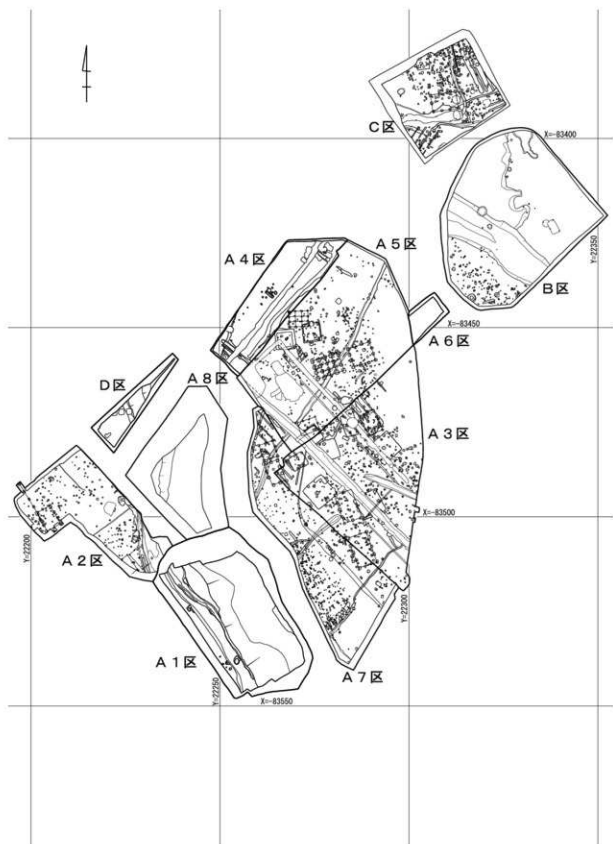


图 4-1 調査区全体図



图 4-2 A1区平面图

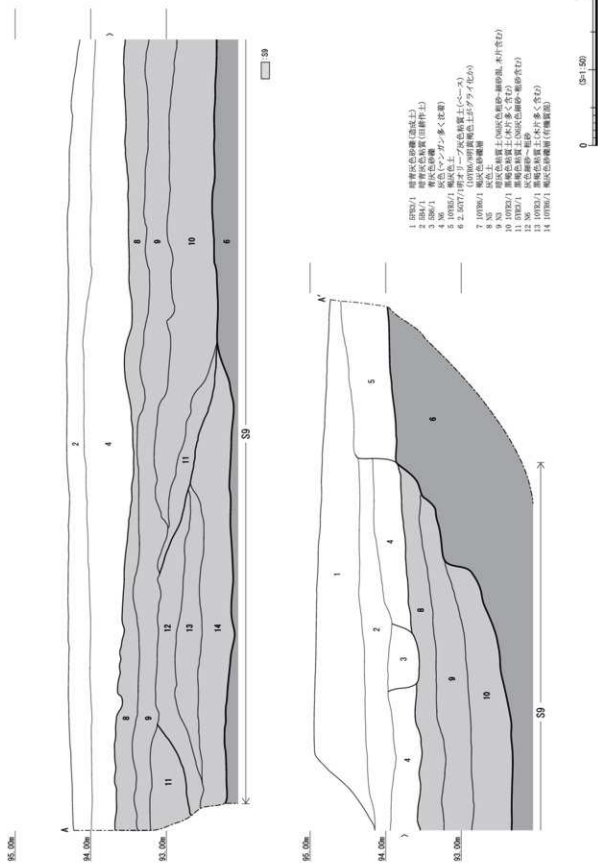


図 4-3 A1 区 南東壁断面図

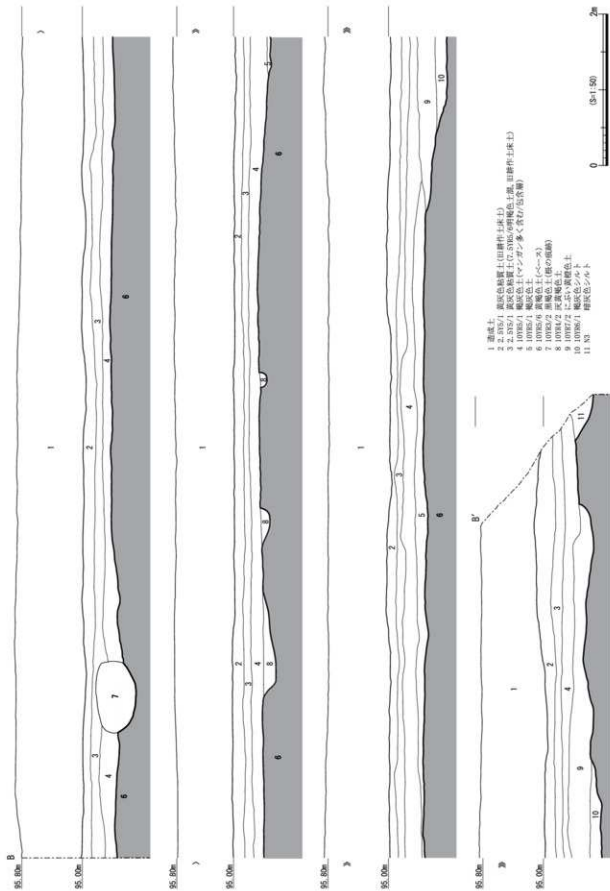


图 4-4 A1 区 南西壁断面图

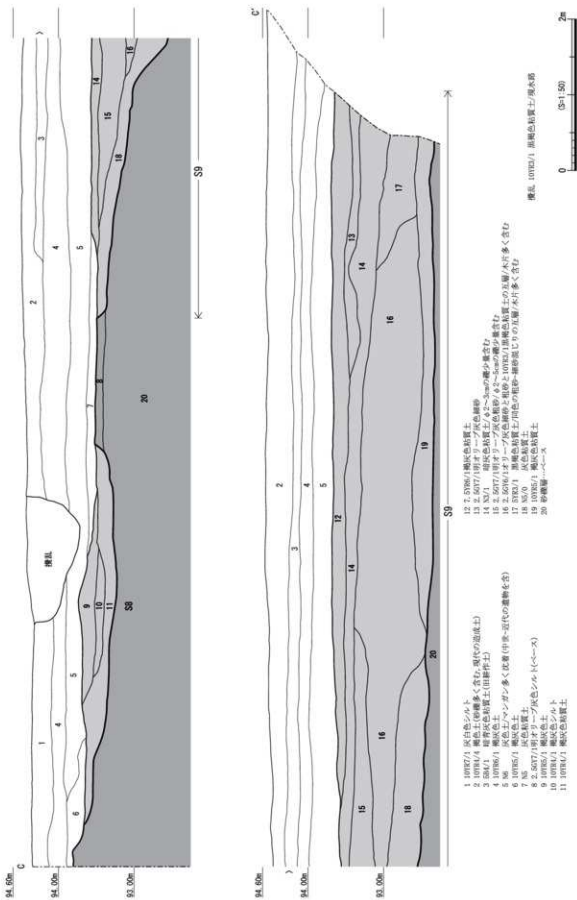


図 4-5 A1 区 北西壁断面図

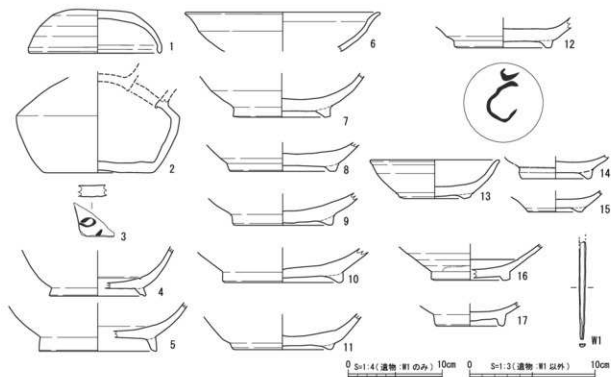


図4-6 A1区 溝S8 出土遺物

規模・形状 後述するA8区、D区で西岸の続きが、A4区・A7区で東岸の一部が検出されており、これらから約24mの幅を持つことが推定される。深さは約1.2~1.5m、底面の標高は92.25~92.50mであり、隣接するA8区の底面標高に比して高いことから、河道は南東から北西へ流れていたことが推定される。河道の上部には、一部で近代以降の河道が確認された。

堆積状況 粘質土層・砂礫層を基本とし、有機質層と砂礫層の厚い互層（16層）もみられた。水流のある状態とやや滞留した状態が、しばしば繰り返されていたことが推定される。

出土遺物 便宜的に北半と南半に分け、さらに検出面から下に約20cmごとに取り上げた。

縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・山茶碗・黒色土器・白磁・青磁・陶磁器といった土器のほか、管状土錘、瓦などの土製品、石鎌・敲石・石斧・砥石などの石製品、農具・工具・漁具・紡織具・容器・食事具・装身具・馬具・武器・楽器・祭祀具・細工物などの木製品、鉄鎌・絞具などの金属製品といった、縄文時代後期～鎌倉時代の多様な遺物が出土しており、また、各大別層で幅広い時期の遺物が含まれていた。一部には墨書や、墨・漆・柿渋様の褐色物質・赤色顔料の付着がみられる。

以下に大別層ごとの出土遺物を記す。なお大別層については、検出面より20cm下から40cm下までのものを「20~40cm」などと表記した。

【S9北半0~20cm】(図4-7~11)

土器・土製品・石製品・木製品が出土した。弥生時代後期から鎌倉時代の時期幅のある遺物を

含む。

[土器]

弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器・灰釉陶器、中世の土師器・山茶碗があり、弥生時代後期～鎌倉時代までの幅広い時期のものが含まれる。

22は弥生土器長頸壺で、外面に斜方向のハケ調整を行い、頸部外面には刺突文を巡らす。内面は斜方向のハケ調整の後ナデ調整を行う。焼成後に、体部上半に1cmほどの不整形な円形の孔を穿つ。24は弥生土器受口状口縁甕で、外面に縦方向のハケ調整、内面に横方向のハケ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。口縁部外面には刺突列点文、体部外面上半には柳描直線文を施す。口縁部から頸部にかけて部分的に炭化物が付着する。26は弥生土器高坏で、外面に斜方向のミガキ調整、内面にナデ調整を行う。22・24・26は弥生時代後期の所産。

23は土師器直口壺で、体部外面に斜方向のハケ調整を行った後、横方向または斜方向のミガキ調整を行う。口縁部は横方向のナデ、体部内面はナデ調整を行う。体部下半には炭化物が付着する。古墳時代前期の所産。25は北陸系の土師器有段口縁甕で、古墳時代初頭の所産。摩滅により調整は不明瞭である。

27・28は土師器長胴甕で、6～7世紀の所産。27は体部内面に縦方向のハケ調整、口縁部内面に斜方向のハケ調整を行う。外面はナデ調整で仕上げる。28は外面に縦方向のハケ調整を行い、口縁部は横方向のナデ、体部下半は縦方向のケズリ調整を行う。内面は口縁部を横または斜方向のハケ調整を、体部を縦または斜方向のハケ調整を行う。29は土師器把手部で、内外にハケ調整を行い、外面に把手を貼り付け、周辺をナデ調整で仕上げる。

30～32は須恵器杯蓋、33は須恵器杯身、34は須恵器有蓋高坏である。6世紀後半～7世紀初頭の所産。34は底部に脚部の痕跡が認められる。35は須恵器壺の口縁部である。36は須恵器甕で、沈線で区画された体部最大径付近にヘラ状工具による刺突文を巡らす。6世紀頃の所産。37は須恵器平底壺で、体部外面にカキ目がみられる。6世紀頃の所産。38は須恵器杯蓋で、天井部にツマミの痕跡が認められる。外面には降灰による厚い自然釉がみられる。7世紀の所産。39～42は須恵器杯蓋で、おおむね8世紀の所産。43～45は須恵器杯で、8世紀頃の所産。46は須恵器甕で、9世紀頃の所産。

47は土師器杯である。摩滅気味で調整不明瞭であるが、内面に放射状および螺旋状の暗文がみられる。48は土師器皿で、外面にミガキ調整およびケズリ調整を行う。内面には放射状暗文がみられる。47・48は8世紀頃の所産。

49は灰釉陶器碗、50・51は灰釉陶器鉢である。10世紀頃の所産。51は底部外面に木葉圧痕が認められる。52・53は山茶碗、54は山茶碗小碗、55・56は土師器皿である。おおむね12～13世紀の所産。

[土製品]

平瓦(57)、管状土錘(58)がある。57は凹面に布目、凸面に縄目の圧痕が認められる。古代のものである。58は土師質で、平面形状はやや紡錘形である。

[石製品]

磨石(S3)、砥石(S2)がある。S3は扁平な平坦面と側面の一部に顕著な磨面を持つ。S2

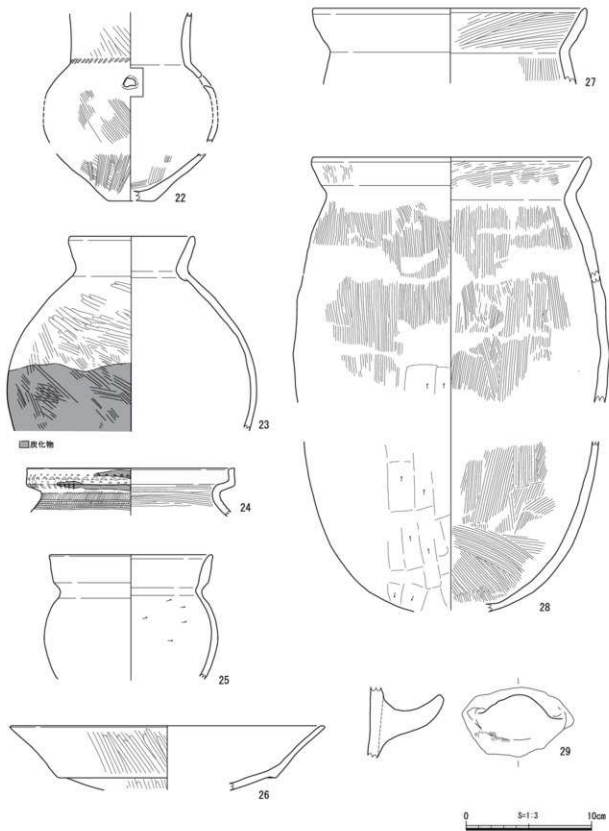


图 4-7 A1区 河道S9北半0~20cm 出土遗物(1)

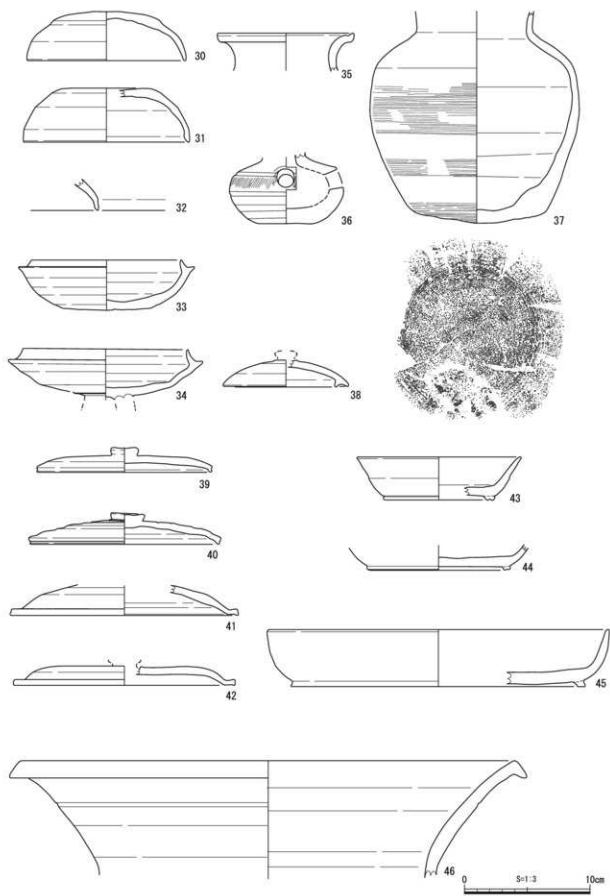


图 4-8 A 1 区 河道S9北半 0~20cm 出土遺物(2)

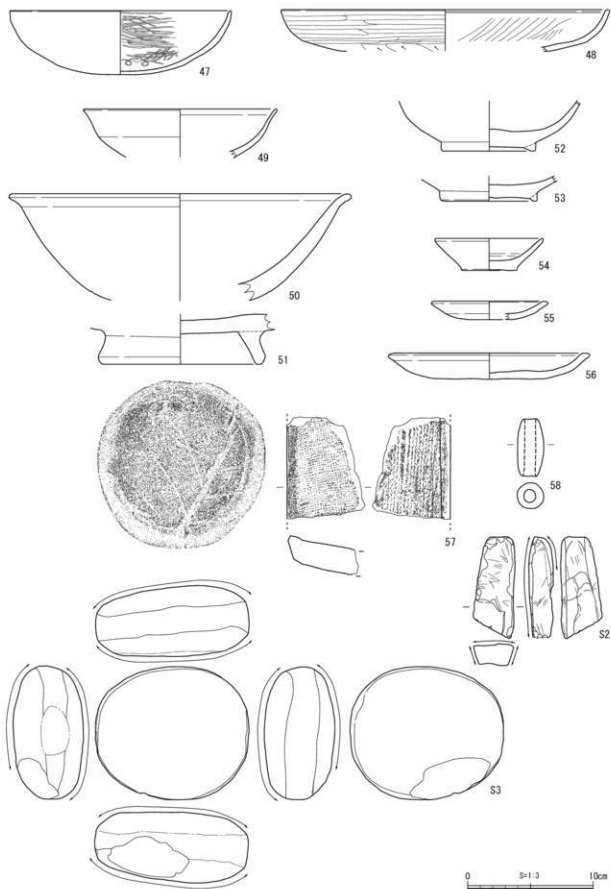


图 4-9 A 1 区 河道 S9 北半 0~20cm 出土遺物(3)

は複数面を使用する。

〔木製品〕

農具・紡織具・容器・用具・部材が含まれる。

＜農具＞W2・W3は杵型田下駄の杵部分である。W2は横杵で使用樹種はスギ、W3は縦杵で使用樹種はヒノキ属である。W2の横杵は、縦杵に差し込む突起の片方が欠損している。W3の縦杵には、横杵の角材を差し込む方形の穴が3ヶ所残存している。上端から1.5cmほどの位置に少し窪みを作っている。縄をかけるためか。このような杵型田下駄は「大足」とも呼ばれ、雑草を肥料として田圃の土中に踏み込んだり、代掻きを行ったりするためのもので、滋賀県内では弥生時代中期以降に現れる。

W9～W11はアカガシ亜属の材をミカン割にした角材である。W9は小径材を1/4程度にミカン割にしたもので、樹皮が剥離した痕跡が残る。堅杵や横槌などの原木か。W10もアカガシ亜属の材をミカン割にしたものだが、W9とは異なり樹皮部分は認められない。W11もアカガシ亜属の原木をミカン割に分割製材した材木である。弥生時代の堅杵などはアカガシ亜属でこの木取りで製作されることが多い。また、九州地方から関東・東北地方に至るまで、弥生時代から古墳時代を通じて、W76のように長い原木をミカン割にして複数の鎌や鋤を作り出していく方法が一般的であるので、その材木が折れたものではないかと思われる。

＜紡織具＞W4は杼で、上半を破損する。使用樹種はヒノキ属である。残存している上端の幅が広く、そこから下端に向かって緩く湾曲しながら細くなる。断面では、弧の凸側が刃状に整形されている。上端の破損している部分は、ポケット状に丸く窪めるような加工が施されている。表裏ともに表面には糸の擦痕が残る。杼は、経糸（たていと）の間に緯糸（よこいと）を通す際に用いられる織機部品である。

＜容器＞W5は削り物の平面方形の槽の一部か。使用樹種がアカガシ亜属なので、一木鋤の肩部である可能性もある。

W6～W8は曲物底板である。W6はアスナロ属製で、縁辺部を幅1cm程、一段薄く加工し、そこに上面から穴を明け、側板を樹皮で結束したうえで楔として木釘を打ち込んで締めている。使用しているのはサクラの樹皮と思われる。W7・W8は針葉樹で、W7の側面には木釘の痕跡が残る。表面には刃傷が見られる。W8は右方約1/2が欠損していると思われる。側板との結合方法は不明である。表面には刃傷が見られる。

＜用具＞W12は厚みのある板材で、作業台と思われる。使用樹種はスギで、上側は斜めに切断している。右図側は全体的に炭化している。左図側中央には、多くの刃傷が残る。

＜部材＞W13はアスナロ属の板材である。上方に楕円状の突起を斜めに作り出し、板状部分には一辺4cm前後の方形の貫通穴をあける。方形貫通穴の左辺は、隅部分が上下方向に摩滅している。楕円状突起部分の側面も、摩滅している。W14はヒノキ属の角材で、下端は欠損する。W15は針葉樹の角材である。上端は摩滅しており、下端は欠損している。

＜端材＞W16は針葉樹の角材である。1cm強四方に粗く削られており、両端が炭化している。松明として使用した燃えさしと考えられる。

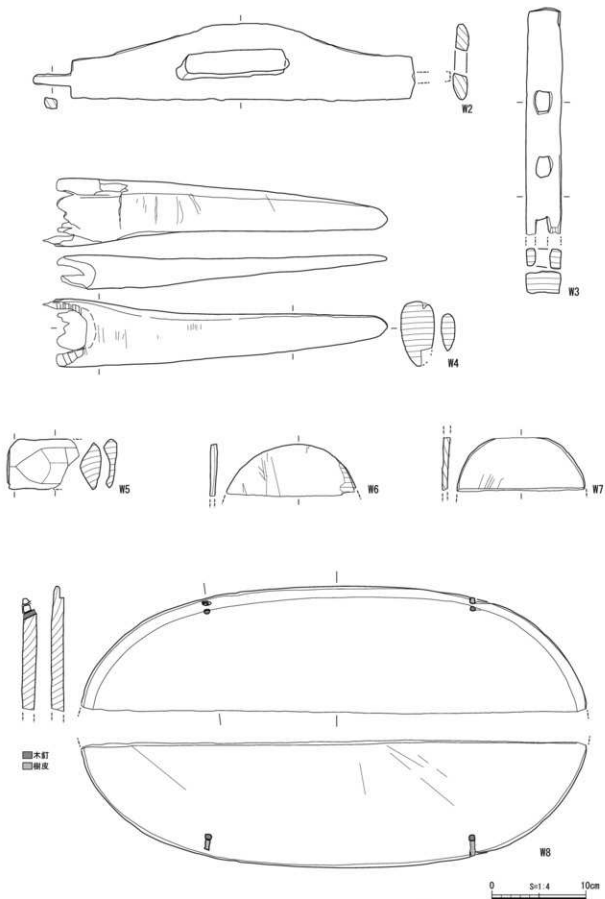


图 4-10 A1区 河道S9北半0~20cm 出土遗物(4)

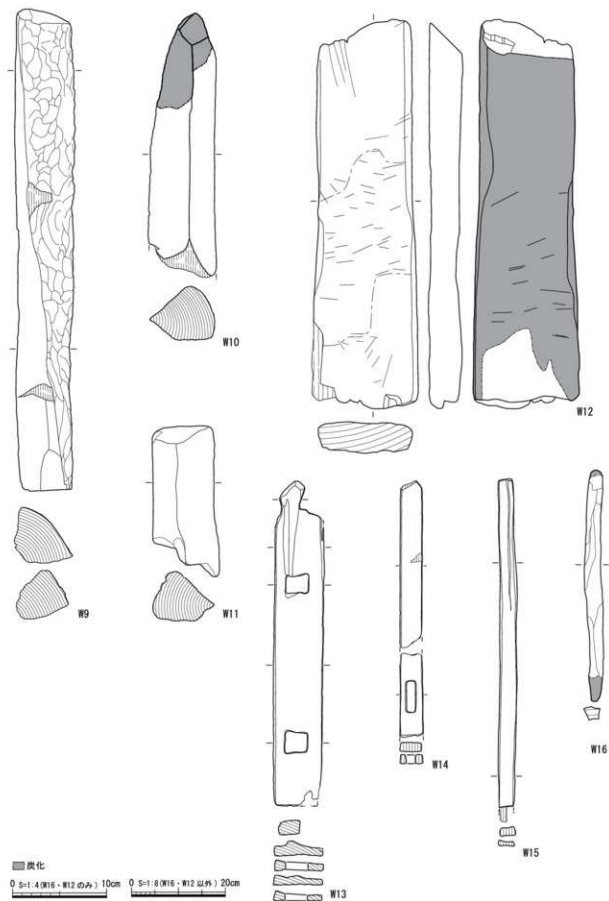


図 4-11 A 1 区 河道S9北半0~20cm 出土遺物(5)

【S9北半20～40cm】(図4-12)

土器・土製品・木製品が出土した。弥生時代中期後半から鎌倉時代までの時期幅のある遺物を含む。

〔土器〕

弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、中世の土師器・山茶碗といった、弥生時代中期頃～鎌倉時代の幅広い時期のものが含まれる。

59は弥生土器口縁部と思われる。内外面に斜方向のハケ調整を行い、口縁部外面に凹線を施す。弥生時代中期後半の所産か。

60は土師器甕で、内外面に斜方向のハケ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。古墳時代後期頃の所産。

61・62は須恵器杯蓋で、6世紀の所産。63は回転台土師器杯で、内面にハケ目がみられ、内面上半に炭化物が付着する。10世紀頃の所産。

64は朝鮮半島系土器¹⁾の体部片である。軟質で外面に格子状のタタキ痕が認められる。5世紀頃のものである。

65は山茶碗で、底部外面に墨書がある。「上」の下に弧状に線を入れる。12世紀末～13世紀の所産。

〔土製品〕

平瓦(66)、管状土錘(67)がある。66は凹面に布目、凸面に縄目が認められる。古代のものである。67は土師質で、平面形状はやや紡錘形である。

〔木製品〕

漁具・容器・端材・串・部材がある。

<漁具>W17はアカスクイで、使用樹種はヒノキ属である。断面コ字形の身に直線的な柄が付く。下方、身部先端が破損し、身部裏面は一部剥離している。身部内面には一部炭化している部分がある。アカカキとも呼ばれ、船の中に染み出してくる水を船外にくみ出す道具である。しかし、他に漁撈と関連する遺物が見られない内陸の遺跡からも同様の形状のものが出土することがあること、弥生時代中期以降に出土することなどから、収穫した穀物を俵などに入れるときに使う杓のようなものである可能性も指摘されている。

<容器>W18は曲物底板で、下半が欠損している。残存している部分の側面中央に、側板との結合のための木釘が1箇所残っている。

<端材>W19はスキの板材である。上下面および中央の切り込み部分にはノコギリによる切断の痕跡が残る。中央の切り込みの延長上には、切断に先立つ毛引き線と見られる線が引かれている。左側は丸く削っている。右側は特に加工を加えておらず、切り落とされたままの状態である。

<串>W20・W21は串で、いずれも一端を尖らせた太さ1～3cmの角材ないし棒材である。W20はヒノキ属、W21はアスナロ属である。

<部材>W22は柱材で、樹種はアスナロ属である。下半は直径6.5cmの芯持材で、枝を払っている。下端は尖らせるように削っている。上半は細く削られており、断面は径3.5cm前後の不整多角形を呈する。この部分の側面には加工痕が残る。こちらの上端も尖らせるように削っている。細い部分の根本には加工の際についてと思われる刃傷が残る。この部分をソケット状の別材に差し込

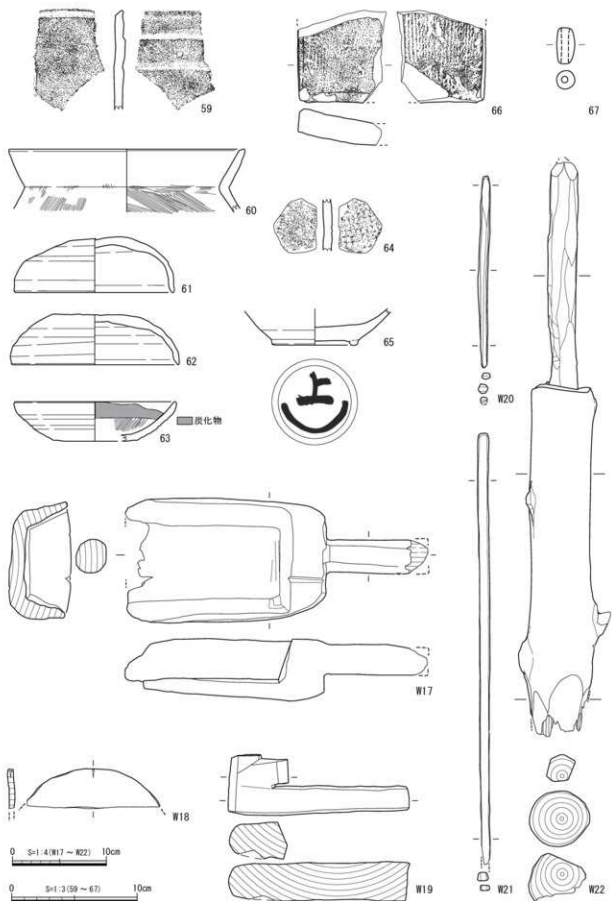


图 4-12 A 1 区 河道S9北半20~40cm 出土遗物

んで使用されていたものが、後に柱材に転用された可能性がある。

【S9北半40～60cm】(図4-13・14)

土器・土製品・木製品が出土した。縄文時代晩期後葉～平安時代前期頃までの時期幅のある遺物を含む。

〔土器〕

縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器があり、縄文時代晩期後葉～平安時代前期頃の幅広い時期のものが含まれる。

68・69は縄文土器深鉢で、縄文時代晩期後葉の滋賀里Ⅳ式のものである。68は内外面ナデ調整を行い、貼付突帯上に刻みを施す。69は内外面に条痕がみられ、口縁部外面に突帯を貼り付ける。

70は弥生土器広口壺である。口縁部外面に凹線を巡らせ、口縁部内面に竹管文・綾杉文を施し、赤色顔料を塗布しており、装飾に富む東海地方の影響を受けたものと思われるが、内外面には明瞭なミガキ調整は認められず斜方向のハケ調整を行っており、在地のものと考えらえる。71は弥生土器長頸壺で、外面に斜方向のハケ調整、内面にナデ調整、口縁部は横方向のナデ調整を行う。

72は弥生土器受口状口縁甕で、外面に縦方向のハケ調整を行い、体部上半に横描直線文、口縁部に柳条工具による刺突列点文を巡らす。内面は横方向のハケ調整の後、口縁部は横方向のナデ、体部はナデ調整を行う。75・76は弥生土器高坏で、内外をミガキ調整で上げる。70～72・75・76は弥生時代後期の所産。

73は土師器高坏で、脚部に八角形の面取りを行う。8～9世紀頃の所産。77は土師器脚部で、内外面に縦または斜方向のハケ調整を行う。78・79は土師器把手で、内外面にハケ調整を行い、把手を貼り付ける。6世紀頃の所産。

80～86・90・91は須恵器杯蓋、87～89は須恵器杯身、92は有蓋高坏蓋である。85は天井部に一部焼成時の膨張が認められる。92は天井部の調整の際に付いたヘラ状工具の跳ね痕と思われる線状痕がみられる。80～92は6世紀後半～7世紀初頭の所産。

93・94は須恵器蓋で、おおむね8世紀の所産。95は須恵器脚部、96は須恵器甕で、6世紀頃の所産。93は内面に墨書が認められるが、判読不明である。96は外面をナデ調整で仕上げ、口縁部外面に板状工具による刺突を巡らす。体部内面には同心円状の当て具痕が認められる。

〔土製品〕

管状土錘(74)がある。74は土師質焼成品で、平面形状はやや紡錘形である。

〔木製品〕

紡織具・農具・装身具・串・部材・端材・用途不明品がある。

<紡織具>W23は杵で、使用樹種はスギある。中央が厚くなり、方形の貫通穴があげられている。中央部分を一部欠損するが端部は左右とも完存している。製糸に用いられる道具の一部であり、国内では弥生時代中期から出現するが、7世紀には出土数が大きく減少する(東村2004)。

<農具>W24は曲柄平鍬の着柄部である。使用樹種はアカガシ亜属で、ナスビのヘタ状突起から刃部にいたる部分のみ残存している。古墳時代の所産と思われる。W25はムシロや俵を編む際に用いる木錘である。使用樹種はヒノキである。丸太のまま、あるいは断面水滴状に加工されるも

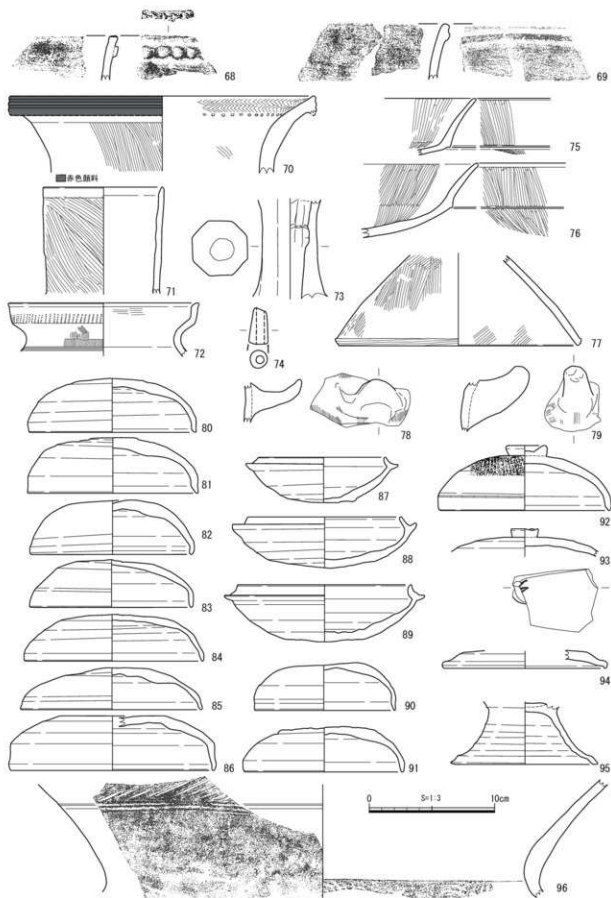


图 4-13 A 1 区 河道 S9 北半 40~60cm 出土遗物 (1)

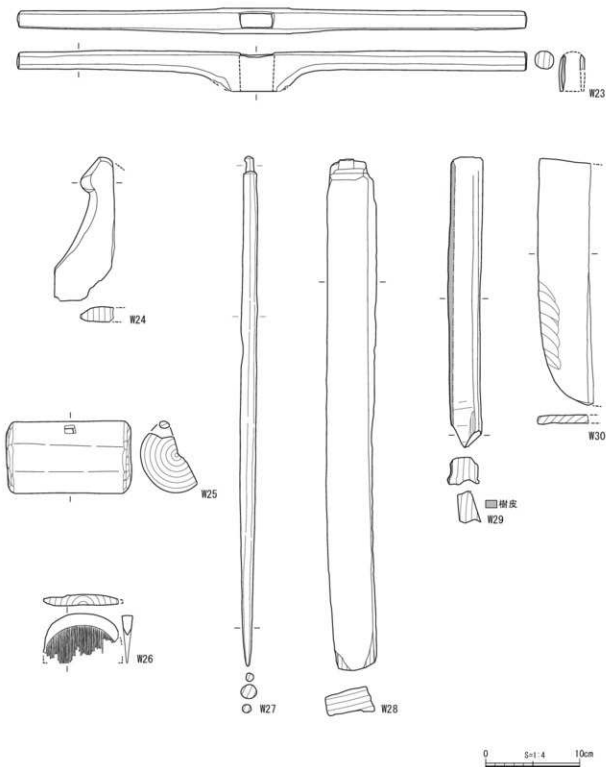


图 4-14 A1 区 河道S9北半40~60cm 出土遗物(2)

のが多いが、W25は丸太を半裁している。このタイプの本鍾は弥生時代後期以降、継続的に使われ続ける形状である。

<装身具>W26は櫛で、使用樹種はツバキである。歯は1cmあたりおおよそ6本である。一木から削り出す櫛櫛であり、古墳時代中期以降に一般化する。

<串>W27は串で、一端を尖らせた太さ1～3cmの棒材で、もう一端に円柱状の突起を作り出す。樹種はスギである。

<部材>W28は針葉樹の角材である。上端はナタ状の刃物で表裏両面から切り落とされている。下端は摩滅する。

<端材>W29はスギの角材である。樹皮が残っており、両端は切り落とされている。

<用途不明品>W30はヒノキ属の板材である。刀子状に残存しているが、右側側面には破損した痕跡が見られる。上端は破損ではなく切断されている。弧状に加工されている付近の表面の一部には、刃物で削った痕跡が残る。

【S9北半60～80cm】(図4-15)

須恵器有蓋高坏蓋(97)・杯身(98)が含まれる。6世紀の所産。

【S9北半80cm～最下層】(図4-15)

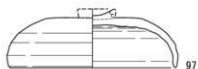
土器が出土した。弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器があり、弥生時代後期～古墳時代後期頃の時期幅のあるものが含まれる。

99・100は弥生土器短頸壺である。弥生時代後期の所産。99は外面に斜方向のハケ調整を行う。内面は摩滅しており調整不明瞭である。100は外面に斜方向のハケ調整、口縁部は横方向のナデ調整を行う。内面は口縁部には横方向のハケ調整、体部上半はナデ調整、下半は斜方向のハケ調整を行う。103は弥生土器器台で、脚部には3方向に円形の透かしを穿つ。脚部外面に縦方向のミガキ調整を行い、3帯の櫛描直線文を施し、赤彩を施すもので、東海地方の影響を受けたものと考えられるが、内面には横方向のハケ目がみられ在地のものと思われる。弥生時代後期の所産。

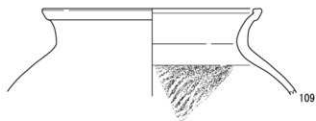
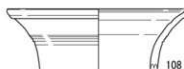
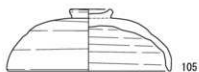
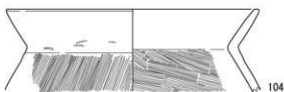
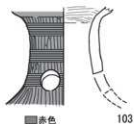
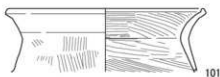
101は土師器くの字状口縁甕で、外面に縦または斜方向のハケ調整、口縁部に横方向のナデ調整、内面に斜方向のハケ調整を行う。102は土師器受口状口縁甕または鉢で、外面に斜方向のハケ調整、内面に横方向のハケ調整を行い、口縁部は横方向のナデによって仕上げる。101・102は古墳時代前期の所産。

104は土師器甕で、外面に斜方向のハケ調整、口縁部に横方向のナデ調整を行う。内面は横または斜方向のハケ調整、口縁部はナデ調整で仕上げる。古墳時代後期頃の所産。

105は須恵器有蓋高坏蓋、106は須恵器杯蓋、107は須恵器杯身で、6世紀後半～7世紀初頭の所産。108は須恵器壺、109は須恵器短頸壺で、7～8世頃の所産。109は外面に降灰による厚い自然釉がみられ、内面には同心円状の当て具痕が認められる。



(60~80cm)



(80cm~最下層)



图 4-15 A 1 区 河道S9北半60~80cm・80cm~最下層 出土遺物

【S9南半0～20cm】(図4-16～19)

土器・土製品・石製品・木製品などが出土した。縄文時代晩期～鎌倉時代までの幅広い時代の遺物を含む。

〔土器〕

縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器・灰釉陶器・青磁・白磁・青白磁、鎌倉時代の山茶碗・黒色土器・陶器があり、縄文時代晩期～鎌倉時代の幅広い時期のものを含む。灰釉陶器・山茶碗には墨書や墨の付着した資料が多くみられるほか、漆様の褐色物質が付着する資料も認められる。

110～112は縄文晩期中葉の篠原式の深鉢である。110は外面に条痕が認められる。111・112は外面に条痕がみられ、口縁端部に刻みを施す。111は外面に炭化物が付着する。113は縄文時代晩期後葉の遊里Ⅳ式の深鉢である。内外ミガキ調整を行い、口縁部の表裏に突帯を貼り付ける。

114は土師器複合口縁壺で、口縁部内外面に横方向のミガキ調整を行う。頸部外面は縦方向のケズリ調整を行った後、縦方向のミガキ調整を行う。古墳時代前期の所産。115は弥生土器高坏で、内外面を縦方向のミガキ調整で仕上げる。弥生時代後期の所産。

116は須恵器杯身で、6世紀後半～7世紀初頭の所産。117・121は須恵器杯蓋で、おおむね8世紀の所産。121は内面に墨書が認められる。判読不明。118は須恵器杯で、7世紀頃の所産。119・120は須恵器杯で、8世紀の所産。120は口径の大きいものである。122は青磁四耳壺である。123～125は須恵器壺で、8世紀後半～9世紀の所産。124は小型壺で、内面に墨が付着する。129は須恵器甕で、外面にタタキ調整、内面にナデ調整を行う。

126は灰釉陶器壺、128は灰釉陶器耳皿で、9～10世紀頃の所産。127は土師器高坏で、脚部を六角形に面取りする。8～9世紀の所産。130・131・133は回転台土師器碗である。130・131・133は9世紀後半～10世紀、132・134・135は土師器台付皿である。12世紀頃の所産。136は灰釉陶器皿、137は灰釉陶器碗または皿、139・140・143は灰釉陶器碗である。9世紀の所産。137は底部外面に墨書がみられる。「東寺」または「東守」か。

138・141・142・144～162は山茶碗である。12～13世紀の所産。いくつかについては底部外面に墨書がみられる。138・160は「は」または梵字と思われる。147・148・150・152・153・158・162は判読不明。また、153・158・160の見込み、154・155の底部外面、156の見込みと底部外面、157・159の底部外面には墨が付着する。これらは転用碗と考えられる。142・145は内面に赤色顔料が付着する。顔料のパレットとして使用したものと思われる。161の内面には褐色物質が付着する。漆か。163は山茶碗鉢である。外面下方にケズリ調整を行う。12世紀の所産。164～172は山茶碗小碗である。12世紀の所産。164は底部外面に墨書がみられる。記号であろうか。170の底部外面には墨の付着が顕著である。転用碗と考えられる。

173～184は土師器小皿、185～188は土師器大皿である。おおむね11～12世紀頃の所産。189～191は白磁碗、192は青白磁壺である。193～195は近江型黒色土器碗で、内面から口縁部外面が黒化し、内面には暗文がみられる。12世紀後半～13世紀の所産。196は土師器羽釜で、内外面にナデ調整を行う。11世紀頃の所産。197は底部外面に墨書がみられる。198は青磁壺である。

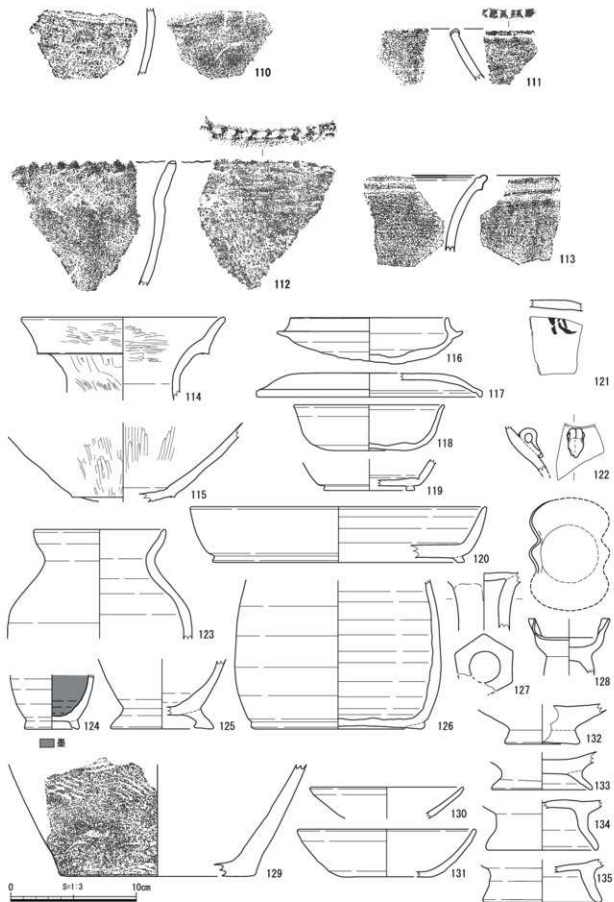


图 4-16 A1区 河道S9南半0~20cm 出土遗物(1)

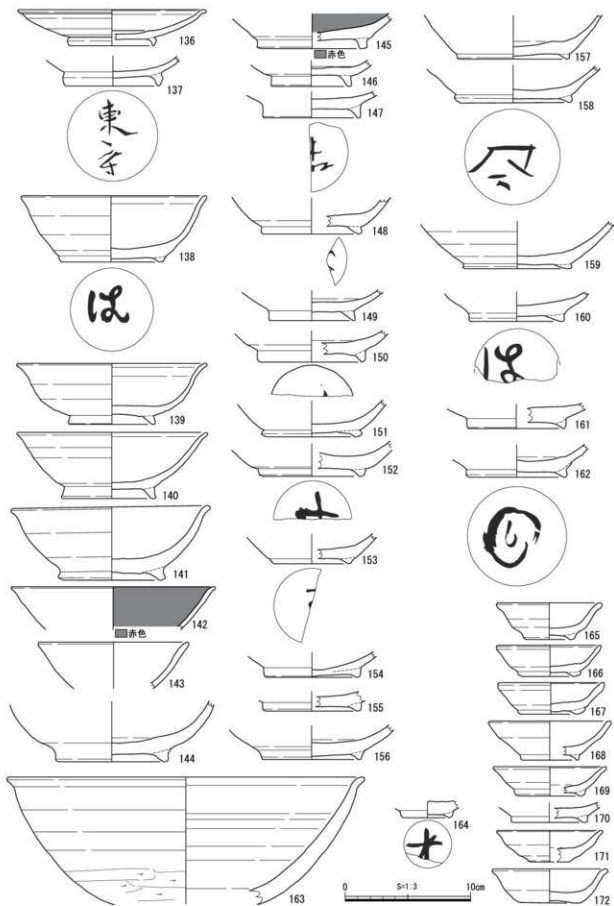


图 4-17 A1区 河道S9南半0~20cm 出土遗物(2)

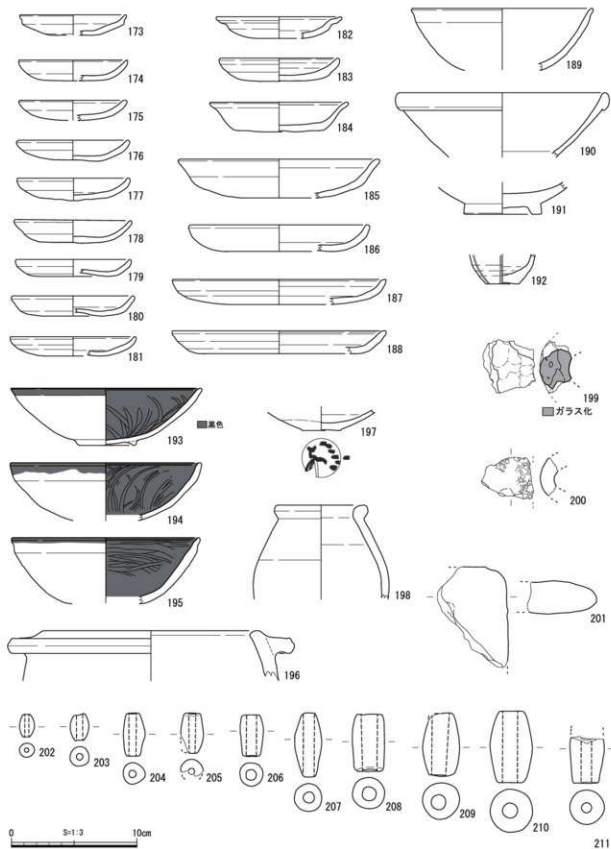


図 4-18 A 1 区 河道S9南半0~20cm 出土遺物(3)

〔土製品〕

羽口（199・200）、管状土錘（202～211）、用途不明品（201）がある。

199・200は大部分を欠損する。199は小口の一部がガラス化する。200は表面に気泡状の凹凸がみられる。被熱によるものと考えられる。

201は土師質焼成品である。方形の形状と思われ、二辺を欠損する。211は一方が欠損する。

202～211はすべて土師質で、長さ2cm程度のものから5cm程のものまでである。平面形状は208が方形のほかは、やや紡錘形のものである。

〔石製品〕

石鍋（S4）、砥石（S5～S8）がある。S4は口縁端部から内面を著しく平滑に研磨し、外面には横方向の研磨痕が残る。S5～S8は複曲面を使用する。S9は扁平な平坦面の片側に使用面を持つ。

〔木製品〕

容器・祭祀具・串・用材がある。

＜容器＞W31は曲物底板である。樹種はアスナロ属で、ほぼ完形だが、木釘の跡などは見られず、側板との結合方法は不明である。W32は漆器椀である。樹種はトチノキで、横木取りであり、内面に黒漆を施す。文様などは確認できない。

＜祭祀具＞W33は斎串である。厚さ0.5cmのスギの板材で、上下端を斜めに切り落とす。薄板式・斜頭式・無造作式である（奈良文化財研究所2019）。

＜串＞W34～36は串である。いずれも一端を尖らせた太さ1～3cmの角材ないし棒材である。W35は先端がつぶれている。W34・W35の樹種はヒノキ属である。W36の樹種はスギで、下端を削って尖らせている。断面は楕円形で、上端は破損している。

＜用材＞W37は杭である。針葉樹の芯持ち材で、全体が緩く湾曲し、粗く面取りしている。上方は欠損しており、下方は削って尖らせている。

〔S9南半20～40cm〕（図4-20～24）

土器・土製品・石製品・木製品が出土した。縄文時代晩期中葉～鎌倉時代までの幅広い時期の物を含む。

〔土器〕

縄文土器、弥生土器、古墳時代の須恵器、古代の須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器、中世の山茶碗・瓦器・黒色土器・土師器があり、縄文時代晩期中葉～鎌倉時代までの幅広い時期のものを含む。灰釉陶器・山茶碗には墨の付着した資料や墨書が多くみられる。

212は縄文時代晩期後葉の深鉢である。外面にケズリ調整、内面にナデ調整を行い、貼付突帯上に刻みを施す。縄文時代晩期後葉の所産。213は縄文時代晩期中葉の篠原式の深鉢である。内外面にナデ調整で仕上げ、口縁端部に刻みを施す。外面に炭化物が付着する。

214は弥生土器の底部である。円形の焼成前穿孔がみられる有孔鉢と考えられる。外面をナデ調整し、内面は横または斜方向のハケ調整を行う。弥生時代後期の所産か。

215・217は土師器高坏である。古墳時代前期の所産。内外面に摩滅しており、調整不明である。

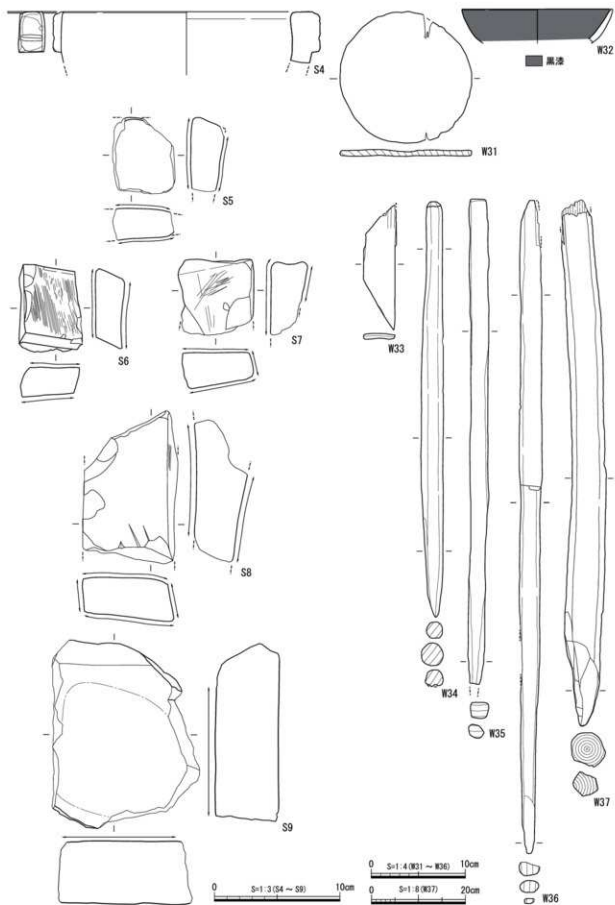


图 4-19 A 1 区 河道 S9 南半 0~20cm 出土遺物 (4)

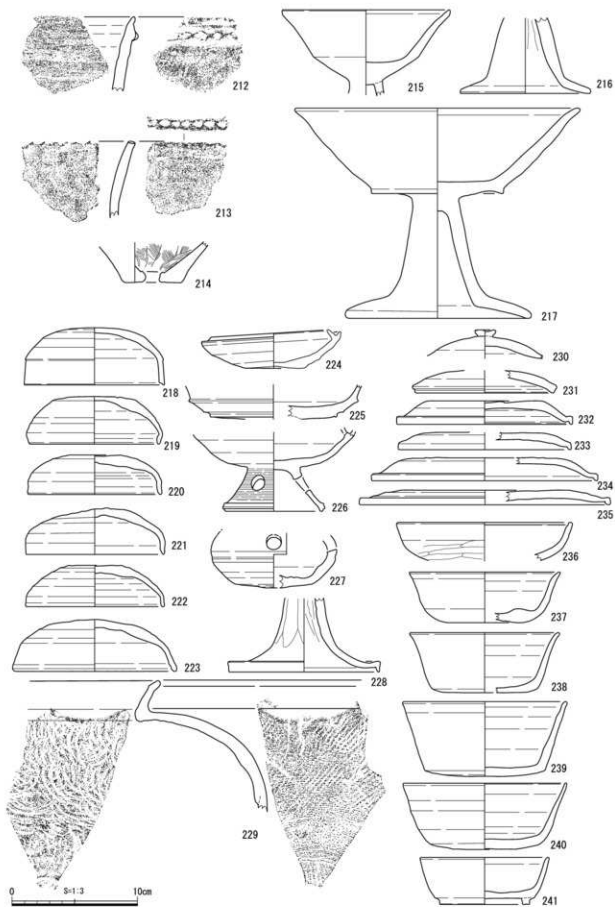


图 4-20 A1区 河道S9南半20~40cm 出土遗物(1)

217は土師器脚部である。内外面をナデ調整で仕上げる。

218～223は須恵器杯蓋、224は須恵器杯身である。218は5世紀後半、219～223は6世紀後半～7世紀初頭の所産。225は須恵器無蓋高坏、226は須恵器有蓋高坏である。5世紀後半～6世紀前半の所産。226は脚部にカキ目が認められ、3方向に円形の透かしを設ける。227は須恵器甕である。6世紀後半頃の所産。229は須恵器横瓶である。体部断面には閉塞部が確認できる。外面には平行タタキ・カキ目、内面に同心円状の当て具痕がみられる。6世紀頃の所産。230～235は須恵器杯蓋である。230は7世紀の所産。231～235は8～9世紀の所産。237～241は須恵器杯である。237～240は7～8世紀、241は8世紀の所産。237は底部に焼成時の膨張痕が認められる。

228は土師器高坏である。脚部を面取りする。8世紀頃の所産。236は土師器杯である。外面下方に横方向のケズリがみられる。8世紀頃の所産。

242～244は土師器甕である。242は体部内面にハケ調整を、体部外面にナデ調整を行い、口縁部内外を横方向のナデ調整で仕上げる。243は体部外面にハケ調整を、体部内面にナデ調整を行い、口縁部内外を横方向のナデで仕上げる。口縁部下半に炭化物が付着する。244は体部外面に平行タタキがみられ、口縁部～体部上半の内外に強い横方向のナデ調整を行う。いわゆる「甲良甕」(重岡2001)である。9世紀後半～10世紀の所産。

245は須恵器鉢、246は須恵器甕である。245は口縁部内面にヘラ記号「×」が認められる。247は須恵器小型壺である。外面下半にヘラケズリを行う。8世紀後半～9世紀の所産。

248は灰軸陶器壺である。9～10世紀の所産。249は緑軸陶器碗である。10世紀頃の所産。250は無軸陶器碗である。9世紀頃の所産。251・254・257～261・264は灰軸陶器碗、269・270は灰軸陶器皿である。9～10世紀の所産。261の底部外面には墨が付着する。転用碗と思われる。257～259・264・270には底部外面に墨書がみられる。257・259は「上」、他は判読不明。

252・253・255・256・262・263・265～268は山茶碗である。12～13世紀の所産。253は口縁部に輪花が施される。263は強い圧痕により高台の凹凸が著しい。253の内面には赤色顔料が付着する。パレットとして使用したものと考えられる。262の底部外面、263の見込みには墨が付着する。転用碗と考えられる。256の外面、266・267の底部外面には墨書がみられる。256は「サ」か。271・272は山茶碗小碗で、12世紀頃の所産。272の底部外面には墨書がみられる。「山」か。

273～275は回転土師器碗である。9世紀後半頃の所産。276・277は底部糸切土師器皿である。10世紀頃の所産。278・280・281は白磁碗、279は白磁輪花皿である。282・283は土師器小皿で、糸切底である。13世紀頃の所産。284～288は土師器小皿、289～291は土師器大皿である。おおむね12世紀頃の所産。

292は土師器鍋である。口縁部外面から体部内面に横方向のナデ調整、体部外面にナデ調整を行う。293は瓦器碗で、見込みに格子状暗文がみられる。12世紀頃の所産。294は近江型黑色土師器碗で、内面から口縁部付近が黒化し、内面に暗文がみられる。12世紀後半～13世紀の所産。295～297は土師器羽釜である。295の外面、296の内面には炭化物が付着する。297は内面を横または斜方向のハケ調整、外面をナデ調整で仕上げる。おおむね12～13世紀頃の所産。

〔土製品〕

平瓦 (298～300)、管状土錘 (301～307) がある。

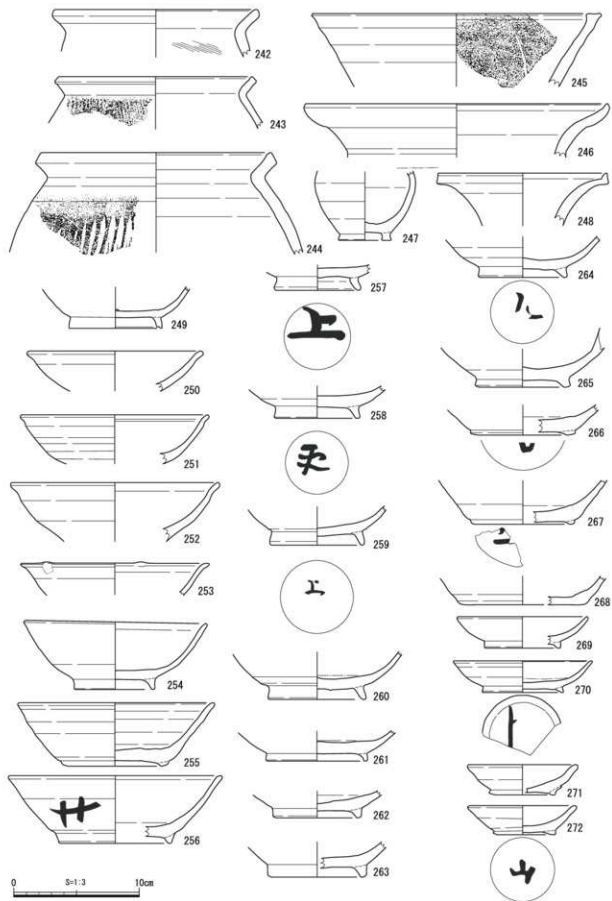


图 4-21 A 1 区 河道S9南半20~40cm 出土遺物(2)

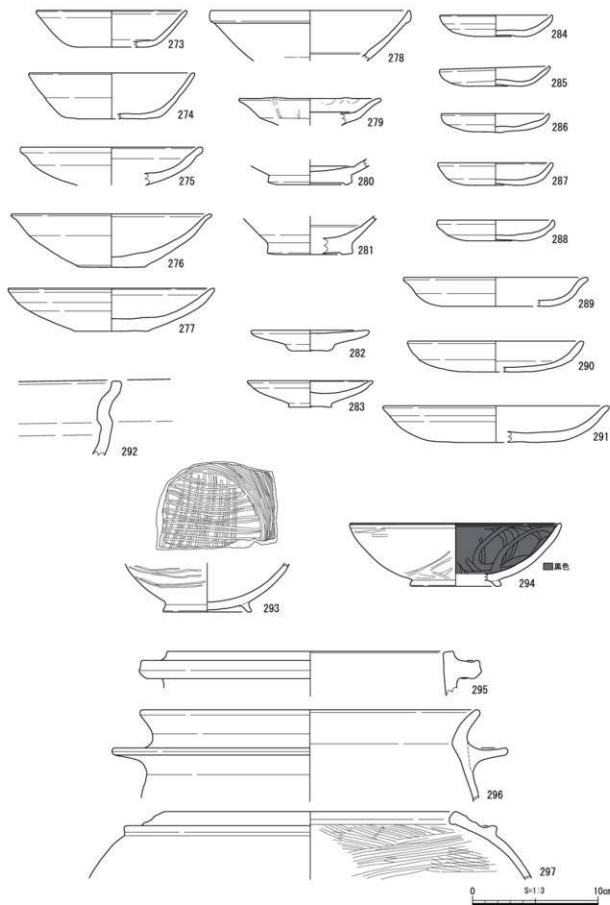


图 4-22 A 1 区 河道S9南半20~40cm 出土遺物(3)

298・299は凹面に布目、凸面に縄目が認められ、300は凹面に布目、凸面に並行叩きが認められる。古代のものである。

301～303・305～307は土師質焼成品、304は須恵質焼成品である。平面形状はいずれもやや紡錘形で、長さが2 cm程度のものから4.5cm程のものがある。

[石製品]

剥片 (S10・S11)、磨石 (S13)、磨石・敲石 (S12)、砥石 (S15・S16)、棒状石製品 (S14) がある。

S10・S11はサヌカイトの剥片で、一部に礫面が残る。S12は平坦面の磨面に加え、同じ面と側面にも敲打痕が認められる。転用あるいは併用していたものか。S13は平坦面に使用面を持つ。S12・S13は部分的に炭化物が付着する。S14は全体に平滑で、顕著な擦痕などは認められない。用途不明品である。S15・S16は複数面を使用する。

[木製品]

農具・装身具・祭祀具・食器具・部材・用材・容器・端材がある。

<農具>W38はムシロや俵を編む際に用いる木錘である。使用樹種はヒノキである。

<装身具>W39は下駄である。大半が欠損しているが、平面楕円形の連歯下駄と思われる。使用樹種はケヤキである。上面には指の痕跡が残る。残存している歯の基部には、ノミヤノコギリで加工した痕跡が見られる。

<祭祀具>W40は斎串である。厚さ0.3cmのヒノキ属の板材で、上端を尖らせる。左右に2対の切れ込みを入れており、近年の分類(奈良文化財研究所2019)に従えば薄板式・圭頭式・挾式となり、7世紀以降のものと思われる。

<食器具>W41は箸である。片方の端を尖らせた、断面が五～六角形の角材である。木芯は持たない。

<部材>W42はスギの板材である。上端は方形で、若干摩滅気味である。上端から約6 cmの位置に、一辺約1 cmの貫通穴があいている。下端は1/4弧状を呈しており、切断する際についたと思われる刃傷が見られる。

<用材>W43はイヌマキの棒材である。芯持ち材で、緩く湾曲している。上方は欠損しており、下方は削って尖らせている。杭か。直径が約1.5cmと細いので、タモ幹などの可能性もある。

<容器>W44は容器である。側面に直接木釘を打ち込んでいる。側板も残存しており、薄く削いだ板に細かく傷を入れて曲げ、樹皮で編んで留めている。下端には木釘の跡が残る。

<端材>W45は燃えさしである。針葉樹の角材で、1 cm強四方に粗く削られており、片端が炭化している。松明として使用した燃えさしか。

[その他]

ほかに、ウシの骨が出土した(図版111②)。右脛骨で、近似端は破損するが、遠位端は良好に遺存する。解体痕や嚙食痕などは認められない¹²⁾。

[S9南半40～60cm] (図4-25～29)

土器・土製品・石製品・木製品が出土した。縄文時代晩期中葉～鎌倉時代までの幅広い時期の遺物を含む。

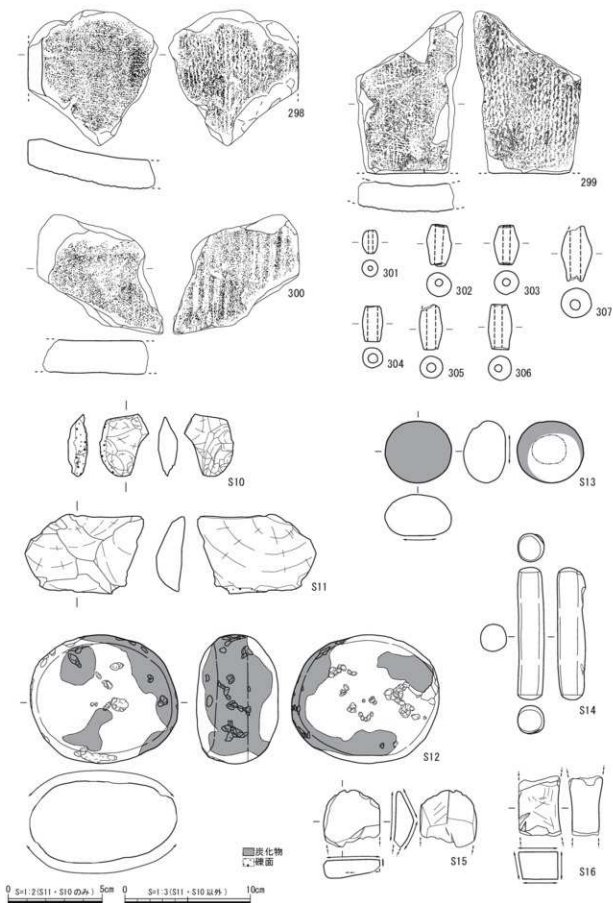


图 4-23 A 1 区 河道 S9 南半 20~40cm 出土遗物 (4)

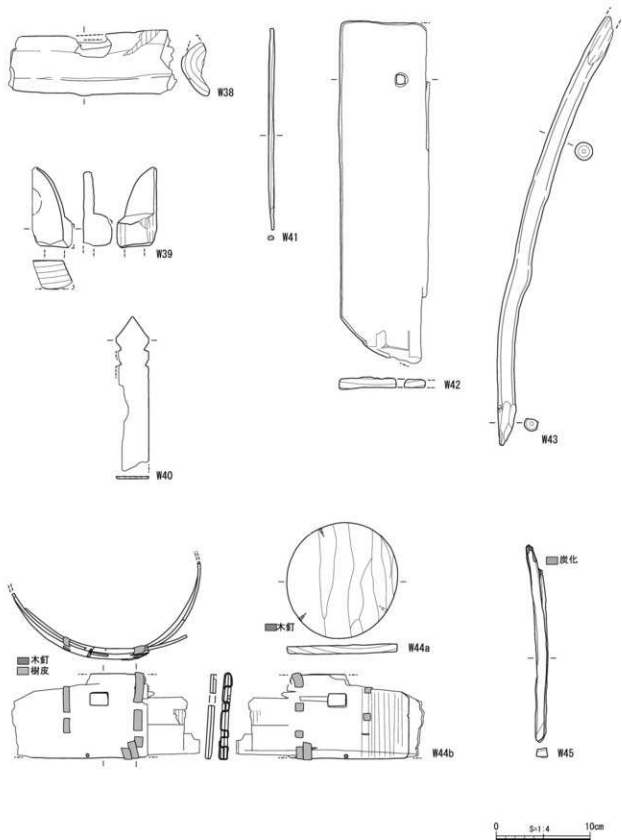


图 4-24 A 1 区 河道S9南半20~40cm 出土遗物(5)

[土器]

縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器、灰軸陶器、中世の土師器・瓦質土器、黒色土器があり、縄文時代晩期中葉～鎌倉時代までの幅広い時期のものが含まれる。

308は縄文時代晩期中葉の篠原式の深鉢である。口縁端部に刻みを施し、内外面にナデ調整、体部外面にケズリ調整を行う。外面に炭化物が厚く付着する。309は縄文時代晩期後葉の滋賀里Ⅳ式の浅鉢である。口縁部外面に突帯を貼り付け、内外面にナデ調整、体部外面にケズリ調整を行う。外面には炭化物が付着する。

310は弥生土器広口壺である。頸部外面には2条の突帯を貼付ける。口縁部外面には沈線を巡らせる。口縁部内面には頸部外面から口縁部、竹管文およびへら状工具による綾杉文を巡らし、頸部内面に掛けて赤色顔料を塗布する。装飾に富む東海地方の影響を受けたものと思われるが、内外面には明瞭なミガキ調整は認められず外面を縦または斜方向のハケ調整の後ナデ、内面にナデ調整で仕上げ、口縁端部には3状1対の棒状浮文を貼り付けており、在地のものと思われる。

311・313は北陸系の土師器有段口縁甕である。古墳時代初頭の所産。311は全体的に摩滅しており調整不明瞭である。口縁部内面に横方向のハケ目が認められる。313は内外面にナデ調整を行い、口縁部外面に擬円線を巡らす。312は土師器甕である。体部内外面にナデ調整を行い、口縁部は外面を横方向のナデ、内面は横方向のハケ調整を行う。頸部内面は横方向のナデで仕上げる。314は土師器底部～脚台部である。内外面にナデ調整を行う。古墳時代初頭の所産。

315は須恵器杯蓋、316は須恵器杯身である。6世紀後半～7世紀初頭の所産。318は須恵器杯である。7世紀の所産。319は土師器皿である。内面に放射状の暗文がみられる。8世紀頃の所産。

320～322は須恵器杯蓋である。おおむね8世紀の所産。323～328・331は須恵器杯である。323・324・327・328は7～8世紀の所産。325は8世紀の所産。326～328・331は底部外面に墨書がみられる。

329は山茶碗小碗で、底部外面に墨書がみられる。「は」または梵字と思われる。12世紀の所産。

330・332は灰軸陶器碗または皿の底部である。底部外面に墨書がみられる。

333は須恵器脚部の焼成不良品、334は須恵器長頸壺、335は須恵器壺の底部と思われる。7世紀頃の所産。

341は灰軸陶器碗である。11世紀の所産。336～340は山茶碗である。12世紀後半～13世紀の所産。336は輪花碗である。339・340の底部外面には墨書がみられる。342は山茶碗小碗である。12世紀頃の所産。342の底部外面には墨書がみられる。

343は回転台土師器杯である。10世紀頃の所産。344～346は糸切底部の土師器小皿である。13世紀頃の所産。344は底部外面にヘラ記号「×」がみられる。354・355は土師器小皿である。11世紀後半～12世紀前半頃の所産。

347は瓦器碗である。12世紀頃の所産。348～351は近江型黒色土器碗、352は近江型黒色土器皿、353は近江型黒色土器小碗である。12世紀後半～13世紀の所産。348～351・353は内面から口縁部外面が黒化し、内面に放射状暗文がみられる。352は内外面が黒化する。

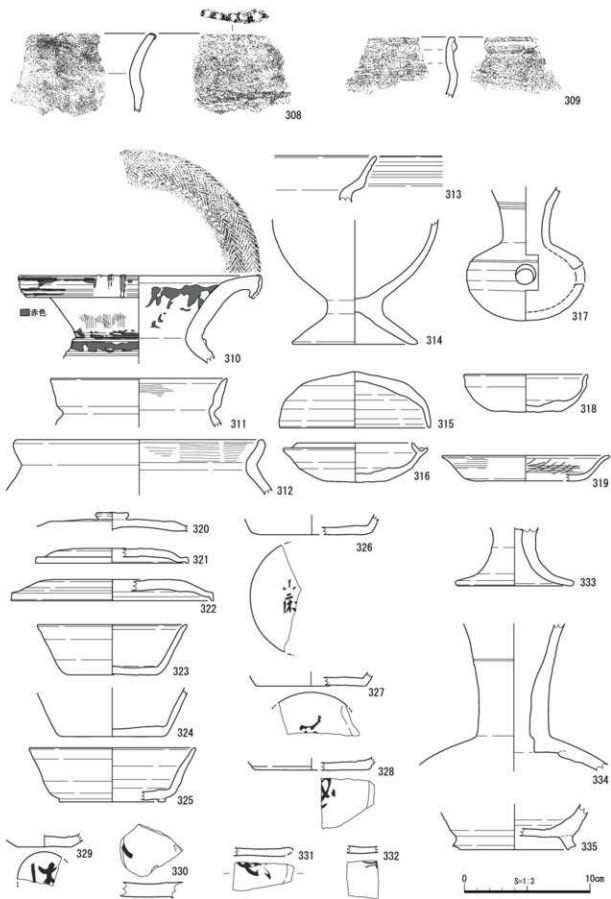


图 4-25 A 1 区 河道S9南半40~60cm 出土遗物(1)

356は土師器小皿、357は土師器大皿である。11世紀後半～12世紀の所産。358～360は土師器羽釜である。12～13世紀の所産。358は内外面に横方向のハケ調整を行い、口縁部外面は横方向のナデ調整を行う。外面には炭化物が付着する。359は外面に横方向のハケ調整を、内面にナデ調整を行う。内外面に炭化物が付着する。360は内外面をナデ調整で仕上げる。外面の鈎部より下方には炭化物が付着する。

〔土製品〕

平瓦 (361)、羽口 (362)・管状土錘 (363～367) がある。

361は凹面に布目、凸面に縄目が認められる。古代のものである。362は被熱により赤橙色を呈し、全体的にひび割れている。

363～366は土師質焼成品、367は須恵質焼成品である。363は平面形状が扁平な紡錘形で、土製玉の可能性もある。364～367は平面形状が方形～やや紡錘形をなす。

〔石製品〕

磨製石斧 (S17)、磨石 (S18・S20)、砥石 (S19・S21) がある。

S17は部分的に整形痕が残る。刃部には剥離痕が、表面には線状痕がみられる。使用痕か。また上端の割れ口は平坦で、その周囲に二次的な加工のためと思われる敲打痕が認められる。A8区河道S9下層有機質層20～40cmで出土した磨製石斧S38と石材や加工痕が近似しており、同一個体であった可能性がある³⁾。S18は扁平な平坦面に磨面を持ち、側面には敲打痕がみられる。磨石と敲石の転用、あるいは併用したものか。S19は平坦な2面に磨面を持ち、一部に礫面が残る。S20は扁平な平坦面の片方に使用面を持ち、割れ口以外の表面に炭化物が付着する。S21は複数面に使用面を持つ。

〔金属製品〕

銅製鉸具 (M2) がある。M2は、本体に装着するためと考えられる直径0.3cmの円形の孔が2箇所認められ、鉸具頭部は欠損するが、1.5cmほどの方形の孔の一端が認められる。厚みは0.3cm程度と薄く、馬具というより鈎帯の鉸具と考えられる。

〔木製品〕

農具・容器・装身具・食器具・祭祀具・串・用具・部材・用途不明品がある。

<農具>W46は曲柄鋏、使用樹種はアカガシ亜属である。断面は中央が膨らむ板状で、表面には整形の際の刃傷が見られる。かなり厚く、未製品と思われる。未製品を分割し、加工していく過程のものであろう。

<容器>W47～W49は曲物底板である。W47は実測図右方1/5程が欠損していると思われる。側板との結合方法は不明である。側縁は炭化している部分がある。W48も実測図右方3/5程が欠損していると思われる。側板との結合方法は不明である。表面には刃傷が見られる。W49は実測図右方3/5程が欠損していると思われる。残存している側面の下方に2箇所、上方に1箇所、側板との結合のための木釘が残る。表面には刃傷が見られる。W50は容器蓋か。スギで、上下端が緩い弧を描く板材である。上下端からそれぞれ1.5cm程の位置に直径1cm前後の貫通穴があく。厚さが約1.3cmあり、下端部は表面から裏面に向けて少し薄くするように削っている。

<装身具>W51は連歯下駄で、使用樹種はヒノキ属である。平面楕円形で、歯は前後とも摩滅し

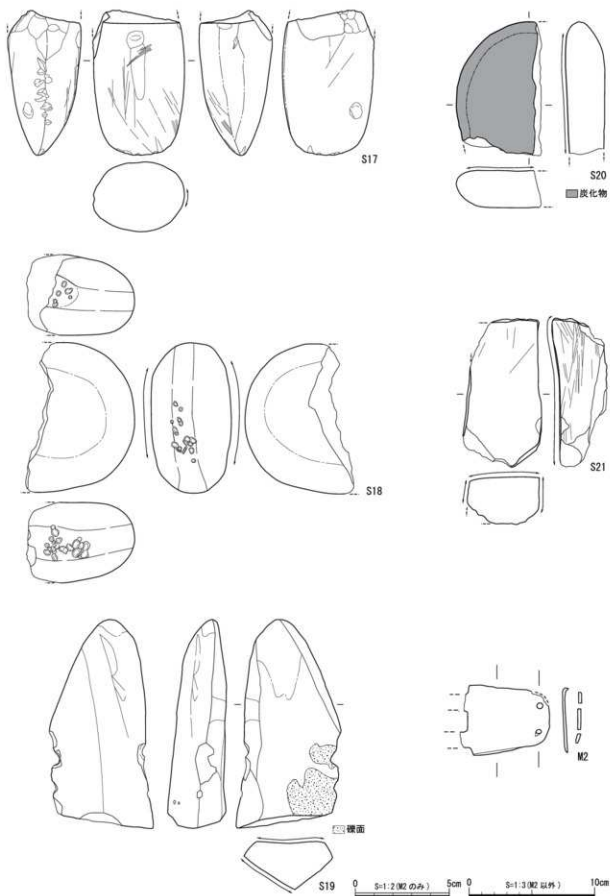


图 4-27 A 1 区 河道S9南半40~60cm 出土遺物(3)

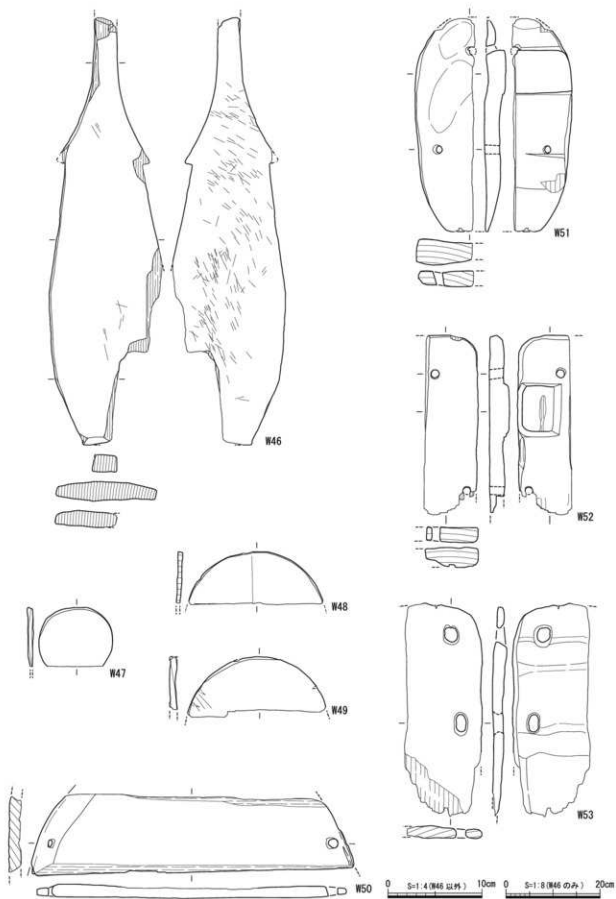


图 4-28 A 1 区 河道S9南半40~60cm 出土遗物(4)

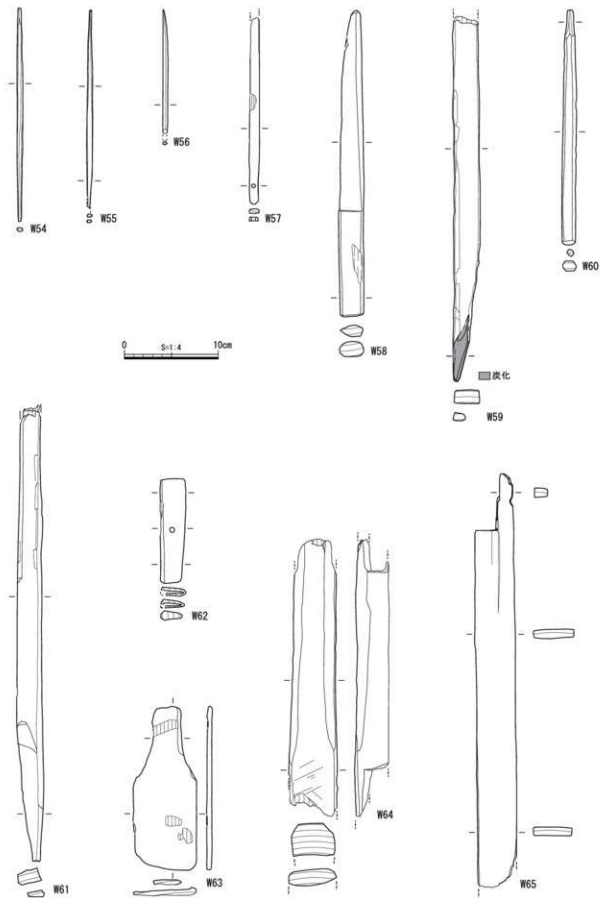


图 4-29 A 1 区 河道S9南半40~60cm 出土遗物(5)

ており、わずかに厚くなっている程度である。前壺の前後には足の跡が残る。これが親指および親指付け根の土踏まず部分の痕跡であれば、右足用である。前後は端部に向けて薄く作られている。W52は平面隅丸方形の連歯下駄と思われる。使用樹種はスギである。後歯は欠損しており、前歯も半分強が欠損している。W53は連歯下駄で、使用樹種はヒノキ属である。平面は隅丸方形で、歯は前後とも摩滅しており、わずかに痕跡が残る程度である。前壺がかなり片方に寄っていることから、左足用と見られる。

W57は扇骨である。使用樹種はアスナロ属で厚さは0.4~0.5cm、下端から2cmの位置に、要部として0.4cmの穴があげられている。上端部は折れ、下端は丸く収めている。

<食器具>W54~56は箸である。いずれも片方あるいは両方の端を尖らせた、断面が五~六角形の角材である。いずれも木芯は持たない。

<祭祀具>W58は刀形である。使用樹種はヒノキ属で、柄と刃部を明瞭に区別して作られている。

<串>W59~61は串である。いずれも一端を尖らせた太さ1~3cmの角材ないし棒材である。

W59は先端が炭化しており、たいまつに転用後の燃えさしの可能性も。W60は完形で、一端は尖らせるように削っているが、先端は丸みを帯びている。全体に断面不整六角形に削っている。

W59・W60は針葉樹、W61はスギの角材である。

<柄>W62は茎部を挿入する加工を有する棒材で、使用樹種はアスナロ属である。中央に茎部を固定するための目釘穴が貫通している。本体の形状も、茎部挿入部も右側が尖るように加工されており、こちら側を刃部とする刀子の柄だと思われる。

<用具>W63はヘラである。使用樹種はスギで、全体に摩滅・腐食している。全体に反りがなく平らで、身部の右辺部分はわずかに厚くなり、左辺は薄くなる。また下端左側は片減りしている。使用により摩滅したと見られる。

<部材>W64はスギの角材である。両端にL字形の切り欠きが見られるが、本来は方形の貫通穴があいており、一方の辺が木目に沿って剝離・破損して現状の姿になっていると思われる。切り欠きの無い部分は角材の角の部分面取りしている。

<用途不明品>W65はアスナロ属の板材である。上端は約6cmの長さにわたり、ほぼ半分が切り落とされている。残存する半分は、右側面に2箇所の切り欠きが見られる。下端は破損している。斎串であろうか。

【S9南半60~80cm】(図4-30~32)

土器・土製品・石製品・金属製品・木製品が出土した。縄文時代後期~鎌倉時代の幅広い時期の遺物を含む。

〔土器〕

縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の灰胎陶器・土師器・青白磁、中世の山茶碗・黒色土器があり、縄文時代後期~鎌倉時代までの幅広い時期のものを含む。

369は縄文時代後期の北白川上層式Ⅲ期の深鉢である。内外面にナデ調整を行い、口縁部に突帯を貼り付け、棒状貼付文を施す。368・370・371~373は縄文時代晩期中葉の籬原式の深鉢である。368・370は内外面にナデ調整を行い、口縁端部に刻みを加える。371は内外面に条痕がみられ、

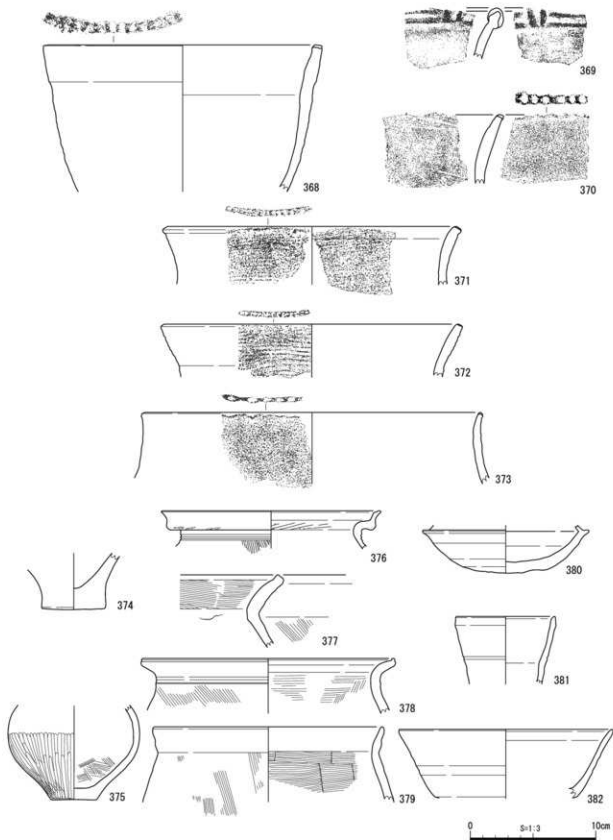


图 4-30 A 1 区 河道S9南半60~80cm 出土遗物(1)

口縁端部に刻みを施す。外面には炭化物が付着する。372は外面に条痕がみられ、内面にナデ調整を行う。外面に炭化物が付着する。373は内外面にナデ調整を行い、口縁端部に刻みを加える。外面には炭化物の付着が顕著である。

374は弥生土器底部。内外面にナデ調整を行う。375は弥生土器小型壺で、内外面に斜方向のハケ調整の後、体部外面上半をナデ調整、下半を縦方向のミガキ調整で仕上げる。体部内面はナデ調整を行い、下半にはハケ目が残る。376は受口状口縁甕である。体部外面に縦または斜方向のハケ調整を行い、頸部に櫛描直線文を施す。口縁部は横方向のナデ調整を、体部内面はナデ調整を行う。頸部内面には斜方向のハケ目が認められる。374～376は弥生時代後期の所産。377～379はく字状口縁甕である。377は体部外面に斜方向のハケ調整を、口縁部外面に横方向のナデ調整を行う。口縁部内面には横方向のハケ調整を、体部内面にはナデ調整を行う。378は体部外面に斜方向のハケ調整を、内面に横方向のハケ調整を行う。口縁部は横方向のナデ調整を行い、口縁部を強くヨコナデしたことにより頸部外面に段差が生じている。379は体部外面に斜方向のハケ調整、内面に横方向のハケ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整を行う。

380は須恵器杯身である。6世紀頃の所産。381は須恵器平瓶、382は須恵器杯である。7～8世紀頃の所産。

383は緑釉陶器碗である。10世紀頃の所産。384は土師器台付皿である。10世紀頃の所産。385は土師器小皿で、糸切底部である。13世紀頃の所産。

386は灰釉陶器皿、389は灰釉陶器碗である。9世紀後半の所産。386は底部外面に墨書が認められる。「莊」か。387は青白磁碗である。内面の一部に黒褐色の被膜が付着する。漆と思われる。

368・390は山茶碗、391は山茶碗小碗である。12世紀の所産。390は口縁部に輪花を施す。

397は黒色土器碗である。内面から口縁部外面が黒化し、内面に放射状暗文がみられる。12世紀後半～13世紀の所産。

〔土製品〕

平瓦 (398)・管状土錘 (399・400) がある。398は凹面に布目、凸面に縄目がみられる。古代のものである。399・400は土師質焼成品である。

〔石製品〕

剥片 (S22)、磨石 (S23)、石鍋 (S24) がある。

S22はサヌカイトの剥片である。S23は扁平な平坦面に磨面を持ち、側面には敲打痕がみられる。一部に炭化物が付着する。S24は石鍋である。内面を著しく平滑に磨き上げ、外面には縦方向の工具痕が残るものの全面を研磨する。口縁部以外はカットしてほぼ方形に整形される。カットした面には一部に横方向の工具痕がみられる。口縁端部から外面およびカットした側面には薄く炭化物が付着する。温石として転用したものと考えられる。

〔金属製品〕

鉄鏃 (M3・M4)、鉄滓 (M5) がある。

M3は鏃身部が雁股形を呈するいわゆる雁股鏃である。鏃身部は下半に猪の目透かしを持ち、上半は断面が扁平な三角形の平片刃作りで、先端の片方が欠損する。頸部は短い台形で断面は方形、また基部は長く断面は扁平な方形である。M4の鏃身部は断面菱形の両鑄造で、一部が欠損

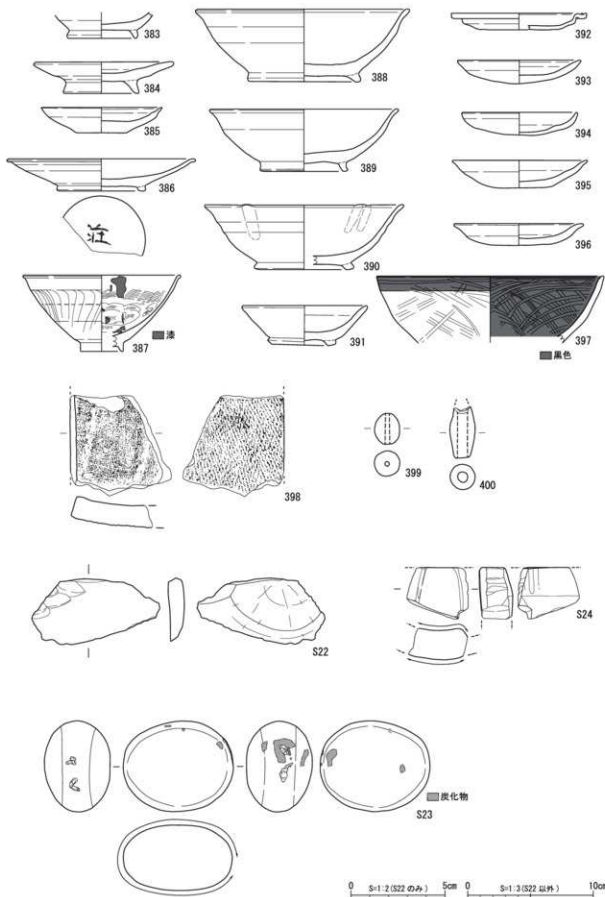


图 4-31 A 1 区 河道S9南半60~80cm 出土遗物(2)

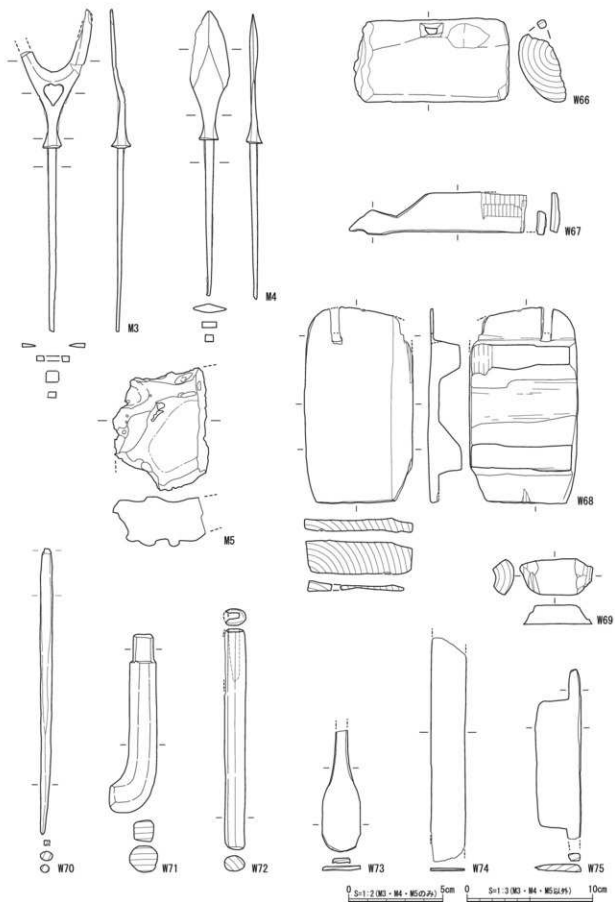


图 4-32 A1区 河道S9南半60~80cm 出土遗物(3)

するがほぼ完形を保つ。頸部は短い台形で断面は扁平な方形、また基部は長く断面はやや扁平な方形である。M5は扁平な片側に平滑な面を持つ。

[木製品]

農具・祭祀具・端材・串・柄・用具・部材がある。

<農具>W66はムシロや俵を編む際に用いる木錘である。使用樹種はアスナロ属で、中央端に方形の穴をあけるタイプの木錘である。丸太のまま、あるいは断面水滴状に加工されるものが多いが、丸太を半裁している。このタイプの木錘は弥生時代後期以降、継続的に使われ続ける形状であり、時期の比定は難しい。

<祭祀具>W67は鳥形である。使用樹種はスギで、厚さはおおよそ1cm弱、頸と嘴部分が表現されている。尾部は欠損している。下方の側面には穴などは見られない。

<装身具>W68は連歯下駄である。前壺のみあけられており、後壺はあけられていないことから、未製品と思われる。使用樹種はアスナロ属で、前壺の部分は破損している。前歯・後歯とも、その前後にノコギリの歯の跡が残る。中央付近の厚さは全体に均等だが、前壺側は厚さ0.2cm程度と非常に薄い。

<端材>W69はヒノキ属の残材で、芯部分が外れている。丸太材を1/4のミカン割にしたもの上下端を、鈍のようなもので粗く切り落としている。

<串>W70は串で、一端を尖らせた太さ1～3cmの角材ないし棒材である。使用樹種はヒノキ属である。

<柄>W71・W72は柄である。W71は完形で、使用樹種はアスナロ属である。上端を一段細くして断面が四角形になるよう加工している。細い部分の先端は摩滅している。もう一端は滑り止め状に曲げた形に削り出している。段になった部分が摩滅しているのも、何かに差し込まれていたのは間違いないが、それが何なのかは不明である。W72は使用樹種がヒノキ属の棒材で、上端側木口面には、1.2cm×0.5cmの長方形で、深さ5.5cmの穴がけられている。ここには何かの茎部が挿入されていたと考えられる。刀子あるいは鑿(やりがんな)の柄か。

<用具>W73はヘラで、使用樹種はスギである。柄の先端部分は欠損しているが、表面の摩滅はほとんどなく、側面部の加工も明瞭に残る。全体に反りはなく、平らに作られている。

<部材>W74は針葉樹の板材である。上下端とも欠損しており、全体に薄い。W75はヒノキ属の板材である。右辺上下方向に突起が作り出されており、下方の突起は先端部分が欠損している。左辺は薄く尖り気味になり、下半は摩滅気味である。表面はごく緩く凸気味に弧を描き、裏面は平坦である。

[その他]

ほかに、動物骨(図版111①)が出土した。遺存状態が不良のため、種は不明であるが、ヒトより大型の獣骨であり、ウシあるいはウマと考えられる。

【S9南半80cm～最下層】(図 4-33・34、図版)

土器・木製品が出土した。弥生時代後期～鎌倉時代の幅広い時期のものを含む。

〔土器〕

弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器・灰釉陶器・白磁、中世の土師器があり、弥生時代～鎌倉時代の幅広い時期のものを含む。

401・402は弥生土器底部である。内外面にナデ調整を行う。内面には炭化物が付着する。403は土師器器台である。受部内面に横方向のハケ調整を行い、それ以外の内外面を横方向および縦方向のミガキ調整で仕上げる。古墳時代前期の所産。

404は須恵器杯蓋、405・406は須恵器杯身、407は須恵器甕である。6世紀後半～7世紀初頭の所産。404の内外面には、柿渋様の褐色物質が付着する。408は須恵器杯である。7世紀の所産。

409は土師器把手付碗である。体部外面下半を横または斜方向のミガキ調整を行い、体部内面は縦方向のミガキ調整を行う。口縁部内面および体部外面上半は横方向のミガキ調整で仕上げる。7世紀前半の所産。410は土師器鍋である。体部内外面に横方向または斜方向のハケ調整を行う。口縁部内面は横方向のハケ調整、外面は斜方向のハケの後横方向のナデ調整を行う。体部には扁平な把手を貼り付ける。7～8世紀の所産。411は土師器甕で、口縁部内外面に横方向のナデ調整を、体部内外面にナデ調整を行う。外面には炭化物が付着する。7～8世紀の所産。412・413は、くの字状口縁甕である。412は外面に斜方向のハケ調整の後ナデ調整を行う。内面は口縁部に横方向のハケ調整を、体部にナデ調整を行う。413は外面に斜方向のハケ調整の後、口縁部に横方向のナデ調整を行う。内面は横または斜方向のハケ調整を行う。

414・415は灰釉陶器碗である。10世紀頃の所産。415は見込みに墨が付着する。転用硯と考えられる。

416～420は土師器小皿である。416・417は糸切底部で、13世紀頃の所産。418は12世紀前半頃の所産。口縁部から体部にかけて黒色物質が付着する。油煙痕と思われる。419・420はおおむね12世紀頃の所産。

421は白磁碗である。底部内面には、柿渋様の褐色物質が付着する。

〔木製品〕

農具・容器・部材・用材がある。

鎌 (W76)・曲物底板 (W77)・容器蓋 (W78)・角材 (W79)・杭 (W80) がある。

<農具>W76は曲柄鎌の未製品である。アカガシ垂属の原木をミカン割にした材で、少なくとも3点の曲柄鎌を取ろうとしたと見られる。曲柄鎌の平面形の特徴としては、柄と固定するための部位として刃部と逆方向に長く伸びた着柄部があり、その左右にナスビのヘタ状の突起が付く、というものが挙げられる。この未製品は、その特徴に加えてナスビのヘタ状突起がある部分の中央に四角く厚く削り残している部分が認められる。これは、この部分に四角く穴をあけ、柄にはこの穴に合致するような突起を設けてはめ込んで着柄することで、鎌の刃が左右にぶれることを防ぐためのものと考えられる。このような特徴を持つ曲柄鎌は北陸地方の5世紀後半から6世紀前半に見られる(樋上2000)。W76は未製品であるが、同様に5世紀後半～6世紀前半のものとなりおきたい。

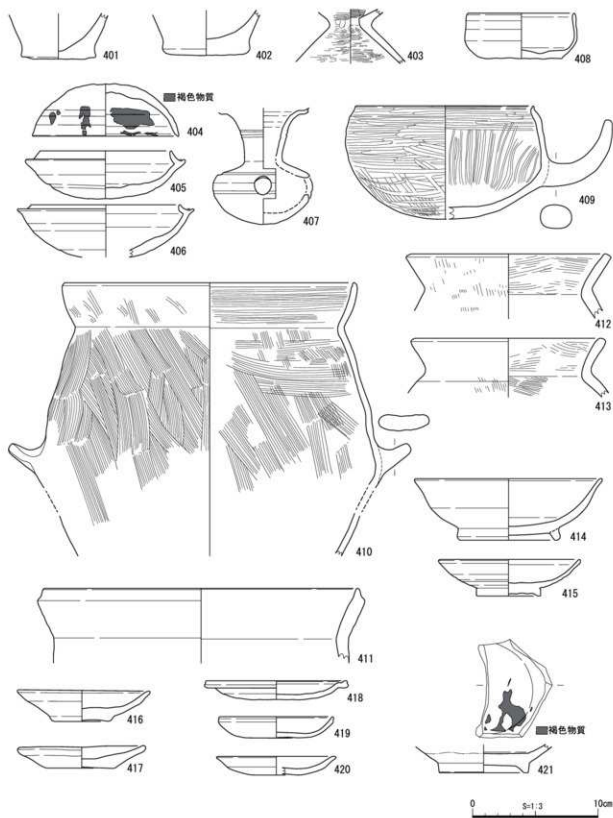


图 4-33 A 1 区 河道S9南半80cm~最下層 出土遺物(1)

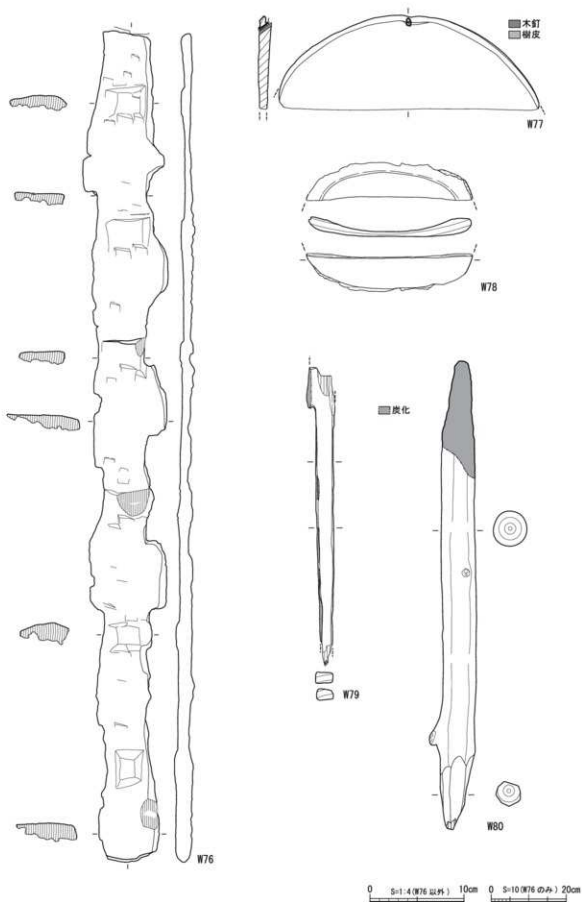


图 4-34 A 1 区 河道 S9 南半 80cm ~ 最下層 出土遺物 (2)

＜容器＞W77は曲物底板である。の使用樹種はヒノキ属である。右方が欠損している。縁辺部を幅0.8cm程、一段薄く加工し、そこに上面から穴を明け、側板を樹皮で結束したうえで楔として木釘を打ち込んで締めている。使用しているのはサクラの樹皮と思われる。

W78は容器蓋である。ヒノキ属で、緩やかに湾曲しており、凹面側では端部に1.5cm程の幅の面を形成し、そこから中央に向かって薄く作られている。この、凹面側端部の面の内側、中央に向かって薄くなっていく部分との境界部分には、ごく低い膨らみが巡る。蓋をされていた容器の側板を受ける部分だったのだろう。

＜部材＞W79はアスナロ属の角材である。上下端とも欠損しており、左側面は炭化している。

＜用材＞W80は針葉樹の芯持ち材で、枝を粗く払っており、下方を削って尖らせている。上方は焼けて炭化している。杭か。

時期 出土遺物には縄文時代後期～鎌倉時代の幅広い時期のものが含まれており、この間に形成された河道と判断される。また、便宜的に設定したいずれの大別層からも13世紀頃までの幅広い時期の遺物が出土しており、河道の機能した時期を特定するのは困難であるが、13世紀頃に機能時期の1点を求めることができる。

B. 土坑

土坑S10 (図4-2・35)

位置 調査区の南方に位置する。

形状・規模 平面形は長軸約2.5m・単軸約1.6mのやや不整形な楕円形で、上面から0.15mほどレンズ状に落ち込み、さらに長軸約1.6m・単軸約1.1mの不整形な楕円形で・深さ0.4m・断面逆台形の落ち込みを設ける。

堆積状況 2層からなり、上段の落ち込みには暗青灰色粘質土に明青灰色粘質土がブロック状に入り、下段には暗青灰色粘質土が堆積する。

出土遺物 土師器羽釜(18)・皿(19・20)、常滑焼甕(21)、砥石(S1)が出土した。

18は内面に横方向のハケ調整を行う。外面には炭化物が付着する。20は内外に褐色物質が付着する。油煙痕か。これらの遺物はおおむね12～13世紀の所産である。S1は複数面を使用する。

時期 出土遺物から12～13世紀頃と推定される。

C. 小穴

このほか、性格不明の複数の小穴を検出した。図化した遺物の出土した事例を示しておく。

小穴S2 (図4-2・5・35)

位置 調査区の南方に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.6mの円形で、深さ約0.05mを呈する。

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 鉄滓(M1)が出土した。

時期 年代を決定する遺物に乏しく、不明である。

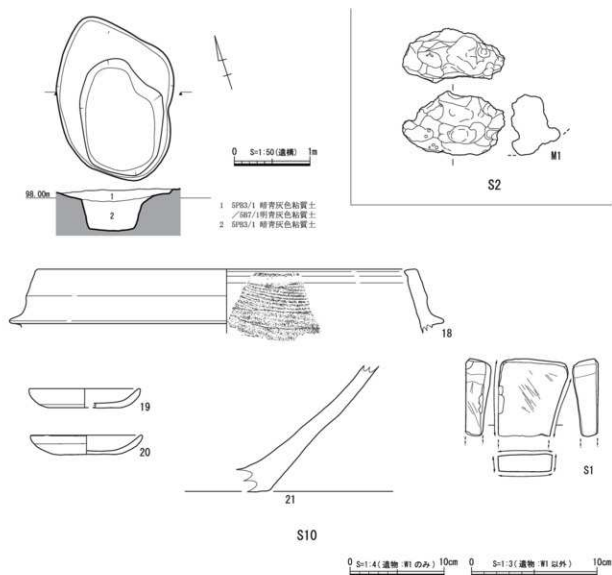


図4-35 A1区 土坑・小穴 詳細図・出土遺物

(2) A2区 (図4-36~41、図版5・6)

位置 A区なかで北西隅に位置する調査区である。南東側をA1区に隣接する。

基本層序・遺構面 厚さ0.9mの造成土の下に、層厚約0.4mの黄灰色粘質土が堆積し、その下層の黄褐色土上が遺構面 (標高約94.70m) となる。なお、当該区における造成土の広がりには調査区全体の半分程度にとどまっており、その他の部分については、約0.4mの耕土直下で遺構面に達する。

検出遺構 掘立柱建物3棟・柵1列・溝1条のほか、土坑・小穴を複数検出した。



图 4-36 A 2 区 平面图

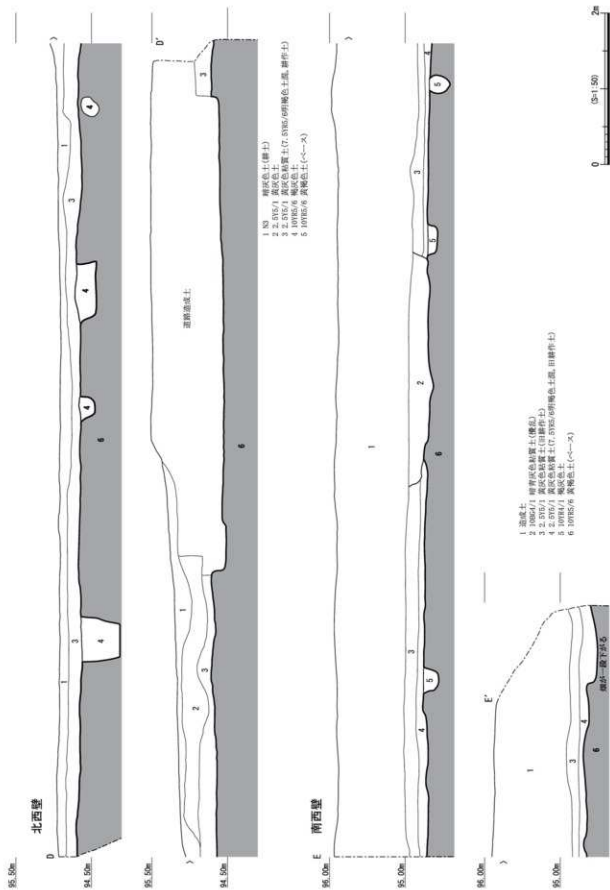


图 4-37 A2 区 北西·南西壁断面图

A. 掘立柱建物・柵

掘立柱建物SB1 (図 4-36・38、図版6)

位置 調査区の西方に位置する。北西部は柵SA1と重複関係にある。

形状・規模 梁行2間(4.2m)×桁行3間(5.7m)で、主軸方位をN35°Wに採る南北棟建物である。柱間は梁行1.1m、桁1.4mで、柱掘方は、平面形は0.4~1.05mの隅丸方形~長方形を呈し、断面形は深さ0.2~0.3mの逆台形である。柱痕は直径0.2m程度で、一部は掘方底部よりいくぶん下がった位置に基底部が認められる。また柱痕底部には円形の明黄褐色を呈する部分がみられ、柱基底部あるいはその接触部が変色したものと推定される。北西隅の掘方S169は柵SA1と重複関係にあるが、平面精査・土層断面の観察からは、複数の掘方の存在や、同一掘方内で柱を立て直した痕跡などは認められず、先後関係を断定することは困難であった。しかしながら、柱痕の並びはSA1の軸と揃っており、掘立柱建物SB1の柱掘方の廃絶後に、SA1が構築されたものと考えられる。

堆積状況 掘方の埋土は褐色土を主体とする単層または複数層からなる。柱痕の埋土は褐灰色土である。掘方S169の掘方内には褐灰色土の埋土が堆積しており、黒褐色土からなる柱痕が1箇所みられ、柱を立て直した痕跡は認められない。

出土遺物 建物を構成する柱掘方S161の掘方埋土から、須恵器杯(422)が出土した。7~8世紀の所産。

時期 出土遺物から7~8世紀に位置付けられる。

掘立柱建物SB2 (図 4-36・39、図版5)

位置 調査区の南東部に所在し、SB3の南西に位置する。

形状・規模 梁行1間以上(1.8m以上)×桁行2間(4.5m)の南北棟建物である。南西部は調査区外であるため全容は不明である。主軸方位は掘立柱建物SB1と同様のN35°Wで、近接する掘立柱建物SB3にも近い方位である。柱間は梁行1.8m、桁行2.25m、柱掘方は、平面形は0.3~0.45mの円形~楕円形、断面形は深さ0.25~0.3mの方形~逆台形を呈する。柱痕は直径0.15m程度で、掘方S8は掘方底部よりいくぶん下がった位置に認められる。

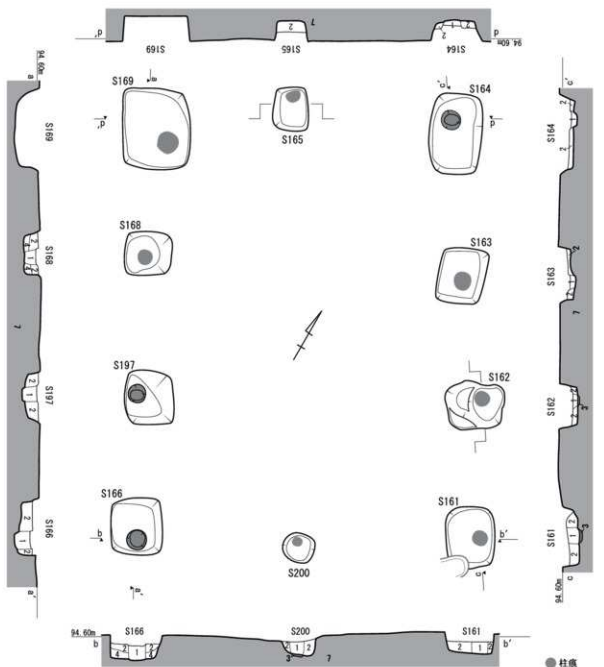
堆積状況 掘方埋土は明黄褐色土ブロックの入る褐灰色土の単層である。柱痕の埋土は灰白色土ブロックの混じる褐灰色土である。

時期 年代を決定する遺物を欠くが、掘立柱建物SB1と近似する主軸方位を持つことから、同様の7~8世紀と捉えておきたい。隣接する掘立柱建物SB3とも近い主軸方位を示すものの、重複関係がなく、出土遺物からも前後関係に言及できないが、非常に近接するため、同時併存のものとは考え難い。

掘立柱建物SB3 (図 4-36・39、図版5)

位置 調査区の南東部に所在し、SB2の北東に位置する。

形状・規模 梁行1間以上(1.8m以上)×桁行2間(5.1m)の南北棟建物である。北東部は溝S2の削平を受け、全容は不明である。主軸方位は柵SA1と同じN30°Wであり、近接するSB2に



- 1 10YR4/1 黒灰色土(柱頭)
- 2 10YR4/1 黒灰色土(10YR5/6黄褐色土ブロック面)
- 3 10YR6/6 明黄褐色土(柱基底部でベースが変色カ)
- 4 10YR4/3 灰色土(10YR4/1黒灰色土ブロック面)
- 5 10YR3/3 黄褐色土(柱頭)
- 6 10YR4/1 黒灰色土
- 7 10YR5/6 黄褐色土(ベース)

0 1:50(遺物) 2m



422

0 1:3(遺物) 10cm

S161 出土

図4-38 A2区 掘立柱建物SB1 詳細図・出土遺物

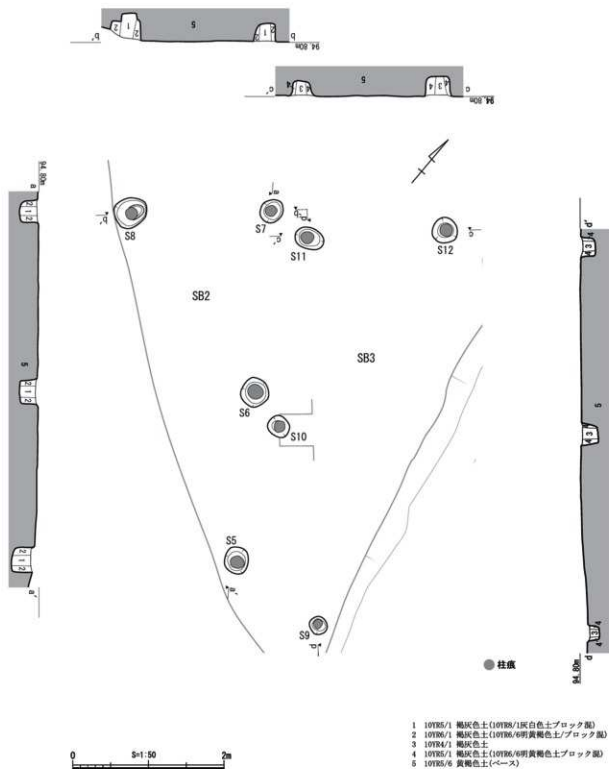


図 4-39 A 2 区 掘立柱建物SB2・SB3 詳細図

も近い方位である。柱間は梁行1.8m、桁行2.55mで、柱掘方は、平面形は0.3～0.4mの円形～楕円形、断面形は深さ0.15～0.25mの方形～逆台形を呈する。柱痕は直径0.15m程度である。

堆積状況 掘方埋土は明黄褐色土ブロックの入る褐灰色土の単層である。柱痕の埋土は褐灰色土である。

時期 年代を決定する遺物が出土しなかったが、掘立柱建物SB2同様、近似する主軸を持つ掘立柱建物SB1と同時期の7～8世紀と捉えておきたい。隣接する掘立柱建物SB2と近い主軸方位を示すものの、重複関係になく、出土遺物からも前後関係に言及できないが、非常に近接するため、同時併存のものとは考え難い。

柵SA1 (図4-36・40、図版5・6)

位置 調査区の西方に位置する。掘立柱建物SB1と重複関係にある。

形状・規模 一辺0.25～0.55m、深さ0.15～0.2mの平面隅丸方形の小穴が整然と並ぶ。全長5.9m以上、柱間は約1.2mで、北西部は調査区外に延びるものと思われる。柱痕は直径0.1～0.15程度で、柱痕底部には明黄褐色を呈するものがみられ、柱基底部の接地面が変色したものと推定される。北西側は調査区外に延びる可能性があり、全容は不明であるが、確認できる全長は11.4mである。周囲に建物を構成する掘方は検出されず、柵とした。主軸方位をN30°Wに採る。南東部の掘方S169は掘立柱建物SB1と重複関係にあるが、先述のように、平面・断面の観察からは先後関係を断定し難いものの、掘立柱建物SB1の掘方とするより、SA1の方が柱並びが揃っており、SB1の掘方を廃して、SA1の柱を立てたものと考えられる。

堆積状況 掘方埋土には、褐灰色土の下に黄褐色土ブロックが混ざった褐灰色土が堆積する。柱痕の埋土は黒褐色土である。掘方S169の柱痕には、基底部から約0.05m浮いた位置に、0.15m程の大きさの石がみられ、柱抜き取り後に入れられたものと考えられる。

出土遺物 柱列を構成する掘方S167の柱痕埋土から須恵器杯(423)が出土した。7～8世紀の所産。柱抜き取り後に入ったものと考えられる。また掘方S167・S170の最上部の掘削開始直後には、それぞれ土師器羽釜(424)、S170から山茶碗(425)が出土した。424・425は12～13世紀頃の所産。最終的な廃絶後の堆積に伴うものと考えられる。

時期 出土遺物より7～8世紀に位置付けられる。

B. 溝

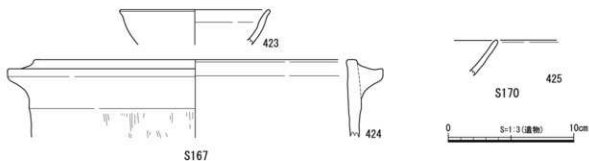
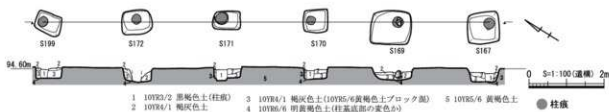
溝S2 (図4-36・40、図版5)

位置 調査区の東部に位置し、掘立柱建物SB3の北東部を削平する。また西岸を土坑S3の削平を受ける。

形状・規模 南北方向に走る。幅約1.5m・深さ約0.4m、断面形はやや不整形な逆台形である。

堆積状況 2層からなり、上から、暗褐色土・灰黄褐色土が堆積する。

出土遺物 1層から山茶碗(426)、剥片(S25)、砥石(S26)が、2層から須恵器壺(427)、砥石(S27)が出土した。426は13世紀の所産。427は底部に糸切り痕が認められる。9世紀頃の所産。S25はサヌカイトの微細剥離痕のある剥片である。一部に礫面がみられる。S26は平坦面に使用面を持



柵 SA1

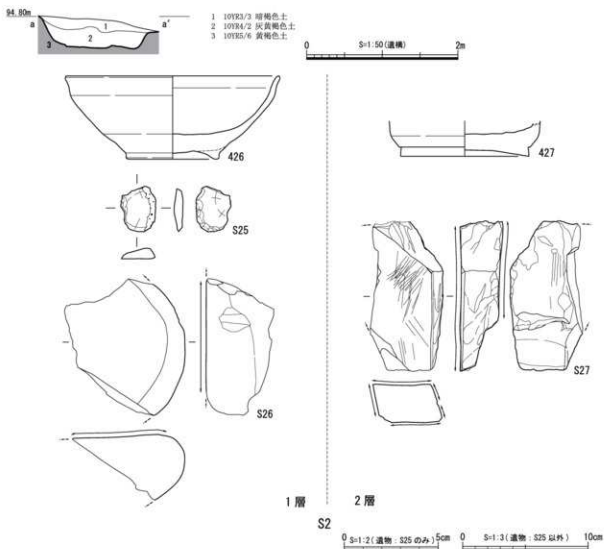


図4-40 A2区柵・溝 詳細図・出土遺物

つ。S27は研面に線状痕が顕著にみられる。

時期 出土遺物から9世紀頃に機能時期の一点を見い出せ、13世紀以降には埋没したと判断される。

C. 土坑

土坑S56 (図4-36・44)

位置 調査区の中央部北寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約2.2mの不整形な円形で、深さ0.25～0.35m程、二段構造を呈する不整形な落ち込みである。

堆積状況 2層からなり、上から、褐灰色土・灰黄褐色土が堆積する。

出土遺物 土師器把手(428)が出土した。

時期 年代を決定する遺物に乏しく、不明である。

土坑S122 (図4-36・41)

位置 調査区の北西部中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.6mの円形、断面形はU字形で深さ約0.5mである。

堆積状況 2層からなり、上から、褐灰色土・褐灰色土(明黄褐色土混)の順で堆積する。

出土遺物 須恵器杯身(429)が出土した。6世紀前半の所産。

時期 出土遺物から6世紀前半と推定される。

D. 小穴

このほか、性格不明の小穴を複数検出した。このうち図化し得た遺物の出土したものを示しておく。

小穴S16 (図4-36・41)

位置 調査区の南東部に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.3mの円形を呈し、深さ約0.2mを測る。

堆積状況 黒褐色土の単層である。

出土遺物 サスカイトの剥片(S28)が出土した。

時期 年代を決定する遺物に乏しく、不明である。

小穴S50 (図4-36・41)

位置 調査区の中央部に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.3mの円形を呈し、深さ約0.2mを測る。

堆積状況 灰黄褐色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯(430)が出土した。8世紀頃の所産。

時期 出土遺物から8世紀頃と推定される。

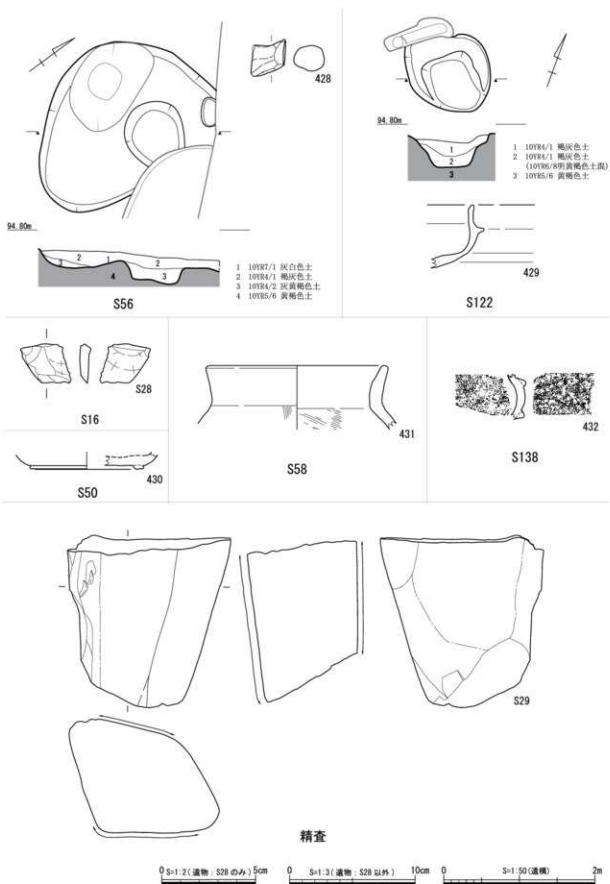


図4-41 A2区 土坑・小穴・精査 詳細図・出土遺物

小穴S58 (図4-36・41)

位置 調査区の中央部北寄りに位置する。

形状・規模 平面形は長軸約0.2m・短軸約0.3mの楕円形を呈し、深さ約0.2mを測る。

堆積状況 褐灰色土の単層である。

出土遺物 土師器甕(431)が出土した。体部内外面に斜方向のハケ調整を行い、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。

時期 年代を決定付ける遺物に乏しく不明である。

小穴S138 (図4-36・41)

位置 調査区の北西端中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.6mの円形を呈し、深さ0.3mを測る。

堆積状況 黒褐色土の単層である。

出土遺物 縄文土器浅鉢(432)が出土した。外面に突帯を貼り付け、周囲に竹管文を施す。縄文時代中期の所産。周囲に同時期の明確な遺構がなく、混入品の可能性が高いと考える。

時期 不明である。

E. その他

精査 (図4-42・60)

このほか精査時の遺物として、砥石(S29)がある。複数面を使用する。

(3) A3区 (図4-42~60、図版7~19)

位置 A区の内なかで東部中央に位置する調査区である。北西側をA5区に、南西側をA7区に接する。

基本層序・遺構面 層厚約0.4mの耕土の下に層厚約0.1mの灰白色土が堆積し、その下の明黄褐色土上面、標高94.80~95.10m前後が遺構面となる。明黄褐色土は調査区の北側でなくなり、黄灰色砂礫が基盤層となる。

検出遺構 竪穴建物6棟・掘立柱建物3棟のほか、溝・小穴等を複数確認した。ほかに、隣接する調査区にかけて広がる遺構があり、A5区に広がる竪穴建物S360、A7区に広がる掘立柱建物SB12・溝S2・S112については、それぞれA5区・A7区の項で記述する。

A. 竪穴建物

竪穴建物S200 (図4-42・44・45、図版8・9)

位置 調査区の中央部北寄りに位置する。南西部の一部は近代以降の溝によって削平される。

形状・規模 一辺約6.5mの平面方形で、深さ約0.3mを呈する。主柱穴は約0.3mの楕円形・深さ約0.15mで、S383・S394を含む4本主柱と考えられるが、南西部は近代以降の溝に削平されており、詳細は不明である。壁溝は認められなかった。N41°Wを指向する。

屋内施設 南東隅付近に焼土が確認されたほかは確認されなかった。焼土は暗赤色を呈し、0.4m

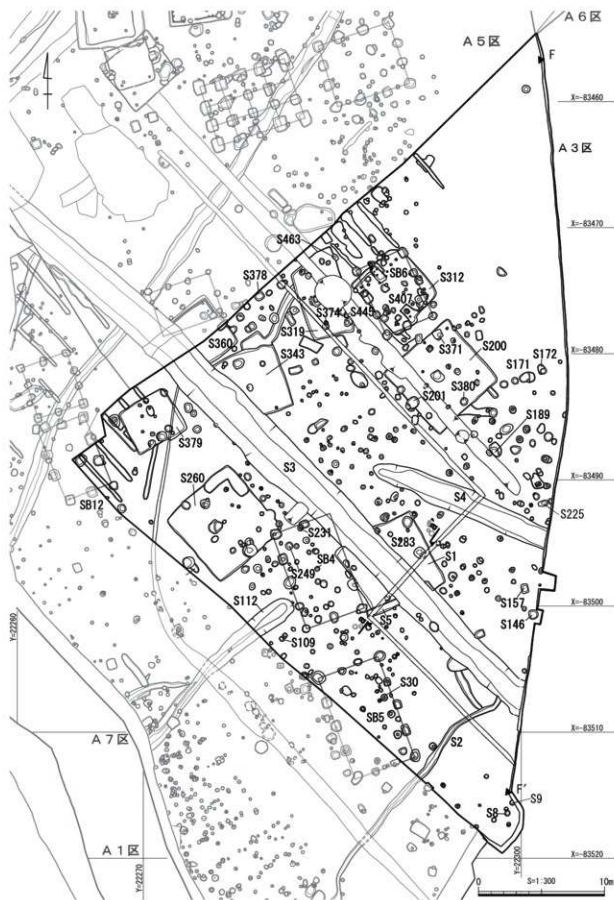


图 4-42 A3区平面图

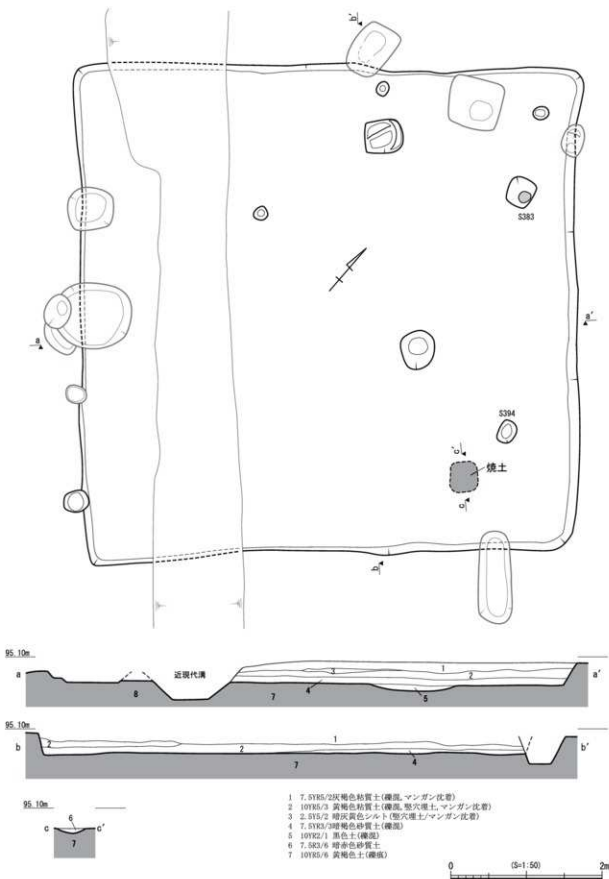


図4-44 A3区 堅穴建物S200 詳細図

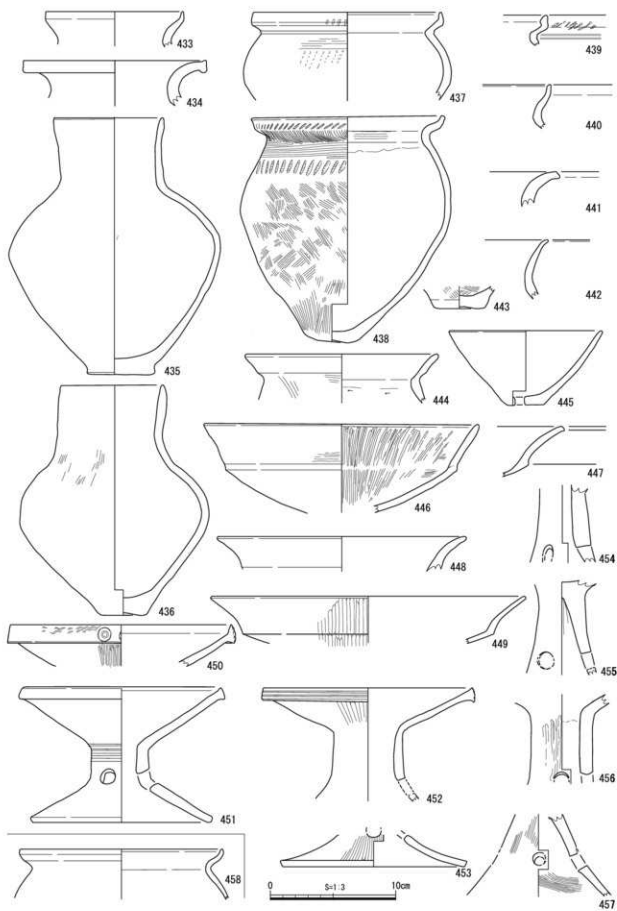


图 4-45 A3区 竖穴建物S200 出土遗物

程の方形に近い平面形で、厚さ0.05mのレンズ状に堆積する。

堆積状況 建物掘方内には、礫混じりのシルト～粘質土が堆積する。

出土遺物 建物掘方から弥生土器壺(433～436)・甕(438～442・444)・壺または甕(443)・鉢(437・445)・高坏(446～449・454・455)・器台(450～452・456)・高坏または器台(453・457)が出土した。このうち436・451・445は建物掘方内南西部の2層からまとまって確認された。また、支柱穴と考えられる小穴S383からは、弥生土器甕(458)が出土した。これらはおおむね弥生時代後期の所産である。

433は受口状口縁壺、434は広口壺、435・436は長頸壺である。433～435は全体的に摩滅が著しく、調整不明瞭である。436も摩滅するが、外面に縦または斜方向のハケ調整が確認される。

437は受口状口縁鉢である。摩滅気味であるが、体部上半に櫛描直線文、その下に刺突列点文が、口縁部外面には刺突文が認められる。

438～440は受口状口縁甕、441・442・444はくの字状口縁甕である。438は体部外面に斜方向のハケ調整を行い、体部上半に粗雑な櫛描直線文および刺突文を巡らす。口縁部外面には刺突文を施す。体部内面はナデ調整、口縁部内面は横方向のナデ調整で仕上げる。頸部内面には横方向のハケ目がみられる。439は摩滅気味であるが、頸部から体部上半に櫛描直線文、口縁部外面に刺突列点文が確認される。440～442はいずれも全体に摩滅しており、調整不明瞭である。443は底部片で、内外面に斜方向のナデ調整を行う。444は体部外面に横方向および斜方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行う。口縁部内外面には横方向のナデ調整を行う。

445は有孔鉢で、底部に円形の焼成前穿孔を行う。調整は摩滅により不明瞭である。

446～449は高坏である。446は杯部外面上半に横方向のハケ調整、その下方にナデ調整を行う。杯部内面は横方向のハケ調整の後、縦方向のミガキ調整を行う。447・448は摩滅により調整不明瞭である。449は外面に縦方向のミガキ調整を行う。内面はナデであろうか、摩滅により調整不明瞭である。

450～452は器台である。450は外面に縦方向のミガキ調整を行い、口縁部外面には櫛描波状文を施し、2箇1対の円形浮文を貼り付ける。内面は摩滅により調整不明瞭である。451は脚部に櫛描直線文を施し、円形の透かしを3方向に設ける。調整は全体に摩滅しており不明瞭である。452は外面に縦方向のミガキ調整を行い、口縁部外面に凹線を施す。内面は摩滅しており調整不明瞭である。453は外面に縦方向のミガキ調整、内面にナデ調整を行う。脚部には円形の透かしを設けるが、破片のため数は不明である。

454・455は全体に摩滅しており、調整不明瞭である。脚部には円形の透かしを3方向に設ける。456が外面に縦方向のミガキ調整、内面にナデ調整を行う。457は外面に縦または斜方向のハケ調整、内面に横または斜方向のハケ調整を行う。456・457の脚部には円形の透かしを設ける。破片のため数は不明である。

458は受口状口縁甕である。体部内面を板ナデ、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。体部外面はナデか。摩滅気味で調整不明瞭である。

時期 出土遺物から、弥生時代後期に位置付けられる。

竪穴建物S379 (図4-42・46・47、図版10・11)

位置 調査区の西部端に位置する。

形状・規模 4m×4.4mの平面方形で、深さ約0.2mを呈し、N30°Wを指向する。明確な主柱穴、壁溝は確認されなかった。建物の南東部は、建物廃絶以降に耕地を形成していたと推定される比高差があり、北西部は削平を受け一段低くなっている。

屋内施設 中央やや北寄りに炉S414が、南辺中央付近に屋内土坑S400が検出された。炉は平面楕円形を呈し、短軸0.55m・長軸0.85mを測る。屋内土坑は平面楕円形を呈し、短軸0.7m・長軸0.85m・深さ0.4mを測る。

堆積状況 建物掘方には炭化物・焼土を含む厚さ0.05m程の黒褐色細砂の上に、0.2m程度の暗褐色細砂土が堆積する。炉内には、焼土や炭片を含む極細砂が厚さ0.05mのレンズ状に堆積しており、その上面には焼土・炭片を含む黒褐色極細砂が厚さ0.1mにわたって堆積する。

出土遺物 炉の肩部から床面にかけて土師器壺(461)が出土した。また屋内土坑S400から土師器高坏(462)が出土した。建物埋土1層からは、土師器壺(459・460)・高坏(463~466)・高坏または器台(467)、須恵器甕(468)が出土した。459~467はおおむね古墳時代前期の所産。

459・460は摩滅により調整不明瞭である。461は体部外面に斜方向のハケ調整、後ナデ調整、口縁部内外面を横方向のナデ調整を行う。体部内面は板ナデで仕上げる。

462~467は全体に摩滅しており、調整不明瞭である。465は脚部に円形の透かしを設ける。透かし部分の高さは残存しており、ほかに穿孔は認められないことから、透かしは1つである可能性が高い。

468は体部内外面をナデ調整で仕上げる初期須恵器と考えられる。

時期 床面の出土遺物から、古墳時代前期に位置付けられる。

竪穴建物S1 (図4-42・48・49、図版12)

位置 調査区の中央部南寄りに位置する。中央部を溝S3に大きく削平されるため詳細は不明である。南西部の一部は後出する掘立柱建物SB4、溝状遺構S5と重複関係にある。

形状・規模 一辺約6.5mの平面方形で、深さ約0.2mを呈する。中央部を溝S3が斜めに縦断するため詳細は不明であるが、明確な主柱穴は確認されなかった。壁溝は認められなかった。主軸方位をN28°Wに採る。南辺の西寄りにはS5がある。S5は幅約0.7m・深さ約0.2mで、断面形は緩やかな逆台形を呈する。

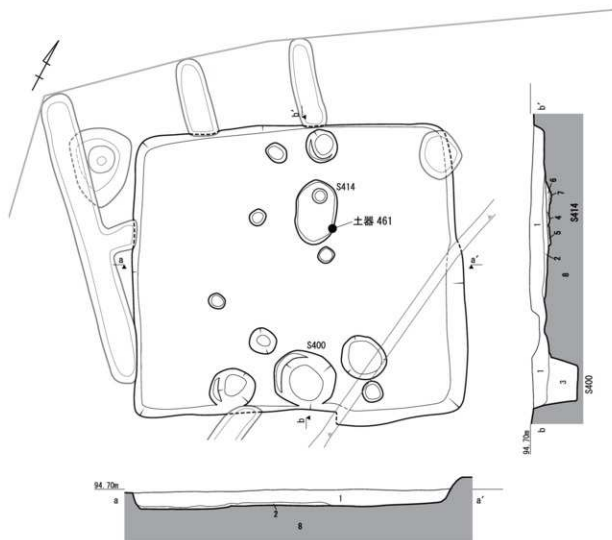
屋内施設 S226やS283は屋内土坑の可能性がある。

堆積状況 褐色土の単層である。

出土遺物 S1から土師器甕(469)・高坏(471)、朝鮮半島系土器(470)、石製管玉(S30)が、S5から土師器甕(473)・ミニチュア土器(474)・朝鮮半島系土器(475)が出土した。また建物内S283からは土師器甕(472)が出土した。これらはおおむね5世紀のものである。

469はくの字状口縁甕である。体部外面に横または斜方向のハケ調整を、体部内面にナデ調整を行う。口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。口縁部外面には粘土紐の痕跡が認められる。

470は体部片である。軟質で、内面ナデ調整、外面には格子状のタタキがみられる。



- 1 10YR3/3 暗褐色細砂 (2~3cmの礫少量含む, Mg 炭多量に含む, 植物生成有)
- 2 10YR3/2 灰褐色細砂(マンガンを多量に含む, 炭化物・焼土含む, 植物生成有)
- 3 10YR3/2 黄褐色極細砂(マンガンを含む)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂(マンガンを多量に含む, 炭土, 炭化物少量含む)
- 5 10YR4/4 褐色極細砂(Mg 炭多量に含む)のブロック土, 焼土少量含む)
- 6 5YR4/4 にぶい赤褐色極細砂(マンガンを含む, 植物生成有, 焼土)
- 7 10YR4/4 褐色極細砂(マンガンを含む, 3層のブロック土少量含む)
- 8 10YR4/4 褐色細砂(1cm炭酸カルシウムの炭粒含む, 植物生成有り, ベース)

図 4-46 A3区 竪穴建物S379 詳細図

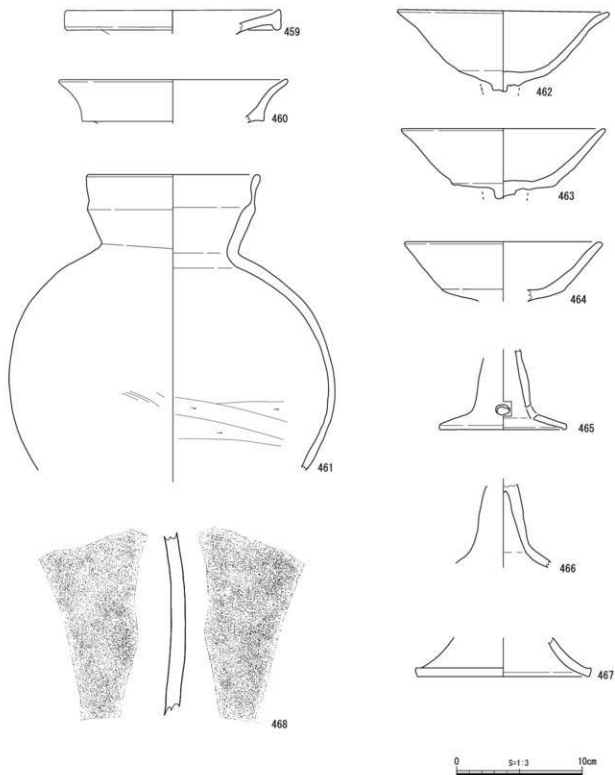
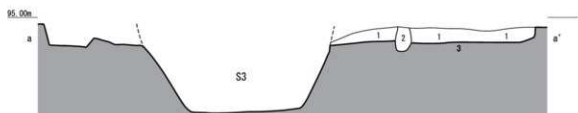
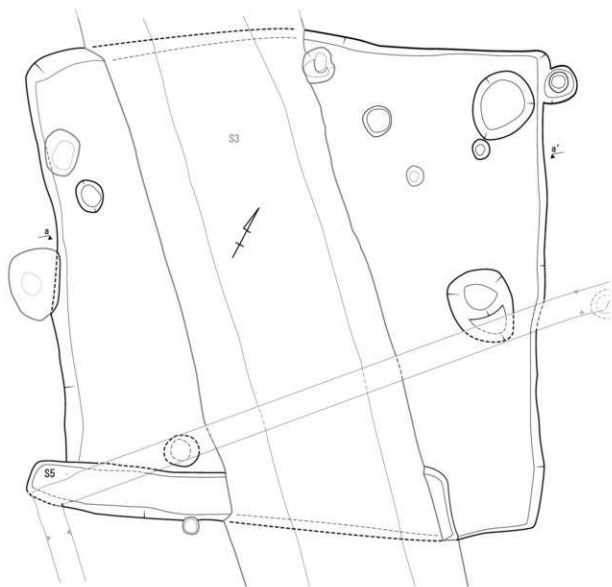


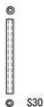
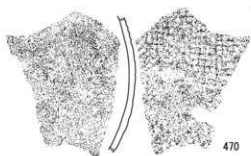
图 4-47 A3区 竖穴建物S379 出土遗物



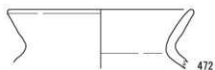
- 1 10YR5/1 褐灰色土
- 2 7.5YR5/6 明褐色土
- 3 10YR5/8 明黄褐色土

0 (S=1:50) 2m

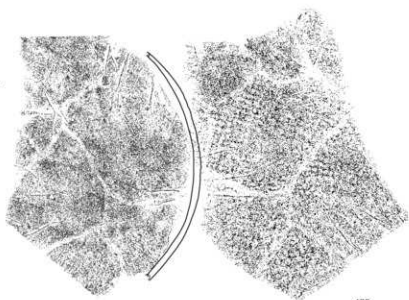
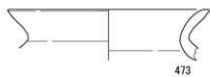
图 4-48 A3区 竖穴建物S1 詳細図



S1



S283



S5



图 4-49 A3区 竖穴建物S1 出土遺物

S30は平面形が方形で、直径約3mmの円形の孔を穿つ。表面を平滑に磨き上げる。緑色凝灰岩製か。

472は内外面が摩滅しており、調整不明瞭である。

473は体部内外面をナデ調整、口縁部内外面を横方向のナデ調整で仕上げる。475は対部片である。軟質で、内面にナデ調整、外面には格子状のタタキ痕がみられる。

時期 S1・S5は共に、出土遺物から5世紀頃に位置付けられる。

竪穴建物S312 (図4-42・50・51、図版13~16)

位置 調査区の北西部中央付近に位置する。後出する掘立柱建物SB6と重複関係にある。

形状・規模 平面方形でやや北西-南東方向に長く、約4.9m×約5.2m・深さ約0.2mを呈する。S392・S435・S437・S441で構成される4本主柱で、主柱穴は直径約0.2mの円形～楕円形・深さ0.1mを呈する。壁溝、貼床は確認されなかった。主軸方位はN42°Wである。

屋内施設 建物の北西辺と南東辺の2箇所に造りつけカマドが確認された。共にカマドは天井部が崩壊し、袖部の構築材のみが残される。また焚口である火床の前面両側には、円形の小穴が1つずつみられ、U字形板状土製品や門柱石のような焚口縁飾り、あるいは補強材の痕跡である可能性がある。

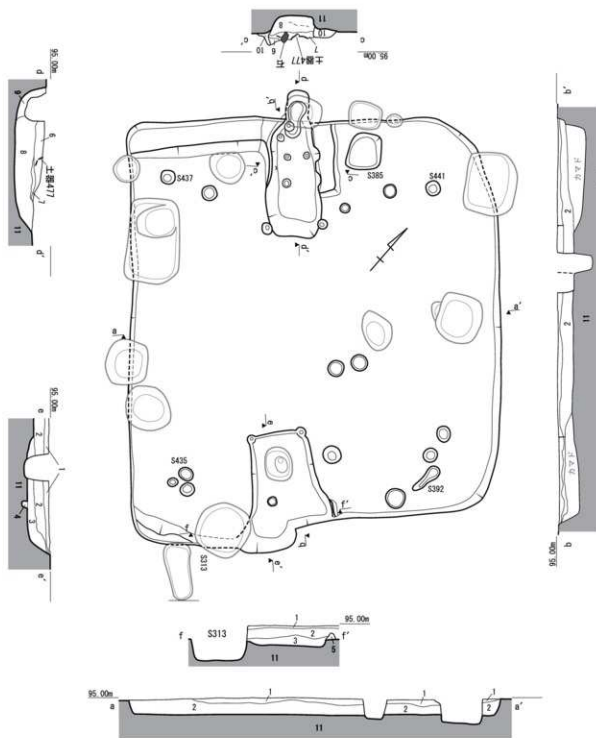
屋内土坑については、北西辺のカマドの北東に設けられている(S385)。平面形はやや不整形な方形で、一辺約0.5m・深さ約0.1m、断面形は緩やかな方形を呈する。

【北西辺のカマド】袖は奥行き3分の2程度が残されており、燃焼部上方の内面から肩部にかけて、灰黄褐色シルトを盛って構築する。燃焼部である内面は緩やかに上に向かって内湾し、袖内面は被熱によって明赤褐色を呈し、硬化する。煙道部は建物外に張り出す。遺存するカマドの大きさは、幅約1m・奥行き約2m・深さ0.4mで、奥行きが比較的長い。火床の平面形は緩やかな長台形で、幅約0.75m・奥行き約1.6m・深さ約0.4mを呈する。煙道部は奥壁中央付近が幅0.2mにわたって0.4m程建物外に張り出す。火床の奥寄りの部分には支脚の痕跡であろうか、直径0.1m・深さ0.03m程の円形の凹みが複数箇所認められる。また、焚口である火床の前面両側には、直径0.1m程・深さ約0.05mの円形の凹みが1つずつ検出された。

建物掘方の南西部はカマド袖部まで約1.8mにわたって、幅約0.45m・床面からの高さ約0.1mのテラス状の平坦面が認められる。この部分について断ち割り調査を行ったところ、掘り残してテラスを造り出している状況が確認された。袖部については断ち割り調査によって、土盛りして構築していることが確認されたので、掘り残して成形したテラス部と掘り窪めた火床の境界付近に土盛りして、カマドを構築した様子がうかがえる。

【南東辺のカマド】主軸をやや南西に傾ける。袖は北東側にわずかに遺存し、火床の肩部に明黄褐色シルトで構築する。この部分について断ち割り調査を行ったところ、土盛りして構築していることが確認された。遺存するカマドの大きさは、幅約1.25m・奥行き約1.35m・深さ約0.2mである。火床の平面形は緩やかな逆台形で、幅約0.8m・奥行き約1.3m・深さ約0.1mを呈する。奥壁は南西コーナー部分が幅0.75mにわたって0.25m程外に張り出し、煙道部と考えられる。火床の奥寄りの部分には支脚の痕跡と考えられる、直径0.1m・深さ0.1m程の円形の凹みが認められた。

カマドの南西側は後出するSB6の掘方に削平され詳細は不明であるが、建物掘方の南西部は



- 1 10YR5/1 灰黄褐色シルト(7.5YR5/1 黒灰色シルトブロック含む)
- 2 7.5YR4/1 褐灰色シルト(標道に近い部分は約1.5cm厚片・10R6/8赤褐色焼土ブロック含む)
- 3 5YR4/1 褐灰色シルト(7.5YR6/1 灰色粘土・10YR5/6 明黄褐色シルトブロック含む)
- 4 5YR4/1 褐灰色シルト(～1cmの厚片・～1cmの10R6/8赤褐色焼土ブロック含む)
- 5 2.5Y6/6 明黄褐色シルト
- 6 2.5YR4/3 に近い赤褐色シルト(焼熟)(7.5YR4/2 灰褐色シルト)
- 7 5Y4/2 灰褐色シルト(2.5YR5/6 明赤褐色焼熟ブロック含む)
- 8 7.5YR5/2 灰褐色シルト(2.5YR5/6 明赤褐色焼熟ブロック含む)
- 9 10YR5/3 に近い黄褐色シルト
- 10 10YR5/2 灰黄褐色シルト
- 11 10YR5/6 黄褐色土

0 (S=1:50) 2m

図4-50 A3区 竪穴建物S312 詳細図

わずかにテラス状の部分が認められ、同建物反対側の北西辺のカマドと南西部との間のテラスの状態を鑑みると、このテラス状の平坦面がカマドまで伸びていた可能性がある。北西辺のテラス同様、断ち割り調査を行ったところ、掘り残して整形していることがわかった。

カマドについては、北西辺のものはテラスや袖部を留め、焼土や炭も多く含まれる土層が堆積している。それに対し、南東辺のものはテラスや袖部をわずかに残すのみで、焼土や炭もほとんど含まれておらず、長期にわたって使用したとは考え難い。こうした状況からは、2基のカマドが建物に同時併存したというより、南東辺のカマドを作った後、風向など何らかの要因で短期間で廃棄し、北西辺に構築し直したことが推定される。また南東辺カマドの南東側は建物掘方の縁部にみられる不整形な平坦面は、もとは北西辺のカマド横にみられるようなテラス状の施設であった可能性がある。廃棄時に残された袖部やテラスなどは、建物内空間を広げるため、あるいはカマド廃絶に伴う祭祀儀礼によって、削り取られたものか。

堆積状況 北西辺のカマド袖内部および火床には、厚さ約0.25mの赤褐色の被熱ブロックを含む灰褐色シルト（8層）の上に、明赤褐色の被熱ブロック混じりの灰褐色シルト（7層）および、にぶい赤褐色の被熱ブロックを含む灰褐色土（6層）が堆積する。

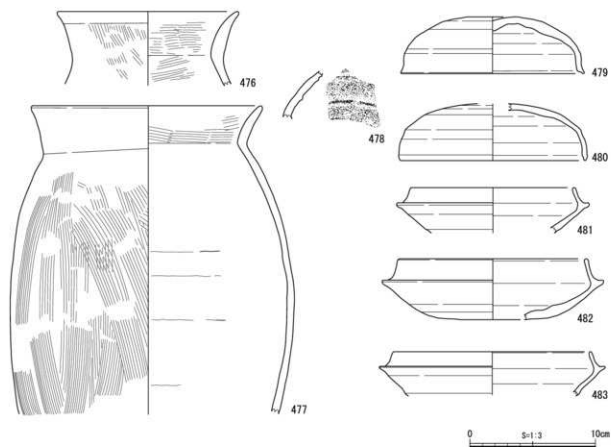


図4-51 A3区 竪穴建物S312 出土遺物

南東辺のカマド火床内には、厚さ約0.1mの褐灰色シルト（3層）が堆積する。焼土や炭片は支脚痕と考えられる火床内の小穴（4層）に含まれるほかは3層にはみられず、反対側の北西辺のカマドの堆積とは対照的である。

2つのカマドより上位の建物掘方内には、厚さ約0.15mの褐灰色シルト（2層）の上に、灰黄褐色シルトが（1層）が0.05m程堆積する。

出土遺物 北西辺のカマド内6層から須恵器杯蓋（480）・杯身（481）、土師器甕（477）が出土した。477は通常カマドで用いられる長胴化した甕であることや、出土状況から、北西辺のカマドで用いられていたものと推測される。南東辺のカマド内3層から須恵器杯身（482）が出土した。建物床面上からは須恵器杯身（483）が出土した。ほかに建物内堆積土から、土師器甕（476）、須恵器甕（478）・杯蓋（479）が出土した。これらは6世紀後半の所産である。

476は外面に斜方向のハケ調整、内面に横または斜方向のハケ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。477は体部外面に縦または斜方向のハケ調整を、口縁部外面を横方向のナデ調整を行う。体部内面はナデ調整を行うものの、粘土紐のつなぎ目が顕著に認められる。478は外面に櫛描波状文を施す。

時期 出土遺物から、6世紀後半に位置付けられる。

竪穴建物S260（図4-42・52、図版9）

位置 調査区の西部南寄りに位置する。北隅を近代以降の攪乱によって削平される。東隅は後出する掘立柱建物SB4と重複関係にある。

形状・規模 6.5m×6.9mの平面方形で、深さ0.05mを呈する。後世の削平を受けていると推定され、遺存深度は非常に浅い。主軸方位はN41°Wである。S258・S271を含む4本主柱と考えられるが、西側については明確な主柱穴は認められなかった。これらは直径0.4～0.5mほどの円形～楕円形で、深さ約0.2～0.4mを呈する。壁溝、貼床は確認されなかった。

屋内施設 南辺中央付近のS256は屋内土坑か。短軸約0.95m・長軸約1.15mの平面楕円形で、深さ約0.5mを呈する。また燃焼部や袖、焼土等は検出されず、明確にカマドと思われる箇所は認められなかった。

堆積状況 建物掘方は灰褐色土が堆積する。S256は褐色土または黒褐色土を主体とする複数層が堆積する。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 年代を判断する遺物に欠けるが、重複関係から後出する掘立柱建物SB4の時期が7世紀頃と推定されることから、古墳時代後期頃のものとして捉えておきたい。

竪穴建物S343（図4-42・53、図版13）

位置 調査区の西部中央付近に位置する。南西部を後出する溝S3に削平される。

形状・規模 一辺約5.5mの平面円形で、深さ約0.35mを呈する。明確な主柱穴、貼床、壁溝は確認されなかった。主軸方位はN20°Wである。

屋内施設 明確な施設は確認されなかった。

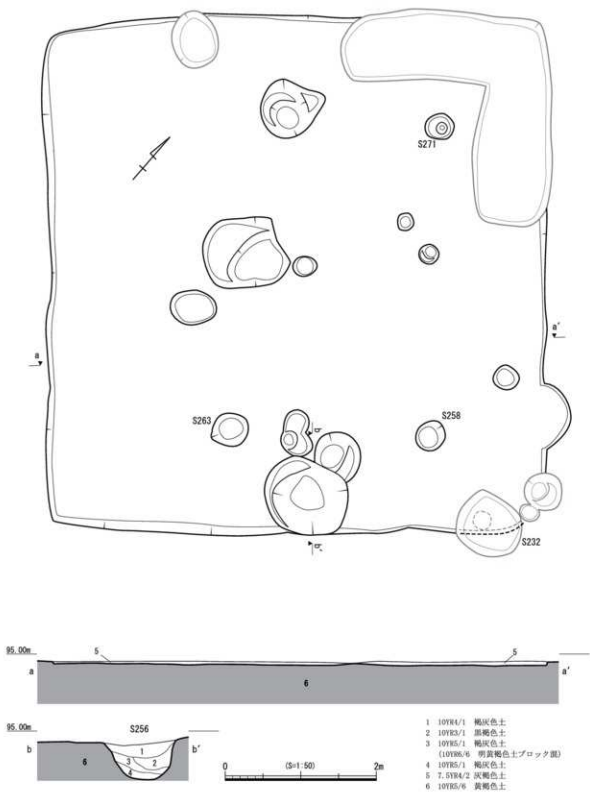
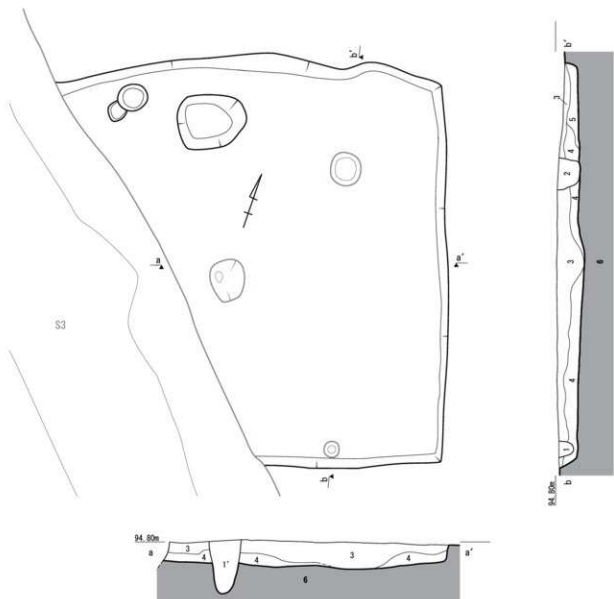


図4-52 A3区 竪穴建物S260 詳細図



- 1 10YR3/3 暗褐色細砂(マンガンド量多量を含む, 1~2cmの礫少量含む, 植物生成有)
- 1' 10YR3/3 暗褐色細砂(マンガンド量多量を含む, 1~2cmの礫含む, 植物生成有)
- 2 10YR3/3 暗褐色細砂(マンガンド量多量を含む, 1~2cmの礫少量含む, 植物生成有)
- 3 10YR4/2 に近い黄褐色細砂(マンガンド量多量を含む, 1~2cmの礫少量含む, 植物生成有)
- 4 10YR4/4 褐色細砂/Mg炭を含む(1~2cmの礫少量含む, 植物生成有)
- 5 10YR4/4 褐色中砂~細砂(マンガンド少量含む, 1~3cmの礫少量含む, 植物生成有)
- 6 10YR4/6 褐色中砂~細砂(炭酸カルシウムの塊状含む, 植物生成有)

図 4-53 A3区 竪穴建物S343 詳細図

堆積状況 礫混じりの中砂～細砂を主体とする複数の層からなる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 不明である。周辺の竪穴建物の時期からは古墳時代後期頃までの時期が想定される。

B. 掘立柱建物

掘立柱建物SB4 (図 4-42・54、図版17)

位置 調査区の中央部南寄りに位置し、掘立柱建物SB5の北西に桁行方向をそろえて並ぶ。北隅の一部は後出する溝S3に削平され、また先行する竪穴建物S1の南西側の一部、およびS260の東端の一部と重複関係にある。

形状・規模 梁行2間(4.8m)×桁行4間(7.9m)で、柱間は梁2.4m、桁行1.9mである。主軸方位をN18°Wに採る南北棟建物で、SB5と桁行方向を揃えて並ぶ。柱掘方は、平面形は0.5～1.1mの隅丸方形～楕円形で、断面形は深さ0.3～0.5mの逆台形である。柱痕は直径0.2m前後で、一部は基底部分が掘方底部よりいくぶん下がった位置に認められる。

堆積状況 黄橙色土ブロックの混じった褐色土の単層である。柱痕の埋土は褐色土である。

出土遺物 掘方S284の埋土から土師器杯(484)が出土した。摩滅しており調整は不明瞭である。7～8世紀の所産である。

時期 出土遺物および、掘方S284と重複関係にあり後出する小穴S231から7～8世紀の土師器杯が出土することから(図 4-60)、SB4は7～8世紀に位置付けられる。

掘立柱建物SB5 (図 4-42・55、図版17)

位置 調査区の中央部南寄り位置し、A7区にまたがって広がる。掘立柱建物SB4との南東に桁行方向をそろえて並ぶ。北隅の一部は後出する溝S3に削平され、また先行する竪穴建物S1の南西側の一部、およびS260の東端の一部と重複関係にある。

形状・規模 梁行3間(5.1m)×桁行4間(8.4m)で、主軸方位をN18°Wに採る南北棟建物である。柱間は梁行2.55m、桁行2.8mである。柱掘方は、平面形は0.5～1.2mの隅丸方形～楕円形で、断面形は深さ0.15～0.45mの逆台形である。柱痕は直径0.15～0.25m前後で、一部は基底部分が掘方底部よりいくぶん下がった位置に認められる。また柱痕底部には円形の黄橙色を呈する部分がみられ、柱基底部の接触部が変色したものと推定される。

堆積状況 掘方の埋土は褐色土を主体とする単層、または粘質土を主体とする複数層が堆積する。柱痕の埋土は褐色土または灰褐色粘質土を主体とする。

時期 年代を決定する遺物に乏しいが、掘立柱建物SB4と同一の主軸方位を採り、その南方に桁行をそろえて整然と並ぶことから、掘立柱建物SB4と同時期の7～8世紀と推定される。

掘立柱建物SB6 (図 4-42・56、図版14・17)

位置 調査区の北西部中央付近に位置する。竪穴建物S312と重複関係にあり、掘立柱建物SB6が後出する。

形状・規模 梁行2間(3.0m)×桁行3間(6.0m)で、主軸方位をN24°Wに採る南北棟建物で

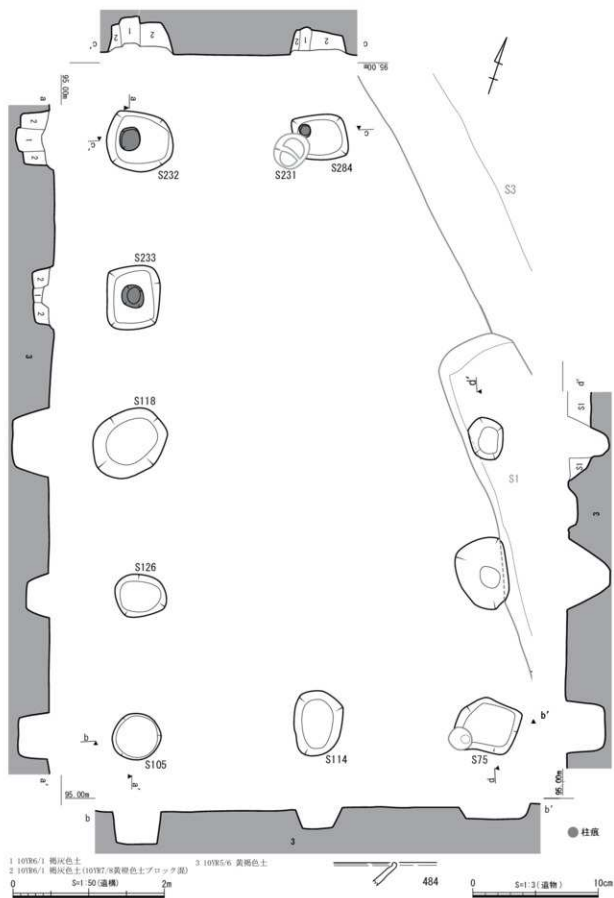


図4-54 A3区 掘立柱建物SB4 詳細図・出土遺物

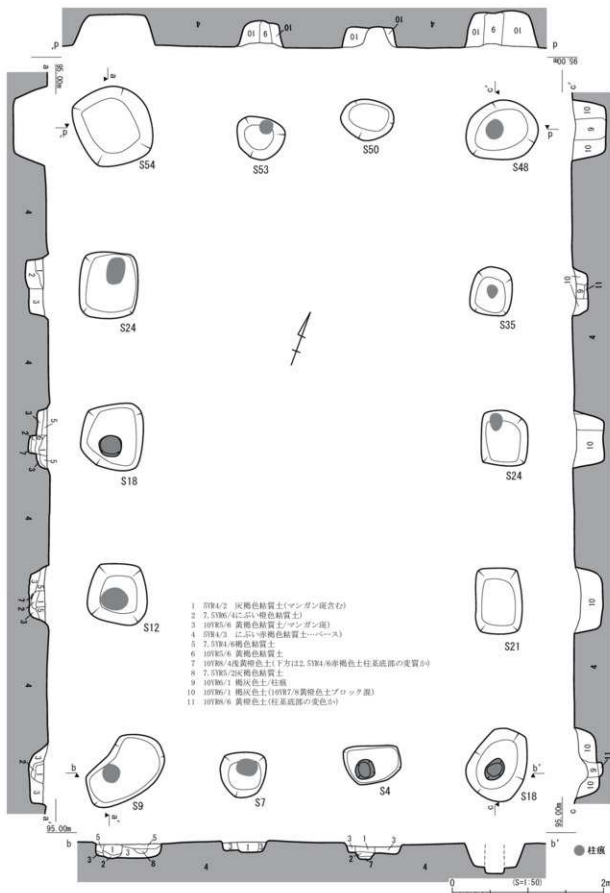


図4-55 A3区 掘立柱建物S85 詳細図

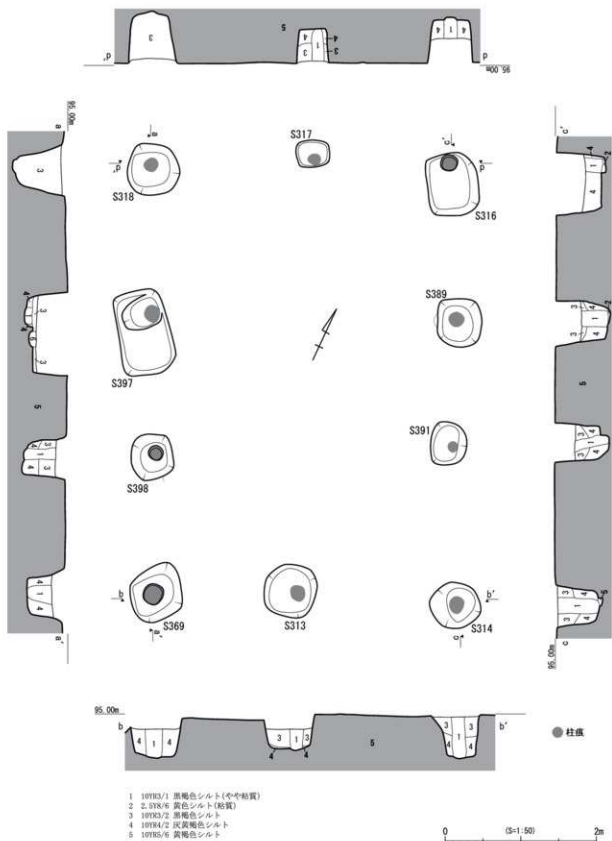


図 4-56 A3区 掘立柱建物SB6 詳細図

ある。柱間は梁行2.0m、桁行2.0mである。柱掘方は、平面形は0.55～1.2mの隅丸方形～楕円形で、断面形は深さ0.15～0.45mの逆台形である。柱痕は直径0.15～0.25m前後で、一部は掘方底部よりいくぶん下がった位置に認められる。また柱痕底部には円形の黄橙色を呈する部分のみられ、柱基底部の接触部が変色したものと推定される。

堆積状況 掘方の埋土はシルトを主体とする単層、または複数層が堆積する。柱痕の埋土は黒褐色シルトである。

時期 年代を決定する遺物に乏しいが、6世紀後半の竪穴建物S312と重複関係にあり、これに後出すること、7～8世紀の掘立柱建物SB4と主軸方位をほぼ同じくすることから、同様の時期の7～8世紀と判断される。

C. 溝

溝S3 (図4-42・57、図版18・19)

位置 調査区の南西部に位置し、A5区に延びる。

形状・規模 直線的に延び、幅2.4～3.6m、深さ約0.95～1.0m、断面形は緩やかな逆台形を呈する。N46°W (N44°E)を指向する。

堆積状況 複数層からなる。下層にシルト～粘質土、その上に褐色土を主体とする土層が堆積しており、砂礫層を含まないことから、顕著な水流はうかがえない。また断面からは、少なくとも5時期に区分され、堆積した土壌を複数期にわたって掘削しなおし、溝を使用していたことがうかがえる。

出土遺物 遺物は検出面から下におおむね40cm程度ごとに取り上げた。これらには、須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶碗などの土器、土製品（管状土錘）、砥石等の石製品が含まれ、年代幅のあるものとなっている。

以下に大別層ごとの出土遺物を記す。なお、大別層については、検出面より40cm下から80cm下までのものを「40～80cm」などとして表記した。

【0～40cm】(図4-42・57)

土器・土製品・石製品・金属製品・木製品が含まれる。

〔土器〕

土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶碗がある。

485・486は土師器甕である。485は体部内外面にナデ調整、口縁部内外面に横方向のナデ調整を行う。486は体部外面を縦または斜方向のハケ調整、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。体部内面は横方向または斜方向のハケ調整を行う。

487は須恵器杯蓋である。8～9世紀の所産。489・490は灰釉陶器底部片である。11世紀の所産。489は底部外面に墨が付着する。転用硯と考えられる。491は緑釉陶器底部片である。10世紀頃の所産。

492～507は土師器小皿である。おおむね12～13世紀頃の所産。992・993は土師器小皿で、漆器皿(W196・W197)の下に重なり合って出土した。非常に脆弱な状態であったことから、土壌ごとに取り上げてPEG含浸処理を行った(図版100F)。

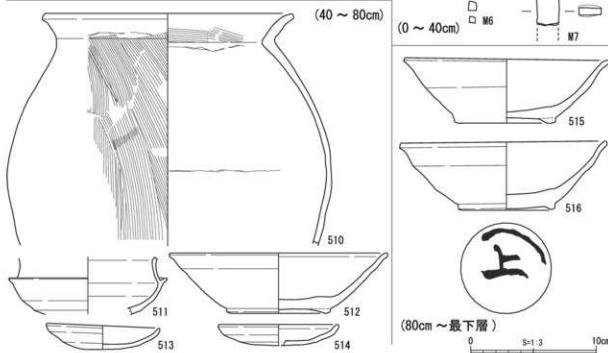
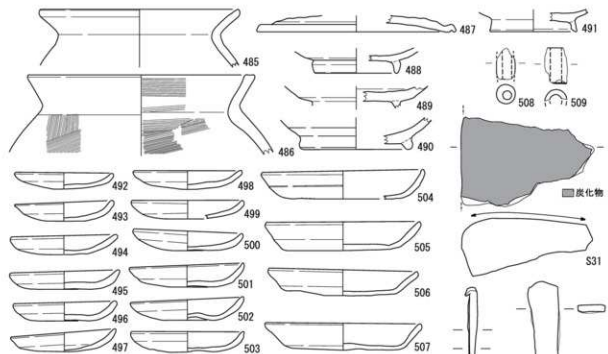
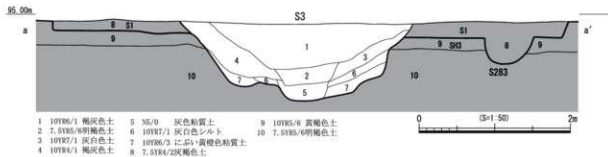


図4-57 A3区 溝S3 詳細図・出土遺物

〔土製品〕

管状土錘（508・509）は、平面形状が長方形で、土師質焼成品である。

〔石製品〕

砥石（S31）がある。平坦面に使用面を持ち、薄く炭化物が付着する。

〔金属製品〕

鉄釘（M6）、用途不明品（M7）がある。M6は断面四角形で、頂部を片側に肥厚させる。M7は鉄製で、断面長方形、薄い板状を呈する。一端を欠損する。

〔木製品〕

<食器具>漆器皿（W196・W197）・椀（W198・W199）がある。先述したように、土師器皿（992・993）の上に重なり合って出土しており、非常に脆弱であったことから、土ごとPEG含浸による保存処理を行った。従って土壌および土師器皿に密着した側の詳細は不明である。

W196、197はいずれも皿で直径が約9.5cm、濃赤褐色に発色する漆が内面に塗布されており、内面見込み中央に柿ないし瓜と思われる文様が朱色の漆で描かれている。ほとんどの部分で非常に薄い漆膜のみが残存しており、取り上げて下面を確認することができなかった。2点ともその下にはほぼ同じ直径の土師器皿が重なっているため、土師器を芯として漆を塗布したもののように見えるが、W197の漆膜が欠損している部分において土師器の上にならずに木質が残存していること、W196の濃赤褐色の漆膜と土師器の間に黒漆の膜が残存しており、かつ濃赤褐色の漆膜と黒漆の膜の間に隙間が認められることから、土師器皿と漆器皿は別個体であり、土師器皿の上に重なっていたものと判断した。漆器皿は内面に濃赤褐色、外面に黒色の漆が施されていたが木質の大半が腐食・消滅し、漆膜の隙間やわずかな木質としてのみその痕跡をとどめていると考える。

W198とW199も、内面に濃茶褐色、外面に黒色の漆が施されているが、皿ではなく深さのある容器である。W198は側面に、W196・197と同じ果実を表現したと思われる文様が朱色漆で描かれている。W199の側面にも、欠損部分が多く形のゆがみはあるが、同じ文様と思われるものが描かれていたようである。この2点も非常に脆弱であるために個々に取り上げることができず、内面・下面の観察はできなかった。確認できる範囲においては、W198は中央部分の漆膜が欠損しており、芯の木質が露出しているように見える。しかしこの木質に見える部分も非常に薄い。おそらく、木芯が漆膜と触れていた部分の木質のみが膜状に残存したものであると思われる。W199は、濃赤褐色の漆膜と黒色の漆膜の間に木質が残存している。W198とW199については、当初は2点の坏状の容器であり、一方がひっくりかえって、口縁を合わせるような形で出土したと見ていた。しかし、側面の文様が柿などの果実に類するものだとすると、W198に見られる文様においてヘタを表現していると思われる3本線が天側であるのが自然である。さらにW198は側面が直立気味で、中央部は高台の痕跡は認められず、平坦である。これらのことからW198は蓋であり、W199はこれと対になる身で、一組のものであった可能性がある。さらに、この4点すべてに共通する文様が描かれており、内面に濃赤褐色、外面に黒色の漆を施すという技法も共通している。

【40～80cm】(図 4-42・57)

土器が出土し、土師器・須恵器・山茶碗がある。

510は土師器甕で、体部外面に斜方向のハケ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。体部内面は板ナデ、口縁部は横または斜方向のハケ調整を行う。頸部外面および体部内面に粘土紐のつなぎ目がみられる。6～7世紀頃の所産。511は須恵器杯身である。5世紀後半の所産。512は山茶碗である。13世紀の所産。513・514は土師器小皿である。おおむね12世紀頃の所産。

【80cm～最下層】(図 4-42・57)

山茶碗(515・516)が出土した。516は底部外面に墨書がみられる。「上」の上から右上に弧状の線を引く。12世紀後半～13世紀の所産。

時期 出土遺物の所属時期はやや幅があるものの、いずれの大別層でも12～13世紀の遺物が含まれており、この頃に複数回掘り直しを行い、最終的に埋没したと推定される。

溝S4(図 4-42・43・59)

位置 調査区の東部中央付近に位置する。

形状・規模 幅1.8～2.1m・深さ0.35～0.4mで、直線的に伸び、断面形は逆台形を呈する。

堆積状況 3層からなり、上から、灰褐色土(明黄褐色土ブロック混)・灰褐色土・灰黄褐色土が堆積する。N69°W(N21°E)を指向する。

出土遺物 平瓦(522)、管状土錘(523)、鉄滓(M8)が出土した。

522は凹面に布目痕、凸面に縄目痕がみられる。古代のものである。523は平面形状が紡錘形で、土師質である。

時期 年代を判断する遺物に乏しい。

素掘り溝

このほか、幅0.3～0.6m、深さ0.05～0.1m程の素掘り溝が複数条検出された。埋土は灰白色土の単層である。これらの主軸はN42°Wである。1.2～1.5mの間隔ではほぼ平行に並ぶ素掘り溝であり、耕作溝と推定される。

D. 土坑

土坑S319(図 4-42・58)

位置 調査区の北西部中央付近に位置する。中央部を近代以降の溝、野井戸によって削平される。

形状・規模 平面形は短辺約3.8m・長辺約7mの不整形な長方形で、深さ約0.1mを呈する。平面形が方形に近く、当初堅穴建物かと思われたが、東西方向への広がりはなく、土坑とした。近代以降の溝等の削平を受け、全容は不明である。

堆積状況 にぶい黄褐色土の単層である。

出土遺物 土師器高坏(517)、須恵器杯蓋(518)・杯(519)、土師器鍋(520)がある。

517は摩滅により調整不明瞭である。520は外面に斜方向のナデ調整後、口縁部は横方向のナデ

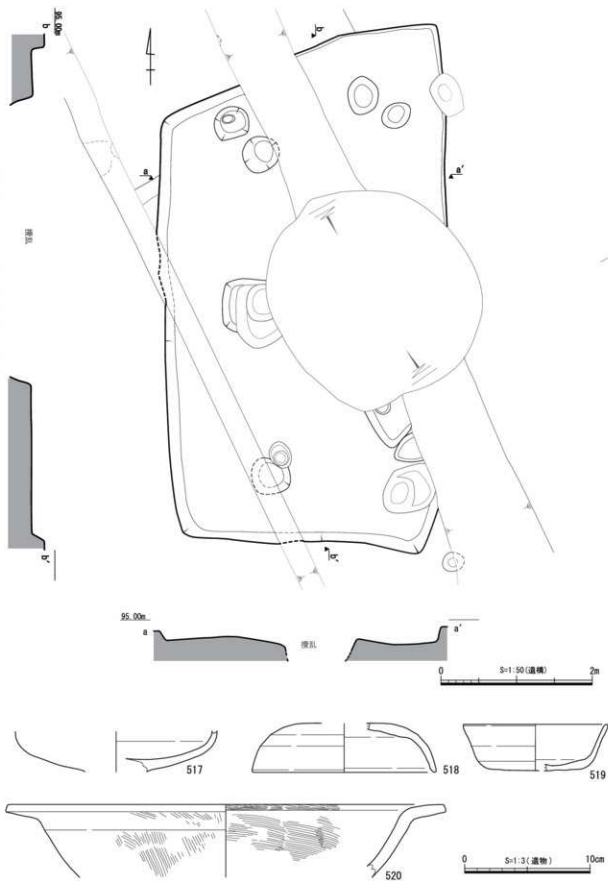


图 4-58 A3区 土坑S319 詳細図・出土遺物

調整を行う。内面は横方向のハケ調整を行う。517は古墳時代、518は6世紀、519・520は7世紀頃の所産。

時期 出土遺物から7世紀頃のものとして推定される。

土坑S189 (図4-42・59)

位置 調査区の東部中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は長軸0.7m・短軸0.5mの楕円形、二段構造を呈し、深さ0.25～0.7mを呈する。

堆積状況 2層からなり、褐灰色土を主体とした土層が堆積する。

出土遺物 須恵器杯蓋(521)が出土した。8～9世紀の所産。

時期 出土遺物から8～9世紀頃以降に埋没したと推定される。

E. 小穴

このほか、性格不明の小穴を複数検出した。このうち図化した遺物の出土した例を示しておく。

小穴S8 (図4-42・59)

位置 調査区の南東隅部に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.2mの円形、深さ約0.05mを呈する。

堆積状況 暗褐色土の単層である。

出土遺物 鉄釘(M9)が出土した。

時期 年代を決定する遺物に乏しく、詳細は不明である。

小穴S9 (図4-42・59)

位置 調査区の南東隅部に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.3mの円形、深さ約0.1mを呈する。

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯蓋(524)・土師器大皿(525)・白磁碗(526)、山茶碗(527・528)、瀬戸鉢(529)が出土した。524は8～9世紀、525は12世紀、527～529はおおむね13世紀の所産。

時期 出土遺物から13世紀と推定される。

小穴S109 (図4-42・59)

位置 調査区の南西部中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.3mの円形で、深さ約0.05mを呈する。

堆積状況 暗褐色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯(530)が出土した。おおむね8世紀頃の所産。

時期 出土遺物から8世紀頃と推定される。

小穴S146 (図4-42・59)

位置 調査区の東端中央部南寄りに位置する。

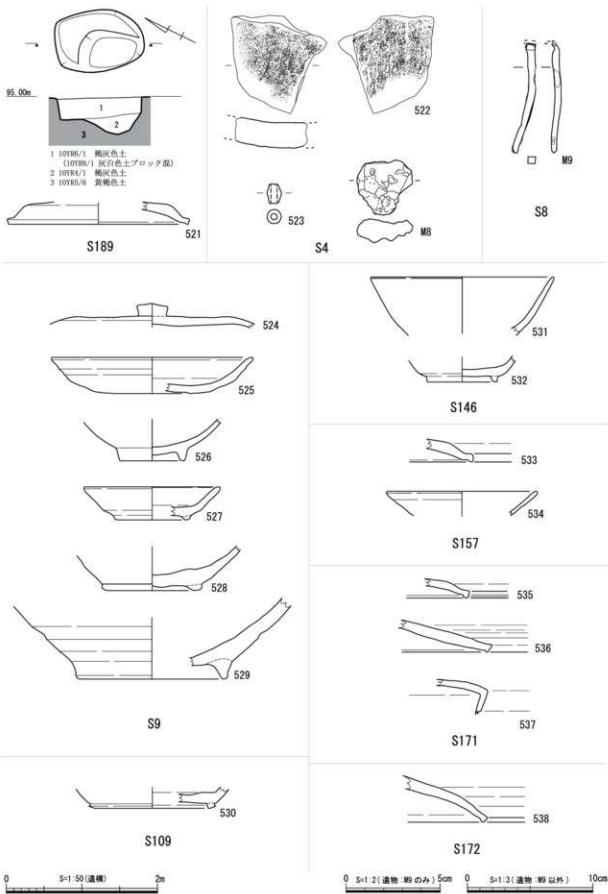


图 4-59 A3区 土坑・小穴 詳細図・出土遺物(1)

形状・規模 平面形は直径約0.7mの円形で、深さ約0.3mを呈する。

堆積状況 灰黄褐色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯(531)・灰釉陶器碗(532)が出土した。531は8世紀頃、532は11世紀頃の所産。

時期 出土遺物から11世紀頃と推定される。

小穴S157 (図4-42・59)

位置 調査区の東端中央部南寄りに位置する。

形状・規模 平面形は短辺0.6・長辺0.9mの隅丸方形、深さ約0.4mを呈する。

堆積状況 灰黄褐色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯蓋(533)、土師器皿(534)が出土した。533は8～9世紀の所産。534は中世の所産。

時期 出土遺物から中世のものと推定される。

小穴S171 (図4-42・59)

位置 調査区の東端中央部北寄りに位置する。

形状・規模 平面形は短軸約0.6m・長軸約0.9mの楕円形、深さ約0.3mを呈する。

堆積状況 灰黄褐色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯蓋(535・536)・壺または平瓶(537)が出土した。8～9世紀頃の所産。

時期 出土遺物から8～9世紀と推定される。

小穴S172 (図4-42・59)

位置 調査区の東端中央部南寄りに位置する。

形状・規模 平面形は短軸約0.6m・長軸約0.7mの楕円形、深さ約0.6mを呈する。

堆積状況 灰黄褐色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯蓋(538)が出土した。8世紀頃の所産。

時期 出土遺物から8世紀頃と推定される。

小穴S201 (図4-42・60)

位置 調査区の中央部北寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.2mの円形、深さ約0.2mを呈する。

堆積状況 灰黄褐色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯蓋(539)のほかに、石鏝(S32)が出土した。S32はサスカイト製である。須恵器杯蓋はおおむね8世紀の所産で、石鏝は混入したものと考えられる。

時期 出土遺物から8世紀と推定される。

小穴S225 (図4-42・60)

位置 調査区の東端中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は短軸約0.6m・長軸約0.9mの楕円形、深さ約0.2mを呈する。

堆積状況 暗褐色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯(540)が出土した。おおむね8世紀の所産。

時期 出土遺物から8世紀と推定される。

小穴S231 (図 4-42・60)

位置 調査区の中央部南西寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.3mの円形、深さ約0.35mを呈する。

堆積状況 黒褐色土の単層である。

出土遺物 土師器杯(541)が出土した。摩滅しており調整は不明瞭である。7世紀頃の所産。

時期 出土遺物から7世紀頃と推定される。

小穴S249 (図 4-42・60)

位置 調査区中央部南西寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.6mの円形、深さ約0.3mを呈する。

堆積状況 黒褐色土の単層である。

出土遺物 土師器甕(543)が出土した。口縁部を横方向のナデ調整、体部内外面はナデ調整を行う。7～8世紀頃の所産。

時期 出土遺物から7～8世紀頃と推定される。

小穴S259 (図 4-42・60)

位置 調査区の南西端中央部南西寄りに位置する。中央部を近代以降の溝、野井戸によって削平される。

形状・規模 平面形は短軸約0.5m・長軸約0.6mの楕円形、深さ約0.1mを呈する。

堆積状況 褐灰色土の単層である。

出土遺物 土師器高坏(542)が出土した。古墳時代の所産。

時期 出土遺物から古墳時代と推定される。

小穴S371 (図 4-42・60)

位置 調査区の北西部北寄りに位置する。中央部を近代以降の溝、野井戸によって削平される。

形状・規模 平面形は一辺約0.6mの隅丸方形・深さ約0.6mを呈する。

堆積状況 暗灰色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯(544)・土師器杯(545)が出土した。おおむね8世紀頃の所産。545は摩滅しており、調整不明瞭である。

時期 出土遺物から8世紀頃と推定される。

小穴S374 (図 4-42・60)

位置 調査区の北西部中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.2m・深さ約0.3mの円形で断面U字のものである。

堆積状況 暗灰色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯 (546) が出土した。8世紀頃の所産。

時期 出土遺物から8世紀頃と推定される。

小穴S378 (図 4-42・60)

位置 調査区の北西部中央付近に位置する。

形状・規模 直径約0.6m・深さ約0.55mの円形で断面U字のものである。

堆積状況 褐灰色土の単層である。

出土遺物 刀子 (M10) が出土した。

時期 年代を決定する遺物に乏しく、詳細は不明である。

小穴S380 (図 4-42・60)

位置 調査区の中央部北東寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.6m、深さ約0.4mを呈する。

堆積状況 灰褐色土の単層である。

出土遺物 弥生土器受口状口縁甕 (551) が出土した。体部外面に斜方向のナデ調整、体部内面にナデ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。体部外面から頸部にかけての櫛描直線文を挟んで、口縁部・体部外面上半に刺突列点文を施す。弥生時代後期の所産。

時期 出土遺物から弥生時代後期と推定される。

小穴S407 (図 4-42・60)

位置 調査区の中央部北寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.6mの円形、深さ約0.3mを呈する。

堆積状況 褐灰色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯蓋 (547) が出土した。6世紀前半の所産。

時期 出土遺物から6世紀前半と推定される。

小穴S445 (図 4-42・60)

位置 調査区の北西部中央付近に位置する。

形状・規模 直径約0.3mの円形、深さ約0.2mを呈する。

堆積状況 黒褐色土の単層である。

出土遺物 土師器甕 (548) が出土した。548は外面に斜方向のナデ調整、体部内面にナデ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整を行う。6～7世紀頃の所産。

時期 出土遺物から6～7世紀頃と推定される。

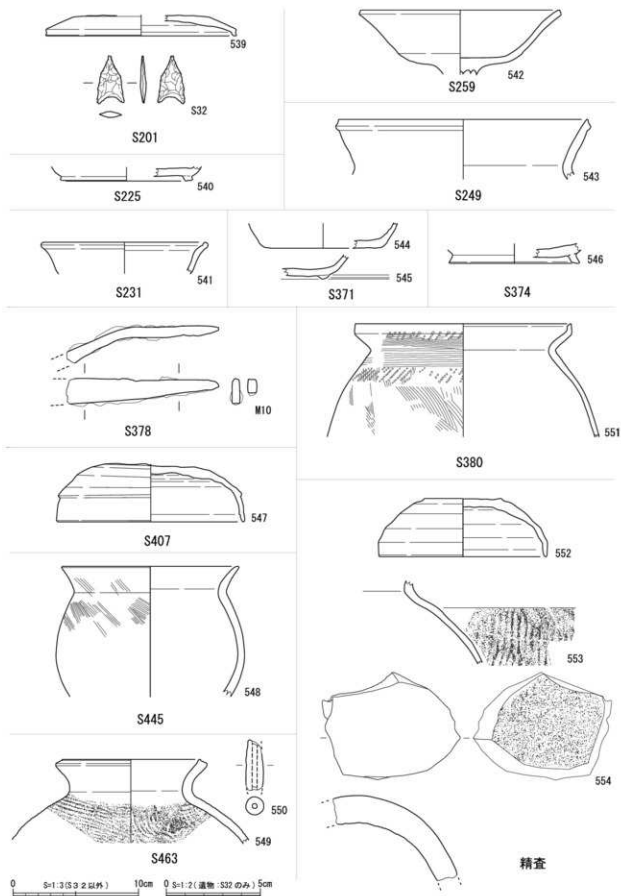


图 4-60 A3区 土坑·小穴 出土遗物(2)

小穴S463 (図 4-42・60)

位置 調査区の北西端中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は短軸約0.3m・長軸約0.6mの楕円形、深さ約0.4mを呈する。

堆積状況 黒褐色土の単層である。

出土遺物 須恵器壺 (549)、管状土錘 (550) が出土した。549は体部外面に平行タタキ、体部内面に同心円状の当て具痕がみられる。体部外面上半には線刻「×」が確認される。6世紀頃の所産。ヘラ記号か。550は平面形が方形で、土師質のものである。両端を欠損する。

時期 出土遺物から6世紀頃と推定される。

F. その他

精査 (図 4-42・60)

このほか精査時のものとして、須恵器杯蓋 (552)、土師器甕 (553) といった土器、丸瓦 (554) といった土製品がある。古墳時代後期～古代の遺物がある。552は6世紀後半の所産。553は体部外面に平行タタキがみられる。いわゆる「甲良甕」と思われる。554は凹面に布目が認められる。古代のものである。

(4) A4区 (図 4-61～63、図版20)

位置 A区のかなで北西部端に位置する調査区である。南東側をA5区に接する。

基本層序・遺構面 層厚1mほどの造成土の下の、明黄褐色極細砂上面、標高94.50m前後が遺構面となる。

検出遺構 河道、土坑を検出した。ほかに調査区の南東端中央部で、A5区で検出した竪穴建物S276の北西隅部、掘立柱建物SB10の北西隅部が検出されたが、これらはA5区で記述する。

A. 河道

河道S24 (図 4-61～63、図版20)

位置 調査区の南西部に位置する。

形状・規模 A1区河道S9・A8区河道S9の延長東岸部が検出された。A1区・A8区・D区で西岸の続きが、A7区で東岸が検出されており、これらから河道幅は約24mと推定される。

堆積状況 極細砂～粗砂を主体とする複数層が堆積しており、水流が想定される。また極細砂に有機質の含まれる層も確認され、一時的に帯水した状態が推定される。

出土遺物 須恵器壺 (555) が出土した。8～9世紀頃の所産。

時期 出土遺物は古代のものであるが、他地区で検出されたA1区河道S9・A8区河道S9と一連のものであることから、同様の12世紀後半～13世紀頃に機能時期の1点を求めることができる。

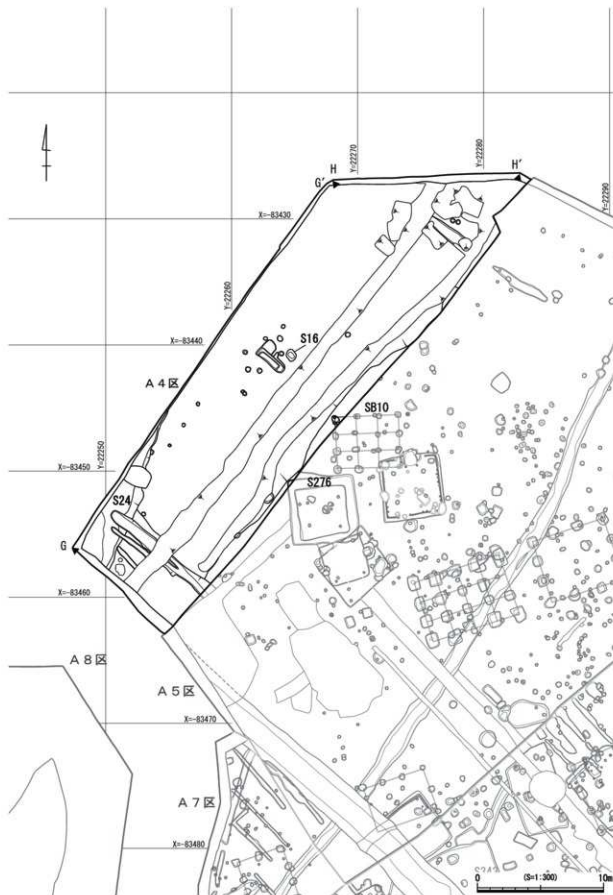


图4-61 A4区平面图

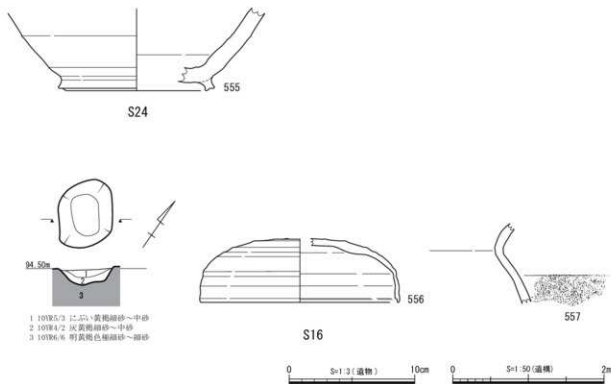


図 4-63 A4区 河道・土坑 詳細図・出土遺物

B. 土坑

土坑S16 (図 4-61・63)

位置 調査区の中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は短辺約0.6m・長辺約0.9mの隅丸方形、深さ約0.2mを呈する。

堆積状況 上位より、にぶい黄褐色細砂～中砂・灰黄褐色細砂～中砂の2層が堆積する。

出土遺物 須恵器杯蓋 (556)、土師器甕 (557) が出土した。556は6世紀前半の所産。557は体部外面に縦または斜方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行う。口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。

時期 出土遺物から6世紀前半以降に埋没したと推定される。

(5) A5区 (図 4-64～81、図版21～33)

位置 A区のなかで北部中央に位置する調査区である。北西側をA4区、南東側をA3区に接する。

基本層序・遺構面 層厚約0.2mの表土の下に、層厚約0.1～0.3mのにぶい黄褐色砂、約0.2mの赤褐色またはにぶい褐色を基調とする粘質土、約0.2mのにぶい褐色の粘質土、約0.2mの黒褐色粘質土が堆積し、その下の明黄褐色土または黄灰色砂礫上面、標高94.80m前後が遺構面となる。調査区の北西側では明黄褐色土がなくなり、黄灰色砂礫が基盤層となる。

検出遺構 竪穴建物6棟、掘立柱建物4棟のほか、溝・土坑・小穴を複数確認した。

A. 竪穴建物

竪穴建物S276 (図4-64・66、図版22)

位置 調査区の北西端中央付近に位置する。後出する竪穴建物S472、同じく後出する竪穴建物S279・S473と重複関係にある。南西部の一部は近代以降の溝によって削平を受ける。

形状・規模 一辺約5.3mの平面方形で、深さ約0.3mを呈する。主軸方位はN6°Wである。竪穴建物S472とはほぼ同方向を指向し、床面の高さはほぼ差が認められない。主柱穴を兼ねたものか。断面からは竪穴建物S472に先行すると判断された。明確な主柱穴、貼床、壁溝は確認されなかった。

屋内施設 明確な遺構は確認されなかった。

堆積状況 粘質土を主体とする複数層が堆積する。

出土遺物 土師器甕(558・559)・高坏(560)が出土した。558はくの字状口縁甕、559は受口状口縁甕である。558～560は全体に摩滅しており、調整は不明瞭である。古墳時代前期の所産。

時期 出土遺物から古墳時代前期に位置付けられる。

竪穴建物S472 (図4-64・66、図版22)

位置 調査区の北西端中央付近に位置する。先行する竪穴建物S276と重複関係にある。南西部の一部は近代以降の溝により削平を受ける。

形状・規模 一辺約4mの平面方形で、深さ約0.4mを呈する。主軸方位をN5°Wに採る。S501～S504から構成される4本主柱で、主柱穴は直径0.15～0.2m・深さ約0.15mである。貼床、壁溝は認められなかった。先行する竪穴建物S276とはほぼ同方向を指向し、床面の比高差はほとんど認められない。竪穴建物S276をひとまわり小さく建て替えたものと思われる。

屋内施設 中央付近に炬と考えられる焼土が2箇所確認され、1箇所(焼土1)はほぼ中央に、もう一箇所(焼土2)は中央やや北東寄りに検出された。共に平面楕円形で、焼土1は短軸0.35m・長軸0.45m、焼土2は短軸0.55m・長軸0.65mを測る。

堆積状況 建物掘方内は粘質土を主体とする2層からなる。焼土1・焼土2には、焼土が厚さ0.05m程レンズ状に堆積する。

出土遺物 焼土1・焼土2の上面および周辺の床面から、土師器壺(561)・甕(562・563)・高坏(567)・高坏または器台(566)が出土した。また、1層上部から土師器甕(564)が、2層から土師器高坏(565)が出土した。

561は直口壺、562・563は受口状口縁甕である。内外面が摩滅しており、調整は不明瞭である。564は外反する口縁を持つ甕で、摩滅気味である。ナデ調整か。565は高坏で、杯部外面に横方向のミガキを施す。内面は摩滅により調整不明瞭である。566・567は摩滅により調整不明瞭である。567は3方向に円形の透かしを設けており、そのうち2方向の距離が詰まる。561～563・565～567はおおむね古墳時代前期の所産である。564は7～8世紀の所産で、最上層上部からの出土であり、廃絶後の最終的な堆積物と捉えられる。

時期 出土遺物から古墳時代前期に位置付けられる。

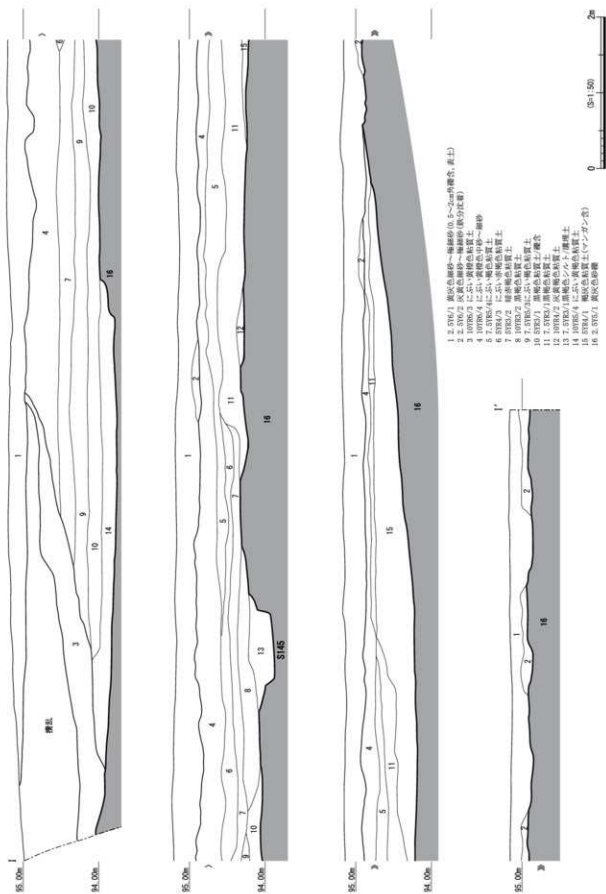


図 4-65 A5区 北東壁断面図

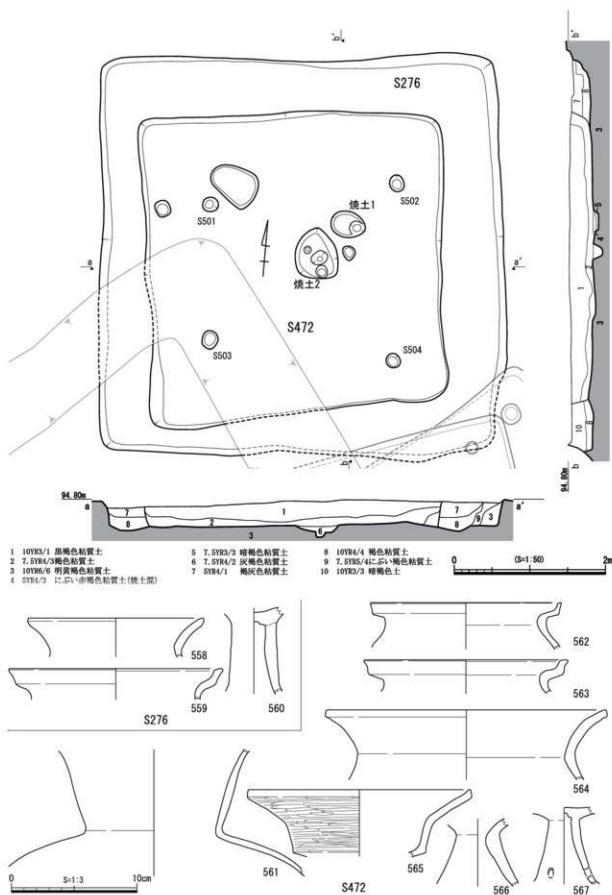


图 4-66 A5区 竖穴建物S276・S472 詳細図・出土遺物

竪穴建物S279 (図4-64・67、図版26)

位置 調査区の北西部中央付近に位置する。後出する竪穴建物S473、および同じく先行する竪穴建物S276と重複関係にあり、また一部は近代以降の溝によって削平される。

形状・規模 一辺約4.8mの平面方形で、深さ約0.3mを呈する。主柱穴は、S508～S511で構成される4本主柱、あるいはS459・S470を含む4本主柱が想定される。貼床、壁溝は認められなかった。床面の高さは後出する竪穴建物S473より約0.05m高い。主軸方位をN40°Wに採る。

屋内施設 東辺中央やや北寄りに造りつけカマドを設ける。カマドは天井部、袖部等の構築材が崩落しており、燃焼部の基底部であるいわゆる火床のみが確認された。火床は幅約0.75m、奥行き0.8mで、断面は緩やかな逆台形を呈する。奥行き3分の1程を外に張り出す。奥壁の中央付近には直径0.15m程の半円形の張り出しがあり、煙道の痕跡と推定される。

堆積状況 建物掘方内には、厚さ0.05～0.1mの(5層)の焼土ブロックおよび炭片混じりの灰褐色土の上に、炭片を含む褐色土(4層)が0.1～0.15mほど堆積する。火床内には、厚さ約0.15mのいぶい黄褐色シルト(2層)の上に赤灰色土(1層)が0.1m程堆積する。埋土には共に焼土ブロックおよび炭片が含まれる。

出土遺物 建物掘方内5層から須恵器壺(569・571)・有蓋高坏蓋(570)が出土した。おおむね5世紀末～6世紀初頭の所産。570は頸部から体部にカキ目がみられる。

時期 出土遺物から5世後半～6世紀初頭に位置付けられる。

竪穴建物S473 (図4-64・68、図版25)

位置 調査区の北西部中央付近に位置する。先行する竪穴建物S279および同じく先行する竪穴建物S276と重複関係にある。また一部は近代以降の溝によって削平される。

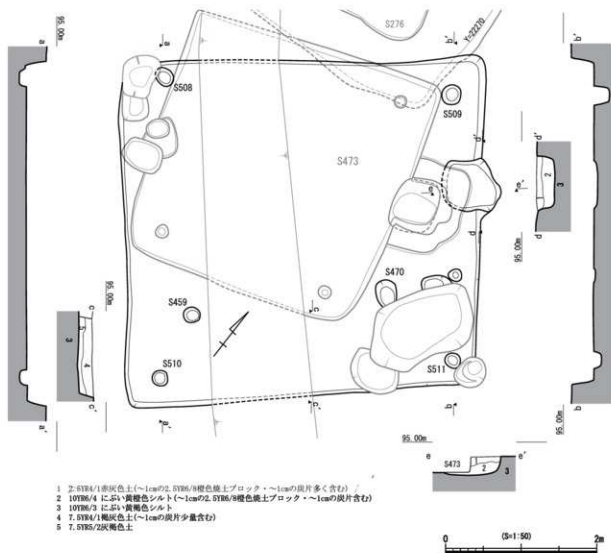
形状・規模 一辺約3.5mの平面方形で、深さ約0.25mを呈する。S505～S507を含む4本主柱と考えられるが、北西部は近代以降の溝に削平され、詳細は不明である。主柱穴の直径は約0.15m、深さ0.1mを呈する。貼床、壁溝は認められなかった。床面の高さは先行する竪穴建物S276より約0.05m低い。主軸方位をN18°Wに採る。

屋内施設 東辺中央付近に造りつけカマドを設ける。カマドは幅約1.25m・奥行き約0.5m・深さ約0.35mで、そのほとんどを大きく外に張り出す。天井部は崩落しており(3～6層)、袖部・外壁部の構築土(7層)のみが残される。袖・外壁は明黄褐色シルトを火床の壁面から肩部にかけて盛り上げて構築される。燃焼部の基底部は0.1mほど緩やかなU字形に凹み、内部の壁面は上に向かって内湾する。奥壁の中央付近はU字形に幅0.15mほど外側に凹んでおり、煙道部の痕跡と考えられる。

堆積状況 建物掘方内には、厚さ約0.15mのいぶい黄褐色土(2層)の上に、焼土ブロックおよび炭片混じりの灰黄褐色土(1層)が0.15mほど堆積する。

出土遺物 土師器甕(568)、須恵器小片が出土した。568は体部内外面に横方向のナデ調整、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。8世紀頃の所産か。

時期 出土遺物から8世紀頃と推定され、またカマドが大きく突出する構造は近江では8世紀に増加する傾向にあり¹⁾、この頃のものとして判断される。



- 1 5YR6/1赤灰色土 (~1cm) 2. 5YR6/9橙色粘土ブロック (~1cmの脱片多く含む)
- 2 10YR6/4 に近い黄褐色シルト (~1cmの2. 5YR6/9橙色粘土ブロック ~1cmの脱片含む)
- 3 10YR6/3 に近い黄褐色シルト
- 4 7. 5YR6/1褐色土 (~1cmの脱片少量含む)
- 5 7. 5YR5/2灰褐色土

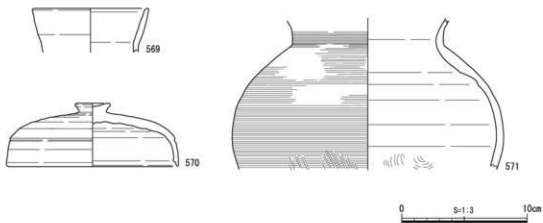
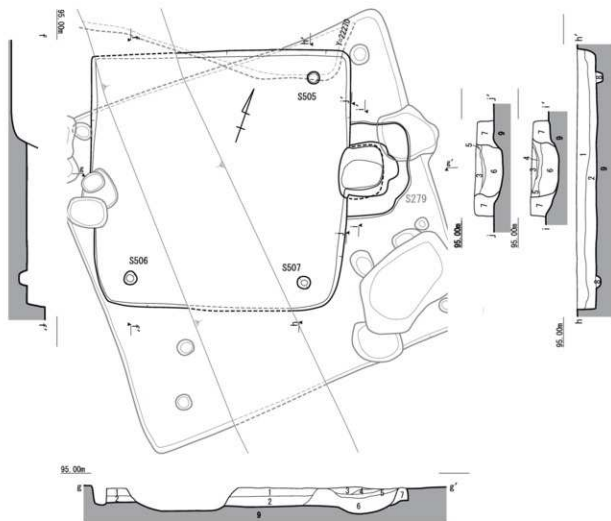
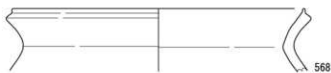


図 4-67 A5区 竪穴建物S279 詳細図・出土遺物



- | | |
|---|--|
| 1 101R4/2 灰黄褐色土(マンガン沈着、～約1cmの炭片・
～1cmの2. S1R6/8褐色粘土ブロック含む) | 4 2. S1R6/8褐色土 |
| 2 101R5/3 にぶい黄褐色土 | 5 101R6/6 明黄褐色シルト(～約1cmの炭片・～1cmの2. S1R6/8褐色粘土ブロック含む) |
| 3 101R6/6 明黄褐色シルト(～約1cmの炭片・
～約5cmの2. S1R6/8褐色粘土ブロック多量に含む) | 6 101R6/6 明黄褐色シルト(～約1cmの炭片・～1cmの2. S1R6/8褐色粘土ブロック少量含む) |
| | 7 101R7/6 明黄褐色シルト |
| | 8 101R1/1 灰色シルト |
| | 9 101R6/3 にぶい黄褐色シルト |



0 S=1:3 10cm

図4-68 A5区 竪穴建物S473 詳細図・出土遺物

竪穴建物S209 (図 4-64・69、図版23・24)

位置 調査区の北西部中央付近に位置する。北西隅の一部は後出する掘立柱建物SB10と重複関係にある。

形状・規模 一辺約5mの平面方形で、深さ約0.2～0.25mを呈し、主軸方位をN7°Wに採る。S44・S446・S250・S514で構成される4本主柱の構造を持つ。主柱穴は平面円形で、直径約0.3m・深さ0.25～0.35mの断面緩い逆台形を呈する。貼床は認められなかった。

壁溝 壁溝は幅0.05～0.06m・深さ約0.1mで、掘方の立ち上がりから内側に約0.2m離れた位置に設けられる。北辺のカマド部と南辺の中央付近西寄りを除いて四方に巡らされ、壁溝の内側には直径0.05～0.07m・深さ0.05mの壁材を支える支柱穴が並ぶ。支柱穴は壁溝の外側では検出されなかったことから、内側から支える構造であったことが推察される。

南辺の壁溝が途切れる部分は入り口と推定され、両端には直径0.15m・深さ0.05m程の小穴がみられる。また、この入口推定部の中央にみられる直径約0.3m・深さ0.1mほどの小穴は、梯子の設置痕など入口施設の一部である可能性がある。また、カマド部を挟んで途切れる壁溝の両端には、壁支柱痕よりひとまわり太い直径0.1m・深さ0.05m程の小穴が確認され、この小穴とカマドの間の壁構造が、ほかの部分と異なっていた可能性が示唆される。

屋内施設 北辺中央付近に造りつけカマドを設ける。カマドは天井部が崩落し、袖部の構築材のみが残される。袖は明黄褐色シルトを火床壁面から肩部に盛り上げて構築される。カマド背後の構造は追及できなかった。遺存するカマドの大きさは幅約1.75m・奥行き約1.3m・深さ約0.35mである。燃焼部の基底部であるいわゆる火床は幅約0.85m・奥行き約1.2mで、断面は深さ約0.05mの浅く緩やかな逆台形を呈し、奥行き約3分の1程を外に張り出す。燃焼部の側壁である袖の内側は穏やかに上に向かって内湾する。奥壁の中央付近には直径0.15m程の半円形の凹みが0.1m程外に張り出し、煙道の痕跡と推定される。火床基底部の中央付近には支脚の痕跡であろうか、直径約0.1m・深さ約0.08mの円形の凹みが認められる。また、焚口の両側である袖の延長部前面には、直径約0.15m・深さ約0.07mの小穴が1つずつみられる。U字形板状土製品などのような焚口縁飾りや門柱石など補強材の痕跡である可能性がある。

カマドの東には屋内土坑SS15が検出された。短軸約0.4m・長軸約0.5mの丸みを帯びた方形を呈し、深さ約0.45m、断面形は緩やかな方形である。

堆積状況 建物掘方内には、厚さ約0.1mの灰黄褐色土(2層)の上に、炭刃を含む褐色土(1層)が0.1mほど堆積する。2層両端の建物掘方縁部においては、埋土と壁材を支えていた土層の区別が困難で、堆積状況を突きとめることができなかった。屋内土坑は5YR5/1褐色シルトの単層である。

カマド袖内部および火床には、厚さ約0.2mの明黄褐色シルト(8層)の上に、約0.1mの厚さで灰赤色シルト(7層)が堆積する。いずれも炭化物および焼土ブロックが含まれる。さらに上部には、0.5mほどの厚さで赤色シルト(4層)および暗赤色シルト(5層)が堆積し、さらに前面には明黄褐色シルト(6層)が斜めに堆積する。

出土遺物 須恵器甕(572)が出土した。体部外面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕が

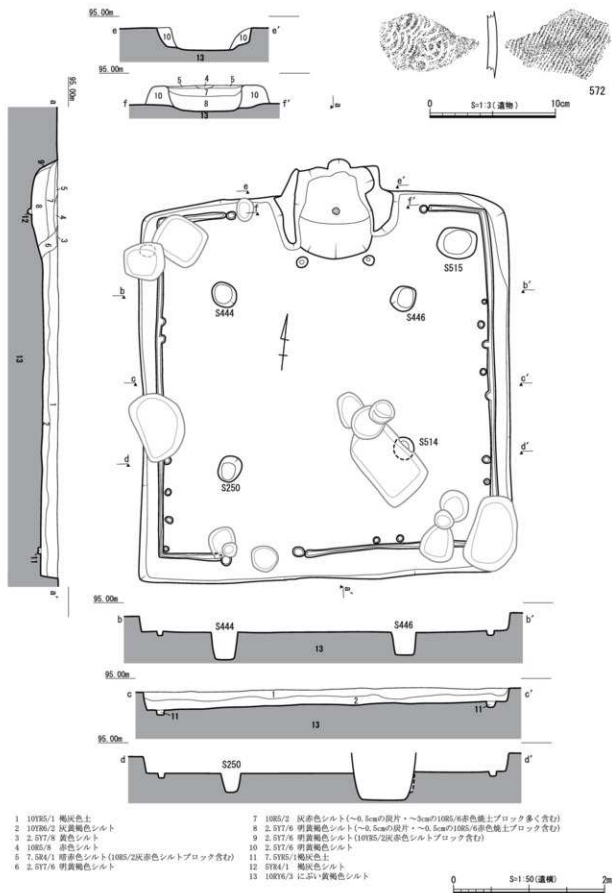


図4-69 A5区 竪穴建物S209 詳細図・出土遺物

みられる。

時期 出土遺物に須恵器が入ることから少なくとも5世紀後半以降と考えられる。また、カマドがいくぶん建物の外に張り出す傾向は、東近江市中沢遺跡の6世紀の竪穴建物に類似しており(宮崎2022)、6世紀頃のものとして捉えておきたい。

竪穴建物S360 (図4-64・70、図版28)

位置 調査区の南方に位置し、A3区に広がる。北隅の一部は後出する掘立柱建物SB9と重複関係にあり、南西部は溝S3の削平を受ける。

形状・規模 平面方形で一辺約4.7m・深さ約0.4mを呈する。主軸方位をN36°Wに採る。南西部は溝S3に大きく削平を受けており詳細は不明であるが、明確な主柱穴は認められなかった。

壁溝 壁溝は北西辺から北東辺の屋内土坑までの北西側で確認された。幅約0.08m・深さ約0.08mで、建物掘方の立ち上がりから内側に約0.05m離れた位置に設けられる。壁溝の内側には壁を支える支柱と考えられる直径0.07～0.15m・深さ約0.1mの小穴がみられる。

貼床 建物掘方基底部の一部には厚さ約4mmの硬く締まった橙色土(2.5YR6/8)の貼床が確認された。当該建物の基盤層は、部分的に2～5cm程度の礫からなる層となっており、貼床は床面を平滑にするための造作と推定される。

屋内施設 東辺の中央やや南寄りに造りつけカマドを設ける。カマドは天井部、袖部等が崩落しており、燃焼部の基底部であるいわゆる火床のみが確認された。火床は幅約0.5m、奥行き約1.1mで、断面は深さ約0.3mの緩やかなU字形を呈し、燃焼部の一部を外に張り出す。

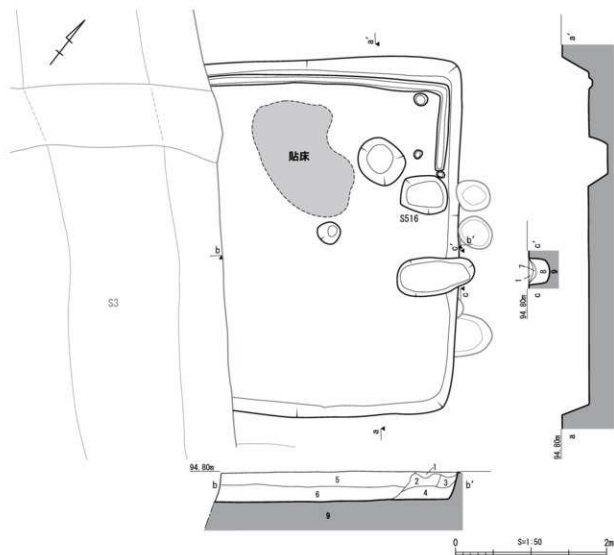
屋内土坑と考えられるS516を検出した。平面形は短軸約0.5m・長軸約0.6mのやや不整形な隅丸方形で、深さ約0.3m、断面形は緩やかな方形である。

堆積状況 火床には、厚さ0.2m程の暗赤褐色シルト(8層)の上に、約0.05mの厚さで暗赤灰色シルト(7層)、さらに焼土ブロックおよび炭片混じりの暗赤褐色シルト(1層)が0.05m程の厚さで堆積する。

建物掘方内には、0.5mほどの厚さで石混じりの灰褐色土(6層)の上に褐色土(5層)が堆積する。カマド付近には、約0.15mの厚さの明黄褐色シルト(4層)の上に、0.15m程の厚さの灰黄色シルト(2層)および褐色土(3層)、さらにその上に焼土ブロックおよび炭片混じりの赤褐色シルト(1層)が0.05～0.1mの厚さで堆積しており、この部分はカマドの袖部や天井部の崩落土と考えられる。

出土遺物 1層から土師器甕(573)、須恵器蓋(574)が出土した。573は体部内外面に縦方向のハケ調整を行う。直線的な形状から長胴甕と考えられる。これらはおおむね6世紀末の所産。

時期 出土遺物から6世紀末頃に位置付けられる。



- | | |
|--|---|
| <p>1 2. 5YR3/2 暗赤褐色シルト(～約1cmの7. 5B4/4にぶい赤色・7. 5B4/5赤色・10YR6/8赤褐色焼土ブロック・～約1cmの破片多く入る)</p> <p>2 10YR5/2 灰黄色シルト(7. 5YR6/1 焼灰色シルトブロック入る)</p> <p>3 7. 5YR4/1 焼灰色シルト(2・3層は漸次的)</p> <p>4 10YR6/6 明黄褐色シルト(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック入る)</p> | <p>5 5YR4/1 焼灰色土</p> <p>6 7. 5YR5/2 灰褐色土(～2cmの石少量入る)</p> <p>7 2. 5YR3/3 暗赤褐色シルト</p> <p>8 5YR3/3 暗赤褐色シルト</p> <p>9 10YR6/3 黄褐色シルト～埋</p> <p>※貼床: 2. 5YR5/9 橙褐色土(固く締まる, 厚さ約4cm)</p> |
|--|---|

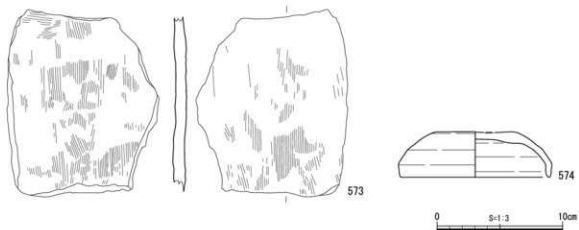


図4-70 A5区 竪穴建物S360 詳細図・出土遺物

B. 掘立柱建物

掘立柱建物SB7 (図 4-64・71・72、図版29～31)

位置 調査区の中央付近に位置し、掘立柱建物SB8の南西に桁行方向をそろえて並ぶ。先行する溝S145と重複関係にある。

形状・規模 梁行3間(5.0m)×桁行4間(7.1m)の総柱構造の建物である。建物東辺の掘方S75の南側は溝S145と重複しており、この部分の柱穴を明確に検出することはできなかった。主軸方位がN18°Wである東西棟建物で、柱間は梁行1.67m、桁行1.78mである。柱掘方は、平面形は0.6～1.0mの隅丸方形～長方形で、断面形は深さ0.2～0.45mの逆台形を呈する。柱痕は直径0.2m程度で、一部は掘方底部よりいくぶん下がった位置に認められる。また柱痕底部には円形の明黄褐色を呈する部分がみられ、柱基底部あるいはその接触部が変色したものと推定される。堆積状況 掘方の埋土は褐色土を主体とする単層または複数層が堆積する。柱痕の埋土は暗褐色シルトである。

出土遺物 建物を構成する掘方S325から須恵器杯身(575)が、S315から須恵器壺(576)が出土した。576の外面上には櫛描波状文がみられる。575は6世紀後半頃、576は6世紀代の所産である。時期 出土遺物には6世紀代のものが含まれるが、重複関係にあり後出する小穴S339からは8世紀頃の須恵器杯(577)が出土していること、また先行して重複関係にある溝S145から7世紀の土器が出土していることから、7～8世紀と捉えておきたい。

掘立柱建物SB8 (図 4-64・73、図版29・30)

位置 調査区の中央付近に位置し、掘立柱建物SB7の北東に桁行方向をそろえて並ぶ。先行する溝S145と重複関係にある。

形状・規模 梁行3間(5.1m)×桁行3間(6.0m)の東西棟建物で、主軸方位はN18°Wである。柱間は梁行1.7m、桁行2.0m、柱掘方は、平面形は0.6～1.0mの隅丸方形～楕円形で、断面形は深さ0.2～0.3mの逆台形を呈する。柱痕は直径0.2m程度である。軸をそろえて隣に並ぶ掘立柱建物SB7が総柱構造を持つため、当該建物範囲を精査したが、明確な掘方は検出されなかった。堆積状況 掘方の埋土は粘質土を主体とする単層である。柱痕の埋土は暗褐色粘質土である。

出土遺物 建物を構成する掘方から土師器・須恵器小片が出土した。

時期 年代を決定する遺物に乏しいが、先行する溝S145からは7世紀の土器が出土していること、また桁行方向をそろえて南西に並ぶ掘立柱建物SB7と同時期のものと考えられることから、7～8世紀のものと捉えておきたい。

掘立柱建物SB9 (図 4-64・74)

位置 調査区の南方に位置する。南東部は先行する竪穴建物S360および溝S145と重複関係にあり、また南西隅は後出する溝S3の削平を受ける。

形状・規模 梁行2間(3.6m)×桁行3間以上(5.1m以上)で、主軸方位がN18°Wとなる東西棟建物である。柱間は梁行1.8m、桁行1.7mである。柱掘方は、平面形は0.4～0.65mの隅丸方形～

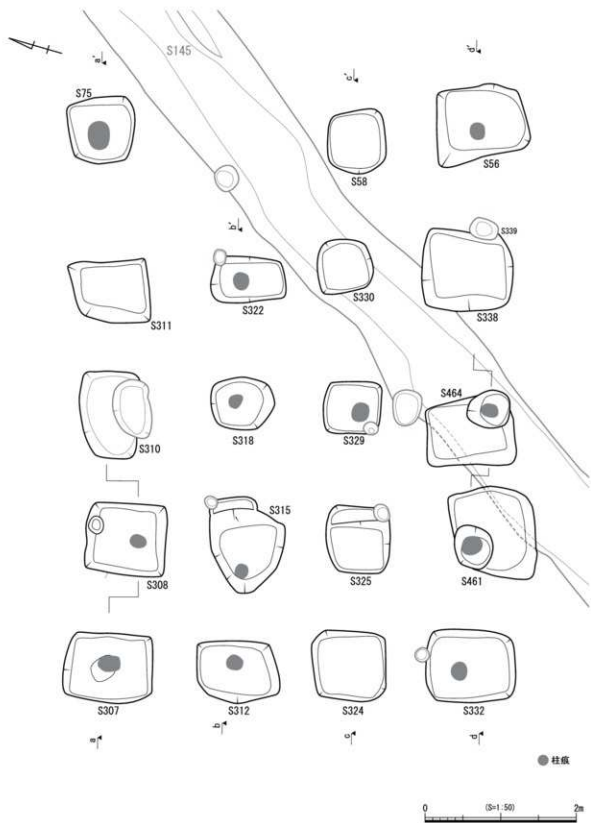
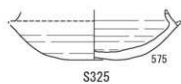


图 4-71 A5区 掘立柱建物SB7 詳細図



S325

575



S315

576



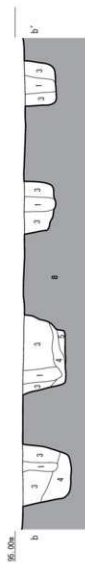
S339

577

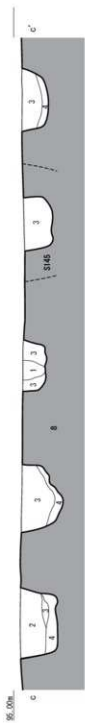
0 5=1.3(遺物) 10cm



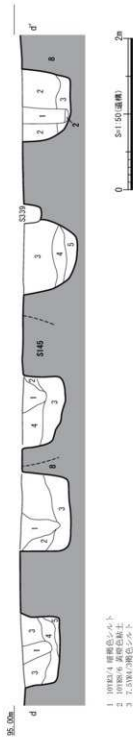
95.00m



95.00m



95.00m



95.00m

0 5=1.50(遺物) 2m

- 1 10182.0 褐色シルト
- 2 10182.0 灰褐色粘土
- 3 7.5304.0 褐色シルト
- 4 10182.0 褐色シルト
- 5 10182.0 褐色シルト(柱型)
- 6 10182.0 褐色シルト
- 7 10182.0 褐色シルト
- 8 10182.0 褐色シルト

図4-72 A5区 掘立柱建物SB7 断面図・出土遺物

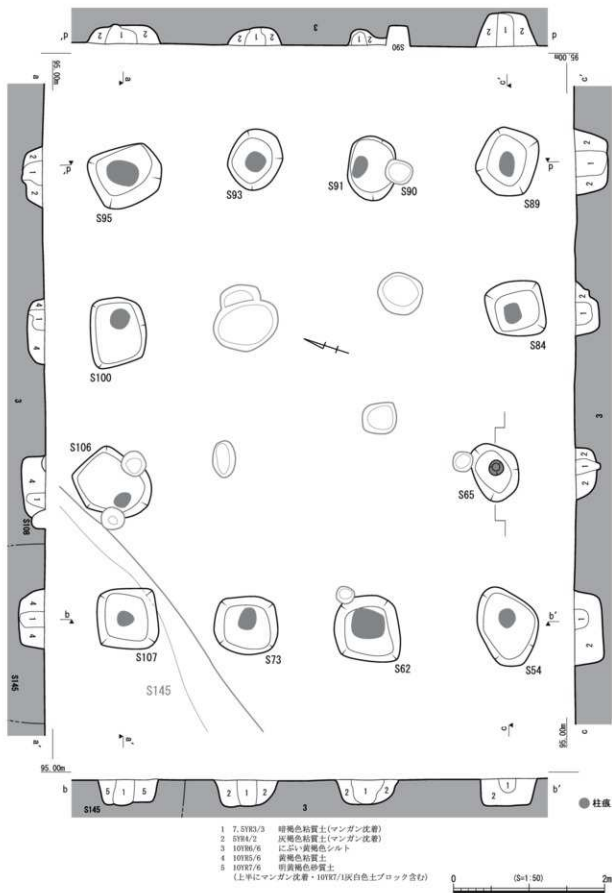


図 4-73 A5区 掘立柱建物S88 詳細図

楕円形で、断面形は深さ0.2～0.45mの逆台形を呈する。柱痕は直径0.15m程度で、一部は掘方底部よりいくぶん下がった位置に認められる。

堆積状況 掘方の埋土にはぶい黄褐色シルトの単層である。柱痕の埋土は灰黄褐色シルトである。
出土遺物 土師器・須恵器小片が出土した。

時期 年代を決定する遺物に乏しいが、重複関係にあり先行する溝S145が7世紀の埋没時期を示すこと、掘立柱建物SB7と主軸を同じくすることから、SB7と同時期の7～8世紀と捉えておきたい。

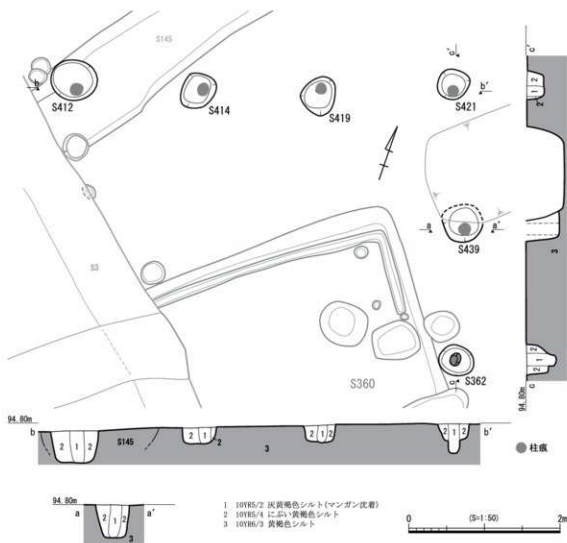


図4-74 A5区 掘立柱建物SB9 詳細図

掘立柱建物SB10 (図4-64・75、図版31)

位置 調査区の北西端中央付近に位置する。重複関係にある竪穴建物S209に後出する。

形状・規模 梁行3間(4.14m)×桁行3間(4.98m)で、総柱構造の建物である。主軸方位がほぼ正南北のN5°Wとなる東西棟建物で、柱間は梁行1.38m、桁行1.66mである。柱掘方は、平面形は0.35～0.6mの隅丸方形～楕円形で、断面形は深さ0.15～0.55mの逆台形を呈する。柱痕は直径0.15m程度である。

堆積状況 掘方の埋土は褐色シルトを主体とする単層または複数層が堆積する。柱痕の埋土は暗褐色シルトである。

出土遺物 建物を構成する掘方から土師器・須恵器小片が出土した。

時期 年代を決定する遺物に乏しいが、重複関係にある6世紀頃の竪穴建物S209に後出することから7世紀以降と捉えておきたい。

C. 溝

溝S145 (図4-64・76～79、図版32)

位置 調査区の中央付近に位置する。A7区に延び、溝S378に相当する。

形状・規模 幅0.75～1.55m、深さ0.3～0.7m、断面形は緩やかな逆台形を呈する。やや蛇行するもの、おおむね直線的に延びる。

堆積状況 礫や土器片混じりの褐色～暗褐色土の複数層が堆積し、最上部に黒褐色土が堆積する。

出土遺物 6～7世紀の須恵器・土師器がある。

578～588は須恵器杯蓋である。578は5世紀後半、579は6世紀前半、580～588は6世紀後半の所産。589～603は須恵器杯身である。589は5世紀後半、590～603は6世紀後半～7世紀初頭の所産。604は有蓋高坏蓋、605～606は高坏で、6世紀後半の所産。607は須恵器体部片である。608・611～613は須恵器甕、609・610・614は須恵器壺である。610は外面にカキ目がみられる。611は内外面をナデ調整で仕上げる初期須恵器である。612・613は体部外面に平行タタキ、体部内面に同心円状の当て具痕がみられる。

615は土師器底部である。内外面をナデ調整で仕上げる。616～625は土師器甕で、おおむね6～7世紀の所産。616は体部内外面をナデ調整、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。617・618は体部外面に縦または斜方向のハケ調整、体部内面に横方向のハケ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。619は体部外面に横または斜方向のナデ調整、体部外面に横方向のハケ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。620は体部外面に縦方向のハケ調整、体部内面にナデ調整、口縁部に横方向のナデ調整を行う。622～625は体部内外面に縦または斜方向のハケ調整、口縁部に横方向のナデ調整を行う。625は長胴甕で体部外面下半には炭化物が付着する。

626・627は土師器鍋である。体部内外面に斜方向のハケ調整、口縁部に横方向のナデ調整を行う。7世紀頃の所産。

628は土師器甕である。体部外面に縦または斜方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行う。体部外面には扁平な把手を貼り付ける。7世紀の所産。

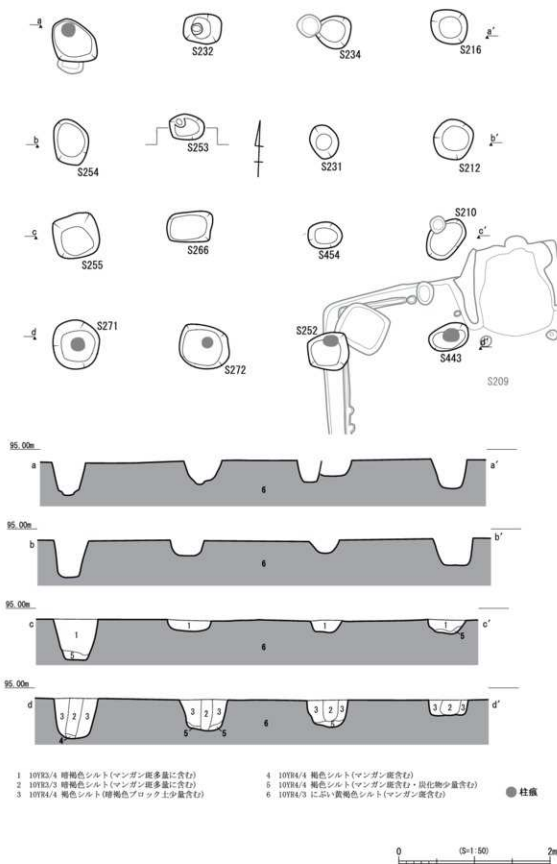
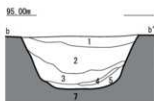
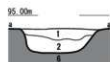


図 4-75 A5区 掘立柱建物SB10 詳細図



- 1 10YR2/3 黄褐色 細砂～極細砂/土層片含む/粘土・炭化物含む/陶器含む→上層
- 2 10YR2/3 暗褐色 細砂～極細砂/粘土含む→中層
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト0.5～1.0cm大の礫・マンガン錠・暗褐色ブロック土少量含む
- 4 10YR3/4 暗褐色 細砂～極細砂
- 5 10YR4/4 黄褐色 細砂～極細砂
- 6 10YR4/2 灰黄褐色シルト(1～5cmの礫大量に含む)
- 7 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト

0 5=1.50(遺構) 2m

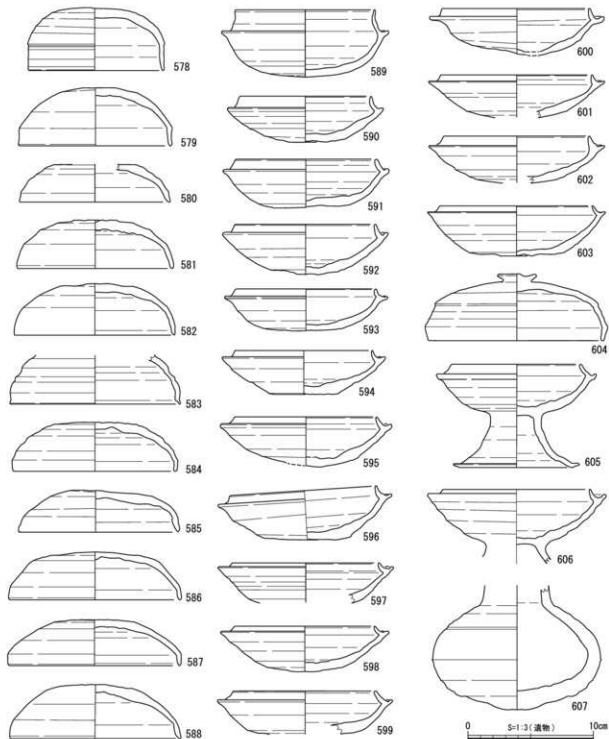


図4-76 A5区 溝S145 詳細図・出土遺物(1)

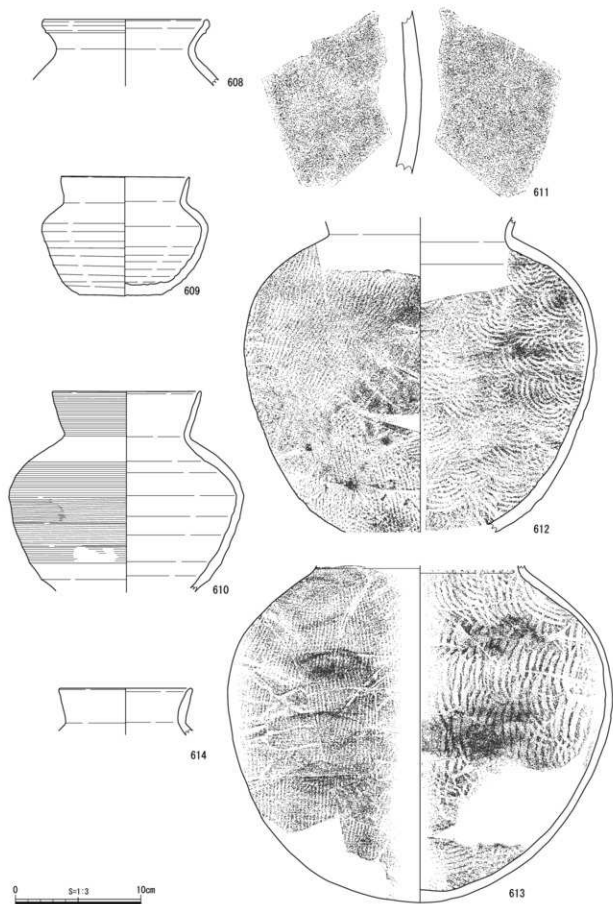


图 4-77 A5区 溝S145 出土遺物(2)

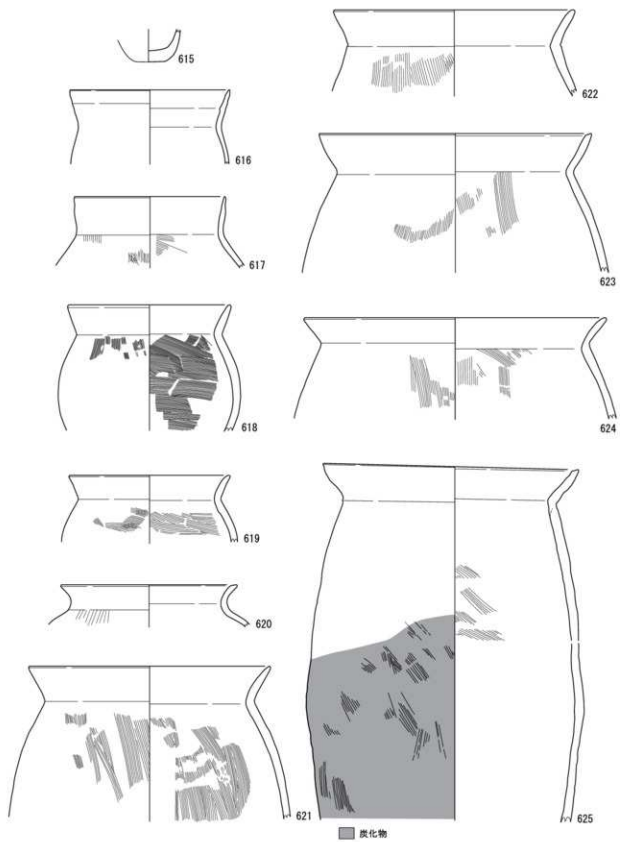


图 4-78 A5区 沟S145 出土遗物(3)

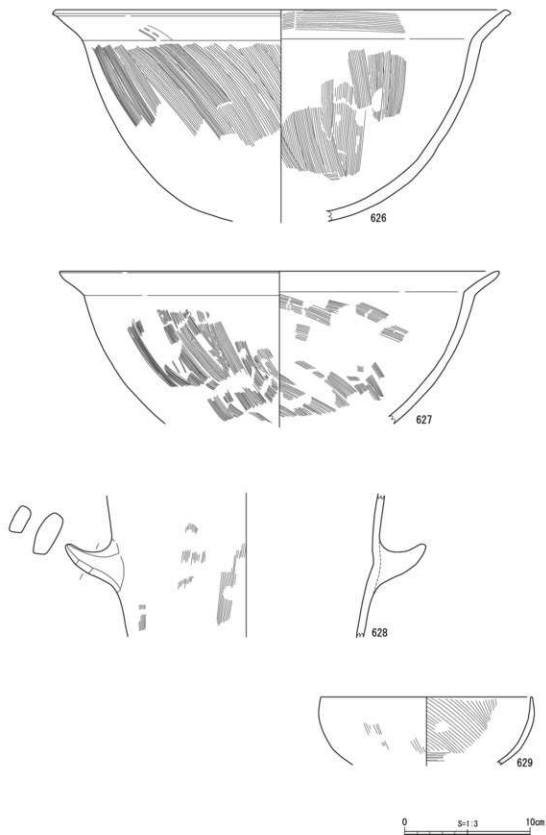


图 4-79 A5区 沟S145 出土遗物(4)

629は土師器杯である。やや摩滅しており内外をハケ調整の後ナデ調整で仕上げたものか。7世紀の所産。

時期 出土遺物は6世紀頃のもの为主体となっており、この頃に機能していたと考えられる。また、出土遺物および、重複関係にある7～8世紀の掘立柱建物SB7に先行することから、7世紀頃には埋没したものと捉えられる。

D. 井戸

井戸S431 (図4-64・80)

位置 調査区の南東端中央部南寄りに位置する。北東部の一部は近代以降の溝によって削平を受ける。

形状・規模 平面形は直径約1.35m、深さ約1.65mの円形で、断面形は緩やかなコ字形を呈する。

規模からも井戸と考えられるが、曲物や井戸枠は検出されなかった。

堆積状況 9層からなり、シルト～粗砂を主体とする土層が堆積する。

出土遺物 須恵器小片が出土した。

時期 須恵器が出土したが、細片のため、年代を決定しがたい。

E. 土坑

土坑S359 (図4-64・80)

位置 調査区の南東端中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は短軸1.4～2.2m・長軸約3.4mのやや不整形な楕円形、深さ約0.3mを呈する。

堆積状況 5層からなり、粘質土を主体とする土層が堆積する。

出土遺物 土師器皿(630)・高坏(631)、須恵器杯蓋(632～636)・杯(637～640)が出土した。

おおむね8世紀頃の所産。638の底部外面には墨書が認められる。「床」であろうか。

時期 出土遺物から8世紀頃のものとして推定される。

土坑S376 (図4-64・80、図版33)

位置 調査区の西方に位置する。

形状・規模 平面形は一辺約0.75mの方形、深さ約0.2mを呈する。掘方の内面上方は赤褐色を呈し、被熱によるものと推定される。

堆積状況 5層からなり、細砂を主体とする土層が堆積する。2層・4層には焼土ブロックがみられ、いずれの層にも炭化物が含まれていた。

出土遺物 土師器小片が出土した。

時期 年代を決定する遺物に乏しく、不明である。

F. 小穴

このほか、性格不明の複数の小穴を複数検出した。このうち図化し得た遺物の出土したものを示しておく。

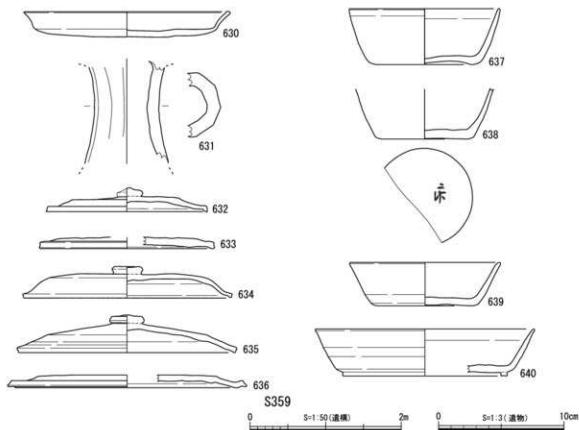
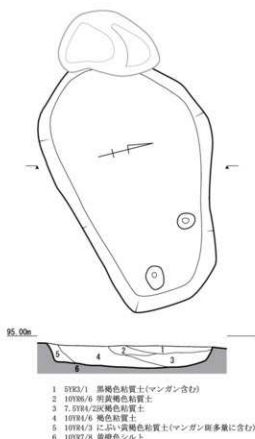
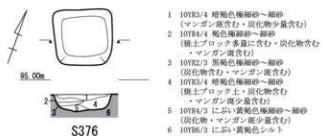
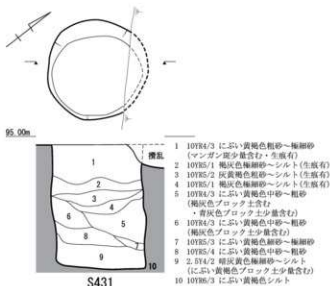


図4-80 A5区 井戸・土坑 詳細図・出土遺物

小穴S118 (図 4-64・81)

位置 調査区の中央付近北寄りに位置する。

形状・規模 平面形は短辺約0.6m・長辺約0.8mの隅丸方形、深さ約0.25mを呈する。

堆積状況 黒褐色土の単層である。

出土遺物 土師器椀 (641) が出土した。7世紀の所産。

時期 出土遺物から7世紀頃のものか。

小穴S122 (図 4-64・81)

位置 調査区の中央付近北東よりに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.3mの円形、深さ約0.25mを呈する。

堆積状況 褐灰色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯蓋 (642) が出土した。5世紀後半の所産。

時期 出土遺物から5世紀後半頃のものか。

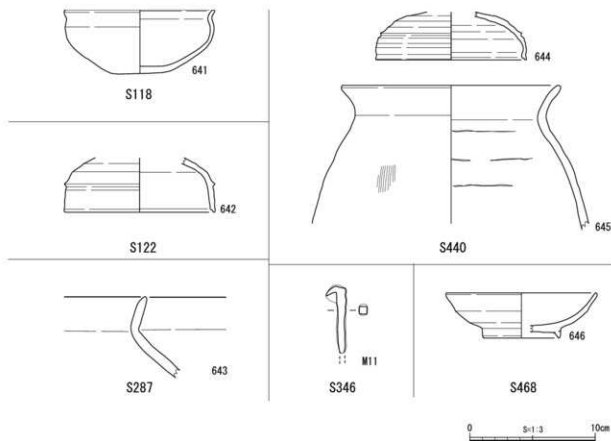


図 4-81 A5区 小穴 出土遺物

小穴S287 (図 4-64・81)

位置 調査区の中央付近北寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.9mのやや不整形な円形、深さ約0.3mを呈する。

堆積状況 黒褐色土の単層である。

出土遺物 須恵器壺(643)が出土した。7世紀頃の所産。

時期 出土遺物から7世紀頃のものか

小穴S346 (図 4-64・81)

位置 調査区の南東端中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.2mの円形、深さ約0.3mを呈する。

堆積状況 黒褐色土の単層である。

出土遺物 鉄釘(M11)が出土した。

時期 詳細な年代を決定する遺物に乏しい。

小穴S440 (図 4-64・81)

位置 調査区の南東端中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.6mの円形、深さ約0.3mを呈する。

堆積状況 灰褐色土の単層である。

出土遺物 須恵器杯蓋(644)、土師器甕(645)が出土した。5世紀後半頃の所産か。645は体部外面に縦方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行う。口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。体部内面には粘土紐のつなぎ目がよく残る。古墳時代中期～後期の所産か。

時期 出土遺物から古墳時代中期～後期頃のものか。

小穴S468 (図 4-64・81)

位置 調査区の中央付近北寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.2mの円形、深さ約0.1mを呈する。

堆積状況 灰白土の単層である。

出土遺物 灰軸陶器碗(646)が出土した。平安時代の所産。

時期 出土遺物から平安時代のものか。

(6) A6区 (図 4-82、図版33)

位置 A区のなかで中央部付近に位置する調査区である。南西側をA5区に隣接する。

基本層序・遺構面 層厚0.2～0.3mの耕土の下に、褐色～暗褐色を基調とする粘質土・砂礫層複数層堆積し、その下の明黄褐色土上面、標高94.00～94.20mが遺構面となる。

検出遺構 遺構は検出されなかった。

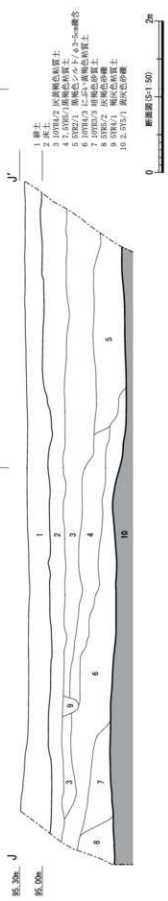
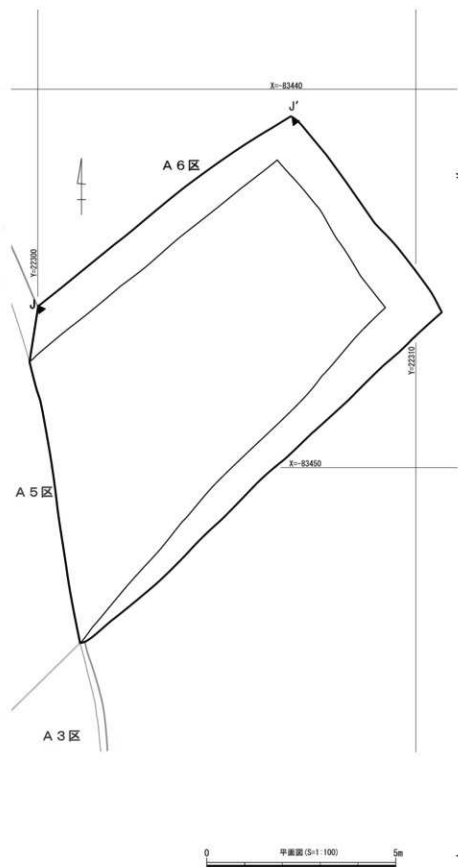


图 4-82 A6区 平面图·北西壁断面图

(7) A7区 (図4-83~90、図版34~41)

位置 A区のなかで中央部付近に位置する調査区である。A1区・A8区の南東側にあり、北東側をA3区・A5区に接する。

基本層序・遺構面 1mほどの造成土の下に、黄橙色または青灰色の粘土が0.3mほど堆積する。その下の明黄褐色粘質土上面、標高94.80~94.90mが遺構面となる。

検出遺構 掘立柱建物3棟のほか、溝・土坑・小穴を複数検出した。またこのほか、掘立柱建物SB5は隣接するA3区に広がっており、A3区の項で記述した。

A. 掘立柱建物

掘立柱建物SB11 (図4-83・85、図版37)

位置 調査区の北方に位置し、掘立柱建物SB12の北西に桁行方向をほぼ揃えて並ぶ。重複関係にある溝S378に後出する。

形状・規模 梁行2間(3.8m)×桁行3間(4.3m)で、主軸方位がN18°Wとなる南北棟建物である。柱間は梁行1.9m、桁行1.4mである。柱掘方は、平面形は0.5~0.75mの隅丸方形で、断面形は深さ0.2m前後の逆台形を呈する。柱痕は直径0.2m程度で、一部は掘方底部よりいくぶん下がった位置に認められる。

堆積状況 掘方の埋土は灰色シルトの単層が堆積する。柱痕の埋土は灰色シルトの混じる明黄褐色シルトである。

出土遺物 建物を構成する掘方から土師器・須恵器小片が出土した。

時期 年代を決定する遺物に乏しいが、重複関係にあり先行する溝S378が7世紀に埋没していること、A5区掘立柱建物SB7と主軸をそろえることから、7~8世紀と捉えておきたい。南東部に隣接するSB12もほぼ主軸をそろえることから同時期と推定されるが、近接することから、時間差のある可能性を持つ。

掘立柱建物SB12 (図4-83・86、図版35・36)

位置 調査区の北方に位置し、南東隅部はA3区に広がる。掘立柱建物SB11の南東に桁行方向にはほぼ同じ方向に並ぶ。

形状・規模 梁行2間(3.9m)×桁行3間(5.8m)で、主軸方位がN23°Wとなる南北棟建物である。柱間は梁行1.9m、桁行1.9mである。柱掘方は、平面形は0.55~0.9mの隅丸方形で、断面形は深さ0.2~0.65mの逆台形を呈する。柱痕は直径0.2m程度で、一部は掘方底部よりいくぶん下がった位置に認められる。

堆積状況 掘方の埋土は灰色シルトの単層が堆積する。柱痕の埋土は黄褐色シルトである。

出土遺物 土師器小片が出土した。

時期 年代を決定する遺物に乏しいが、重複関係にあり先行する溝S378が7世紀に埋没していること、A5区掘立柱建物SB7に近い主軸を持つことから、同様の7~8世紀と推定される。また、北西部に隣接するSB11と同様の主軸を持つことから同様の時期のものと推定されるが、近接した位置にあることから、時間差のある可能性を持つ。

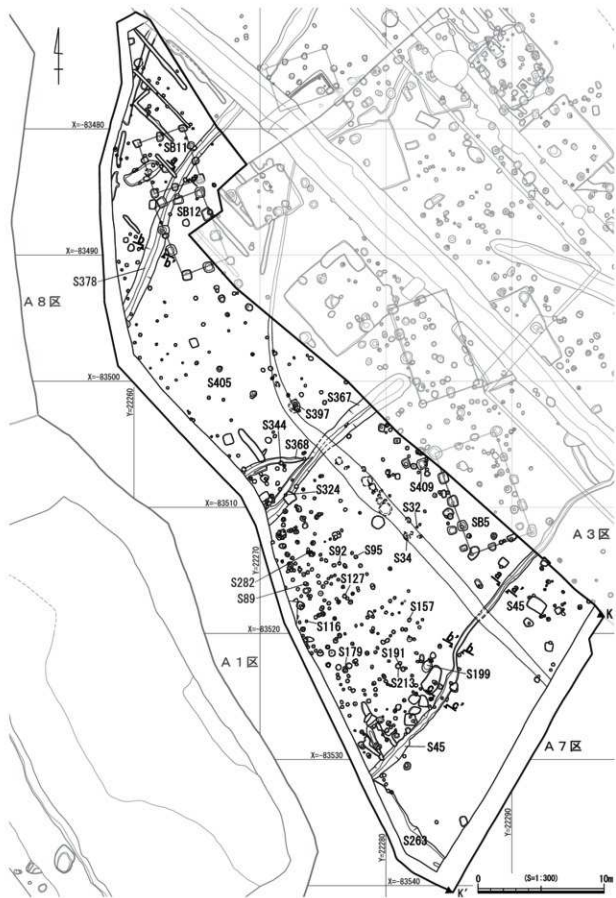


图 4-83 A7区平面图

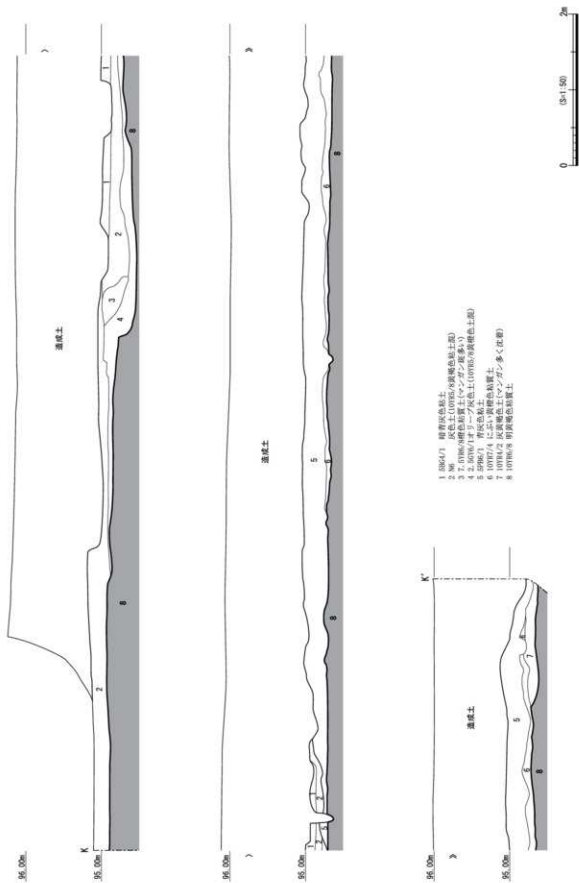


図4-84 A7区南東壁断面図

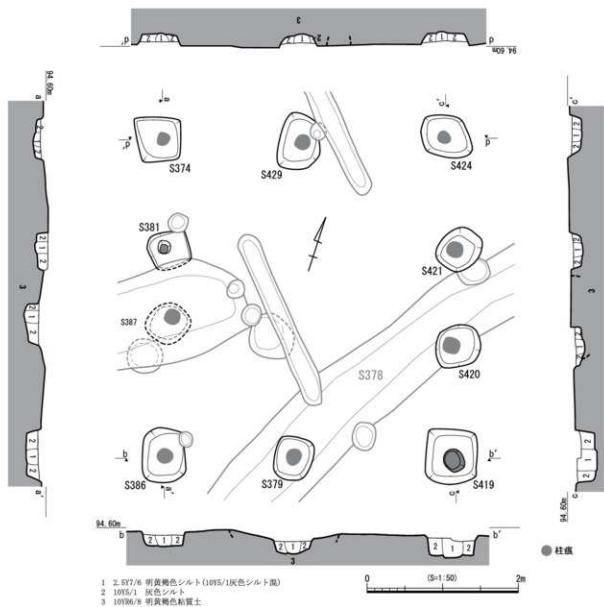


図4-85 A7区 掘立柱建物SB11 詳細図

B. 河道

河道S263 (図4-83・84)

位置 調査区の南隅に位置する。

形状・規模 A1区S9・A8区S9の延長東岸部が検出された。A1区・A8区・D区で西岸の続きが、A4区で西岸の一部が検出されており、これらから約24mの幅を持つことと推定される。河道の肩部で、深さは約0.15mである。

堆積状況 灰黄褐色土が堆積する。

出土遺物 土師器・須恵器小片が出土した。

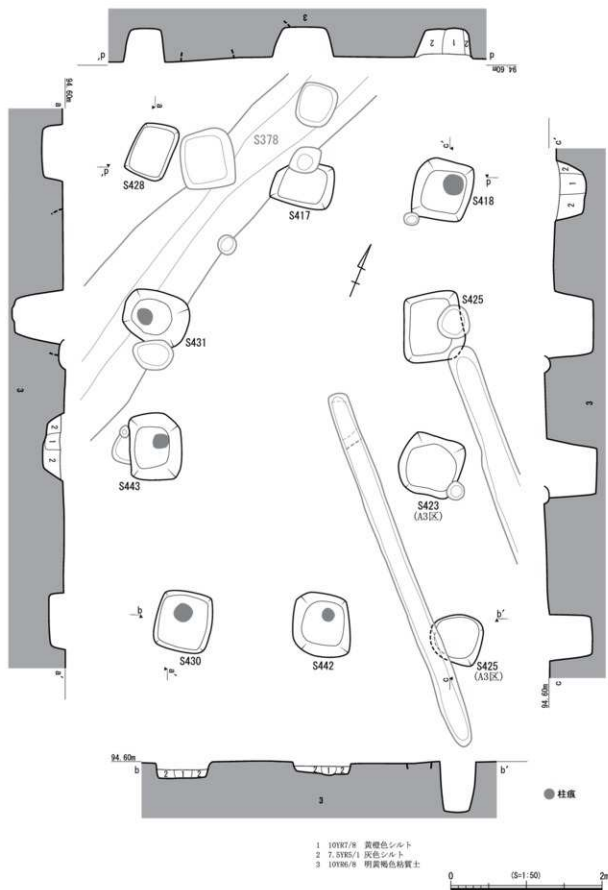


図4-86 A7区 掘立柱建物SB12 詳細図

時期 年代を決定する遺物に乏しいが、他地区で検出されたA1区S9・A8区S9など同じ河道の年代から、12世紀後半～13世紀頃に機能時期の一点を求めることができ、これ以降に埋没したと判断される。

C. 溝

溝S45 (図4-83・88、図版38)

位置 調査区の南東部に位置する。隣接するA3区に延び、溝S2に相当する。一部を近代以降の溝に削平される。

形状・規模 幅0.3～1.1m、深さ0.05～0.25mで、断面形はU字形～逆台形を呈する。直線的に延び、調査区の中ほどで緩やかに屈曲する。

堆積状況 3層からなり、粘質土を主体とする土層が堆積する。

出土遺物 須恵器杯(648)が出土した。8世紀頃の所産と思われる。

時期 出土遺物から8世紀頃以降に埋没したと判断される。

溝S378 (図4-83・87、図版37・38)

位置 調査区の北方に位置する。隣接するA5区に延び、溝S145に相当する。

形状・規模 幅0.9～1.2m、深さ0.8mで、断面形はU字形～緩やかな逆台形を呈する。やや蛇行するものの、比較的直線的に延びる。

堆積状況 3層からなり、細砂～極細砂を主体とする土層が堆積する。最下層は粘土が混じり、上位の層は礫を多く含む。

出土遺物 須恵器壺(647)が出土した。7世紀頃の所産。

時期 出土遺物および、連続する溝A5区S145の年代から、7世紀頃に埋没したと判断される。

溝S367 (図4-83・87・88、図版39・40)

位置 調査区の中央付近に位置し、隣接するA3区に延びる。溝S368の南東側に位置する。後出するS324と重複関係にある。

形状・規模 幅0.75～1.45m、深さ0.35～0.6mで、断面形はU字形～逆台形を呈する。わずかに湾曲するものの、直線的に延びる。主軸はN43°Eを指向する。

堆積状況 複数層からなり、粘土～シルトを主体とする土層が堆積する。

出土遺物 最下層4層から、山茶碗(649～651)、土師器皿(652～654)が出土した。12世紀後半頃～13世紀の所産。649・651には底部外面に墨書がみられる。649は記号、651は「は」または梵字と思われる。

時期 出土遺物および、重複して後出するS324から13世紀頃の土器が出土しており、12世紀後半～13世紀頃に機能時期の一点を見いだせる。

溝S368 (図4-83・87・88)

位置 調査区の中央付近に位置し、溝S367の北西側に所在する。

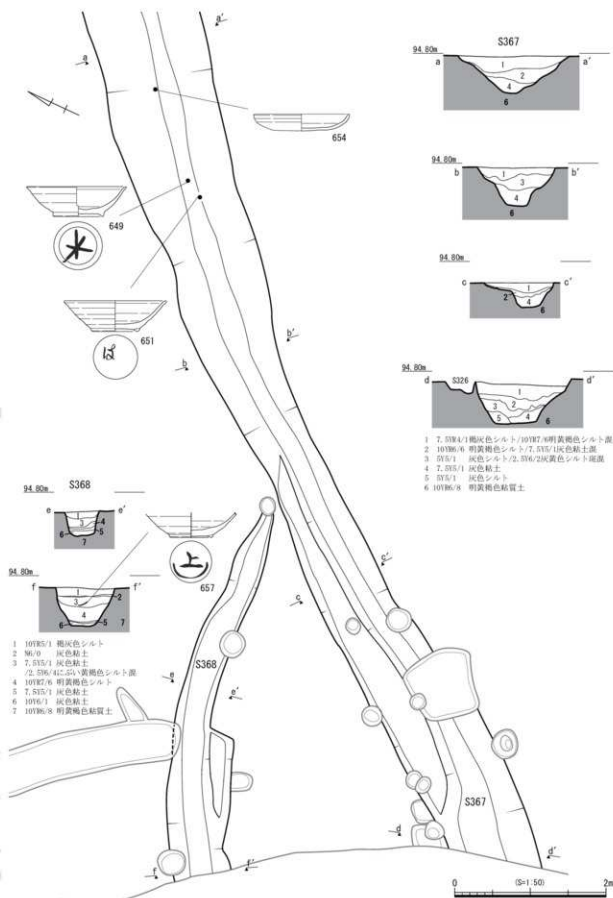
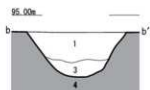
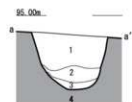
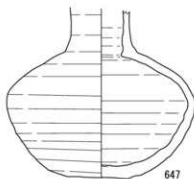


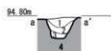
図4-87 A7区 溝S367・S368 詳細図



- 1 10YR6/6 明褐色/シルト混
(~3cmの石多く入る)
- 2 10YR6/6 明褐色(やや砂質
* ~2cmの石少量入る)
- 3 10YR/1 灰色(粘土混)
- 4 7.5YR5/6明褐色粘質土



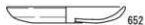
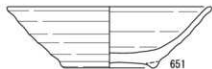
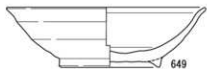
S378



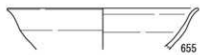
- 1 10YR3/1 濃褐色粘質土
- 2 5YR4/3 褐色粘質土
- 3 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- 4 7.5YR5/6 明褐色粘質土



S45



S367



S368



図 4-88 A7区 溝 詳細図・出土遺物

形状・規模 幅0.4～0.85m、深さ0.3～0.5mで、断面形は逆台形を呈する。ゆるやかに湾曲する。
堆積状況 複数層からなり、粘土～シルトを主体とする土壌が堆積する。
出土遺物 山茶碗（655～657）が含まれ、12世紀後半～13世紀の所産。657は3層から出土し、底部外面には「上」の下に円弧を描いた墨書が認められる。
時期 出土遺物から12世紀後半～13世紀頃以降には埋没したものと推定される。

素掘り溝

このほか、幅0.3～0.6m、深さ0.05～0.1m程の素掘り溝が複数条検出された。埋土は黄灰色土の単層である。これらは主軸がN42°Wである。1.2～1.5mの間隔ではほぼ平行に並ぶ素掘り溝で、耕作溝と考えられる。時期を判別できる遺物に乏しい。

D. 土坑

土坑S397（図4-83・89、図版41）

位置 調査区の中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.9mの円形で、深さ0.4mを呈する。これに沿って2箇所に、直径0.1m程の平面円形の小穴が付随する。杭跡か。また底部には直径0.4mの浅い円形の凹みがあり、この内部には直径約0.05mの小穴が複数みられた。底部の凹みの中の小穴は木根跡の可能性もあるが、中から土師器小片が出土した。

堆積状況 2層からなり、シルトを主体とする土壌が堆積する。

出土遺物 土師器甕（658）・高坏（659・660）が出土した。おおむね古墳時代前期の所産。

658は1層から出土した。体部外面に斜方向のハケ調整、体部内面に斜方向の板ナデまたはケズリ調整を行う。口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。659・660は2層から出土した。659は内外をナデ調整で仕上げる。660は外面に縦方向のハケ調整、内面にナデ調整を行う。

時期 出土遺物から古墳時代前期に位置付けられる。

土坑S409（図4-83・89）

位置 調査区の中央付近北東寄りに位置する。

形状・規模 平面形は一辺0.8m程の方形で、深さ約0.3mを呈する。

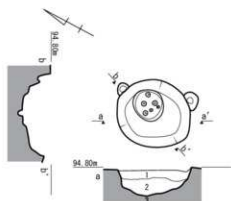
堆積状況 2層からなり、粘土およびシルト質土壌が堆積する。

出土遺物 土師器甕（661）が出土した。5～6世紀の所産。体部外面に斜方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行う。口縁部はナデ調整で仕上げる。外面には炭化物が付着する。

時期 出土遺物から5～6世紀頃以降には埋没したものと推定される。

E. 小穴

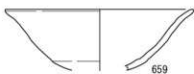
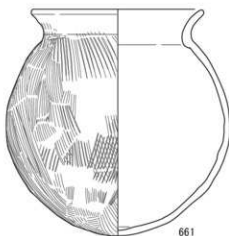
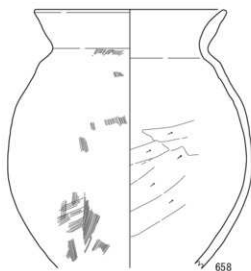
このほか、性格不明の小穴を複数検出した。このうち図化した遺物の出土したものを示しておく。



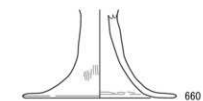
- 1 2.53X/2 黒褐色シルト
- 2 2.514/3 オリーブ褐色シルト
- 3 2.5385/6 明黄褐色粘質土



- 1 2.5384/1 黒灰色シルト
- 2 2.5386/8 褐色シルトブロック (a~4cm) 入る
- 2 2.5377/4 明黄褐色粘土
- 3 2.5385/6 明黄褐色粘質土



S409



S397

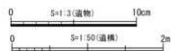


図4-89 A7区 土坑 詳細図・出土遺物

小穴S32 (図 4-83・90)

位置 調査区の中央付近北東寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.15mの円形で、深さ約0.2mを呈する

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 土師器皿(662)が出土した。13世紀頃の所産。

時期 出土遺物から13世紀頃と推定される。

小穴S34 (図 4-83・90)

位置 調査区の中央付近北東寄りに位置する。

形状・規模 平面形は短軸約0.3m、長軸約0.6mの楕円形で、深さ約0.2mを呈する。

堆積状況 黄灰色土の単層である。

出土遺物 土師器皿(664~667)が出土した。11~12世紀頃の所産。

時期 出土遺物から11~12世紀頃と推定される。

小穴S89 (図 4-83・90)

位置 調査区の中央付近南東寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.2mの円形で、深さ約0.5mを呈する。

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 土師器皿(663)が出土した。12~13世紀頃の所産。

時期 出土遺物から12~13世紀頃と推定される。

小穴S92 (図 4-83・90)

位置 調査区の中央付近南東寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.2mの円形で、深さ約0.35mを呈する。

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 土師器皿(668・669)が出土した。12~13世紀頃の所産。

時期 出土遺物から12~13世紀頃と推定される。

小穴S95 (図 4-83・90)

位置 調査区の中央付近南東寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.2mの円形で、深さ約0.25mを呈する。

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 土師器皿(670・671)が出土した。12~13世紀頃の所産。

時期 出土遺物から12~13世紀頃と推定される。

小穴S116 (図 4-83・90)

位置 調査区の中央付近南東寄りに位置する。

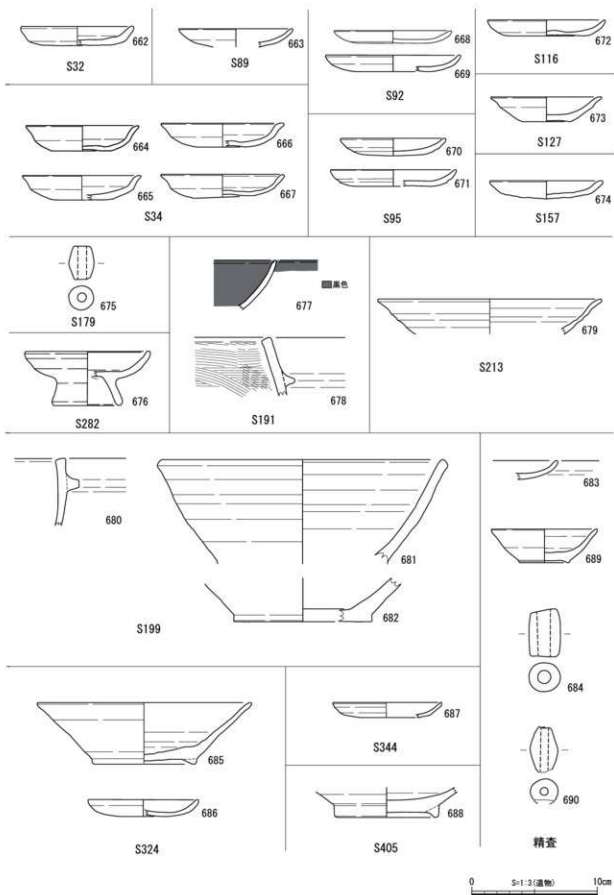


图 4-90 A7区 小穴·精査 出土遺物

形状・規模 平面形は直径約0.2mの円形で、深さ約0.15mを呈する。

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 土師器皿（672）が出土した。12～13世紀頃の所産。

時期 出土遺物から12～13世紀頃と推定される。

小穴S127（図 4-83・90）

位置 調査区の中央付近南東寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.2mの円形で、深さ約0.1mを呈する。

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 山茶碗（673）が出土した。12世紀後半頃の所産。

時期 出土遺物から12世紀後半頃と推定される。

小穴S157（図 4-83・90）

位置 調査区の中央付近南東寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.2mの円形で、深さ約0.25mを呈する。

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 土師器皿（674）が出土した。12～13世紀頃の所産。

時期 出土遺物から12～13世紀頃と推定される。

小穴S179（図 4-83・90）

位置 調査区の中央付近南東寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.3mの円形で、深さ約0.3mを呈する。

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 管状土錘（675）が出土した。675は平面形が紡錘形のもので、土師質焼成品である。

時期 時期を判断する遺物に乏しく、不明である。

小穴S191（図 4-83・90）

位置 調査区の中央付近南東寄りに位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.1mの円形で、深さ約0.4mを呈する。

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 近江型黒色土器碗（677）・土師器羽釜（678）が出土した。12～13世紀頃の所産。667は口縁部外面から内面にかけて黒化する。全体に著しく摩滅する。678は内面横または斜方向にハケ調整を行う。外面には炭化物が付着する。

時期 出土遺物から12～13世紀頃と推定される。

小穴S199（図 4-83・90）

位置 調査区の中央付近南東寄りに位置する。

形状・規模 平面形は短軸約0.6m、長軸約0.9mの楕円形で、深さ約0.35mを呈する。
堆積状況 灰白色土の単層である。
出土遺物 土師器羽釜（680）、瀬戸鉢（681・682）が出土した。13～14世紀前半頃の所産。
時期 出土遺物から13世紀頃と推定される。

小穴S213（図4-83・90）

位置 調査区の中央付近南東寄りに位置する。
形状・規模 平面形は直径約0.3mの円形で、深さ約0.45mを呈する。
堆積状況 灰白色土の単層である。
出土遺物 山茶碗（679）が出土した。13世紀頃の所産。
時期 出土遺物から13世紀と推定される。

小穴S282（図4-83・90）

位置 調査区の中央付近南東寄りに位置する。
形状・規模 平面形は直径約0.3mの円形で、深さ約0.2mを呈する。
堆積状況 灰白色土の単層である。
出土遺物 土師器台付皿（676）が出土した。13世紀頃の所産。
時期 出土遺物から13世紀頃と推定される。

小穴S324（図4-83・90）

位置 調査区の中央付近に位置し、溝S367の一部を削平する。
形状・規模 平面形は直径約0.15mの円形で、深さ約0.2mを呈する。
堆積状況 灰白色土の単層である。
出土遺物 山茶碗（685）、土師器皿（686）が出土した。12世紀末～13世紀頃の所産。
時期 出土遺物から12世紀末～13世紀頃と推定される。

小穴S344（図4-83・90）

位置 調査区の中央付近に位置し、溝S368の一部を削平する。
形状・規模 平面形は直径約0.15mの円形で、深さ約0.1mを呈する。
堆積状況 灰白色土の単層である。
出土遺物 土師器皿（687）が出土した。12～13世紀頃の所産。
時期 出土遺物から12～13世紀頃と推定される。

小穴S405（図4-83・90）

位置 調査区の中央付近北北西寄りに位置する。
形状・規模 平面形は直径約0.2mの円形で、深さ約0.2mを呈する。
堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 山茶碗 (688) が出土した。12世紀後半～13世紀頃の所産。

時期 出土遺物から12世紀後半～13世紀頃と推定される。

F. その他 (図 4-83・90)

このほか精査時の遺物として、土師器皿 (683)、山茶碗 (689)、管状土錘 (684・690) がある。683・689はおおむね12世紀末～13世紀の所産。684は平面形が方形、690は平面形が紡錘形で、ともに土師質焼成品である。

(8) A 8 区 (図 4-91～118、図版42～45)

位置 A区のなかで北東部に位置する調査区である。A 1 区の北側に接する。

基本層序・遺構面 0.6m前後の表土下の、黄褐色土上面、標高94.60m前後が遺構面となる。表土は調査区の中央付近では2m近くになる。

検出遺構 河道を検出した。

A. 河道

河道S9 (図 4-91～118、図版42～45)

位置等 調査区の大半を占める。

規模・形状 A 1 区S9の延長部が検出された。D区で西岸の続きが、A 4 区・A 7 区で東岸の一部が検出されており、これらから約24mの幅を持つと推定される。深さは約1.9m、底面の標高は91.40～91.50mであり、隣接するA 1 区の底面標高に比して低いことから、河道は南方から北方へ流れていたと推定される。河道の上部には、一部で近代以降の河道が確認された。

堆積状況 粘質土層・砂礫層の下層に厚い有機質層と砂礫層の互層がみられ、水流のある状態とやや滞留した状態が、しばしば繰り返されていたことが推定される。

出土遺物 おおまかな土質の傾向より上から、粘質度の高い「上層粘土層」・砂層を主体とする「中層砂層」・有機質層と砂礫層の互層である「下層有機質層」の3つの大別層に分け、さらに「下層有機質層」は厚く堆積しており、検出面から下に20cm程度ごとに取り上げた。

縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・朝鮮半島系土器・灰胎陶器・山茶碗・白磁・青磁といった土器のほか、瓦などの土製品、磨石・剥片・石斧・砥石・石鍋などの石製品、農具・漁具・工具・紡織具・容器・装身具・楽器・祭祀具・武器・細工物・用具・部材・端材などの木製品、鉄鎌・釘などの金属製品といった、縄文時代後期～鎌倉時代を中心とした多様なものが出土しており、また、上層から下層までの各大別層で幅広い時期の遺物が含まれていた。一部には墨書や、墨・漆・柿渋様の褐色物質・赤色顔料の付着がみられる。

以下に大別層ごとの出土遺物を記す。なお大別層のうち「下層有機質層」については、検出面より20cm下から40cm下までのものを「20～40cm」などと表記した。

【上層粘土層】(図 4-91・96)

白磁碗 (691) が含まれる。おおむね平安時代頃の所産か。

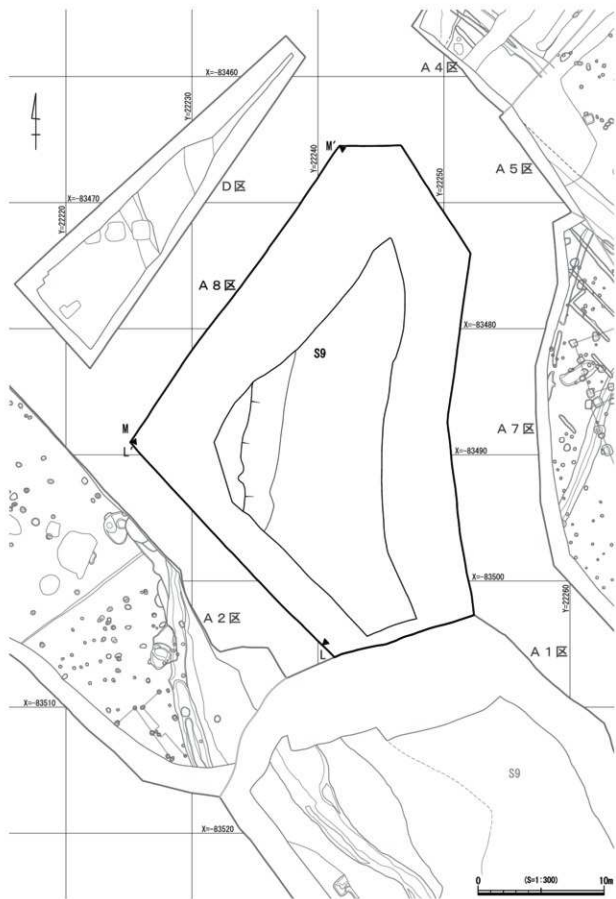
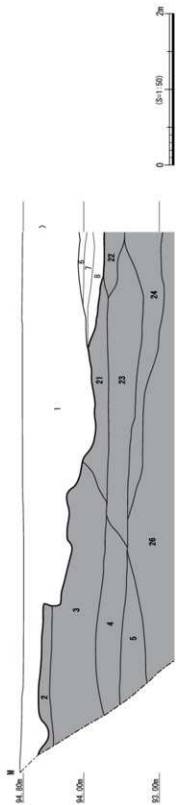


图 4-91 A8区平面图



图 4-92 A8 区 北西壁断面图(1)



- 1 砂岩(片) 厚成岩系(片) 砂岩(砂岩層) (~20m)
 2 砂岩(礫岩)の土壌はより厚く赤く赤り12~15mの厚さには及ぶ
 3 10765/6 黒褐色土 赤ベース (大平層を穿てる)
 4 10784/4 灰色シルト(やや粘質) 赤色の礫岩区にみられるベースの下層
 5 10785/2 赤褐色砂岩(~10m)
 6 10787/2 赤褐色砂岩(~10m)
 7 578/0 灰色粘土
 8 7. 578/1 灰色シルト
 9 10787/1 灰色シルト
 10 367/0 赤褐色土
 11 853/0 灰色シルト
 12 10787/1 灰色シルト(砂質, ~10mの石多く含む)
 13 335/1 赤褐色砂岩(~10m)
 14 367/1 赤褐色砂岩(~10m)の石含む
 15 3738/1 灰色シルト(砂質)
 16 2. 376/4 土壌(灰色砂岩(~2m))
 17 376/1の礫岩(やや粘質) 有礫質(大平の本有り)
 18 376/1の礫岩(やや粘質) 有礫質(大平の本有り)の互層(大平の本有り)
 19 7. 374/1 灰色シルト(~10mの石多く含む)
 20 7. 374/1 黒灰色シルト(~10mの石含む)
 21 585/1 赤褐色粘土
 22 585/1 赤褐色砂岩(互層) (~10m)
 23 585/1 赤褐色砂岩(~10m)
 24 5966/1 赤褐色シルト
 25 5866/1 赤褐色シルト
 26 5965/1 赤褐色砂(~1.50m)
 27 10787/1 赤褐色砂(~30m)

図 4-93 A8区 北西壁断面図(2)

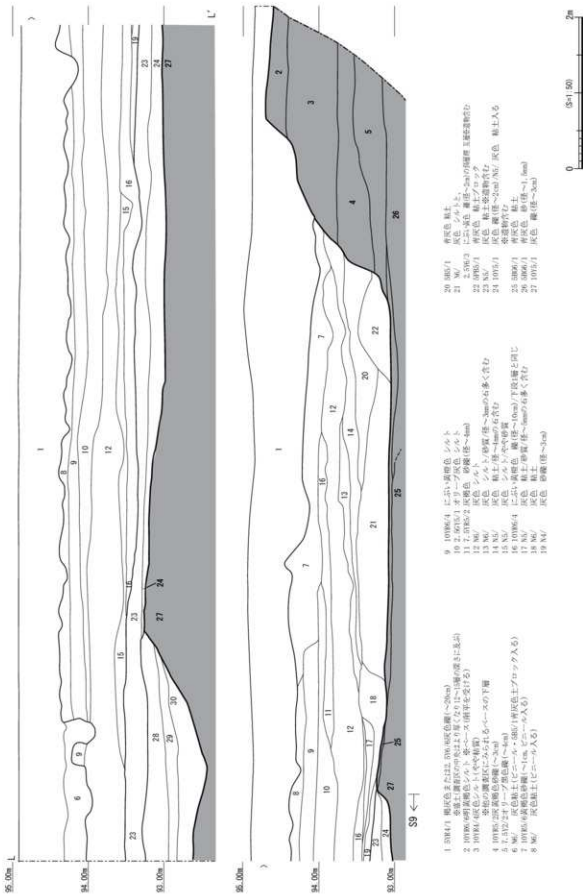


図 4-94 A 8 区 南西陸断断面図

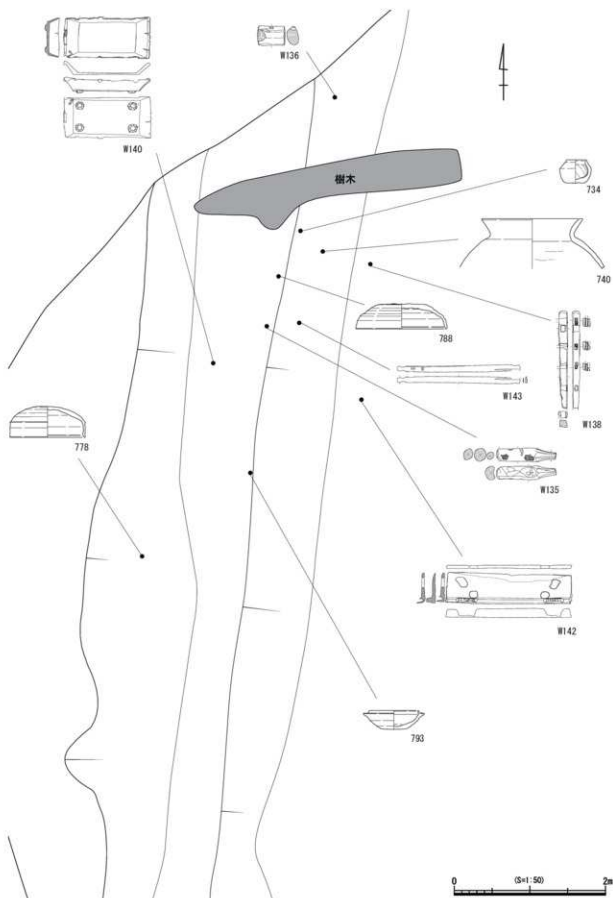


图 4-95 A 8 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 遺物出土狀況

【中層砂層】(図 4-91・96~101)

土器・石製品・金属製品・木製品が出土した。古墳時代中期～鎌倉時代のものがあり、幅広い時期のものを含む。

〔土器〕

古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器・青磁、中世の山茶碗があり、古墳時代～鎌倉時代の幅広い時期のものを含む。

692はミニチュア土器で、やや丸みを帯びた平底の鉢状を呈する。693は土師器高坏である。おおむね古墳時代前期頃の所産。

694～697は須恵器杯身、698は須恵器杯蓋である。694・695は5世紀末～6世紀初頭、696～698は6世紀後半～7世紀初頭の所産。699は須恵器甕である。699は口縁部外面に櫛描波状文を施す。5世紀後半頃の所産。

700は土師器甕、701は土師器甕である。古墳時代後期頃の所産。700は外面に斜方向のハケ調整の後、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。体部内面は斜方向のハケ調整、口縁部内面は横または斜方向のハケ調整を行う。701は外面に斜方向のケズリ調整、内面に横方向のハケ調整を行う。底部には円形～楕円形の孔を複数穿つ。孔数は残存部位から4箇所と推定される。702は土師器杯である。底部外面に縦または斜方向のケズリ調整、口縁部外面に横方向のミガキ調整で仕上げる。内面には放射状の暗文がみられる。7世紀前半の所産。703・704は土師器杯である。703は外面にナデ調整を行い、内面には放射状の暗文がみられる。704は内面から口縁部外面にナデ調整を行い、底部外面はケズリ調整で仕上げる。8世紀頃の所産。

705は須恵器杯である。7～8世紀頃の所産。706～711は須恵器杯蓋である。おおむね8世紀の所産。712は須恵器壺である。8～9世紀の所産。713～720は須恵器杯である。8世紀頃の所産。720は内面に黒色被膜が付着する。漆と思われる。

721・722は山茶碗である。12～13世紀の所産。721の底部外面と見込み、722の見込みには墨が付着する。転用碗と思われる。723は青磁碗または皿の底部である。

724は土師器羽釜である。内面に斜方向のハケ調整、外面にナデ調整を行う。12～13世紀の所産。

〔石製品〕

磨石・敲石(S33・S34)・砥石(S35)がある。

S33・S34は扁平な平坦面に磨面を持ち、側面に敲打痕がみられる。S33は一部に炭化物が付着する。S35は複数面を使用する。扁平な平坦面の一部には線状痕がみられる。

〔金属製品〕

鉄鏃(M12)・釘(M13)がある。

M12の鏃身部は断面は扁平な台形の片切刃造で、一部が欠損するがほぼ完形を保つ。頸部は長い台形で断面は扁平な方、また基部は短く断面はやや扁平な方形である。M13は断面方形で、一端を尖らせ、もう一端は片側に曲げて頂部を造り出す。

〔木製品〕

農具・紡織具・容器・装身具・楽器・祭祀具・串・武器・細工物・用具・部材・端材・用途不明品がある。

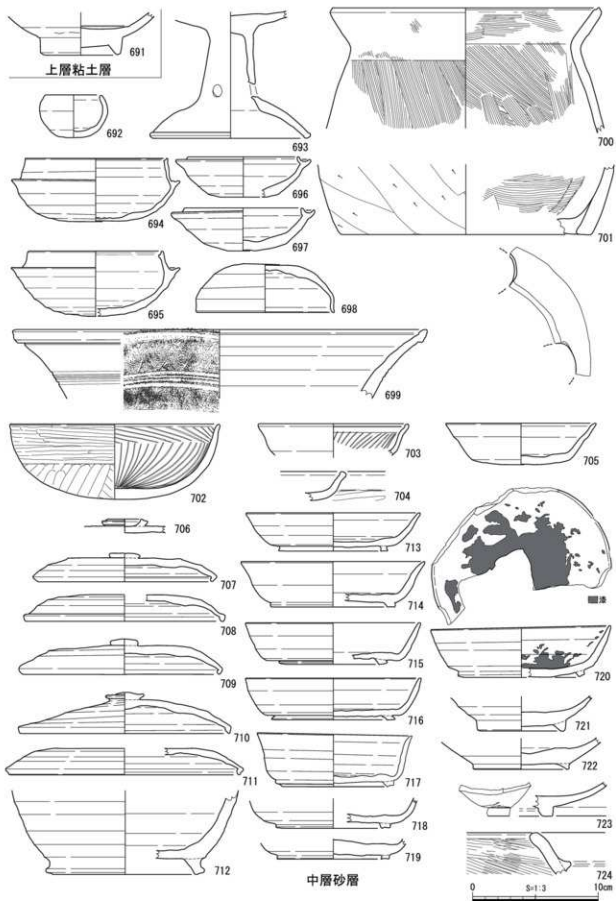


图 4-96 A 8 区 河道 S9 上層粘土層・中層砂層 出土遺物(1)

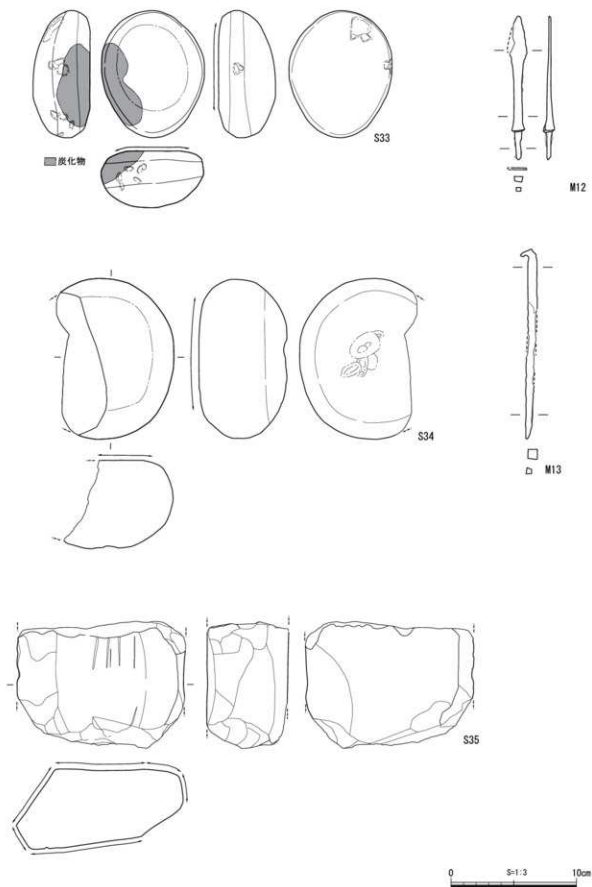


图 4-97 A 8 区 河道 S9 中層砂層 出土遺物 (2)

<農具>W81は横槌である。ヒイラギの芯持ち材で、完形である。上方を細くするように削っており、下端は平らに加工している。搦部側面も面取り状に加工しており、刃傷が見られる。右方の裏面は搦部下半側面が荒れており、使用痕と思われる。

W82・W83は堅杵である。W82は堅杵の搦部か。アカガシ亜属の芯持ち材で、下端には搦部から握部に至る加工が明瞭に残る。握部は欠損している。上方は細く尖り気味に加工されているが、破損後に杭に流用したものか。W83はアカガシ亜属の芯持ち材で、下端は丸く摩滅している。堅杵は、弥生時代前期～後期はアカガシ亜属のミカン割材で、弥生時代後期～古墳時代はツバキの芯持ち材で製作されるのが近畿地方では一般的だが、W82・W83はいずれもその中間的な様相を示す。また、両方とも小振りなので、片手で扱う小型の堅杵と思われる。

W84・W85は木錘である。W84の使用樹種はヒノキ属である。A1区出土の木錘同様に両端を切り落とした丸太を半裁、あるいは断面水滴状に加工して、中央端に方形の貫通穴をあけるタイプである。表面を刃物で削って整形した加工痕が明瞭に残る。W85は断面水滴状で、端部が炭化している。

W88は軸受け台である。使用樹種はカエデ属で、縦横ともに断面台形に加工した板材の中央に、方形の貫通穴をあける。貫通穴は上面から半分まではまっすぐあけられており、中ほどからは斜めに幅を広げていく。貫通穴は上面では、約4cm四方ほどである。

<紡織具>W86は杵である。アスナロ属の角材で、上下両端を欠損する。残存する下端から上端に向けて左右から細くするように加工している。下端には幅1cm程の方形の貫通穴があけられていたと思われる。上端には直径1cm程の貫通穴が、少なくとも2個あけられていたようである。東村分類におけるTⅢ類にあたる杵の腕木である（東村2011）。

W87は布巻具である。角材で、使用樹種はスギである。下方を欠損する。W143同様、上端には径2.5cmほどの円形部分を作り出している。布巻具か。

<容器>W89は木皿で、使用樹種はスギである。1/2弱が残存しており、外面には整形時に削った痕跡が残る。内面底部には多数の刃傷が残る。外面底部にも刃傷が見られる。

W90は割り物の槽である。方形の槽で、使用樹種はスギである。下方で、破損ではなく切断されている。残存している状態で長さ32cm以上、深さ6cm程度あり、本来はかなり大きなものだったと思われる。

W91～101は曲物底板である。使用樹種は、W91・W92・W94・W95はアスナロ属、W96はコウヤマキ、W99・W100はスギ、W93・W97・W98・W101は針葉樹である。W91は円盤状の板材の端部を一段薄く作り、そこに2個一対の穴をあけて桜の樹皮を通し、楔で締めて側板と結合していた痕跡が2箇所残っている。W92は中央付近が残存しているものと思われ、91同様に端部を一段薄く作り、そこに2個一対の穴をあけて桜の樹皮を通して側板と結合していた痕跡が両側に2箇所残っている。W94は完形品で、円周をおおよそ4等分する位置の側面に木釘を打って側板と固定している。4箇所のうち3箇所に木釘が残る。W95は全体の2/3程が残存しており、円周の側面に木釘を打って側板と固定している。確認できる4箇所のうち2箇所に木釘が残る。表面には刃傷が多数残る。W96は全体の1/2程が残存しており、これも円周の側面に木釘を打って側板と固定している。確認できる3箇所のうち1箇所に木釘が残る。3箇所のうち2箇所は近い位

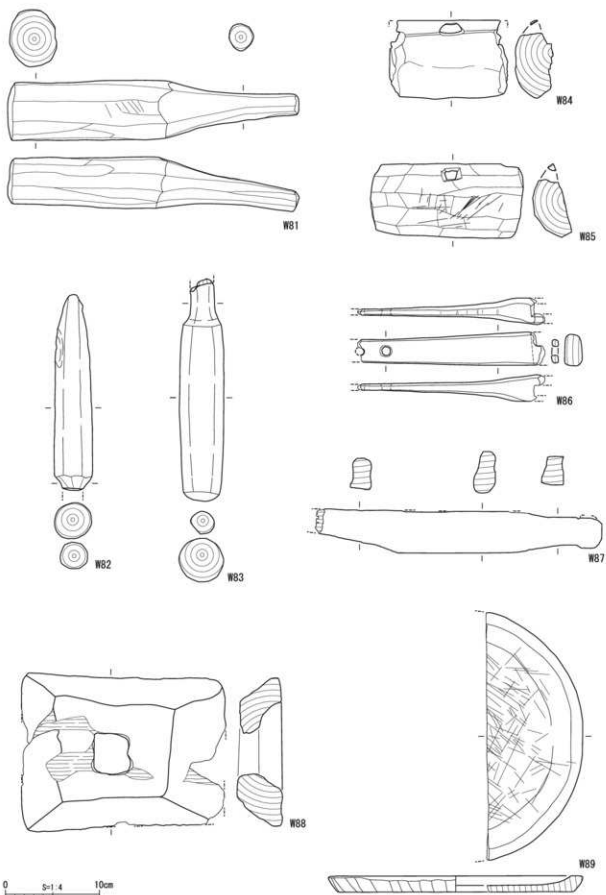


图 4-98 A8区 河道S9 中層砂層 出土遺物(3)

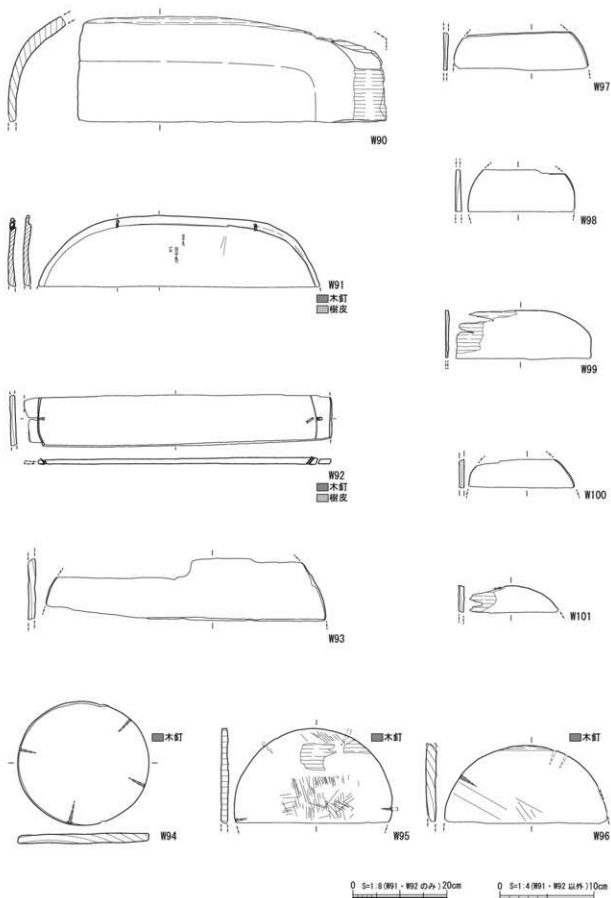


图 4-99 A B 区 河道S9 中層砂層 出土遺物(4)

置にあり、打ち直した跡かもしれない。表面には刃傷が残る。W93、97～101は側板との結合方法は不明である。W99は非常に薄い。

<装身具>W102は平面形が楕円形の連歯下駄である。使用樹種はヒノキ属で、前後とも歯は破損および摩滅して、ほとんどなくなっている。前壺は右へ寄っており、周辺には足の圧痕が残り、左足用と思われる。後壺は楕円形を呈しており、他の下駄と比較するとかなり大きい。破損によって広がっている部分もあるだろうが、観察した限りでは、もともと楕円形で大き目だったと思われる。W103は平面形が隅丸長方形の連歯下駄で、使用樹種はヒノキ属である。W102同様、前後とも歯は破損および摩滅して、ほとんどなくなっている。前壺は右へ寄っており、周辺には足の圧痕が残り、左足用と思われる。W104は平面形が楕円形の連歯下駄である。使用樹種はヒノキ属で、前後とも歯は破損および摩滅している。片方の後壺が残存している。前壺や足の圧痕などは観察できないため、どちらの足で用いるものかの判断はできない。

<楽器>W105は「ささら」か。使用樹種はスギで、上半部は幅約2.5cmで断面は不整三角形、下半部は幅1cm強の多角形の棒状を呈する。上半部右辺には1cm～1.5cmの感覚で浅い切り欠きが作られている。表面の中央部分、断面不整三角形の頂点部分は、1.8cmほどの幅で波状に加工されている。表面は平らである。このような形状の木製品については、これを割り裂いた竹でこすって音を出す「摺りささら」であるとする説、皮をなめす道具とする説、刀剣やノコギリを模した形代であるとする説などがあるが、ここでは切り欠きを持つ辺に摩滅が認められることから、一応楽器としての「摺りささら」としておく。弥生時代以降には出現していたとされているが、平城京跡などでも出土している。

<祭祀具>W106は弓形である。使用樹種はヒノキ属で、芯持ち材ではない材を全体に丁寧に削って棒状に加工している。両端が残存しており、それぞれ一段薄く加工している。両端の弦を掛ける部分や本体中央付近が断面が楕円状になる部分など、実物の形状を丁寧に表現している。

W107は船形である。使用樹種はスギで、上下端を三角形に尖らせる。側面形では船底から船先に向けて斜めに尖らせる。表側中央は深さ1cm程度に粗く窪ませる。窪みの加工が途中である印象があるので、未製品かもしれない。

W108は斎串か。使用樹種はヒノキ属で、下端を三角形に尖らせた板材である。上半は破損している。

<串>W109は串である。直径約2cmの棒材で、下端を尖らせる。上端は欠損している。これも芯持ちではない材を、あえて断面が丸くなるように加工し、側面を面取りするように削っているため、結果的に断面は不整多角形を呈する。使用樹種はスギである。

<武器>W110は丸木弓である。一端を欠損する。使用樹種はイヌガヤで、上端は端から2.5cm程度を一段薄く加工して、弦をかけられるようにしている。芯持ちの枝を用いており、余分な枝を丁寧に払っており、左右を削って薄くする加工を行っている。

<細工物>W111の使用樹種はアスナロ属で、ほぼ完形品である。厚さ2.6cmの三角形で、表裏両面に「人」字状の彫り込みを施す。表面には「人」字状彫り込みの上に毛引き線と思われる細い線が残っている。斜辺には加工痕が明瞭に残るが、下端側面は摩滅している。この部分で何かを擦るために用いる道具か。

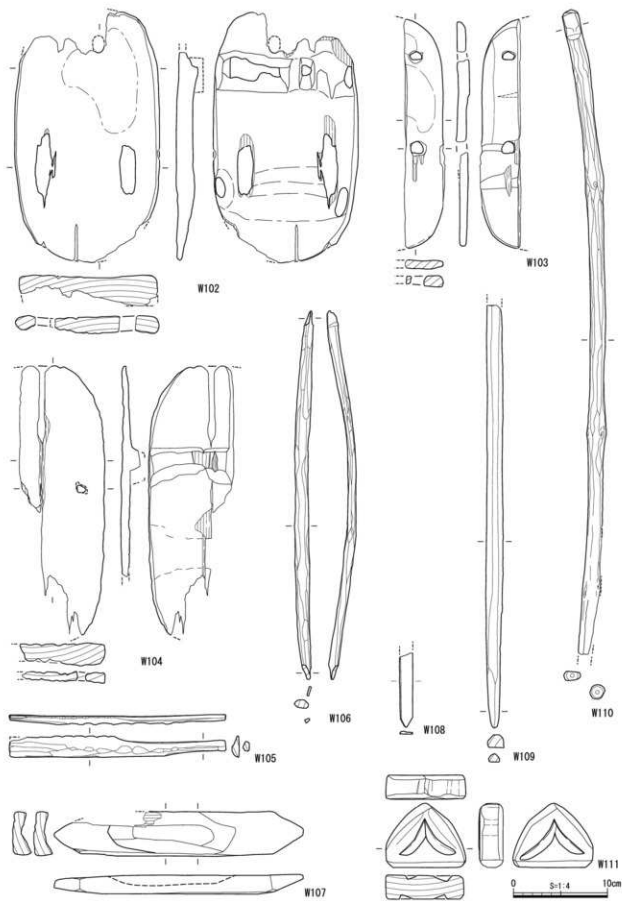


图 4-100 A8区 河道S9 中層砂層 出土遺物(5)

<用具>W112はヘラで、使用樹種はスギである。柄の上端は欠損しており、幅2cm程の細い柄から斜めに幅を広げ、身の部分は最大幅約8.5cmになる。身部は薄く、匙状に反る。先端の一部は欠損するが、この部分は片減りしていたように思われる。

<部材>W113はヒノキ属の棒材で、ほぼ完形品で欠損している部分はない。使用痕や摩滅なども認められない。W114はヒノキ属の棒材である。下方を欠損する。芯持ちではない材を棒状に加工しており断面は円形を呈するが、上端部分は削っていて、断面が不整五角形となる。側面は摩滅気味である。W115はアスナロ属の棒材で、ほぼ完形品である。上端は丸く削られており、下方は右辺を端から5cm程、端に向けて斜めに加工している。芯持ちではない材を削って棒状に加工している。

W116はスギの角材である。下端の一部を欠損するが、ほぼ完形品である。左辺は約16cmにわたり、上端に向けて細くなるように加工している。W117はヒノキ属の板材で、表面には手斧の跡が明瞭に残る。側面はほとんどが切断されており、特に下辺側面にはノコギリの跡が残る。また、表面の下から約2cmの位置には切断の目安となる毛引き線が引かれており、左辺にはその位置にノコギリを入れた痕跡の切り込みが入る。木製品製作の材料、あるいは製作過程の残材と思われる。W118はスギの角材である。ほぼ全面が破損ではなく切断されている。製品加工の際の残材と思われる。W119はクワ属の板材である。下方は欠損するが、その他のいずれの面も平らに切断されており、全体は表面が凹になるように反る。製品加工の際の残材と思われる。W120はヒノキ属の角材である。表面中央やや下には刃傷が見られる。裏面は上下両端を斜めに削って加工している。下方にはノコギリによる切り込みが入っている。

<端材>W121~124は針葉樹の角材で、いずれも1cm~2cm四方に削られており、上端が炭化している。松明に利用した燃えさしか。

<用途不明品>W125はヒノキ属の板材である。下方を欠損する。右側面には釘穴が残る。W126はスギの板材である。全体に大きな破損はない。断面はJ字状を呈している。W127はアスナロ属の板材である。下方および左右方向も欠損しておりもとの形状は不明である。表面に9本の線刻が見られる。右上がりの線が4本、左上がりの線が5本で、それぞれほぼ角度が一定である。W128はアカガシ亜属の角材である。端から5cm程の位置に切り込みが入れられている。耕作のための道具に選択的に用いられる材であるアカガシ亜属が用いられていることから、農具の柄などの可能性がある。W129はアスナロ属の棒材である。芯持ち材で、ほぼ完形品である。上端は左右から切り欠きを入れており、下端には「ほぞ」状の突起を作り出す。「ほぞ」状部分の3.5cmほど上には、表側から切り欠きを入れており、ここには紐状のものによる圧痕が残る。中央裏面にも浅い切り欠きがあり、こども摩滅しているが紐の圧痕などは認められない。W130はヒノキ属の板材である。ほぼ完形品で、上下端は丸く加工する。上端付近には直径0.5cmの貫通穴があげられており、穴付近はわずかに薄く加工されている。左右両側面には浅い切り欠きや傷がつけられている。W131はスギの板材で、右側を欠損する。上端は表裏から斜めに切り落としており、左辺は緩やかに弧を描く。下端には細い突起が作り出されている。W132はツバキ属の丸太材である。上下端を欠損する。芯持ち材で、上端に近い部分は斜上方に向かって削っており、断面が不整五角形を呈する。杭か。W133はヒノキ属の棒材である。下方を欠損する。芯持ちではない

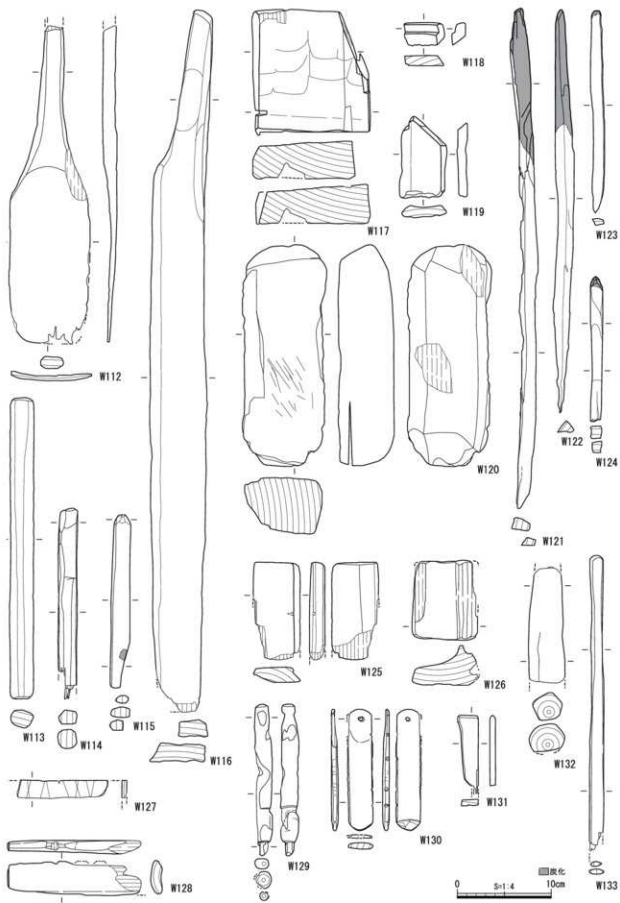


图 4-101 A8区 河道S9 中層砂層 出土遺物(6)

材を棒状に加工しており、断面は楕円形を呈する。上端は丸く加工する。

【下層有機質層 0～20cm】(図 4-91・102～110、図版43～45)

土器・土製品・石製品・木製品が出土した。縄文時代後期～鎌倉時代の幅広い時期ものを含む。また西岸の北部で、調査区壁面に近い部分では遺物が集中して確認された(図 4-95・図版43)。古墳時代前期～飛鳥時代まで時期幅のある遺物であり、近くに樹木が横倒しになり堰き止められたような状態で出土していることから、漂着した遺物が2次堆積したものと判断される。

〔土器〕

縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器、灰釉陶器・白磁、中世の土師器があり、縄文時代後期初頭～鎌倉時代の幅広い時期のものを含む。

725は縄文時代後期初頭の中津式の深鉢で、口縁部外面の沈線を境に上はナデ調整、下は縄文がみられる。内面はナデ調整を行う。726は縄文時代晩期後葉の突帯土器である。内外面にナデ調整を行い、口縁部に突帯を貼付ける。突帯上には刻みを施す。縄文時代晩期初頭～前葉の所産。

727は弥生土器壺で、内面に横または斜方向のナデ調整、外面に斜方向のハケ調整を行う。頸部外面には突帯を貼付け、刻みを施す。弥生時代前期の所産。728～731は弥生土器底部である。728は内面に横方向のハケ調整、外面にナデ調整を行う。口縁部には綾杉状の刻みを施す。729は外面を縦方向のミガキ調整で仕上げ、底部内面には炭化物が付着する。730は外面にナデ調整、内面に斜方向のハケ調整を行う。731は摩滅により調整不明瞭である。

732は受け口状口縁甕である。体部外面にナデ調整、体部内面に横方向のハケ調整を行い、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。古墳時代初頭の所産。733は口縁部に擬凹線を施す北陸系の有段口縁甕である。体部外面にナデ調整、体部内面に横方向のケズリ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整で仕上げ、頸部内面には横方向のハケ目がみられる。古墳時代初頭のものである。

734はミニチュア土器壺、735～738は土師器小型壺、739は土師器小型鉢である。おおむね古墳時代前期の所産。734・735は内外面をナデ調整で仕上げる。735は内面に粘土紐のつなぎ目がみられる。736は外面に斜方向のハケ調整、内面にナデ調整を行う。内面には粘土紐のつなぎ目がみられる。737は内面に黒褐色の被膜が付着する。漆と思われる。738は体部外面に斜方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行う。口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。739は体部外面にナデ調整、体部内面に板ナデ、口縁部に横方向のナデ調整を行う。内外面に炭化物が付着する。740・743は土師器直口壺である。古墳時代前期の所産。740は体部内外面にナデ調整、口縁部に横方向のナデ調整を行う。体部内面には粘土紐のつなぎ目がみられる。743は体部外面に斜方向のハケ調整、体部内面に斜方向のケズリ調整を行う。体部内面上半には粘土紐のつなぎ目がみられる。741・742は土師器くの字状口縁甕である。741は体部外面に横または斜方向のハケ調整を行い、口縁部外面は横方向のナデ調整で仕上げる。体部内面にはナデ調整、口縁部内面には横または斜方向のハケ調整を行う。体部内面に粘土紐のつなぎ目が顕著である。742は外面に斜方向のハケ調整、内面に横方向のハケ調整を行う。

744～751は土師器高坏である。おおむね古墳時代前期～中期の所産。744は杯部底面に縦または斜方向のハケ調整を行い、杯部をナデ調整で仕上げる。脚部外面には縦方向のケズリ調整を行

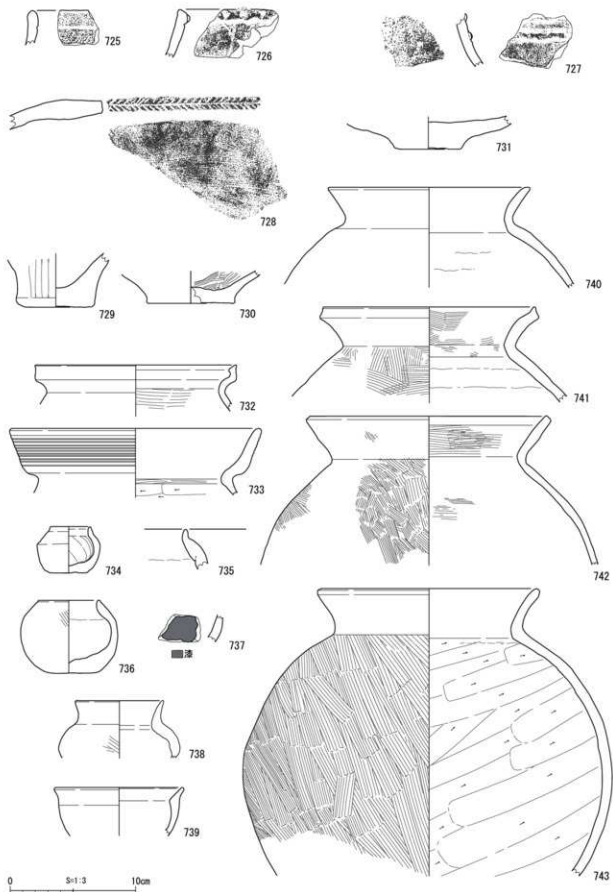


图 4-102 A8区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(1)

う。745は内外面をナデ調整で仕上げる。746は内面を横方向のハケ調整、外面をナデ調整で仕上げる。747は内面に横または斜方向のハケ調整、外面にナデ調整を行う。748は内外面をナデ調整で仕上げる。749～751は内外面にナデ調整を行う。751は脚部内面に粘土紐のつなぎ目がみられる。752は土師器脚部である。外面を縦方向のケズリ調整、内面をナデ調整で仕上げる。

753・754は朝鮮半島系土器である。軟質の甕で、体部外面に格子状のタタキ、内面にナデ調整を行う。5世紀頃のものである。753は外面に、754は口縁端部内面から体部外面にかけて、炭化物が付着する。

755・756は土師器小型甕である。6～7世紀頃の所産。755は体部外面上半を斜方向のハケ調整、下半を斜方向のケズリ調整で仕上げる。体部内面にはナデ調整、口縁部には横方向のナデ調整を行う。756は体部外面に縦または斜方向のハケ調整を行う。また体部内面は横または斜方向のハケ調整の後、下半から底部にかけてナデ調整を行う。口縁部は横方向のナデ調整で仕上げるが、外面には部分的にハケ目が残る。体部内面から口縁部内面にかけて粘土紐のつなぎ目が顕著である。757は小型で器壁の厚い小型甕である。飛鳥時代～奈良時代頃の所産か。体部外面に縦または斜方向のハケ調整、内面に横または斜方向のハケ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。口縁部内面にはハケ目が部分的に残る。体部内面には粘土紐のつなぎ目がみられる。また内外面に炭化物が付着しており、特に口縁部外面には顕著にみられる。

758～768は外反する口縁の土師器甕である。6～8世紀頃の所産。758・759・761・766は体部内外面にナデ調整、口縁部に横方向のナデ調整を行う。760は体部外面に斜方向のハケ調整、体部外面にナデ調整を行い、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。762は外面に斜方向のハケ調整、内面に横または斜方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行う。763・767は体部外面に斜方向のハケ調整、口縁部外面を横方向のナデ調整で仕上げる。また口縁部内面に横方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行う。764は体部外面に斜方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行い、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。765は外面に斜方向のハケ調整を行った後、口縁部外面を横方向のナデ調整で仕上げる。口縁部内面に横方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行う。768は外面に炭化物が付着する。768・770は土師器長胴甕である。7～8世紀の所産。769は体部外面に縦または斜方向のハケ調整を行い、下半に縦または斜方向のケズリ調整で仕上げる。口縁部外面は横方向のナデ調整を行う。体部内面には横または斜方向のハケ調整、口縁部内面に横方向のハケ調整を行う。770は体部外面に斜方向のハケ調整を行い、口縁部外面を横方向のナデ調整で仕上げる。内面は横または斜方向のハケ調整を行う。頸部外面から体部外面にかけて炭化物が付着する。

771は須恵器把手部である。外面に平行タタキ痕、内面に同心円状の当て具痕がみられる。772・773は土師器把手部である。772は内外面にナデ調整を行い、外面に把手を貼り付ける。773は外面に縦または斜方向のハケ調整を行い、把手を貼り付ける。内面には横または斜方向のハケ調整を行い、把手部より下方は斜方向のケズリ調整を行う。

774は須恵器有蓋高坏蓋である。775～777は須恵器短脚高坏の脚部で、4方向に長方形の透かしを設ける。776・777は脚部外面にカキ目がみられる。774～777はおおむね5世紀後半の所産。

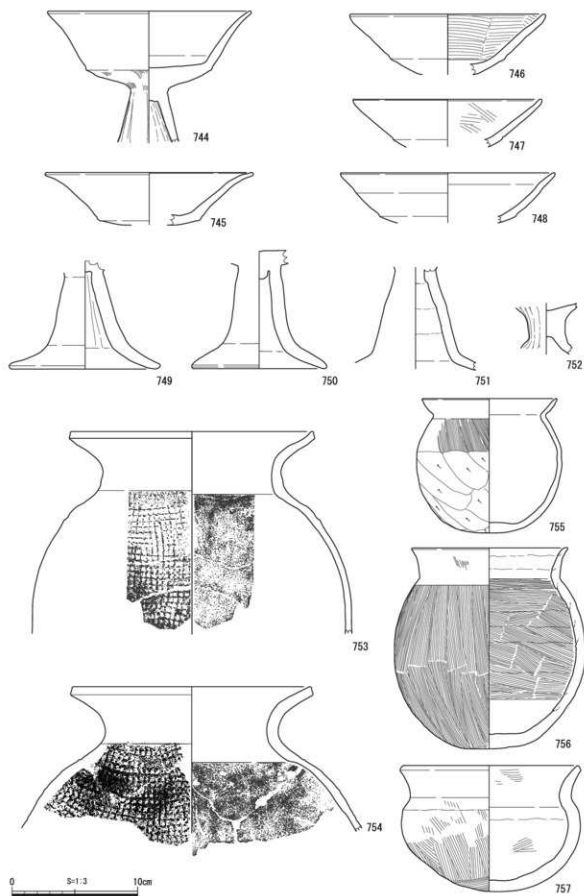


图 4-103 A B 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(2)

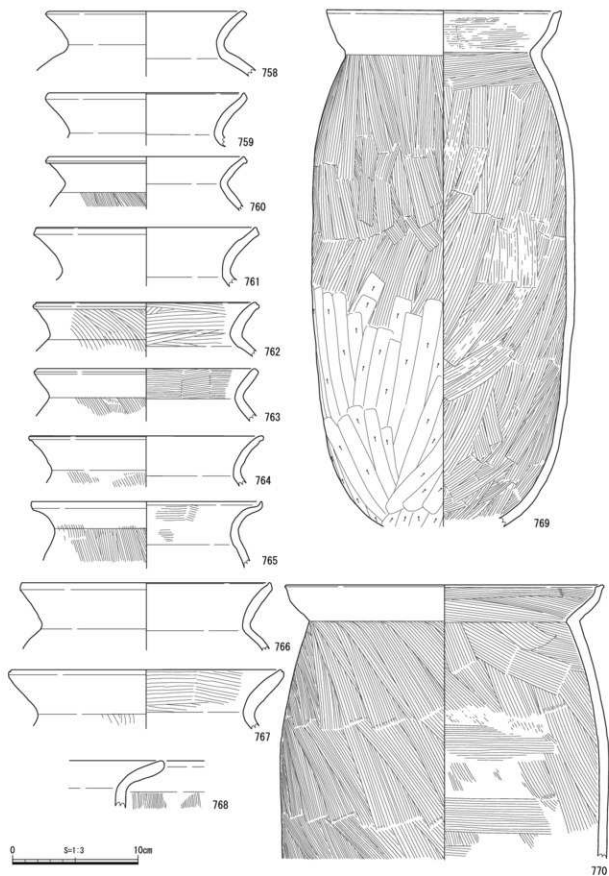


图 4-104 A 8 区 河道 S9 下層有機質層 0~20cm 出土遺物(3)

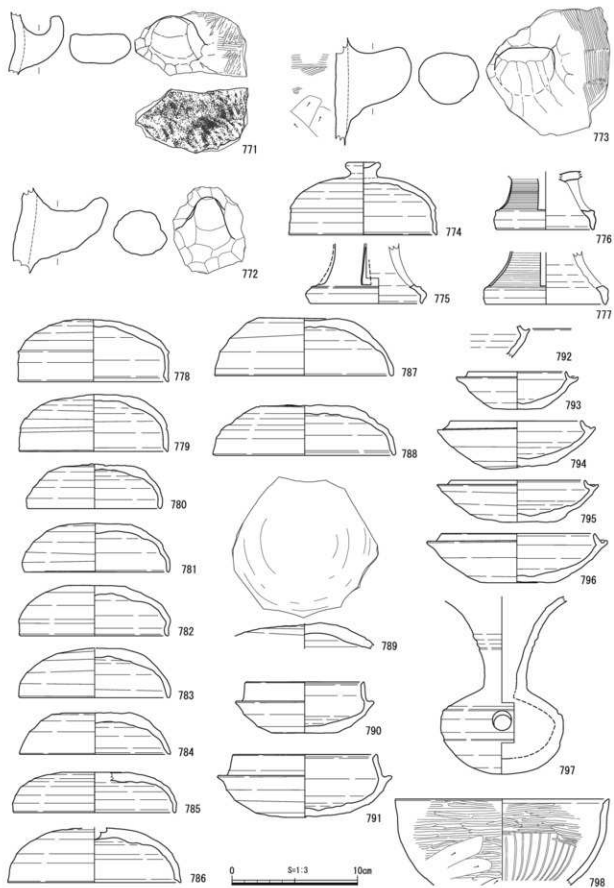


圖 4-105 A B 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(4)

778～789は須恵器杯蓋である。778は5世紀後半、779は6世紀前半の所産。779～789は6世紀の所産。789は周囲を打ち欠く。790～796は須恵器杯身である。790は5世紀後半、791は6世紀前半、792～796は6世紀後半～7世紀初頭の所産。796は内外面に炭化物が付着しており、特に底部外面に顕著にみられる。797は須恵器甕で、6世紀後半の所産。

798は土師器杯である。内外面に横方向のミガキ調整を行い、外面下半を斜方向の幅広のケズリ調整で仕上げる。内面には放射状の暗文がみられる。7世紀前半の所産。

799～808は須恵器杯蓋である。8世紀頃の所産。803は天井部にツマミの痕跡がみられる。810・811は須恵器短頸壺である。6世紀頃の所産。812は須恵器小型壺である。8世紀後半～9世紀頃の所産。809・813～821は須恵器杯である。813～816は7～8世紀、817は7世紀、818～821はおおむね8世紀の所産。809は底部内面に黒漆が付着する。813は底部外面に墨書がみられる。816は内外面に柿渋様の褐色物質が付着する。817は外面に墨書が認められる。「□□内」か。

822～827は須恵器甕である。822は体部外面にタキ痕、体部内面に当て具痕がみられる。口縁部外面には沈線を含んで3帯の櫛描波状文を施す。5世紀後半～6世紀前半の所産。824は体部外面にタキ痕がみられる。内面はナデ調整か。827は8世紀頃の所産。体部外面にカキ目がみられる。

828は青磁片、829は白磁碗である。831～833は灰釉陶器碗である。833は10世紀前半、831・832は11世紀前半の所産。834～836は山茶碗、837は山茶碗鉢、838～840は山茶碗小碗である。おおむね12～13世紀の所産。834の底部内面には墨が付着する。転用硯と思われる。

841・842は土師器小皿、である。11世紀後半から12世紀前半の所産。844・845は土師器小皿である。おおむね13世紀頃の所産。843は底部糸切土師器皿である。11世紀頃の所産。

[土製品]

平瓦(846)がある。凹面に布目痕、凸面に縄目痕がみられる。古代のものである。

[石製品]

剥片(S36)・磨製石鍋(S37)がある。S36はサヌカイト製で、一部に礫面が残る。S37は外面に縦方向の、内面に斜方向の工具痕が認められる。外面には炭化物が付着する。温石として使用したものと考えられる。

[木製品]

農具・容器・紡織具・装身具・串・部材・用途不明品がある。

<農具>W134は曲柄鍬の柄である。使用樹種はヒノキ属の芯持ち材で、鍬身を取り付ける台部分には、はめ込むための突起が四角く削り出されている。A1区出土の曲柄鍬の未製品W76で、着柄のための方形の穴があげられている可能性が認められたが、このW134に見られる方形の突起は、それと対応するものと思われる。握りの方は破損しており、全体の長さは不明である。また、鍬・鋤などの耕作に用いる道具では強度の問題でアカガシ亜属を用いるのが一般的だが、これはヒノキ属を採用している。祭祀に用いた模造品の可能性もあるが、大きさは実用品と変わらない。軽量化を図ったのであろうか。

W135は横槌である。アカガシ亜属の芯持ち材で、上方を細くするように削っている。下端は丸く加工している。搦部側面には樹皮が残存しており、搦部や下端の加工痕は明瞭に残る。側面

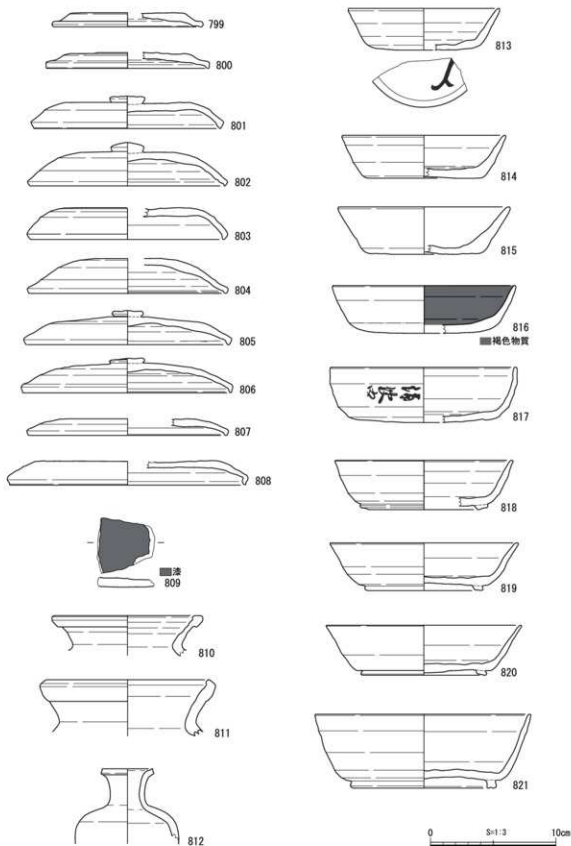


図 4-106 A8区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(5)

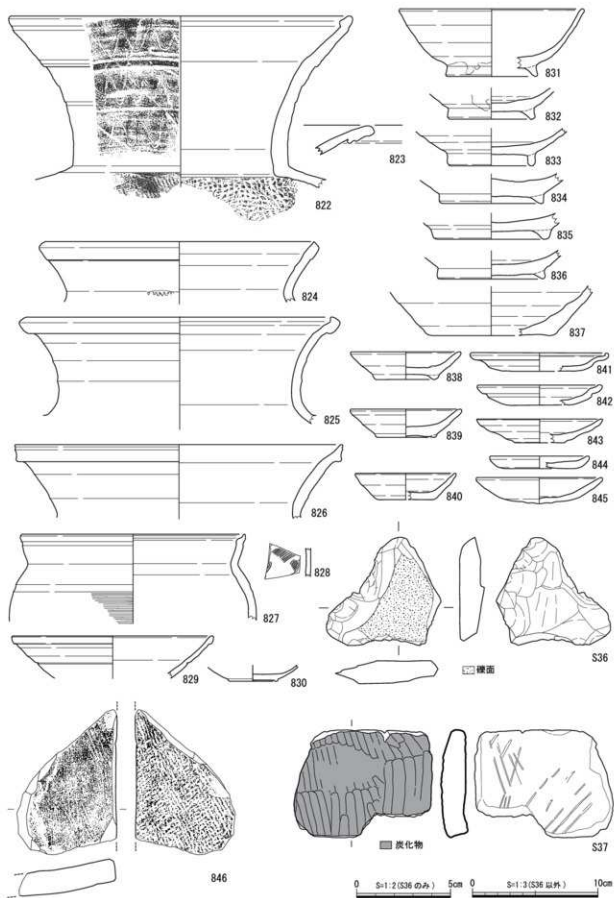


図 4-107 A 8 区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(6)

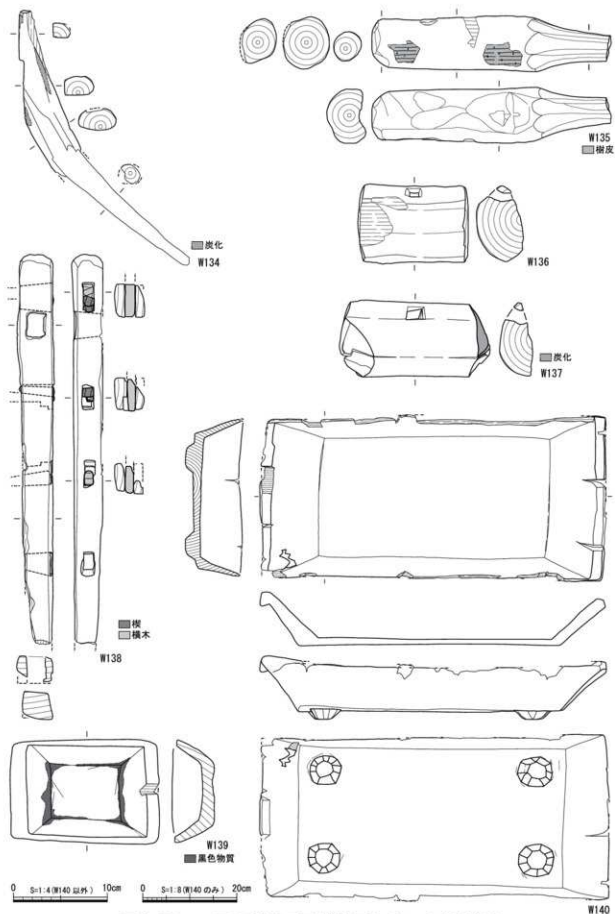


図 4-108 A8区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(7)

中央には使用に伴う窪みがある。

W136・W137は木鐻である。W136の使用樹種はアスナロ属、W137の使用樹種はヒノキ属である。両端を切り落とした丸太を半裁、あるいは断面水滴状に加工して、中央端に方形の貫通穴をあけるタイプである。W137は丸太材を半裁しており、これも端部が炭化している。

W138は枠型田下駄の縦枠と思われる角材である。使用樹種はアスナロ属で、左図の面に、上端から約6cmの位置に3cm×2cmの方形の貫通穴が、右図の面にはその貫通穴に直交する方向に幅1cmの長方形の貫通穴が4箇所あけられている。後者の4個の穴は長さにはばらつきがあるが、右図で示している面では2.5cm～3cm、裏面では1.5cm～2.5cmとなっており、表面から裏面に向かって狹まる。また、この4個の穴のうち3個には横枠材が残存しており、楔となる材を打ち込んで固定している様子がわかる。これらの穴と左図の穴との位置関係からすると馬鐻の可能性もあるが、馬鐻としては華奢すぎるので、ここでは枠型田下駄としておく。

<容器>W139は方形の槽である。割れているが、ほぼ完形品で、使用樹種はヒノキ属である。脚などはなく、素朴な作りである。W140は方形で脚付きの槽である。使用樹種はケヤキである。裏面四隅に、多角形で高さ2cm弱の逆台形の脚が付く。

<馬具>W141は壺鐻である。使用樹種はヒノキ属である。足を入れる踏込部側の側面および踏込部下半を欠損する。上端から約4cmの位置に、鞍から力革で吊るための方形の穴（鐻頭:あぶみかしら）があけられている。背面部には加工痕が多数、明瞭に残る。踏込部内面には、鑿などの金属製の刃物で加工した痕跡が見られる。内外面および鐻頭には摩滅はほぼ認められないので、製作途中で破損したものかもしれない。木製壺鐻は、県内では東近江市の斗西遺跡、蛭子田遺跡について5遺跡目の出土となる（能登川町1994、県教委・公財協会2014）。蛭子田遺跡のものは5世紀後半～6世紀前半、斗西遺跡のものは6世紀～8世紀のものとされている。このW141については、全体の形状がわかる蛭子田遺跡出土のものと比較するとかなり細長い印象を受ける。S9から出土する土器にはかなり時期幅があるが、W141が出土した下層の有機質層から出土している遺物から判断すると、斗西遺跡と同じ頃の6世紀～8世紀のものと思われる。

<部材>W142は建築部材で、使用樹種はヒノキ属である。左辺がL字状に立ち上がり、上下両端から5cm～7cmの位置に、上辺約17cm、下辺約12cmの逆台形の削り込みを入れる。削り込み内部にはノミによる加工痕が残る。その削り込みそれぞれに隣接して5cm×7cm程の隅丸方形の貫通穴をあけ、さらにそこから上下に斜めにずれた位置に、平行四辺形の貫通穴をあけている。平行四辺形の貫通穴右辺の隅は、上下方向に向けて摩滅が見られる。本体右辺は、中央付近がスロープ状に薄くなっている。建築部材であり、これら貫通穴は開き戸の軸受け、L字状に立ち上がる部分は「蹴放し」部分か。

<紡織具>W143は布巻具である。板材で、使用樹種はアスナロ属であり、下端の一部を欠損するがほぼ全体の形状がわかる。上下両端に径2cmほどの円形部分を作り出している。の右辺が凸になるようにごくわずかに反っており、断面は右辺が尖るように削られている。全体に薄く、木目に沿って剥離していると思われる。布巻具か。

<容器>W144・W145は曲物底板で、使用樹種はヒノキ属である。W144は円周の側面に木釘を打って側板と固定している。確認できる2箇所のいずれにも木釘が残る。表面には刃傷が残る。

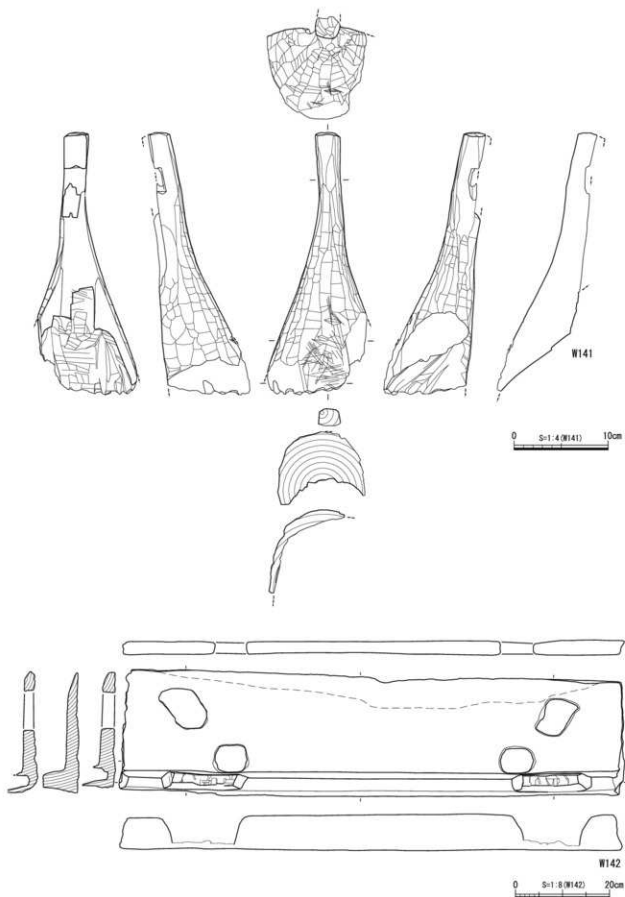


图 4-109 A B 区 河道 S9 下層有機質層 0~20cm 出土遺物(8)

W145は全体の1/2弱が残存しており、円周の側面に木釘を打って側板と固定している。確認できる1箇所には木釘が残る。

W146は剣物である。円板状の板材で、使用樹種はヒノキ属で、端部は削って面取りしている。表面は緩やかに凸状に膨らみ、裏面は平らである。表面中央付近には刃傷が見られる。曲物などの蓋か。

<装身具>W147は平面形が隅丸長方形の連歯下駄で、使用樹種はアスナロ属である。前壺および後壺の一方が残存している。前壺は左に寄っており、周辺には足指の圧痕が明瞭に残る。足の圧痕から、右足用と思われる。歯は厚くしっかりしているが、台部分は厚さ1cm弱で、比較的薄い印象である。

<串>W148はヒノキ属である。直径約2cmの棒材で、下端を尖らせる。ほぼ完形品で、上端には特に加工は見られない。芯持ちではない材を、あえて断面が丸くなるように加工している。

<部材>W149はアスナロ亜属の角材で、下端を欠損する。全体にごく緩く反っており、上端は尖るように、断面は上半2/3程度が楕円形になるように加工している。W150は針葉樹の板材である。下方を欠損する。断面はJ字状を呈しており、木目で剥離していると思われる。W151はスギの棒材で、下方を欠損する。上方は約8cmにわたり上端に向けて薄くなるように両面から削っており、先端中央を幅約1cm、深さ約2cmの方形に切り欠く。芯持ちではない材を丁寧に削って棒状に加工している。

<端材>W152はアスナロ属の角材、W153はマツ属の角材、W154・W155はヒノキ属の角材、W156はアスナロ属の角材で、いずれも1cm～2cm四方に削られており、上端が炭化している。松明に利用した燃えさしか。

【下層有機質層20～40cm】(図4-91・111)

土器・石製品・木製品が出土した。縄文時代晩期末～古墳時代後期までの時期幅のあるものが含まれる。

〔土器〕

縄文土器、古墳時代の土師器・須恵器があり、縄文時代晩期末～古墳時代後期までの時期幅のあるものを含む。

847は縄文時代晩期末の突帯土器深鉢である。内外面をナデ調整で仕上げている。848は土師器羽釜である。内外面に斜方向のハケ調整を行い、外面に鏝を貼り付ける。6世紀頃の所産。849・850は須恵器杯蓋である。6世紀頃の所産。851は須恵器杯身である。6世紀前半の所産。

〔石製品〕

石斧(S38)、砥石(S39)がある。S38は下方に平坦な割れ口を持ち、周囲に二次的な整形のためと考えられる敲打痕がみられる。A1区S9南半40～60cmから出土した磨製石斧S17と石材や加工痕が近似しており、同一個体であった可能性がある⁹⁾。S39は使用面に複数の線状痕が認められる。

〔木製品〕

容器・串・端材・用材がある。

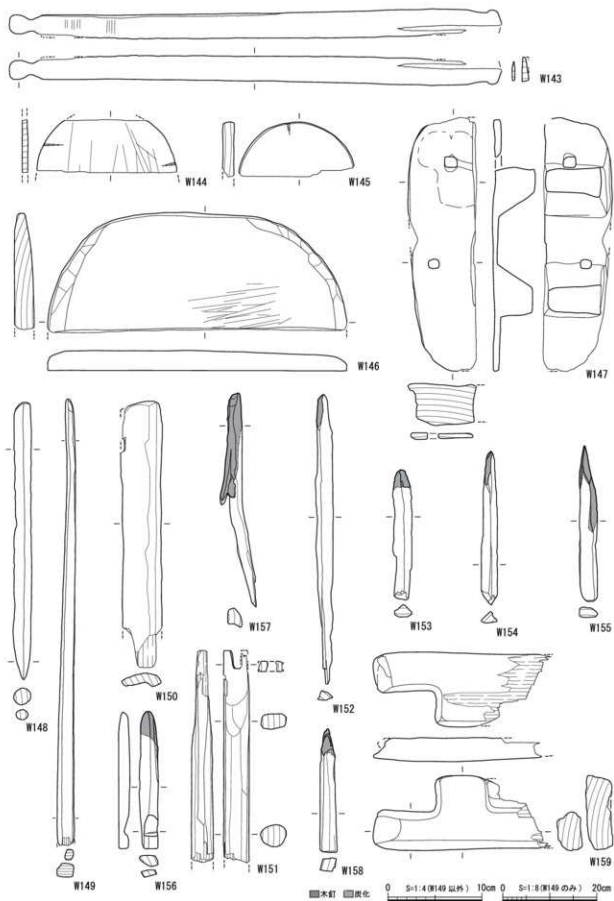


図 4-110 A8区 河道S9 下層有機質層0~20cm 出土遺物(9)

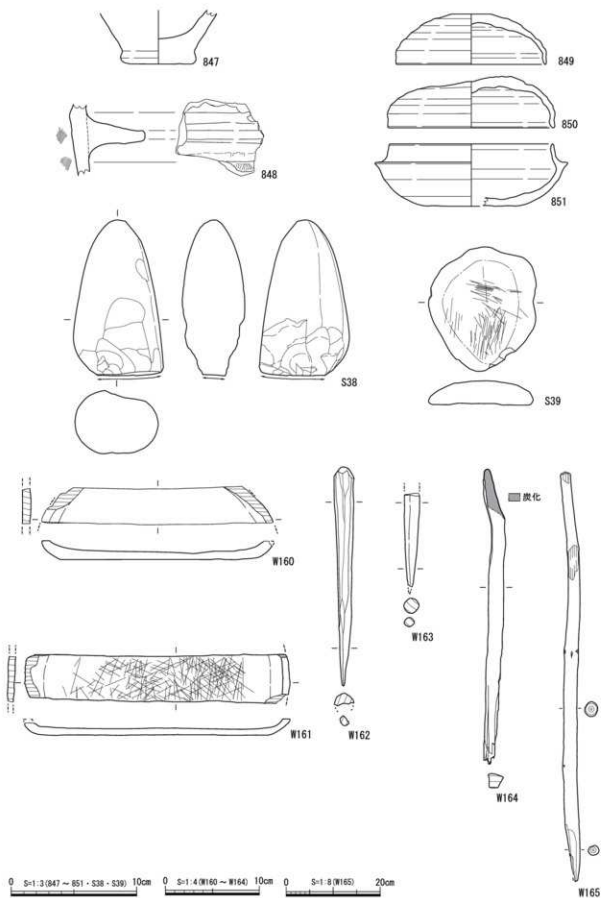


图 4-111 A 8 区 河道 S9 下層有機質層 20~40cm 出土遺物

<容器>W160・W161は皿の中央部である。W161の使用樹種はスギで、外面には整形時に削った痕跡が残る。内面底部には非常に多数の刃傷が残る。外面底部にも刃傷が見られる。復元直径は28cm前後、器高が1.7cm前後である。W89と同じ規格・方法で製作されていた可能性がある（県教委・財協会1998）。

<串>W162・W163は串である。W162はアスナロ属、W163はヒノキ属である。W162は上端付近が最大幅で直径約2cmと思われるが、2/3程は縦半分が欠損しており、断面が半円形を呈する。下端を長く鋭く削り、尖らせる。上端は丸く切断されている。W163は最大径が約1.5cmで、上方が欠損している。下方に向かって長く削って尖らせているが、W163ほど鋭利な印象はない。

<端材>W164はアスナロ属の角材で、1cm～2cm四方に削られており、上端が炭化している。松明に利用した燃えさしか。

<用材>W165はイスガヤの棒材で、直径約3cmの芯持ち材を用いている。上半は欠損している。枝を払い、下端は左辺からのみ12cm前後にわたり尖らせるように削っている。使用樹種や太さなどから、弓、あるいは弓が破損した後に杭に転用したものである可能性が考えられる。

【下層有機質層40～60cm】（図4-91・112～115）

土器・木製品が出土した。縄文時代晩期末～古墳時代後期の時期幅のある遺物を含む。

〔土器〕

縄文土器、古墳時代の土師器・須恵器が含まれ、時期幅のあるものが含まれる。

852は縄文時代晩期末の長原式の壺である。内面をナデ調整で仕上げ、外面には条痕がみられる。口縁部外面付近に突帯を貼り付ける。突帯上には刻みを加える。外面には突帯より下方に炭化物が付着する。縄文時代晩期末の長原式のもの。853は縄文時代晩期末の突帯文土器深鉢である。内外面にナデ調整を行い、口縁部外面に突帯を貼り付ける突帯文土器。突帯上には刻みを加える。外面には突帯より下方に炭化物が付着する。

854は土師器広口壺である。外面に縦または斜方向のハケ調整、内面にナデ調整を行い、頸部外面に突帯を貼り付ける。また口縁部外面には4条の凹線を、口縁部内面には刺突文を施す。古墳時代前期の所産。855は外反する口縁の土師器甕である。体部外面に斜方向のハケ調整、内面に横方向のハケ調整を行い、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。856は底部片である。内外面をナデ調整で仕上げる。857は土師器広口壺である。体部外面から口縁部内面にかけて横または斜方向のミガキ調整で丁寧に仕上げる。体部内面には横方向のハケ調整を行い、頸部および下半ナデ調整で仕上げる。口縁部外面および内面には綾杉状に刺突を施す。古墳時代前期の所産。858は土師器くの字状口縁甕である。体部外面上半に縦または斜方向のハケ調整、下半に横方向のハケ調整を行う。体部内面は横方向のケズリ調整を行い、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。体部外面には炭化物が付着する。古墳時代前期の所産。

859は朝鮮半島系土器である。軟質の甕で、体部外面に格子状のタキ痕がみられる。体部内面にはナデ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。外面には炭化物が付着する。5世紀頃のものである。

860は土師器長胴甕である。外面に縦または斜方向のハケ調整、内面に横または斜方向のハケ

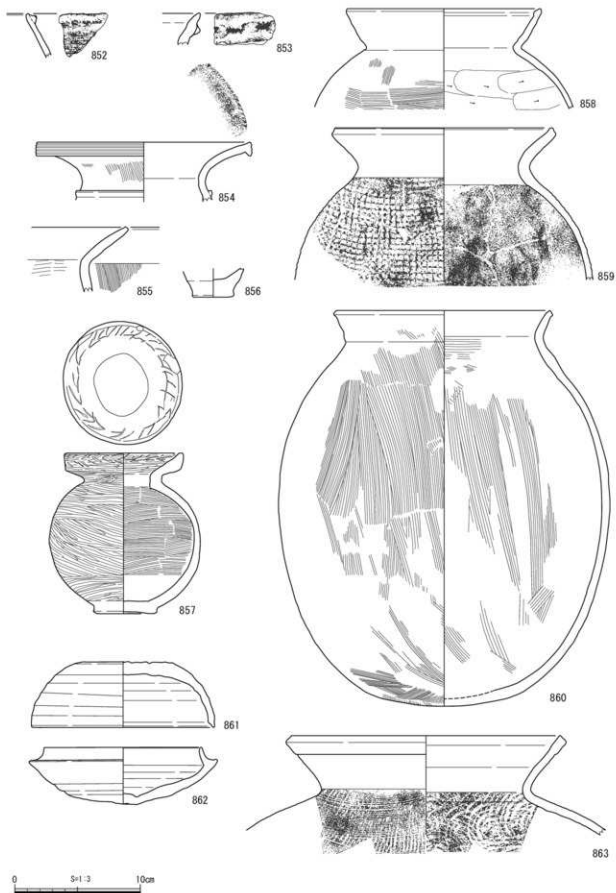


图 4-112 A 8 区 河道 S9 下層有機質層 40~60cm 出土遺物(1)

調整を行い、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。口縁部外面には部分的にハケ目が残る。また体部外面には炭化物が付着する。6世紀頃の所産。861は須恵器杯蓋、862は須恵器杯身である。6世紀後半～7世紀初頭の所産。863は須恵器甕で、体部外面にカキ目およびタキ痕、体部内面に同心円状の当て具痕がみられる。

[木製品]

農具・容器・武器・工具・用具・用材・串・部材・端材、用途不明品がある。

<農具> W166は曲柄鋏の着柄のための突起部分で、使用樹種はアカガシ亜属である。残存部分が少ないため、時期は不明である。W167はアカガシ亜属の板材で、2片に分かれている。接合部がないが、使用樹種・分量・木取り・表面の状態などから同一個体と判断した。土を掘る道具に選択的に使用されるアカガシ亜属を用いていること、斜めに幅を広げていく肩部が残存しており、全体が一定の厚さの板状を呈していることから、曲柄鋏である可能性が高い。着柄部に見られるナスビのヘタ状の突起がないこと、幅を広げた肩部から刃部に向けて左右平行に刃先に至ることから、平鋏I類(樋上2000)と思われる。このタイプの曲柄鋏は滋賀県ではあまり出土しないが、東海地方では弥生時代後期に見られる。

W168は木錘である。使用樹種はアスナロ属である。A1区出土の木錘同様に両端を切り落とした丸太を半裁、あるいは断面水滴状に加工して、中央端に方形の貫通穴をあけるタイプである。断面水滴状に加工している完形品である。

W169は枠型田下駄の縦枠と思われる角材である。使用樹種はアスナロ属で、下方が大きく破損しているが、残存している部分の加工痕から、少なくとも4箇所の貫通穴があけられていたと思われる。横枠材は残っていない。貫通穴は幅2cm程度、長さは5cm～6cmのものと3cm前後のものがある。

W181は軸受け台である。使用樹種はカエデ属で、縦横ともに断面台形に加工した板材の中央に、方形の貫通穴をあける。貫通穴は上面から半分まではまっすぐあけられており、中ほどからは斜めに幅を広げていく。この貫通穴に挿入されている角材と、それを固定するための楔が残存している。

<武器> W170は丸木弓である。一端を欠損する。使用樹種はイヌガヤで、上端は端から2.5cm程を一段細く加工して、弦をかけられるようにしている。忍持ちの枝を用いており、余分な枝を払ったのちに全体を丁寧に削って仕上げている。弦をかける部分は、W110やW188は左右を削って薄くする加工を行っているが、これは全体を削って一回り細くなるような加工を行っている。

W171は完形で、イヌガヤの枝を用いている。ソケット状の金属の刃部をはめ込んで使う斧であり、しなりを意識した形状であること、粘りのあるイヌガヤを用いていることなどから、手斧などの横斧の柄と判断できる。

<用材> W172はヒノキ属の角材の杭で、4cm×5cmの材の一端を欠損する。下端は先端を尖らせるように15cm以上削っている。

<串> W173・W174は串で、使用樹種はW173はアスナロ属、W174はモミ属である。W173は直径約2.7cmの棒材で、全体を面取りするように削り、上下両端を細くするように削っている。ほぼ完形品で、上端はあまり尖らせないが、下端は長く鋭く削っている。126cm以上ある忍持ちで

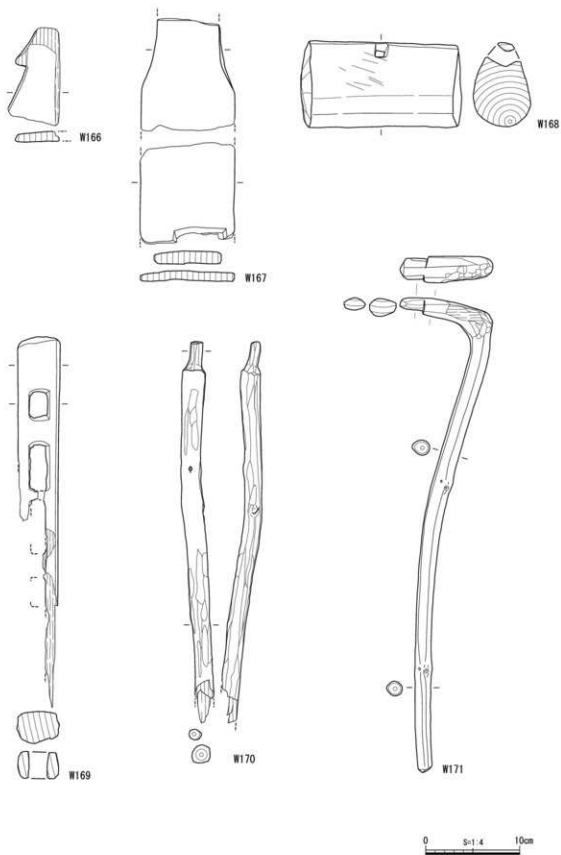


図 4-113 A 8 区 河道 S9 下層有機質層 40~60cm 出土遺物(2)

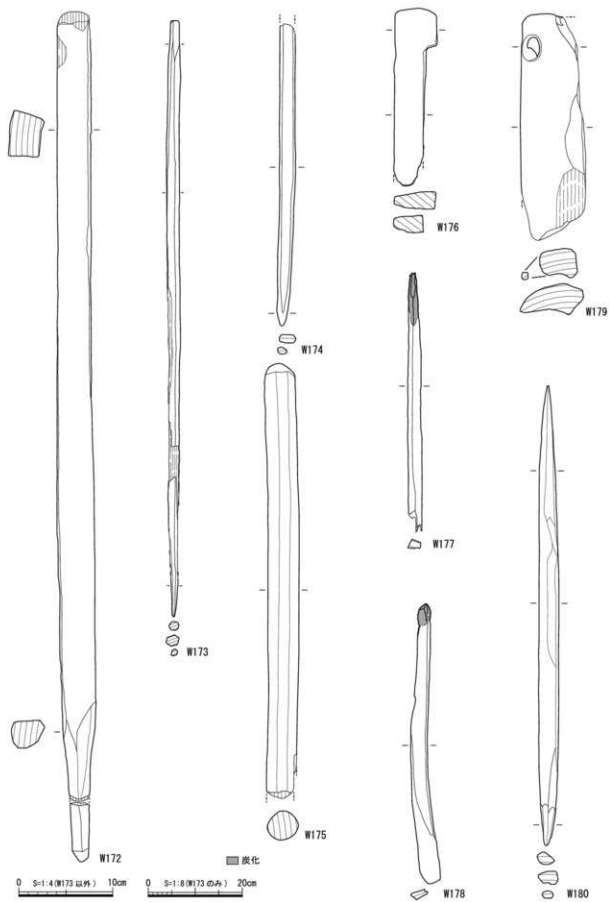


图 4-114 A 8 区 河道 S9 下層有機質層 40~60cm 出土遺物(3)

はない材を、丁寧に細く加工している。W174は幅約2cmの薄い角材状で、下端を尖らせる。上端は破損している。

<部材>W175はヒノキ属の棒材である。上端は丸く加工している。下方は欠損する。芯持ちではない材を丸く加工している。W176はスギの板材で、下方を欠損する。欠損部には炭化が見られる。左辺の上端から約5cmの位置に浅い段がつけられている。右辺は上端から約5cmにかけて、それより下より1.5cmほど幅広に加工されている。断面では左辺側が鈍く尖り気味に加工している。

<端材>W177・W178はアスナロ属の角材、いずれも1cm～2cm四方に削られており、上端が炭化している。松明に利用した燃えさしか。

<容器>W182は削り物の槽である。両短辺が弧状になる細長い槽だと思われる。使用樹種はスギで、口縁部のみが残存している。短辺側面は、斜めに加工した際の加工痕が残っている。

<用具>W183は滑車である。使用樹種はスギである。平面形は若干細長い円形を呈し、中央に2.5cm×3.5cm程の方形の貫通穴をあける。貫通穴表表面には、縦方向に幅2cm程の圧痕が見られる。軸を固定する材の痕跡と思われる。断面は緩やかに反っており、厚さは全体的に約2.5cm、側面には深さ0.5cm～1.5cmの溝が巡る。溝内面は摩擦しており、部分的に深くえぐれている。

<用途不明品>W179はアカガシ亜属の角材である。全体に摩擦しているが、下方および右側が欠損していると思われる。上端から約2.5cmの位置に、直径約1cmの貫通穴があげられている。断面は緩く弧を描く。滋賀県は弥生時代から古墳時代にかけて、木製品製作の際にスギ・ヒノキの使用率が極端に高い地域であり、一方で鋤・鋤などの農耕具では徹底してアカガシ亜属を用いる、という傾向が見られる。そのため、樹種から見ると、W179は農具や土木作業に用いる道具の一部である可能性がある。

W180はヒノキ属の角材である。ほぼ完形品で芯持ちではない材を棒状に加工して、上下両端を尖らせている。ヤスの可能性も考えられる。

【下層有機質層60～80cm】(図4-91・116)

土器・木製品が出土した。縄文時代晩期末～古墳時代前期頃までの時期幅のある遺物を含む。
[土器]

縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器があり、縄文時代晩期末～古墳時代前期頃の時期幅のあるものを含む。

864は縄文時代晩期末の深鉢である。内面にナデ調整、外面を板ナデする。口縁端部には刻みを施す。

865は弥生土器体部片か。内面をナデ調整、外面をミガキ調整で仕上げる。また外面に絵画であろうか、線刻がみられる。866・867は底部片である。866は内外面にナデ調整を行う。867は外面にナデ調整、内面に横または斜方向のハケ調整を行う。868は受け口状口縁甕である。体部外面に斜方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行い、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。体部外面上半には刺突列点文を施す。古墳時代前期の所産。869は土師器高坏で、内外面にナデ調整を行う。外面には炭化物が付着する。古墳時代前～中期の所産。870は土師器脚部で、外面に縦方向のミガキ調整、裾部内面に斜方向のハケ調整を行う。古墳時代前期の所産。

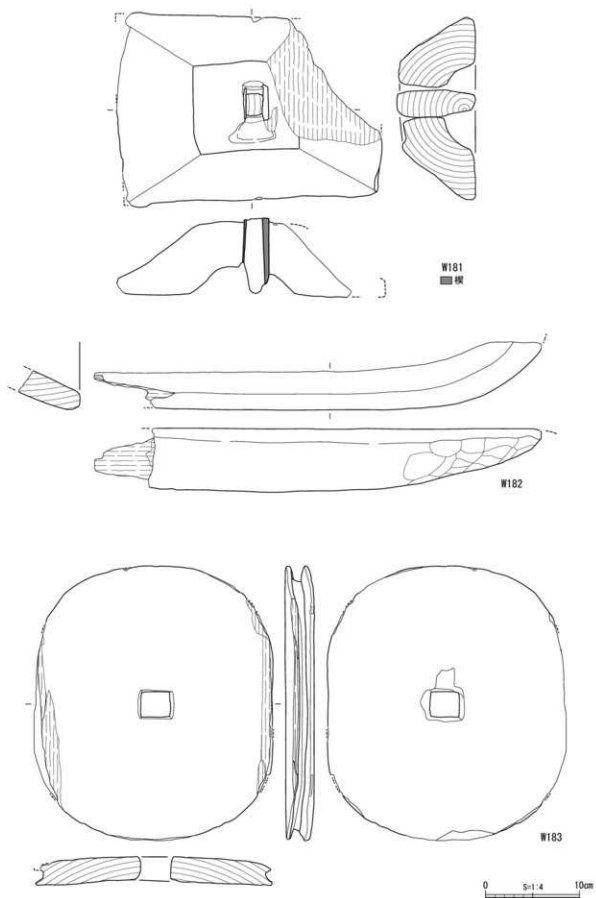


图 4-115 A 8 区 河道 S9 下層有機質層 40~60cm 出土遺物(4)

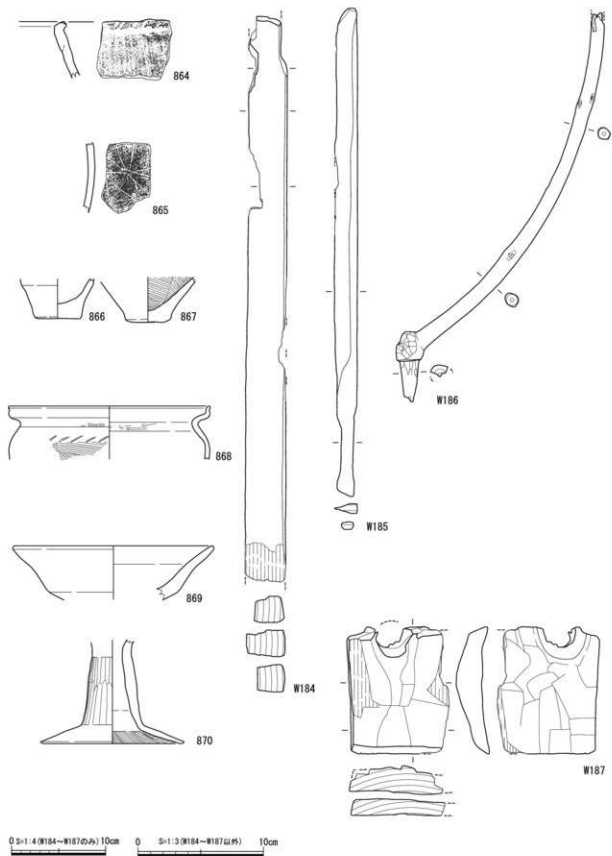


図 4-116 A 8 区 河道 S9 下層有機質層 60~80cm 出土遺物

〔木製品〕

祭祀具・漁具・部材・端材がある。

＜祭祀具＞W185は刀形である。使用樹種はスギで、ほぼ完形品である。上端は切っ先を表現しており、刀身部分は刃部を尖らせるように加工し、鑢のような表現も見られる。下方8cmほどは一段細くして下端を少し膨らませ、握りを表現する。全長が50cmを超える大型であることも含め、丁寧に製作されている。

＜漁具＞W186はタモ枠である。使用樹種はイスガヤで、半分および柄部、枠先端部が破損していると思われる。枠と柄の接合部分は丁寧に加工されており、加工痕が明瞭に残る。接合部分と柄との境界部には段がつけられている。

＜部材＞W184はスギの角材で、上下両端を欠損する。残存している上端は、端から約4cmの位置から右辺を少し削って細くしている。また、左辺は上端近くに2箇所、4cm～5cmの切り欠きがなされている。このような加工を持つ角材あるいは棒材は「有頭棒」として報告されることが多いが、用途は定かではない。出土事例は多く、いずれも比較的大きく加工は大雑把な印象である。建築部材の一部の可能性もある。

＜端材＞W187はヒノキ属の残材である。板材で、上端の半円形の部分は節が抜けた跡である。中央付近から下端に向けて斜めに加工しており、表裏面ともに加工痕が明瞭に残る。槽などの容器の破損したものの可能性もある。

【下層有機質層120～140cm】(図4-91・117)

土器・木製品が出土した。縄文時代中期末～古墳時代中期の時期幅のある遺物を含む。

〔土器〕

縄文土器、須恵器杯身がある。871は縄文時代中期末の深鉢である。波状口縁を呈し、口縁端部に縄文がみられる。872は縄文時代晩期末の突帯文土器深鉢である。体部外面にケズリ調整、底部外面を板ナデ調整で仕上げる。内面は板ナデ調整を行う。873は須恵器杯身で、6世紀前半の所産。

〔木製品〕

＜武器＞丸木弓(W188)がある。W188は一端を欠損する。使用樹種はイスガヤで、上端は端から1cm程度を一段薄く加工して、弦をかけられるようにしている。芯持ちの枝を用いており、余分な枝を払ったのちに体を丁寧に削って仕上げている。上端付近は断面円形だが、ほとんどの部分は断面が半円形に近くなるように削っている。

時期 出土遺物には縄文時代中期～鎌倉時代の幅広い時期のものが含まれており、この間に形成された流路と考えられる。いずれの大別層からも幅広い時期の遺物が出土しており、河道の機能した時期を特定するのは困難であるが、河道の延長部であるA1区河道S9では、便宜的に設けた大別層のいずれから12～13世紀の土器が出土することからも、この頃に機能時期の1点を求めることができる。

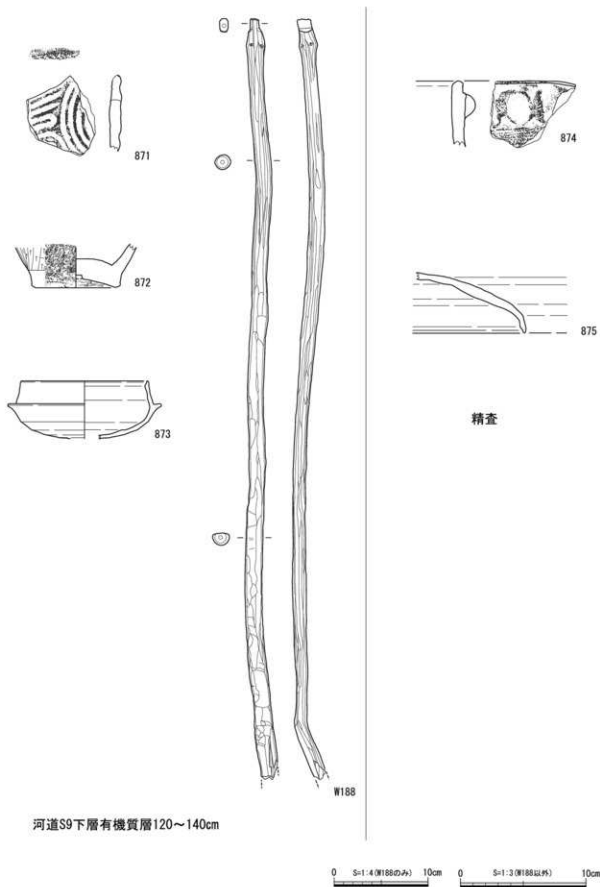


図 4-117 A B 区 河道S9 下層有機質層120~140cm・精査 出土遺物

B. 精査 (図 4-90・116)

このほか精査時の遺物として、縄文土器深鉢 (874)、須恵器杯蓋 (875) がある。874は外面に条痕がみられ、口縁外面に突帯を貼り付け、突帯上に刻みを施す。縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の東海系の壜王式と判断されるものである。875は6世紀頃の所産。

第2節 B区 (図 4-118～128、図版46～50)

位置 「ひこね燦ばれす」南東側の調査区である。A区の北東、C区の南東に位置する。

基本層序・遺構面 0.3～0.5mほどの表土の下に、層厚約0.1mの橙色砂質土、層厚約0.2mの灰色粘質土が堆積し、その下の黄灰色粘質土、標高94.20～94.50m前後が遺構面となる。また調査区の南西部では黄灰色粘質土の下の、標高93.80～94.20m前後で明赤褐色砂礫上面に下層遺構面が確認された。

検出遺構 井戸1基、溝2条、河道2本のほか、複数の土坑、小穴を確認した。

A. 井戸

井戸S2 (図 4-118・123、図版48)

位置 調査区の南西部中央付近に位置する。

形状・規模 直径約2.25mのほぼ円形で、深さ約1.25m、いわゆる段掘りの掘方を持つ。基底部の標高は92.8mである。底部、井戸内には曲物や井戸枠は認められなかった。最下層の堆積するひとまわり狭まった部分は、砂礫層から0.6mほど掘り窪められて、この層から取水される構造と考えられる。

堆積状況 複数層からなり、粘質土を主体とする土層が堆積する。

出土遺物 1層には灰釉陶器片、3層には緑釉陶器片が含まれる。最下層から、土師器皿 (876)、灰釉陶器椀 (877) が出土しており、11世紀頃の所産である。

時期 出土遺物から、11世紀頃に機能時期の一点を求めることができる。

B. 溝

溝S46 (図 4-118・122・124)

位置 調査区の北方に位置する。

形状・規模 幅0.1～0.75m、深さ0.65m、不整形な溝である。

堆積状況 上位に砂の堆積がみられるが、粘質土を主体とした土壌が堆積する。

出土遺物 土師器壺 (878～882)・甕 (883～885)・鉢 (886・887)・高坏 (888～891)・器台 (892)・高坏または器台 (893) が出土した。これらはおおむね古墳時代前期の所産である。

878は体部外面を斜方向のミガキ調整を行った後、最も張り出す付近に横方向のミガキを施す。体部内面ハケ後ナデ調整を行う。体部内面には粘土紐のつなぎ目が顕著に認められる。

879はミニチュア土器である。体部外面に斜方向のミガキ調整、体部内面はナデ調整を行う。880は広口壺で、外面に斜方向または横方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行う。口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。体部内面には粘土紐のつなぎ目がみられる。881は直口壺で、体

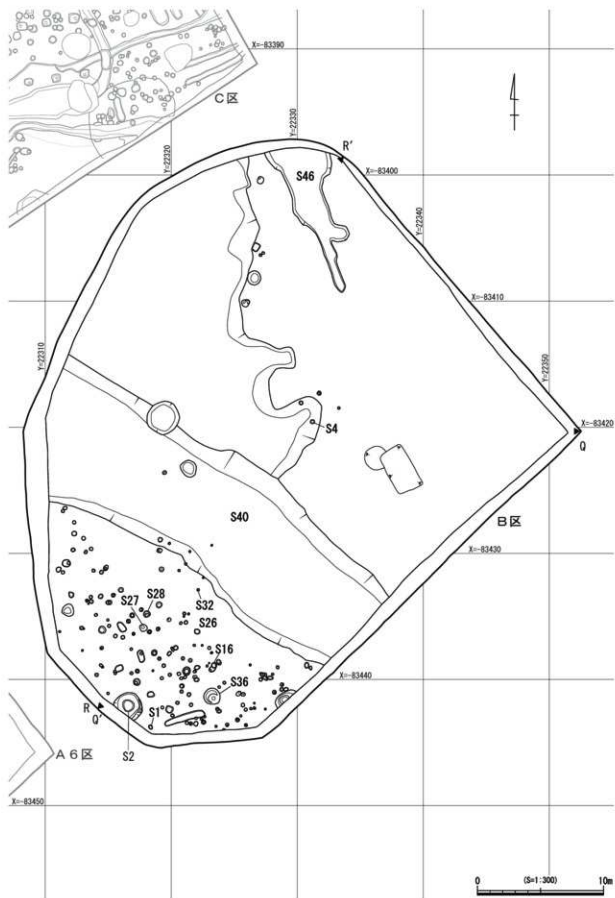


图4-118 B区上层平面图

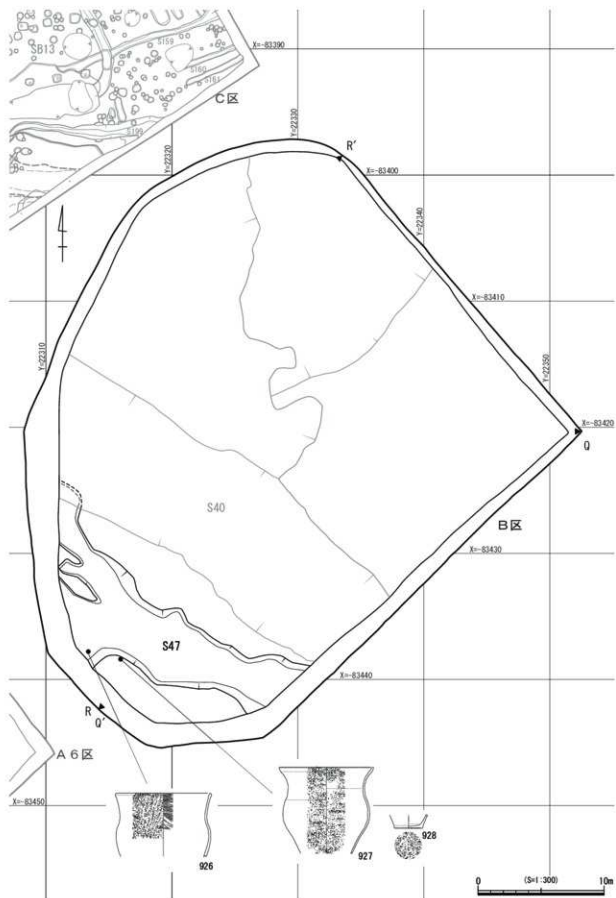


图 4-119 B区 下層 平面图

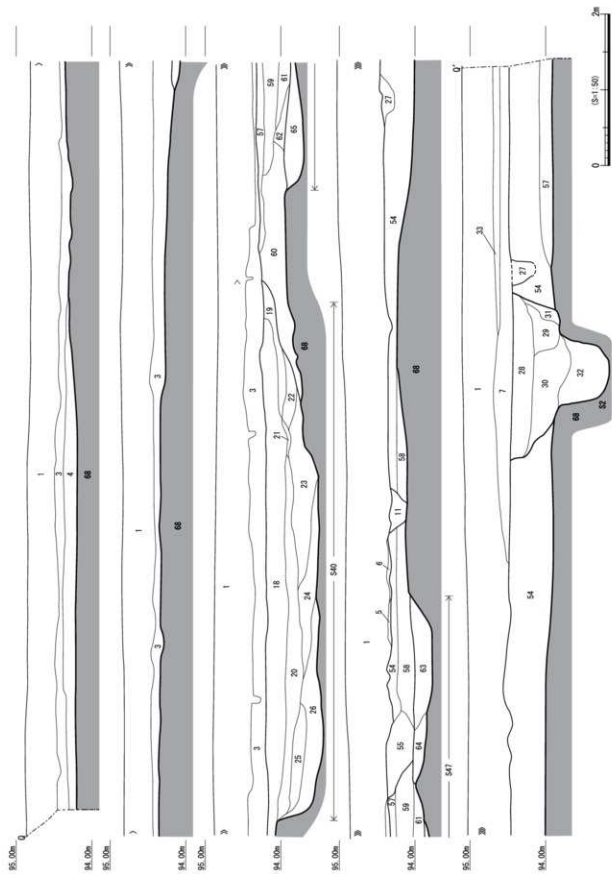


图 4-120 B 区 南 东 壁 断 面 图

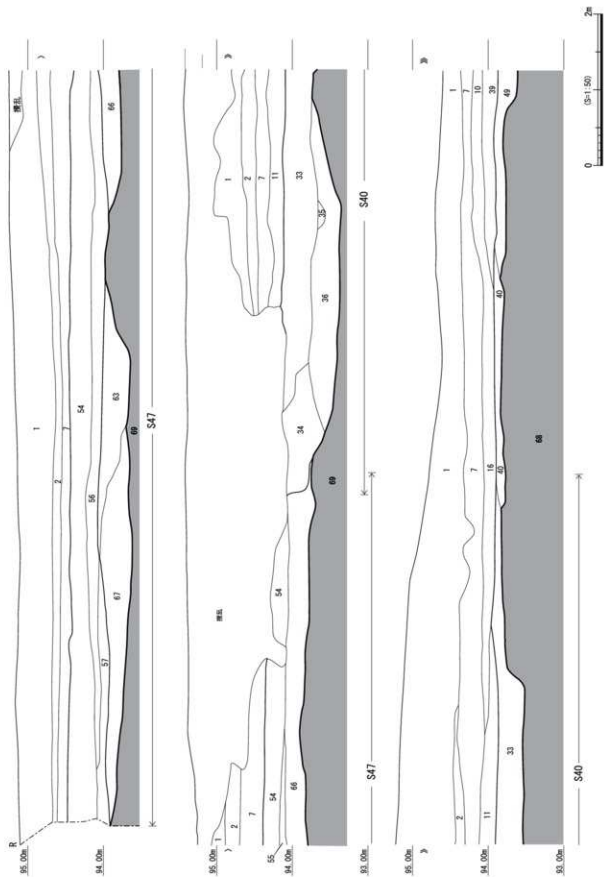


图 4-121 B 区 西北跨断面图(1)

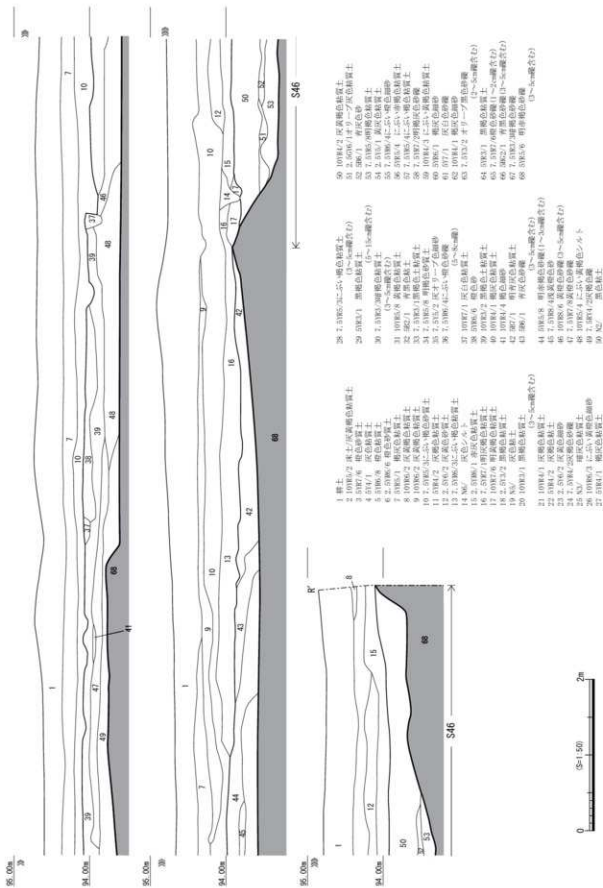


图 4-122 B 区 北西隆断面图(2)

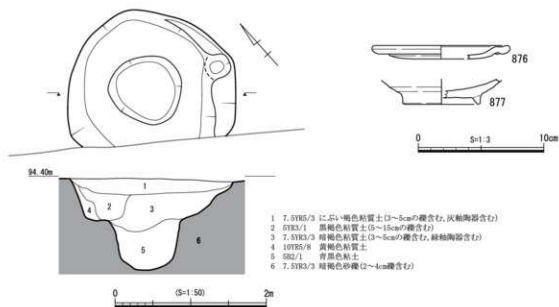


図 4-123 B区 井戸S2 詳細図・出土遺物

部外面に斜方向のハケ調整、体部内面に横方向のケズリ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。882は外面に斜方向のハケ調整を行った後、斜方向の板ナデ調整を行う。内面は横または斜方向のハケ調整の後、上半をナデ調整で仕上げる。

883・884は口縁部外面に擬凹線を施す北陸系の有段口縁釜である。833は体部内面にケズリ調整を行い、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。口縁部外面には擬凹線を施す。884は内面に横方向のハケ調整、頸部内面にナデ調整を行う。体部外面にはナデ調整、頸部外面に横方向のナデ調整を行う。口縁部外面には擬凹線を施す。885はくの字状口縁釜で、体部外面に斜方向の粗いハケ調整、体部内面にナデ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。全体に粗雑なつくりである。

886は有孔鉢で、底部に円形の孔を穿つ。内外面に斜方向にハケ調整を行う。887は台付の片口鉢である。内外面に横または斜方向のハケ調整を行い、口縁部および脚部をナデ調整で仕上げる。

888は内外面に縦または斜方向のミガキ調整を行う。889は内外面に縦または斜方向のミガキ調整、口縁部内外面に横方向のミガキ調整で仕上げる。

890は外面に縦または斜方向のミガキ調整、脚部内面に横または斜方向のハケ調整を行う。891は外面にナデ調整、脚部内面下方に横または斜方向のハケ調整を行う。892は小型器台で、脚部外面に縦または斜方向のミガキ調整、受け部には横方向のミガキ調整で仕上げる。受け部内面には縦方向のミガキ調整、口縁部には横方向のミガキ調整を行う。脚部内面は横方向のハケ調整を行う。893は脚部内面にナデ調整、脚部外面は縦方向のミガキ調整で仕上げる。890~893はいずれも脚部に円形の透かしを3方向に設ける。

時期 出土遺物から古墳時代前期に位置付けられる。

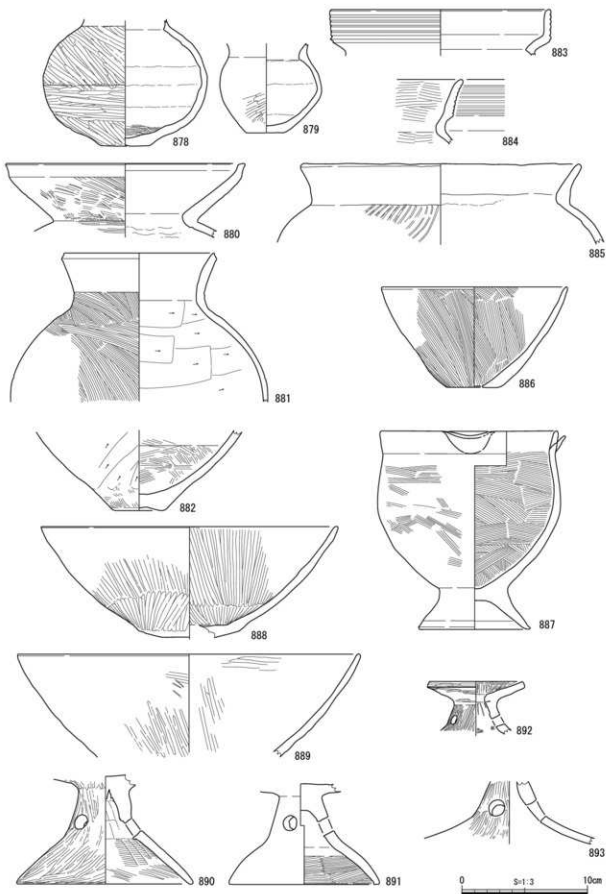


图 4-124 B区 冢S46 出土遗物

C. 河道

河道S40 (図 4-118~121・125・126、図版47)

位置等 調査区の中央部南西寄りに所在する。

規模・形状 幅約9m、深さ約0.7mを呈し、直線的に延びる。底面の標高は、南東部で93.45~93.60m、北西部で93.45~93.55mであり、河道は南東から北西に向かって流れていたと推定される。

堆積状況 上半に粘土~粘質土、下半に細砂~砂礫層を主体とする土層が堆積する。

出土遺物 古墳時代前期の土師器壺(894~895)・甕(897~902)・脚台(896)・高坏(903~905)・器台(906・907)、6世紀後半~7世紀初頭の須恵器杯蓋(908)・杯身(909)・壺(910~912)が出土した。

894は小型の直口壺で、体部内面に斜方向のハケ調整、口縁部内面に横方向のハケ調整を行う。外面は摩滅しており、調整不明瞭である。895は直口壺で、外面に縦または斜方向のハケ調整を行った後、体部外面を斜方向のミガキ調整で仕上げる。体部内面は横または斜方向のハケ調整を行った後、ナデ調整を行う。896は内外面に斜方向のハケ調整、脚台部外面裾部に横方向のハケ調整を行う。

897は口縁部外面に擬凹線を施す北陸系の有段口縁甕である。体部外面に横または斜方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行う。口縁部~頸部外面には横方向のナデ調整を行う。898は受口状口縁甕で、体部外面に斜方向のハケ調整、体部内面に横または斜方向のハケ調整を行う。口縁部内面は横方向のハケ調整、口縁部外面は横方向のナデ調整を行う。体部外面上半には刺突文を巡らす。体部外面には炭化物が付着する。

899~902はくの字状口縁甕で、体部外面に斜方向のハケ調整、体部内面および口縁部内外面に横または斜方向のハケ調整を行う。

903は内外面を縦方向のミガキ調整で仕上げる。904は高坏で、外面に縦方向のミガキ調整を行う。内面は摩滅により調整不明瞭である。

905は内面をナデ調整、脚部外面を縦方向のミガキ調整で仕上げる。脚部には3方向に円形の透かしを設ける。906は外面に縦または斜方向のハケ調整、内面に横または斜方向のハケ調整を行った後、受部内面をナデ調整、脚部外面を縦方向のミガキ調整で仕上げる。907は脚部に4方向の円形の透かしを設ける。調整は摩滅により不明瞭である。

910・911は短頸壺である。912は体部外面にタタキ痕、体部内面に当て具痕がみられる時期 出土遺物から、6世紀後半~7世紀頃に機能時期の一点を求めることができる。

河道S47 (図 4-119~121・128、図版49・50)

位置 調査区南西部の下層遺構である。北西部の一部を上層遺構の河道S40に削平される。

形状・規模 幅2.1~6.3m、深さ0.25~0.45mを呈する。底面の標高は南東部で93.70~93.80m、北西部で93.60~93.70mであり、河道は南東から北西に向かって流れていたと推定される。

堆積状況 複数層からなり、砂礫を主体とする土壌が堆積する。

出土遺物 縄文土器深鉢(926~928)が出土した。縄文時代後期前葉の北白川上層式2期のもの

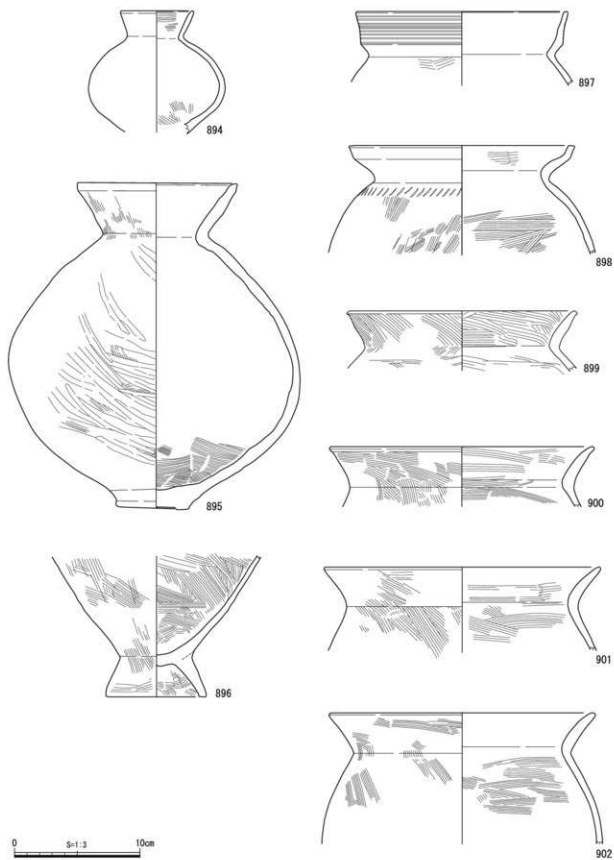


图 4-125 B区 河道S40 出土遗物(1)

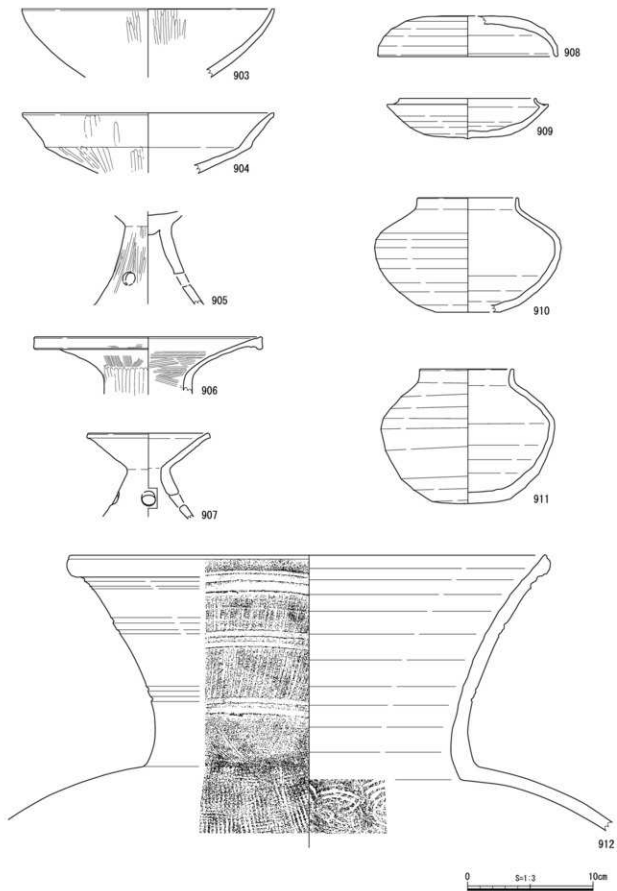


图 4-126 B区 河道S40 出土遗物(2)

である。926は河道南岸の肩部で、927・928は南岸際の上面で出土した。いずれも摩耗しておらず、肩部付近の出土であることから、南岸からの投棄である可能性がある。

926は内外面に条痕がみられ、口縁部に線状の刻み、体部に棒状工具による沈線を施す。927は外面に条痕、内面をナデ調整で仕上げる粗製土器である。928は底部外面に網代圧痕がみられる。幅3mm程の扁平な材を縦横に編んだもので、編み方は1本越え1本潜り1送りである。

時期 出土遺物から、縄文時代後期前葉のものと推定される。

D. 土坑

土坑S36 (図4-118・127)

位置 調査区の南西部中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径約1.3mの円形で、深さ約0.4mを呈する。

堆積状況 灰褐色土の単層である。

出土遺物 弥生土器壺(913)・高坏(914)が出土した。おおむね弥生時代後期の所産。いずれも摩滅しており、調整不明瞭である。

時期 出土遺物から弥生時代後期と推定される。

E. 小穴

このほか、性格不明の複数の小穴を複数検出した。このうち凶化し得た遺物の出土したものを示しておく。

小穴S1 (図4-118・127)

位置 調査区の南西部中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径0.3m程の楕円形で、深さ約0.3mを呈する。

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 土師器皿(915・916)が出土した。12世紀頃の所産。916は内面に黒色被膜が付着する。漆と思われる。

時期 出土遺物から12～13世紀頃と推定される。

小穴S16 (図4-118・127)

位置 調査区の南方部中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.3mの円形で、深さ0.1mを呈する。

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 土師器羽釜(917)が出土した。12～13世紀頃の所産。

時期 出土遺物から12～13世紀と推定される。

小穴S26 (図4-118・127)

位置 調査区の南方部中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.4mの円形で、深さ約0.3mを呈する。

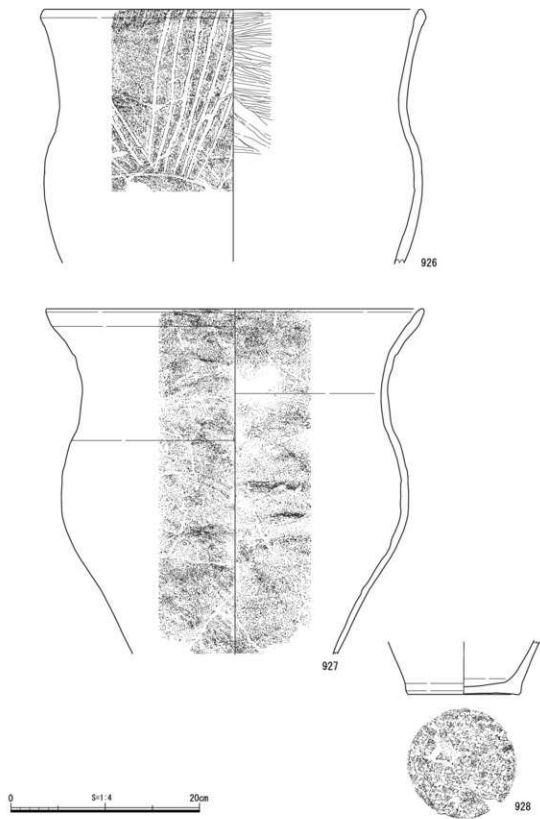


图 4-127 B区 河道 S47 出土遗物

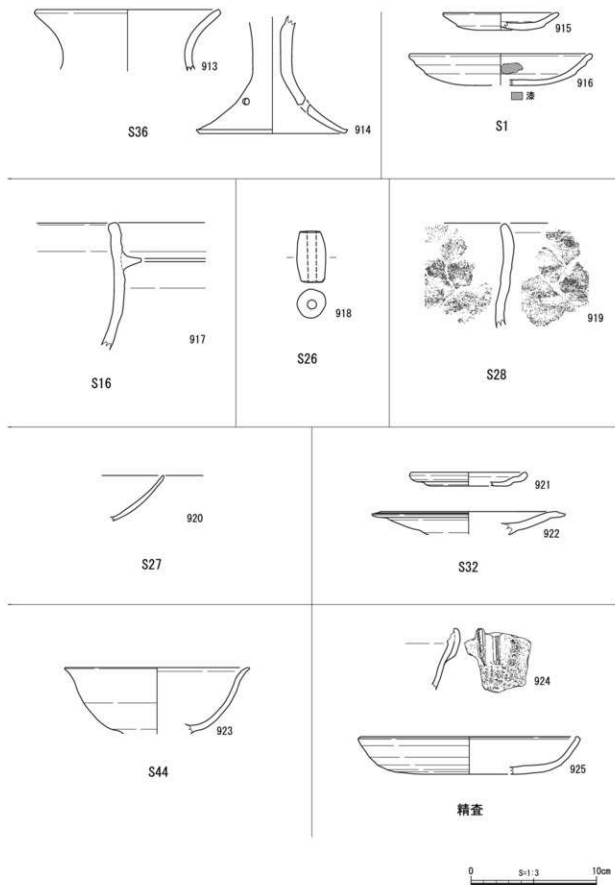


图 4-128 B区 土坑·小穴·精查 出土遗物

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 管状土錘 (918) が出土した。土師質で、平面形はやや中ほどが膨らむものの長方形である。両端部は面を持つ。

時期 年代を決定する遺物に乏しく、不明である。

小穴S27 (図 4-118・127)

位置 調査区の南方部中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.6mの円形で、深さ約0.35mを呈する。

堆積状況 灰黄褐色土の単層である。

出土遺物 土師器杯 (920) が出土した。全体に摩滅する。8世紀後半～9世紀頃の所産。

時期 出土遺物から8世紀後半～9世紀前半頃と推定される。

小穴S28 (図 4-118・127)

位置 調査区の南方部中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.5mの円形で、深さ約0.15mを呈する。

堆積状況 黒褐色土の単層である。

出土遺物 縄文土器深鉢 (919) が出土した。縄文時代後期のものである。外面に条痕がみられ、内面はナデ調整で仕上げる。

時期 出土遺物から縄文時代後期の可能性があるが、周囲に建物遺構など明確な当該期の遺構もないことから混入した可能性が高いと考える。

小穴S32 (図 4-118・127)

位置 調査区の南方部中央付近に位置する。

形状・規模 平面形は直径約0.2mの円形で、深さ約0.1mを呈する。

堆積状況 灰白色土の単層である。

出土遺物 土師器皿 (921)・高坏 (922) が出土した。921は11世紀末～12世紀初頭、922は8～9世紀頃の所産。

時期 出土遺物から12世紀頃と推定される。

小穴S44 (図 4-118・127、図版48)

位置 調査区の中央付近に位置する。溝S40北側に広がる落ちの肩部に形成される小穴である。

形状・規模 平面形は直径約0.35mの円形で、深さ約0.3mを呈する。この小穴から1.5～1.8mの間隔で北方・北西・北東部に同様の小穴がみられ、S44はこれらで構成される同一構造物の一部である可能性がある。

堆積状況 灰黄褐色土の単層である。

出土遺物 灰釉陶器椀 (923) が出土した。9～10世紀頃の所産。

時期 出土遺物から平安時代頃と推定される。

F. 精査 (図 4-118・127)

このほか精査時の遺物として、弥生土器壺 (924)、土師器皿 (925) がある。924は口縁部外面に竹管文を施し、2本1対の棒状浮文を貼り付ける。924は弥生時代中期後半、925は8世紀後半～9世紀頃の所産。

第3節 C区 (図 4-129～137、図版50～52)

位置 「ひこね燦ばれす」南東側の元駐車場部分の調査区で、A区の北東、B区の北西に位置する。
基本層序・遺構面 層厚約0.3mの耕土の下に、層厚約0.3mの褐灰色土が堆積し、その下のにぶい黄橙色土上面、標高93.80～94.50mが遺構面となる。調査区の北西部は最上部に1.0～1.5mの礫が厚く造成される。

検出遺構 竪穴建物1棟、掘立柱建物1基、井戸1基のほか、複数の溝、土坑、小穴を確認した。

A. 竪穴建物

竪穴建物S134 (図 4-129・132)

位置等 調査区の北西端中央付近に位置する。

形状・規模 一辺約3.5mの平面方形で、深さ約0.2mを呈する。主柱穴は不明瞭で、S270を含む4本主柱であろうか。北方は調査区外に広がっているため不明である。貼床、壁溝は確認されなかった。N7°W前後を指向する。

屋内施設 明確な施設は検出されなかった。

堆積状況 灰褐色土の単層である。

出土遺物 弥生土器壺 (929)・甕 (930) が出土した。弥生時代後期の所産。929は内面にナデ調整を行う。口縁部外面には9条の凹線を巡らせ、4本1対の棒状浮文を貼り付ける。930は内外面にナデ調整を行い、体部外面上半に櫛描直線文、その下方に刺突列点文を施す。

時期 出土遺物から弥生時代後期と推定される。

B. 掘立柱建物

掘立柱建物SB13 (図 4-129・133、図版51)

位置 調査区の中央付近に位置する。建物南側の柱掘方S233～S236は、重複関係にあり後出する河道S198の肩部を掘り下げた段階で検出した。

形状・規模 梁行2間 (4.5m) × 桁行3間 (6.9m) の東西棟建物である。主軸方位をN8°Wに採る。柱間は梁行2.25m、桁行2.3mである。柱掘方は、平面形は0.35～0.6mの隅丸方形～楕円形で、断面形は深さ0.15～0.55mの逆台形を呈する。柱痕は直径0.15m程度である。

堆積状況 掘方の埋土は灰褐色土・ぶい黄褐色土の単層または複数層が堆積する。柱痕の埋土は黒褐色土である。

出土遺物 土師器・須恵器小片が出土した。

時期 年代を決定する遺物に乏しいが、A5区SB7など、他調査区で検出した掘立柱建物と同様の主軸であることから、7～8世紀のものと推定される。

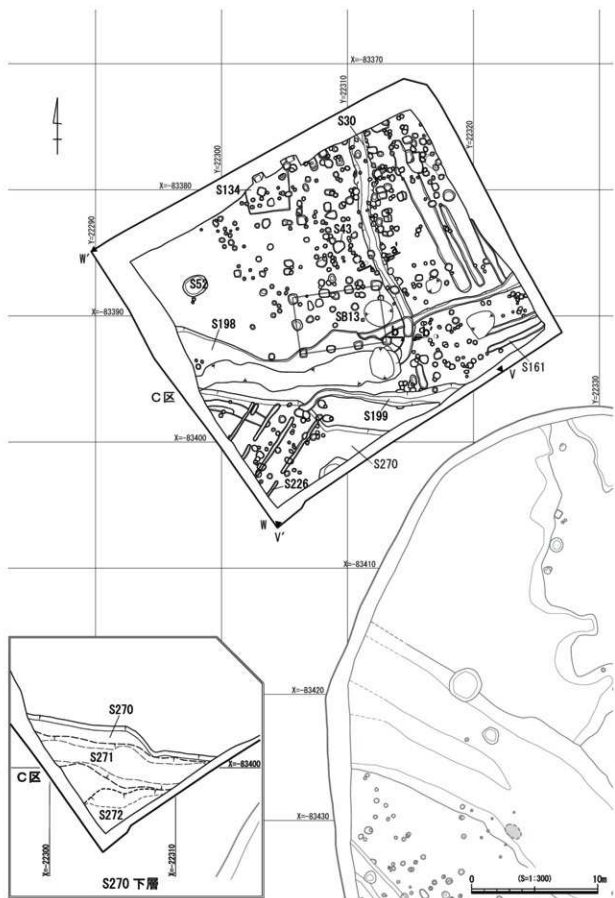


图 4-129 C区 平面图

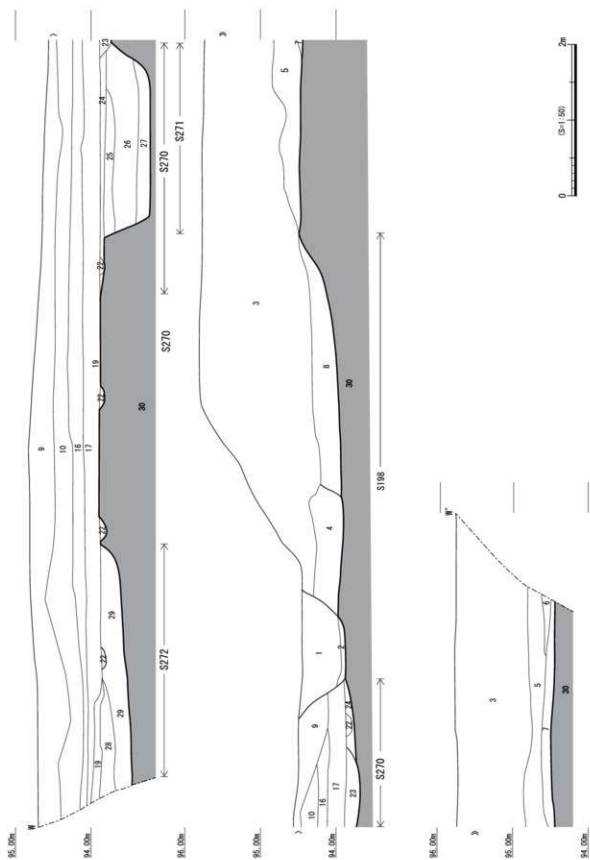


图 4-130 C 区 南西壁断面图

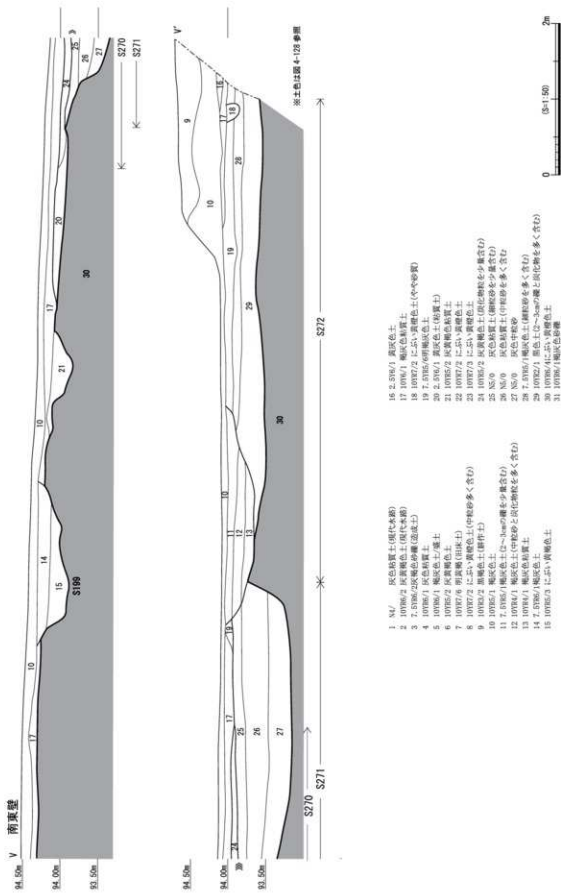


图 4-131 C区 南東壁断面图

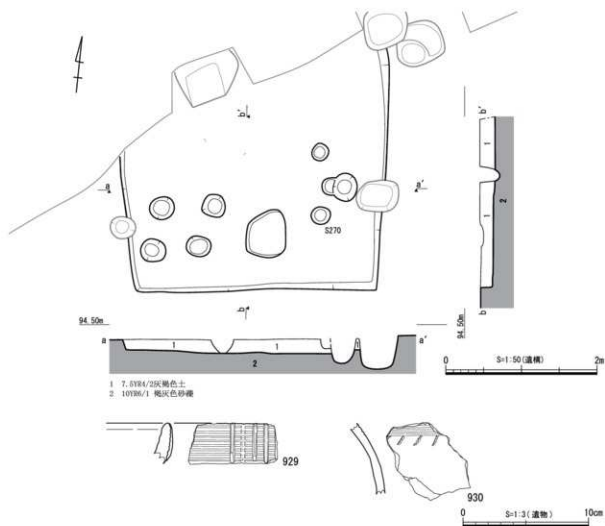


図 4-132 C区 竪穴建物S134 詳細図・出土遺物

C. 井戸

井戸S52 (図 4-129・134、図版52)

位置 調査区の西部に位置する。

形状・規模 平面形は短軸約1.5m・長軸約2.0mの楕円形で、深さ約1.15m、断面形は緩やかな逆台形を呈する。内部には曲物や井戸枠は認められない。

堆積状況 複数層からなり、ほぼ水平堆積である。湧水部と判断される底部に粘質土が、その上部に褐色土が堆積する。

出土遺物 山茶碗 (931・932)、砥石 (S40) が出土した。931・932は12世紀後半～13世紀の所産。S40は擦面に線状痕が認められる。

時期 出土遺物から12世紀後半～13世紀頃に機能時期の一点を求めることができる。

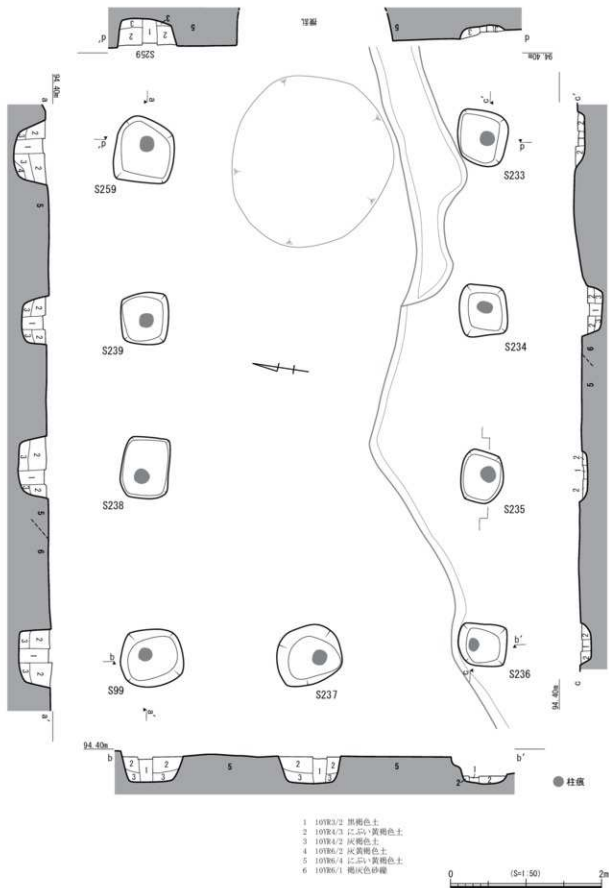


图 4-133 C区 掘立柱建物SB13 詳細图

D. 溝

溝S30 (図 4-129・134)

位置 調査区の中央付近東寄りに位置する。

形状・規模 幅0.9～1.2m、深さ0.1～0.25m、断面形は緩やかな逆台形を呈する。緩やかに蛇行しながら、南北方向に走る。N12°Wを指向する。

堆積状況 複数層からなり、褐色土を主体とする土層がほぼ水平堆積する。

出土遺物 土師器甕(933)・杯(934)が出土した。

933は体部外面に斜方向のハケ調整、体部内面にナデ調整を行い、口縁部は横方向のナデ調整で仕上げる。弥生時代後期の所産。934は摩滅しており、調整不明瞭である。7～8世紀の所産か。

時期 出土遺物から、7～8世紀以降には埋没したと判断される。

溝S199 (図 4-129・131・135)

位置 調査区の中央付近南寄りに位置する。

形状・規模 幅0.5～1.1m、深さ約0.4mで、断面形は不整形な逆台形である。ほぼ正東西方向に走る溝で、西部は南方に緩く屈曲する。

堆積状況 2層からなり、褐色土を主体とする土層が堆積する。

出土遺物

【上層】

須恵器片口鉢(937)、山茶碗(935)、土師器皿(936)・羽釜(938)が出土した。おおむね13世紀頃の所産。937は東播系の鉢である。938は口縁端部外面および銜部より下方に炭化物が付着する。

【下層】

灰釉陶器壺(944)、山茶碗(939～942)・小碗(943)、土師器皿(945・946)、管状土錘(947)が出土した。おおむね12世紀後半～13世紀の所産。

943の内面には重ね焼きの痕跡がみられ、底部外面には墨が付着する。転用碗か。947は平面形がやや紡錘形で、土師質のものである。

時期 出土遺物から12世紀後半～13世紀頃に機能時期の一点を求めることができる。

溝S161 (図 4-129・135)

約1.5m北西に、同様の規模・形状・埋土のものが1条並ぶ。N30°Wを指向する。

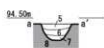
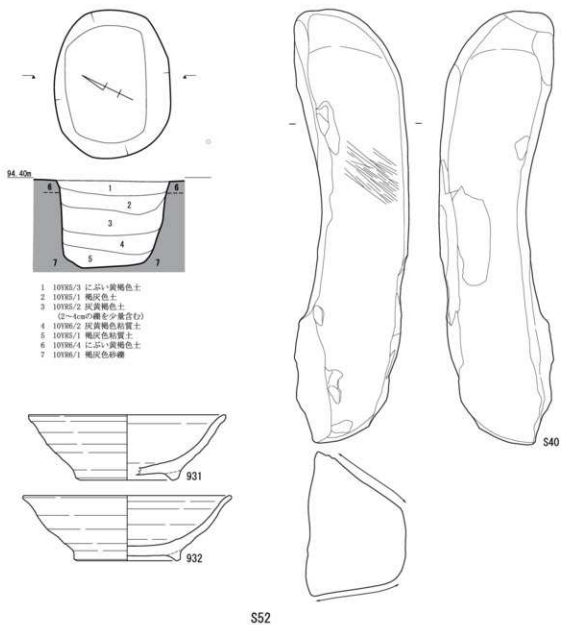
位置 調査区の東方に位置する。

形状・規模 直径約0.5m・深さ約0.1mの円形で断面U字形である。

堆積状況 にぶい黄褐色土の単層である。

出土遺物 山茶碗(948)が出土した。12世紀後半～13世紀の所産。

時期 出土遺物から12世紀後半～13世紀頃と推定される。



94.50n



- 5 10YR4/3 にぶい・黄褐色土
 6 10YR5/3 にぶい・黄褐色土
 7 10YR5/1 褐色色土
 8 10YR6/4 にぶい・黄褐色土



S30



图 4-134 C区 井戸・溝(1) 詳細図・出土遺物

溝S226 (図 4-129・135)

位置 調査区の南方に位置する。

形状・規模 幅約0.2m、深さ約0.05mで、断面形は緩いU字形である。北西側には、平行して約1.5mおきに、同様の方向・形状・規模・埋土のものが3条並ぶ。N32°Eを指向し、条里方位に規制されたものと判断される。

堆積状況 におい黄橙色土の単層である。

出土遺物 山茶碗(949・950)が出土した。12世紀後半～13世紀の所産。

時期 出土遺物から12世紀後半～13世紀頃と推定される。

素掘り溝

ほかに調査区の南東部に、S161の北西に並ぶほぼ同方向の、幅0.3～1.5m、深さ約0.1m、N27°Wを指向する素掘り溝が複数条検出されており、時期を断定する遺物に欠けるが、S161と同様の12世紀後半～13世紀頃のものとして推定される。

また調査区の南西部でS226に平行して、これらと方位を違えるN32°Eを指向する素掘り溝がある。幅約0.3m・深さ約0.1mを呈し、およそ1.5m間隔に平行して並ぶ。平安時代後半以降に犬上郡に広く展開した条里方位であることから、中世以降の耕作にかかわる溝と推定される。

E. 河道

河道S198 (図 4-129・130・135)

位置 調査区の中央付近南寄りに位置する。

形状・規模 近現代溝によって南側の大部分で削平を受けるため、全容は不明であるが、残存幅約0.3～3.6m、深さ約0.35mである。S199や当該溝を削平する近現代溝とはほぼ同方向か。

堆積状況 中粒砂を多く含む黄橙色土の単層である。

出土遺物 須恵器甕(951)、山茶碗(952)が出土した。951は外面にタキ痕、内面に同心円状の当て具痕がみられる。古墳時代～平安時代頃の所産。952は内面に重ね焼きの痕跡が認められる。13世紀頃の所産。また、河道北側肩部から、ウマの歯が出土した。遺存状態が良好でなく加工痕等産状の詳細は不明である。

時期 出土遺物から13世紀頃と推定される。

河道S270 (図 4-129・130・136)

位置 調査区の南方隅に位置する。

形状・規模 北岸を検出し、南岸は調査区外であるため詳細は不明であるが、幅8.4m以上、深さ約0.1mで、東西方向に走る。溝S226および平行に並ぶ複数条の素掘り溝によって一部削平を受ける。

堆積状況 灰黄褐色土の単層である。

出土遺物 土器・木製品が含まれる。

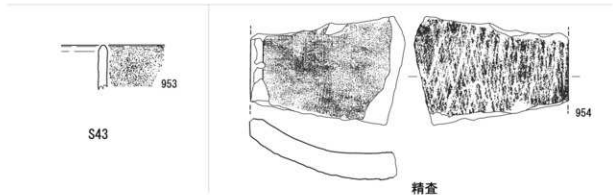
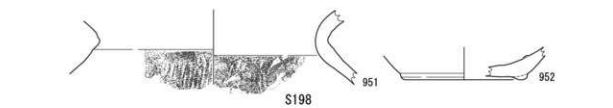
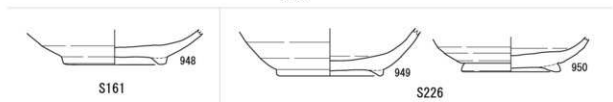
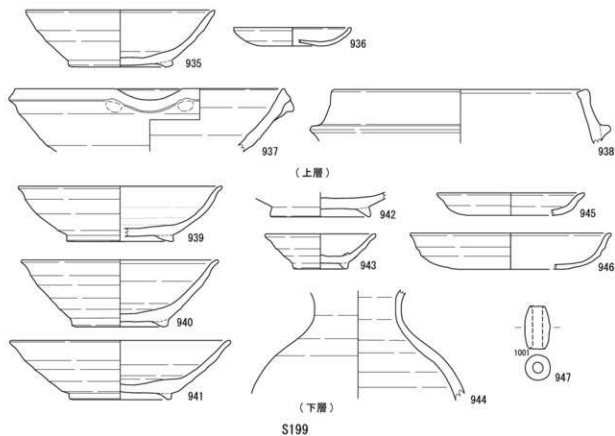


图 4-135 C区 土坑·溝(2)·河道·精査 出土遺物

[土器]

7世紀頃の土師器鍋(955)、おおむね8世紀頃の須恵器杯蓋(956~959)・皿(960)・杯(961・962)、10世紀頃の灰釉陶器椀(963)、12世紀後半~13世紀の羽釜(968・969)・皿(970)、山茶椀(964~967)など、時期幅のある遺物が出土している。

955は内外面に横または斜方向のハケ調整を行い、口縁部を横方向のナデ調整で仕上げる。959は外面に焼成時の膨張による気泡痕がみられる。957・959の内面には墨が付着する。転用硯か。

968は内面に縦方向のハケ調整、外面にナデ調整を行う。969は外面に横または斜方向のハケ調整、外面にナデ調整を行う。

[木製品]

<用途不明品>W189は角材状のアカガシ亜属で、上辺・右辺が厚くなる。上端部には加工の際の刃傷が残る。一木鋤の肩か。

時期 出土遺物から、12世紀後半~13世紀以降に埋没したと推定される。

河道S271(図4-129・130・131・137)

位置 調査区の南方に位置し、S270の下層で確認された。重複関係にあるS272に先行する。

形状・規模 幅1.8~3.9m、深さ約0.65mで、東西方向に走る。

堆積状況 3層からなり、最下層に中粒砂、その上方に細~中粒砂を多く含む粘質土が堆積する。

出土遺物

【上層】土器・土製品・石製品・木製品がある。

[土器]

おおむね8世紀の土師器皿(971・972)、須恵器杯蓋(973~977)・杯(978~981)・壺(982)、11~12世紀の古瀬戸鉢(986)がある。

977は内面に墨書がみられる。「南」か。986は外面を板ナデ、内面をナデ調整で仕上げる。

[土製品]

管状土錘(983~985)がある。平面形は933・985が紡錘形、984は方形である。983は須恵質、984・985は土師質のものである。

[石製品]

砥石(S41)がある。複数面を使用する。

[木製品]

<農具>W190は堅件である。使用樹種はアカガシ亜属の芯持ちの丸太材で、上端は丸く加工しており、上端面は摩滅している。上半の一部には樹皮が残る。一方から大きく削って尖らせている。破損した堅件を杭あるいは楔として再利用したと思われる。

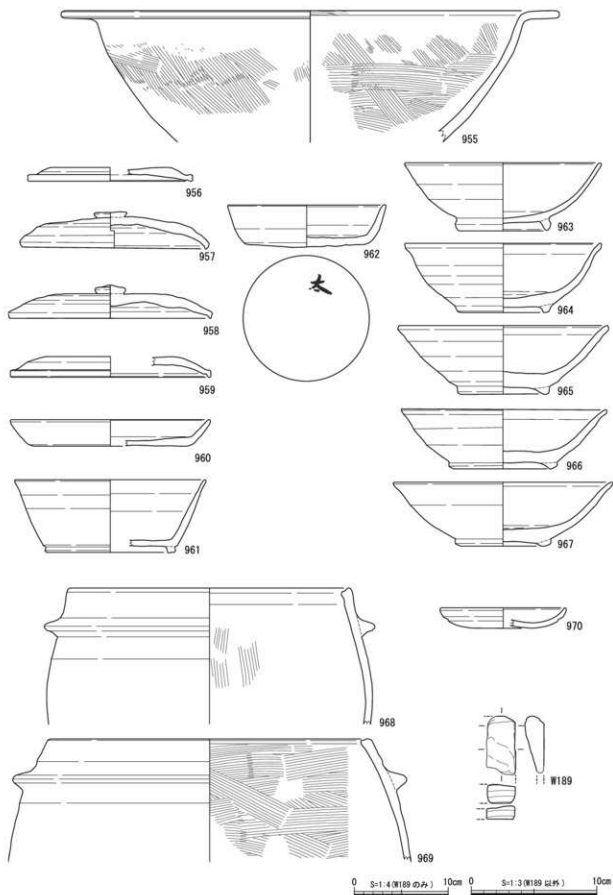


图 4-136 C区 河道S270 出土遺物

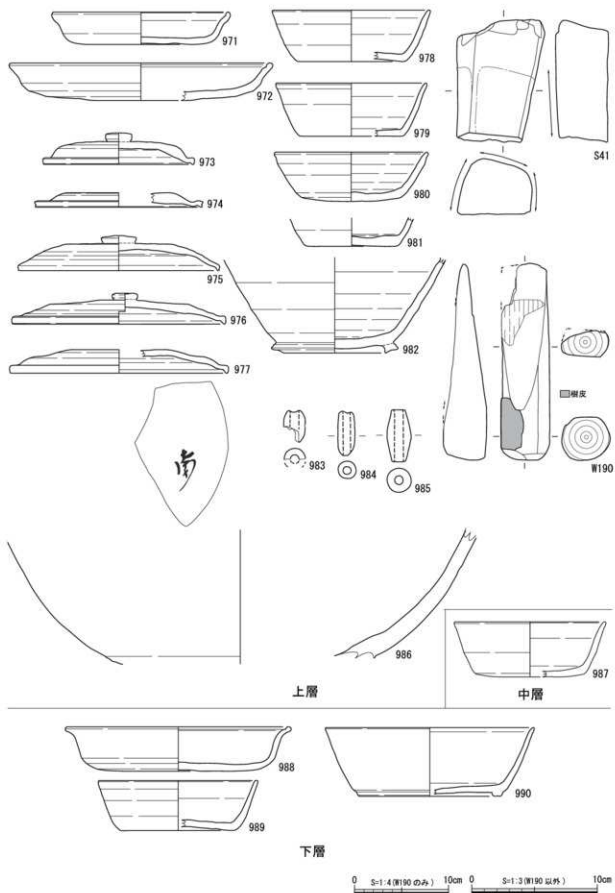


図 4-137 C区 河道S271 出土遺物

【中層】土器・須恵器杯（987）が出土した。8世紀頃の所産。

【下層】土器が出土した。

〔土器〕

土師器皿（988）、須恵器杯（989・990）がある。おおむね8世紀の所産。

時期 出土遺物から、8世紀に機能時期の一点を求めることができる。

河道S272（図4-128・129・130）

位置 調査区の南方に位置する。河道S270の下層で確認された。先行するS271と重複関係にある。

形状・規模 北岸を検出し、南岸は調査区外にあるため詳細は不明であるが、幅3.6m以上、深さ約0.5mで、東西方向に走る。

堆積状況 3層からなり、上から明褐色土、細砂を多く含む褐色土、有機質・礫を多く含む黒色土が堆積する。

時期 年代を決定する遺物に乏しいが、河道S270の下層で検出されており、S271に後出することから、12世紀後半～13世紀以前には埋没したと推定される。

F. 土坑

土坑S43（図4-129・135）

位置 調査区の中央付近北寄りに位置する。

堆積状況 黒褐色土の単層である。

出土遺物 縄文土器深鉢（953）が出土した。外面に条痕がみられ、内面はナデ調整で仕上げる。全体に摩滅が著しい。縄文時代後期～晩期のものか。

時期 出土遺物から縄文時代後期～晩期の可能性もあるが、周辺に当該期の建物などの明確な遺構は確認されておらず、混入した可能性がある。

G. その他（図4-135）

このほか精査時の遺物として、平瓦（954）がある。古代のものである。凹面に布目、凸面に縄目がみられる。

第4節 D区（図4-138～140、図版52）

位置 市立城南小学校のグラウンド南東部端の調査区である。A区の北西に位置し、A8区と小溝を挟んで隣接する。またB区・C区の南西に位置する。

基本層序・遺構面 0.4～0.8mの造成土の下の、灰褐色シルト上面、標高94.00m前後が遺構面となる。

検出遺構 河道を検出した。現代の溝やグラウンドのゴール基礎跡などの攪乱が認められたが、ほかの遺構はみられなかった。

A. 河道

河道S9 (図 4-138~140、図版52)

位置等 調査区の北東半を占める。

規模・形状 先述のA1区・A8区で西岸の続きが、A4区・A7区で東岸が検出されており、これらから河道の幅は約24mと推定される。深さは約1.9m以上で、調査区が狭長の上、河道の底面は深いことが予想されたため、深さ等の確認は安全を考慮して、掘削可能深度までにとどめた。河道の上部には、一部で近代以降の河道が確認された。

堆積状況 シルトおよび粘土層の下層に、厚い有機質層と砂層の互層がみられ、水流のある状態とやや滞留した状態が、しばしば繰り返されていたことが推定される。

出土遺物

【15層】土製品・石製品・木製品が出土した。

[土製品]

瓦(991)が含まれていた。古代のものである。凹面には布目痕、凸面にはタタキ痕がみられる。

[石製品]

磨石類(S42)、砥石(S43)がある。S42は磨面と敲打痕が認められ、併用していたものか。S43は扁平な平坦面に使用面を持つ。

[木製品]

<容器>W191は曲物底板である。使用樹種はヒノキ属で、右側を欠損しており、弧状の部分も残存状況は良くない。側面には側板と結合するための装置や釘穴は認められない。

【28層】木製品が出土した。容器・祭祀具・用途不明品がある。

<容器>W192・W193は曲物底板である。W192は使用樹種はスギで、右側を欠損しており、弧状の部分も残存状況は良くない。側面には側板と結合するための釘穴が1箇所あり、木釘が残存している。W193は使用樹種は針葉樹で、右側を欠損している。弧状部分の残存状況は比較的良好である。側面には側板と結合するための装置や釘穴は認められない。

<祭祀具>W194は斎串か。厚さ0.6cmのスギの板材で、下端を斜めに切り落とす。上方および左側が欠損している。

<用途不明品>W195は用途不明品である。スギの角材で、ほぼ完形品と思われる。上半を左右から削り込んで先端を丸く作り出している。

時期 年代を決定する遺物に乏しいが、河道S9の延長部である、A1区・A4区・A7区・A8区の同河道の年代から、12世紀後半~13世紀に機能時期の一点を求めることができ、その後埋没したと推定される。

(中川 *木製品は阿刀)

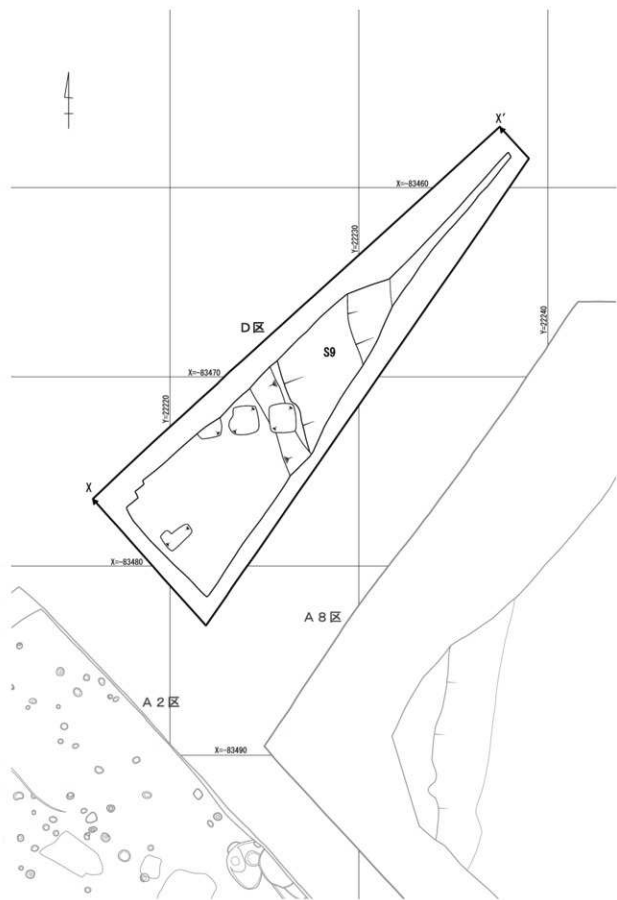


图 4-138 D区平面图

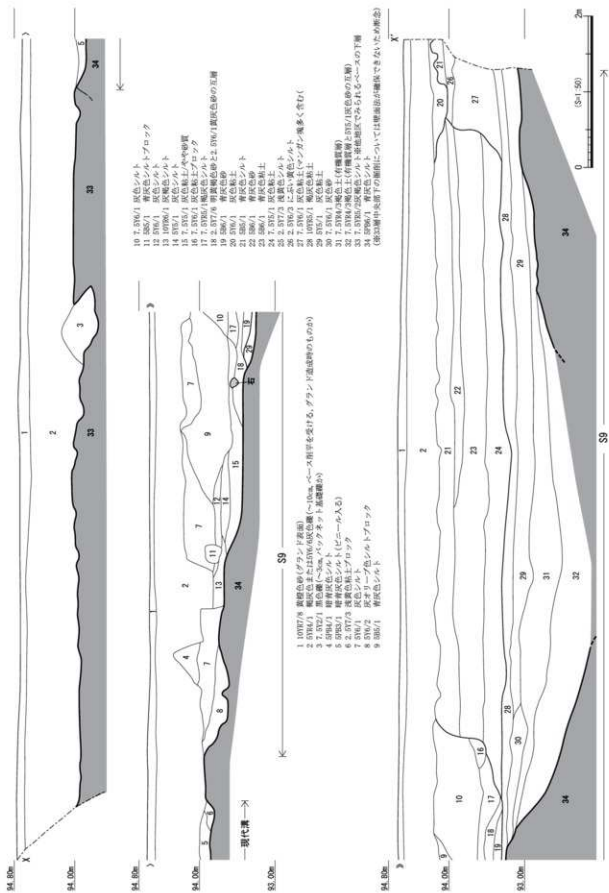
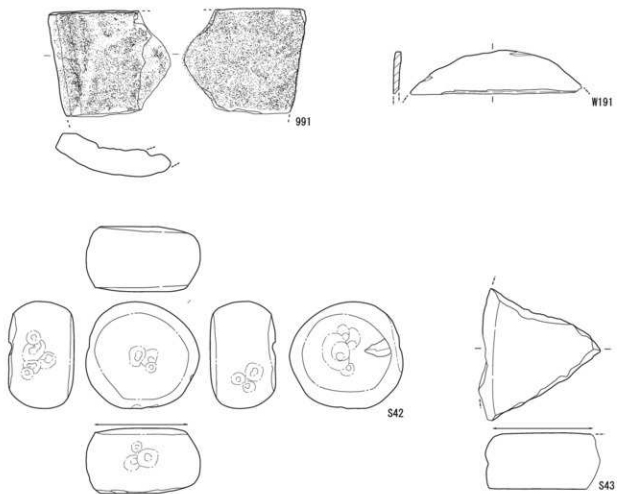
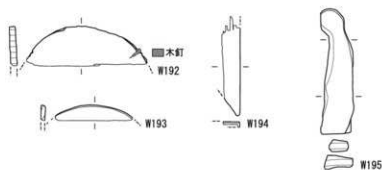


図 4-139 D 区 北西壁断面図



15層



28層

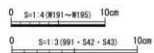


图 4-140 D区 河道S9 出土遺物

第5節 木製品の樹種同定

(1) 出土木製品の樹種同定について

A1区河道S9・A8区河道S9・D区河道S9、およびC区の河道S270から、多くの木製品が出土した。

木製品の樹種を同定することは、用材を明らかにして用途による樹種選択のあり方を判断することができるほか、他地域や同時期の他の遺跡との比較検討を行うための基礎材料となる。考古学的な手法からでは明らかにできない情報であることから、実測対象遺物について樹種同定を実施した。なお、同定結果は付表4に示す。

(中川)

(2) 樹種同定結果⁶⁾

試料 試料は滋賀県福満遺跡(23次)で出土した木製品171点である。

観察方法 剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡(Nikon DS-Fi1)で観察して同定した。なお、W35・W130・W143・W173・W180・W185は遺物の形状により木口が採取出来なかった。

結果 針葉樹8種、広葉樹7種が確認された。以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マキ科マキ属イスマキ (*Podocarpus macropylus* Sweet)

(W43)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はゆるやかであり、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。短冊型をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続(ストランド)をなして存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。イスマキは本州(中・南部)、四国、九州、琉球に分布する。

2) イスガヤ科イスガヤ属イスガヤ (*Cephalotaxus Harringtonia* K. Koch f. *drupacea* Kitamura)

(W110・W165・W170・W171・W186・W188)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は漸進的で、晩材の幅は非常に狭く、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はトウヒ型で1分野に1～2個ある。仮道管内部には螺旋肥厚が見られる。短冊型をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続(ストランド)して存在する。板目では放射組織はほぼ単列であった。イスガヤは本州(岩手以南)、四国、九州に分布する。

3) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

(W174)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個ある。板目では

放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

4) マツ科マツ属 [二葉松類] (*Pinus* sp.)

(W153)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1~15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属[二葉松類]はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

5) コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.)

(W96)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや緩やかに晩材部の幅は極めて狭い。柾目では放射組織の分野壁孔は小型の窓状で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。コウヤマキは本州(福島以南)、四国、九州(宮崎まで)に分布する。

6) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

(W2 · W12 · W19 · W23 · W27 · W29 · W33 · W36 · W42 · W49 · W50 · W52 · W61 · W63 · W64 · W67 · W73 · W87 · W89 · W90 · W99 · W100 · W105 · W107 · W109 · W112 · W116 · W118 · W126 · W131 · W151 · W159 · W161 · W176 · W182 ~ 185 · W192 · W194 · W195)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部に接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

7) ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.)

(W3 · W4 · W17 · W20 · W25 · W30 · W34 · W35 · W38 · W40 · W41 · W44 · W48 · W51 · W53 ~ 55 · W58 · W69 · W70 · W72 · W75 · W77 · W78 · W84 · W85 · W102 ~ 104 · W106 · W108 · W113 · W114 · W117 · W120 · W125 · W130 · W133 · W134 · W137 · W139 · W141 · W142 · W144 ~ 146 · W148 · W154 · W155 · W157 · W158 · W163 · W172 · W175 · W180 · W187 · W191)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

8) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujaopsis* sp.)

(W13・W18・W21・W22・W31・W47・W57・W62・W65・W66・W68・W71・W79・
W86・W91・W94・W95・W111・W115・W127・W129・W136・W138・W143・W147・
W149・W152・W156・W162・W164・W168・W169・W176・W177・W178)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からヤスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

9) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen, *Cyclobalanopsis*)

(W5・W9・W10・W11・W24・W46・W76・W82・W83・W128・W135・W166・W167・
W179・W189・W190)

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管(～200 μ m)が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州(宮城、新潟以南)、四国、九州、琉球に分布する。

10) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino.)

(W39・W140)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管(～270 μ m)が1列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している(イニシアル柔組織)。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1～3列のものと大部分を占める6～7細胞列のほぼ大きさの様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

11) クワ科クワ属 (*Morus* sp.)

(W119)

環孔材である。木口では大道管(～280 μ m)が年輪界にそって1～5列並んで孔圏部を形

成している。孔圏外では小道管が2～6個、斜線状ないし接線状、集合状に不規則に複合して散在している。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。小道管には螺旋肥厚もある。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管内には充填物（チロース）が見られる。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ～1.1mmからなる。単列放射組織はあまり見られない。クワ属はヤマグワ、ケグワ、マグワなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

12) カエデ科カエデ属 (*Acer* sp.)

(W88・W181)

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～100 μ m）が単独ないし数個複合して分布する。軸方向柔細胞は年輪界で顕著である。木繊維の壁に厚薄があり木口面で濃淡模様が出る。柾目では道管は単穿孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ～1mmからなる。カエデ属はウリカエデ、イタヤカエデ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

13) トチノキ科トチノキ属トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume)

(W32)

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～80 μ m）が単独あるいは2～4個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数ともに年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は1～3細胞の幅で年輪の一番外側（ターミナル状）に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって篩状になっている（上下縁辺の1～2列の柔細胞に限られる）。板目では放射組織は単列で大半が高さ～300 μ mとなっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列しており、肉眼では微細な縞模様（リップルマーク）として見られる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

14) ツバキ科ツバキ属 (*Camellia* sp.)

(W26・W132)

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～40 μ m）が、単独ないし2～3個接合して均等に分布する。放射組織は1～3細胞列で黒い筋としてみられる。木繊維の壁はきわめて厚い。柾目では道管は階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔（とくに直立細胞）は大型のレンズ状の壁孔が階段状に並んでいる。放射柔細胞の直立細胞と軸方向柔細胞にはダルマ状にふくれているものがある。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ～1mm以下からなり、平伏細胞の多列部の上下または間に直立細胞の単列部がくる構造をしている。木繊維の壁には有縁壁孔が一行に多数並んでいるのが全体で見られる。ツバキ属はツバキ、サザンカ、チャがあり、本州、四国、九州に分布する。

15) モクセイ科モクセイ属ヒイラギ (*Osmanthus heterophyllus* P.S. Green)

(W81)

紋様孔材である。木口ではきわめて小さい道管 ($\sim 50 \mu\text{m}$) が多数集合し、年輪界に無関係に火炎状、X字状などの紋様状に配列する。軸方向柔細胞が3～4列をなして顕著なイニシアル状に並ぶ。柾目では道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は異性である。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ $\sim 0.5\text{mm}$ 以下。直立細胞は大形で目立つ。ヒイラギは本州 (関東以西)、四国、九州、琉球に分布する。

((株) 吉田生物 汐見 真)

注

- (1) 従来「韓式系土器」と呼称される一群の土器については、近年の研究の進展によって、新羅系・百済系・高句麗系・伽耶系といった系譜が明らかにされるようになる中で、「朝鮮半島系土器」と呼称されるようになってきた。例えば亀田修一氏は「朝鮮系土器」としたのを(亀田2013)、さらに「朝鮮半島系土器」としている(亀田2018)。本報告では、朝鮮半島に系譜が求められる搬入品・模倣品を含む土器の総称として「朝鮮半島系土器」を用いる。
- (2) 本書の動物骨の同定は、(公財) 滋賀県文化財保護協会 佐藤巧庸が行った。
- (3) 中村健二氏の御教示による。
- (4) 建物床面積の縮小と共にカマドが屋外に突出する傾向が指摘されている。(宮崎1992)
- (5) 前掲注(3)
- (6) 本項の記述に当たっては以下の文献を参考にした。(伊藤1989、北村・村田1979、高地・伊藤1988、奈良国立文化財研究所1995・1993、林1991)

文献 (著者名・刊行機関名50音順、刊行年次順)

- * 滋賀県教育委員会→県教委、(財) 滋賀県文化財保護協会→財協会、(公財) 滋賀県文化財保護協会→公財協会
- 伊東隆夫 (1999) 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」 京都大学木質科学研究所
- 亀田修一 (2013) 「渡来人の考古学」 『七隈史学』 第4号 七隈史学会
- 亀田修一 (2018) 「古墳時代の渡来人 (西日本)」 『専修大学古代東ユーラシア研究センター年報』 第4号
- 北村四郎・村田 源 (1979) 『原色日本植物図鑑本編 I・II』 保育社
- 県教委・財協会 (1998) 『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書 2 赤野井湾遺跡』
- 県教委・公財協会 (2014) 『蒲生スマートインターチェンジ設置工事 (県事業区域) に伴う発掘調査報告書 蛭子田遺跡 2』
- 重岡卓 (2001) 「古代末における「在地産タタキ炭」についての基礎的研究-近江の事例を中心に-」 『紀要』 第14号 財協会
- 高地 謙・伊東隆夫 (1988) 『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣出版
- 奈良国立文化財研究所 (1985) 『奈良国立文化財研究所史料 第27冊 本器集成図録-近畿古代篇-』
- 奈良国立文化財研究所 (1993) 『奈良国立文化財研究所史料 第36冊 本器集成図録-近畿原始篇-』
- 奈良文化財研究所 (2019) 『奈良文化財研究所史料 第92冊 本器集成図録-飛鳥藤原篇 I-』

- 能登川町教育委員会（1994）『能登川町埋蔵文化財調査報告書27 斗西遺跡（第2次）』
- 林 昭三（1991）『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- 東村純子（2004）『古代日本の紡織体制-枠・認めかけ・糸枠の分析から-』『史林』87巻5号 史学研究会
- 東村純子（2011）『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房
- 樋上昇（2000）『3～5世紀の地域間交流-東海系曲柄鋸の波及と展開-』『日本考古学』第10号、日本考古学協会
- 宮崎幹也（1992）『滋賀県下におけるカマドの導入と普及』『滋賀考古』第8号 滋賀考古学研究会
- 宮崎幹也（2022）『古代における六世紀の移住民集落』『淡海文化財論叢』第十四輯 淡海文化財論叢刊行会

第5章 総括

第1節 はじめに

今回の23次調査では、標高93.80～95.10m前後で、竪穴建物13棟、掘立柱建物13棟、井戸2基のほか、複数の溝・河道などの遺構を検出し、これらにもなつて縄文時代中期～鎌倉時代の遺物が出土した。

福満遺跡の様相は、これまでの調査成果もあわせて複数の画期が認められる。ここでは「福満遺跡1期」～「福満遺跡8期」と仮称し、概観したい。

なお、福満遺跡の周辺では、同様の時期の遺構が確認されており、深く関わりのあるものと考えられる。このため本章では、福満遺跡を中心に近隣遺跡との関わりの中で、今回の調査結果を整理することで、まとめとしたい。

第2節 各期の様相 (図5-1～4・表5-1)¹⁾

(1) 福満遺跡1期 —縄文時代の様相—

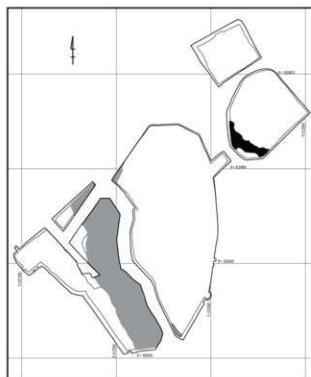
今回の調査結果の概要 今回の調査では当該期の建物など明確な遺構は検出されなかったものの、A8区河道S9から中期の土器が、一連の河道であるA1区河道S9・A8区河道S9と、B区河道S47から後期～晩期の土器が出土した。

周辺遺跡と福満遺跡 これまでの調査では、草創期については福満遺跡およびその周辺で遺跡は確認されておらず、早期についても福満遺跡から南西約6kmの屋中寺庵寺遺跡で土器が出土し、北東に5kmほど離れた磯山に所在する磯山城遺跡で土器や屈葬人骨がみついているものの、いずれも琵琶湖岸に近く、福満遺跡からはやや離れた位置に所在する遺跡である。

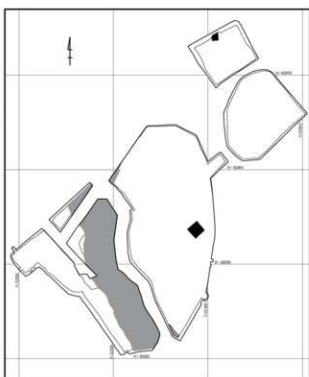
前期については、今回の23次調査の北西側で行われた1次調査で、前期末の大蔵山式土器が1点みついている。しかしながら周辺遺跡を含め遺構は確認されておらず、詳細は不明である。

中期末以降は周辺で遺跡が増加し、福満遺跡の南方を流れる犬上川流域では、敏満寺遺跡で竪穴建物、小川原遺跡で7,000mほどの範囲に配石遺構・土器棺墓・平地住居・貯蔵穴など、上流部に形成される扇状地の扇頂～扇中部を中心に、集落がみついている。また近年では、下流域の氾濫原に立地する福満遺跡の南東に位置する丁田遺跡でも、竪穴建物と埋設土器が確認されている。墓の可能性のある埋設土器からは翡翠大珠が出土しており、北陸地方からの流通品と理解されている。今回の調査ではA8区河道S9において土器(871)が確認され、また3次調査では落ち込みから中期末の北白川C式～後期前葉の北白川上層式2期の土器が多量に出土しており、福満遺跡近隣においても生活域が想定される。

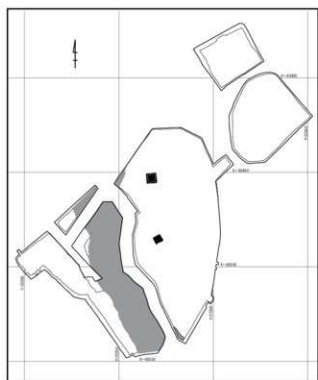
後期から晩期にかけては、犬上川上流域の扇頂から扇中部に所在する金屋遺跡で竪穴建物、北落遺跡で配石遺構、土田遺跡の土器棺墓など、小規模な集落が確認されている。近隣では、品井戸遺跡で土器が出土しているほかは、建物など明確な遺構を伴う遺跡はみつからない。今回の調査では、A1区河道S9・A8区河道S9・B区河道S47において土器が出土しており、出土した縄文土器の大半はこの時期のものである。特にB区の下層遺構である河道S47の肩部には、後期前葉の北白川上層式2期の比較的大きな土器片がほとんど摩滅していない状態で確認された。



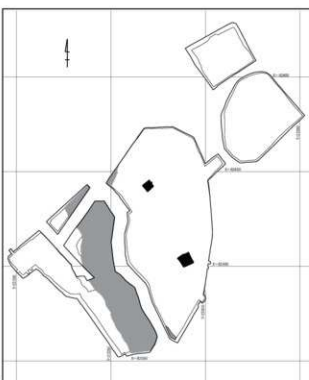
福満遺跡 1期（縄文時代晩期）



福満遺跡 3期（弥生時代後期）

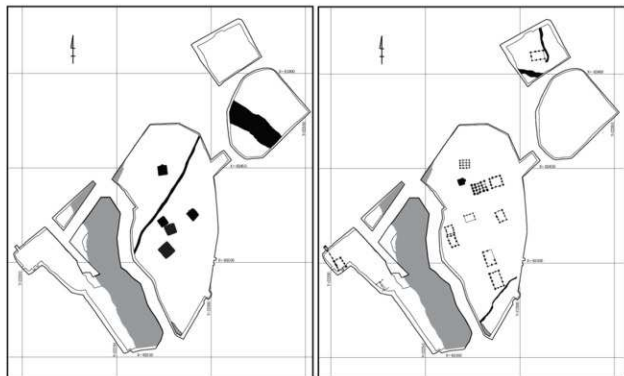


福満遺跡 4期（古墳時代前期）



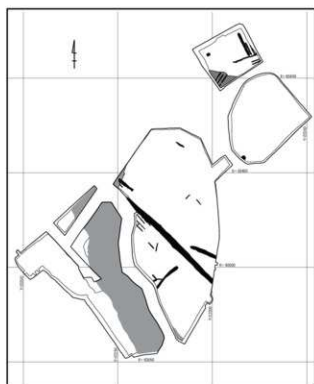
福満遺跡 5期（古墳時代中期）

図 5-1 福満遺跡23次調査 主な遺構の変遷(1)



福満遺跡 6期（古墳時代後期）

福満遺跡 7期（飛鳥時代～平安時代前期）



福満遺跡 8期（平安時代中期以降）



図 5-1 福満遺跡23次調査 主な遺構の変遷(2)



図 5-2 福満遺跡1～30次の調査位置

また、1次・2次調査において河道から多量に、後期から晩期後半を主体とする土器が出土しており、西日本における凸帯文期の土器編年の基準資料のひとつにもなっている(泉1990)。これらの土器も破片が大きく、ほとんど摩滅していない状態であった。こうした、今回の調査や1次・2次調査の土器の状況からは、後期～晩期にかけての集落が近隣に存在した可能性が示唆される。

晩期以降には、県内においても稲作農耕文化が伝播することが知られる。福満遺跡では1次・2次調査で鉢の頸部を絞った小型の「変容壺」とも呼ばれる、従来の鉢を元に新しい器種である壺を真似た土器が出土しており、農耕文化との接触が認識される。一方、石製品は石鏃や磨石など狩猟・採集を主体とする縄文時代以来の内容であり、水田遺構や関連遺物は確認されていない。今回の調査ではA8区河道S9において晩期末～弥生時代前期の長原式(852)や、樫王式と判断される東海地方の土器(874)が出土している。これまでの調査で出土したものも含め、福満遺跡出土の当該期の遺物は、いまのところ明確な遺構に伴うものではないが、犬上川右岸の氾濫原と微高地に形成される福満遺跡および周辺の、稲作農耕の伝播による変容期の様相を知る上で、注目される資料といえる。

ところで、縄文時代の遺跡については、遺物のみ出土する遺跡が多いのが現状である。しかしながら、例えば周辺の入江内湖遺跡や矢倉川遺跡では、地表面より3m程下から豊富な遺物が出土しており(県教委・財協会2007、県教委・公財協会2022)、沖積地等の下層に遺跡の存在が示唆され、今後の事例の増加が待たれる。

このように、福満遺跡とその近隣では、縄文時代については明確な遺構の広がり確認されおらず、後～晩期によく近隣の集落の存在がうかがえる。特に晩期末の福満遺跡出土遺物の様相は、稲作農耕文化変容期のこの地域の様子を示す事例として注目される。

また、周辺遺跡において集落が確認されていない中で、福満遺跡では前期末の土器が出土しており、今後、福満遺跡および近隣で、当該期の建物など明確な遺構が検出される可能性を残している。

(2) 福満遺跡2期 —弥生時代中期の様相— (図5-2)

今回の調査結果の概要 今回の調査では当該期の遺構は検出されていない。

周辺遺跡と福満遺跡 福満遺跡周辺に目を向けると、前期については、犬上川流域では、尼子遺跡や北落遺跡・金屋遺跡などの扇状地扇頂から扇尖にかけて当該期の土器が出土するほか、5kmほど南東に離れた氾濫原に位置する稲里遺跡で、小穴から大量の稲穂とともにアワ・ヒエ・キビの種子が出土している。福満遺跡近隣では竹ヶ鼻廃寺遺跡で土器が出土しているほかは明確な遺構は確認されておらず、実態はわかっていない。

福満遺跡で遺構を伴う明瞭な生活の痕跡が確認されるのは、いまのところ中期以降である。とりわけ、今回の調査範囲の20mほど北西で行われた25次調査において、中期の方形周溝墓15基が検出され、墓域の広がり確認された。周溝墓の規模は周溝の内側で3～6m前後のものと、8～10m前後の大型のものがある。

同調査では、墳丘規模・軸の方向・周溝共有の有無・周溝の形態・周溝の規模・連結の有無などの特徴から、検出された周溝墓が4群に分かれ、弥生時代中期前葉から中期後葉までの間で

おむね東から西に向かって、群単位の変遷が確認された。このうち遺物や重複関係から時期の明らかな3群がそれぞれ中期前葉・中葉・後葉のもので、中期前葉～中期中葉までは周溝を共有して墓が隣接し、中期後葉には周溝を共有しなくなり墓同士が一定の距離を置いた配置へと変化する様子が捉えられた。さらに、この3群は互いに重層関係がなく前代の周溝墓を損なわないよう計画的配置がなされていた。

方形周溝墓は弥生時代～古墳時代前期に県内で一般的にみられる墓制であり、福満遺跡の所在する犬上川流域周辺では、これまで古墳時代初頭の庄内式併行期のものが散見される状態で、25次調査で検出された方形周溝墓群は、現段階で最も古いものとなっている（林2020）。

調査面積の多寡もあろうが、この25次調査の成果は犬上川流域において弥生時代中期の方形周溝墓がまとめて確認された貴重な事例として捉えられる。

また、中期前葉～後葉をととして福満遺跡の同じエリアに営まれた墓域が、その後同エリアから全く姿を消してしまうことも留意される点である。中期後葉から後期初頭にかけては、遺跡の断絶や移動が近畿地方で広範に確認されており¹²⁾、自然災害による影響など、その要因と地域の実態の解明については今後の課題となろう。

こうした福満遺跡の墓域の広がりについては、周溝墓がまとめて検出された25次調査を中心

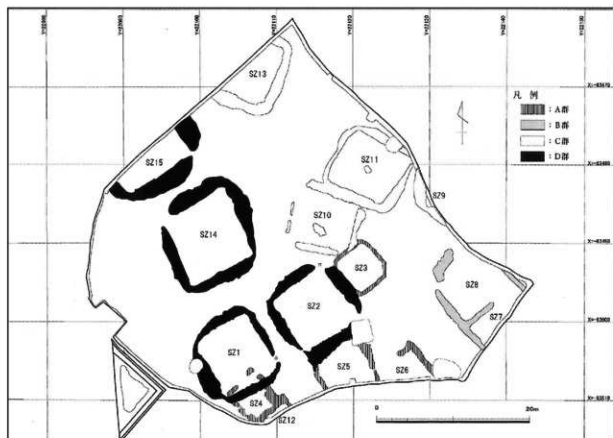


図5-3 福満遺跡25次調査の方形周溝墓群（林2020）

に、その北東部に隣接する16次調査でも方形周溝墓の一部が見つかったものの、さらに北東の2次調査・12次調査・19次調査では検出されていない。また南西側の17次調査では弥生時代の遺構・遺物はまったく確認されておらず、今回の23次調査においても明確に中期に属するものは出土していない。南東部については25次調査区の端に周溝の一部が確認されているものの、南東部周辺での調査件数が皆無であるため、実態は不詳である。これらのことから、福満遺跡周辺の墓域の広がり、25次調査区を中心に、北東部・南西部についてはこれ以上の広がりはないと推定され、北西部はより新しい時期の墓域の展開の可能性が示唆される。また南東部についてはさらに広がるのが想定されるが、その範囲についてはいまだ明確ではない。

このように、弥生時代中期の福満遺跡の様相については、25次調査成果によって中期の墓域の一端がとらえられるようになってきた。一方、当該期の水田などの生産域の調査事例は皆無である。また集落については犬上川流域では扇状地の扇端部から下流域の沖積低地に集落が展開する傾向にあり、福満遺跡から南東にやや離れた宇曾川流域で、川瀬馬場遺跡が中期の集落として、中期～後期の集落として妙楽寺遺跡が知られるが、福満遺跡とその周辺では集落域は見つからないのが現状である。

弥生時代中期においては、墓域について、かろうじてその一端が明らかになってきた中期前葉から後葉にかけての詳細、またその前後の墓域の所在を含めた実態、さらに当該期の集落域および水田などの生産域の解明が今後の課題となる。

(3) 福満遺跡3期 —弥生時代後期の様相—

今回の調査結果の概要 福満遺跡で明確な建物遺構を伴う集落が確認される時期である。今回の調査において、堅穴建物2棟（A3区堅穴建物S200、C区堅穴建物S134）が検出されており、それぞれ平面形が方形で、一辺が約6m・約3.5mのものである。A3区堅穴建物S200は中央より少しずれた位置に炬を持つ。

また、一連の河道と判断されるA1区河道S9・A4区河道S24・A7区河道S263・A8区河道S9・D区河道S9については、鎌倉時代には埋没したと推定され、幅広い時期の遺物を含むため機能時期を限定するのは困難であるが、当該期の土器や木製品が出土しており、この頃にも機能した可能性がある。

周辺遺跡と福満遺跡 当該期には、前段階に福満遺跡で展開された墓域は姿を消し、近隣の品井戸遺跡で大型の方形周溝墓が2基確認されている。1基は2次調査によって、現在の福満公園の北側でみつかったもので、もう1基は近年行われた5次調査によって同公園の西側で検出されたものである。いずれも周溝内側で一辺約15mを測る大型の周溝墓である。8次調査では周溝内側から複数の主体部も確認された。

なお、福満遺跡5次・8次・18次調査においては、弥生時代後期～古墳時代初頭とみられる方形周溝墓が散見される。

弥生時代後期においては、集落域は福満遺跡に、墓域は品井戸遺跡を中心にその広がりが確認される一方、水田など生産域は不明となっている。

(4) 福満遺跡4期 —古墳時代前期の様相—

今回の調査結果の概要 福満遺跡では前段階に引き続き集落が営まれる。今回の調査では、堅穴建物3棟（A3区堅穴建物S379、A5区堅穴建物S276・S472）が検出された。堅穴建物は一辺が4～5mほどのもので、中央付近に炉を持つものである。これまでの調査では、4次調査でも古墳時代初頭の堅穴建物が確認されている。

また、一連の河道と判断されるA1区河道S9・A4区河道S24・A7区河道S263・A8区河道S9・D区河道S9については、鎌倉時代には埋没したと推定され、幅広い時期の遺物を含むため機能時期を限定するのは困難であるが、当該期の土器や木製品が出土しており、この頃にも機能していた可能性がある。

周辺遺跡と福満遺跡 近隣では、竹ヶ鼻廃寺遺跡整地土下層遺構において、堅穴建物3棟が確認されている。また同遺跡では、1次調査および15次調査で、一辺8mを超える大型の堅穴建物が近接して検出されている。15次調査の堅穴建物は、建物掘方の内縁に幅0.15mほどの壁溝を持ち、その両側には直径約0.1mの柱穴が並ぶ。さらに約1m外側には外周溝と考えられる幅約0.15mの溝が配され、溝の両側に直径約0.1mの柱穴が並ぶ構造を持つ。建物内部には中央付近に炉を持つ。

さらに北東に所在する山之脇遺跡でも古墳時代初頭の堅穴建物が確認されており、一帯に集落の広がりが見込まれる。

建物構造については、県内ではおおむね弥生時代中期頃から堅穴建物の平面形状が円形から方形になり、その後は多様な構造のものがあることが知られる。竹ヶ鼻廃寺遺跡15次調査で検出された建物構造は福満遺跡のこれまでの調査では検出されていないものである。一方、近年の調査で、大上川右岸域では福満遺跡に隣接する品井戸遺跡や上流域に所在する塚本遺跡でも確認されているほか、左岸域では極楽寺遺跡などで検出されている。近隣の竹ヶ鼻廃寺遺跡でみられる建物構造が地域的なものであるのか、バリエーションのひとつであるのか、福満遺跡でも検出される可能性があるのかといった課題は、今後の調査の建物精査によって明らかにされることが期待される。

(5) 福満遺跡5期 —古墳時代中期の様相—

今回の調査結果の概要 引き続き集落が営まれる。今回の調査では、堅穴建物2棟（A3区堅穴建物S1、A5区堅穴建物S279）が検出された。A5区堅穴建物S279は、建物北東辺の中央よりやや北寄りにカマドを備える4本支柱の建物である。カマドは、袖や天井部が失われており、燃焼部と奥壁から延びる煙道をわずかに外に張り出す構造を呈する。

滋賀県内で確認される堅穴建物の造り付けカマドは、おおむね古墳時代中期後半以降に朝鮮半島系移住民によってもたらされたと考えられており、今回の調査結果はカマド採用期の事例として興味深い。

もうひとつのA3区堅穴建物S1は後出する溝により中央部を大きく削平されており、建物内の諸施設などの詳細を捉えるのは困難であるが、軟質の朝鮮半島系土器が確認された。

ほかに一連の河道と判断されるA1区河道S9・A4区河道S24・A7区河道S263・A8区河道

S9・D区河道S9については、鎌倉時代には埋没したと推定され、幅広い時期の遺物を含むため機能時期を限定するのは困難であるが、当該期の土器や木製品が出土しており、この頃にも機能していた可能性がある。このなかでA1区河道S9やA8区河道S9からも複数の軟質の朝鮮半島系土器が確認されている。

周辺遺跡と福満遺跡 近隣においても、明らかに中期といえる建物などは確認されていない。福満遺跡の今回の調査で検出された建物は、当該期の集落の様相の一端がうかがえる事例となった。

また、福満遺跡15次調査では溝から朝鮮半島系土器が出土しているほか、中期後半の埋没古墳がみつかり、埴輪片も出土している。

これらの集落や墓と直接的な関りを断定できないものの、福満遺跡の所在する湖東地域には依知泰氏など、いわゆる渡来系氏族との密接な関りが従来から指摘され（彦根市2007、大橋2010）、国策としての蒲生郡・神崎郡への渡来系移住民による開発³⁷などの政策が知られている。朝鮮半島系土器を所有する福満遺跡の建物を含め、当該期に展開される集落も、こうした渡来系移住民との関りが示唆される。

(6) 福満遺跡6期 一古墳時代後期の様相一

今回の調査結果の概要 福満遺跡で集落が拡大する時期である。集落は堅穴建物を主体に構成されており、今回の調査では、堅穴建物5棟（A3区堅穴建物S260・S312・S343、A5区堅穴建物S209・S360）、溝1条（一連の溝であるA5区溝S145・A7区溝S378）、河道（B区河道S40）が検出された。このうち、A3区S260・S343については、重複関係等からひとまず6期としたが、さらに遡る可能性がある。

これらの堅穴建物はいずれも平面形状が方形で、一辺5m前後の規模を呈する。確認できたものは4本支柱のものである。建物の北または北東辺、北西辺、南東辺の、中央かやや左右いずれかに寄せて、壁面に造り付けのカマドを持ち、カマド奥部、あるいは煙道部を建物から外に張り出す。

当該期の検出された堅穴建物は少しずつ異なる構造を呈しており、このうち、A5区堅穴建物S209は北辺中央部にカマドを持ち、カマド袖部前方に焚口飾りあるいは門柱石の痕跡とも思われるカマドを補強するための造作と考えられる小穴が配置される。カマド構築時の補強材としては、石のほか土器や瓦が用いられることがあるが（桐生2007、県教委・財協会1996、佐伯2015、

（財）京都市埋蔵文化財研究所2006）、この建物のカマドは焚口前面のみを補強していたものと推定される。カマド袖と東辺の間には隅丸方形の屋内土坑を設ける。また建物掘方縁部には壁溝が巡り、壁溝の内側にはこれに沿うように小穴（壁支柱）が並ぶ構造を呈する。この壁溝はほぼ全周するが、カマド袖とその対面の一部では壁溝が途切れる。カマド背後の壁構造については不明であるが、壁溝の巡る部分とは別の構築材であることも考えられ、また対面の途切れる部分は入口施設の可能性が示唆される。

また、A3区堅穴建物S312の北西辺に構築されるカマドは、A5区堅穴建物S209カマド同様、焚口付近の両側に小穴を持つほか、カマド南東側に棚状施設と考えられる平坦面を設ける。このカマドは長軸が約1.6m、残存する煙道部を含めると2m程と細長い形状を呈しており、縦方向

の2つ掛け構造のものであった可能性がある。カマド袖と東辺の間には隅丸方形の屋内土坑を設ける。

さらに、A5区竪穴建物S360は、北東辺中央部より南寄りにカマドを設け、建物内縁部には壁溝が確認された。また、建物掘方基底の一部には厚さ約4mmの均質で硬い橙色土の貼床がみられた。当該建物は一部に2～10cm程の礫が多量に混じる基盤層に築かれており、床面を平滑に、居住性を向上させるための造作と推定される。一方、今回の調査で他に検出された竪穴建物には明確な貼床は確認されておらず、建物はシルト質を主体とする基盤層を掘り込んで造られていた。福満遺跡では生活面である床面の居住性を一定の水準にするため、快適性を高めるために、建物の一部に貼り床を採用していたと考えられる。

また、一連の河道と判断されるA1区道S9・A4区道S24・A7区道S263・A8区道S9・D区S9については、鎌倉時代には埋没したと推定され、幅広い時期の遺物を含むため機能時期を限定するのは困難であるが、当該期の土器や木製品が出土しており、この項にも機能していた可能性がある。

周辺遺跡と福満遺跡 今回の調査で検出したA5区S209のように、壁溝と壁支柱を備える事例は福満遺跡のこれまでの調査では確認されない構造のものであるが、時期は異なるものの神ノ木遺跡・竹ヶ鼻廃寺遺跡・品井戸遺跡・塚本遺跡・極楽寺遺跡などの近年の彦根市内の調査で検出されており、県内外でもみられる構造である（望月2007、宮崎2021）。福満遺跡周辺の竪穴建物について、今後の調査事例の増加により、建物構造の検討がなされることに期待したい。

集落の広がりについては、これまでに行われた4次調査や、近隣の竹ヶ鼻廃寺遺跡1～4次調査においても当該期の竪穴建物が複数検出されており、福満遺跡近隣では古墳時代後期集落の広がりが広範に認められる。

一方、福満遺跡1次調査で土坑から須恵器と共に子持ち勾玉が出土するほか、近隣に所在する椿塚は当該期の古墳ともされるが、実態は不明である。

(7) 福満遺跡7期 一飛鳥時代～平安時代前期の様相一

今回の調査結果の概要 福満遺跡で掘立柱建物を主体とした遺構群が大規模に展開される時期である。今回の調査では、竪穴建物1棟（A5区S473）、掘立柱建物13棟（A2区掘立柱建物SB1～SB3、A3区掘立柱建物SB3～SB6、A5区掘立柱建物SB7～SB10、A7区掘立柱建物SB11・SB12）・柵1列（A2区柵SA1）・溝3条（一連の溝A3区溝S2・A7区溝S45、C区溝S30・S271）が確認され、このうちA5区掘立柱建物SB7は総柱構造を持つものであり、その北東に軸をそろえて並ぶA5区掘立柱建物SB8、掘立柱建物SB7の南西に位置する掘立柱建物SB9とともに東西棟建物である。

これらは、竪穴建物をはじめとする古墳時代後期までの遺構の上に広範囲に構築されており、古墳時代の溝（A3区溝S145・A7区溝S378）の廃絶に顕著にみられるように、一帯の前代の遺構を埋めて、新たに掘立柱建物を構築したものと判断される。

検出された掘立柱建物は、大別して2方向の主軸方位を持ち、正南北に近い主軸のもの、西に傾く主軸を持つものがある。前者はN5°Wを指向するA5区SB10、後者はこれ以外の建物で

表 5-1 建物遺構一覧

種類	遺構	間数	規模 (m)	主軸方位	備考
竪穴建物	A 3 区 S200	—	6.5 × 6.5	N41° W	炉
	A 3 区 S379	—	4.0 × 4.5	N30° W	炉
	A 3 区 S1	—	6.5 × 6.5	N41° W	
	A 3 区 S312	—	5.5 × 5.0	N42° W	カマド
	A 3 区 S260	—	6.7 × 6.5	N41° W	
	A 3 区 S343	—	5.5 × (5.0)	N20° W	
	A 5 区 S276	—	5.2 × 5.2	N 6 ° W	
	A 5 区 S472	—	4.0 × 4.0	N 5 ° W	
	A 5 区 S473	—	3.5 × 3.5	N18° W	カマド
	A 5 区 S279	—	4.5 × 4.5	N30° W	カマド
	A 5 区 S209	—	5.0 × 5.0	N 7 ° W	カマド
	A 5 区 S360	—	4.7 × (3.4)	N36° W	カマド、貼床
	C 区 S134	—	(3.5) × 3.5	N 7 ° W	
掘立柱建物	A 2 区 SB1	2 × 3	4.2 × 5.7	N35° W	
	A 2 区 SB2	1 以上 × 2	1.8 以上 × 4.5	N35° W	
	A 2 区 SB3	1 以上 × 2	1.8 以上 × 5.1	N30° W	
	A 3 区 SB4	2 × 4	4.8 × 7.96	N18° W	
	A 3 区 SB5	3 × 4	5.1 × 8.4	N18° W	
	A 3 区 SB6	2 × 3	3.0 × 6.0	N24° W	
	A 5 区 SB7	3 × 4	5.01 × 7.12	N18° W	東西棟、総柱建物
	A 5 区 SB8	3 × 3	5.1 × 6.0	N18° W	東西棟
	A 5 区 SB9	2 × 3	3.6 × 5.1	N18° W	東西棟建物
	A 5 区 SB10	3 × 3	4.14 × 4.98	N 5 ° W	総柱建物
	A 7 区 SB11	2 × 3	3.8 × 4.32	N18° W	
	A 7 区 SB12	2 × 3	3.92 × 5.82	N23° W	
	C 区 SB13	2 × 3	4.5 × 6.9	N 8 ° W	東西棟

N18°W～N35°Wである。後者を詳しくみると、東側のA3区・A5区・A7区にはN18°W～N24°Wの一群が、西側のA2区では東側の一団と40mほど離れてN30°W～N35°Wの一群が広がる。A2区の西方で行われた25次調査でも、N32°Wを指向する掘立柱建物3棟や欄列が検出されており、A2区で検出された建物と一団のものと捉えられる。なお、25次調査で検出された掘立柱建物SB1・SB2は柱並びや主軸方位、柱間がほぼ同じであり、一連の建物となるように見受けられ、その場合は長舎と捉えられるものである。さらに26次調査ではN22°Wに主軸を持つ掘立柱建物が確認されている。これらが同一時期の距離的な差による主軸の振れであるのか、東側と西側の一団で時期差をもつのかは現段階では判断し難い。

また、今回の調査地の北東部で行われた4次調査では、N12°Wを指向する2棟の掘立柱建物、N32°Wを指向する平安時代前期以前の総柱建物を含む4棟の掘立柱建物が確認されており、23次・25次調査で検出された建物群との関係の解明は今後の検討課題のひとつであろう。

23次調査の掘立柱建物の年代については、主軸を西に傾ける一群は、重複する下層の溝を埋めて7～8世紀に建てられており、さらに隣接する建物間の距離などから鑑みて、さらに細分される可能性を持つ。一方、今回の調査では、これらと主軸方位を違えるほぼ正南北を指向する建物との直接的な先後関係は不明である。

また、竪穴建物A5区S473については、県下では8世紀の竪穴建物の床面積が縮小されカマドが屋外に突出する傾向があり¹³、当該建物も一辺が約3.5mと小型で、カマドをすべて外方に突出させる構造を持つ。この竪穴建物は南北方位を指向する掘立柱建物SB10と併存していた可能性もあり、その性格については留意されよう。

また、一連の河道と判断されるA1区河道S9・A4区河道S24・A7区河道S263・A8区河道S9・D区河道S9については、鎌倉時代には埋没したと推定され、幅広い時期の遺物を含むため機能時期を限定するのは困難であるが、当該期の土器や木製品が出土しており、この頃にも機能していた可能性がある。

竹ヶ鼻廃寺遺跡の様相 まず犬上川の対岸（左岸）ではあるが、福満遺跡の南西に所在する神ノ木遺跡では、1次調査で、30枚以上の和同開珎がいくつかの群をなして遺物包含層から出土しているほか、2次調査においても掘立柱建物が検出されているなど、周辺の奈良時代の様相をうかがわせている。次に犬上川右岸では福満遺跡の近隣の遺跡にも当該期の同様の遺構が確認されており、これらを概観しておく。とりわけ当該期においては、南方に位置する竹ヶ鼻廃寺遺跡で広範に遺構が確認されており、福満遺跡を考える上で欠かせない事例である。しかしながら、同遺跡は寺院と官衙推定域、またそれ以外の遺構など時期や性格を混同されることもしばしば見受けられるため、ここで同遺跡について概観し、整理しておく。

なお、飛鳥時代後期の白鳳期には各地に寺院が建立され、滋賀県内でも遺跡から出土する瓦によって多くの寺院が存在したと想定されるものの、当時の寺院名がわかっているものはほとんどなく、寺院が建立された経緯のわかるものはほとんどない（彦根市2007）。福満遺跡周辺においても例外ではなく、白鳳期の寺院の詳細についてはよくわかっていないのが実情であり、竹ヶ鼻廃寺もその一つである。

竹ヶ鼻廃寺遺跡は古瓦の散布地として古くから知られ、採集された瓦によって白鳳時代創建の

犬上郡最古の郡を代表する古代寺院と考えられてきた。同遺跡においては、犬上郡に広く普及するN31°E～N34°Eの条里地割のなかにあつて、小字「上寺街道」「下寺街道」「石仏」「薬師堂」「四反地」については、ほぼ正南北の地割を呈しており、この東西約200m・南北約300mの範囲に寺域が想定されてきた。1983年（昭和58年）以降複数回の発掘調査が行われ、3次調査では、寺院跡とされている範囲が厚さ20cm程の土を盛って整地されており、その整地層を基盤層として、ほぼ正南北に主軸を持つ、総柱建物や東西棟建物、欄列など規則性をもった掘立柱建物群がまとまりを持って広範に検出された。整地層の時期は、含まれている遺物などから奈良時代後半～平安時代頃と考えられている。

調査では多くの瓦が出土したものの、塔や金堂、講堂などの礎石建ちの寺院関係遺構は検出されなかった。一方、隣接する品井戸遺跡からは石帯など、官衛的な遺物がみつかっている。これらから、寺院は近隣に存在していたものの、当初から寺域と想定された範囲は官衛施設で、犬上郡衛の可能性が高いとされている。

竹ヶ鼻廃寺の時期については、出土した瓦のうち最古形式のものが山田寺式のもので、湖東平野でも古い様相のものとして認識されており、早い段階で創建されたものと考えられている。さらに、周辺の古代寺院と推定されている出土瓦より新しい段階である平城宮式のものを含むため、竹ヶ鼻廃寺は、7世紀後半～8世紀代の寺院と捉えられている（北村2001）。しかしながら、寺院址の位置や具体的な範囲については、依然として明確ではない。

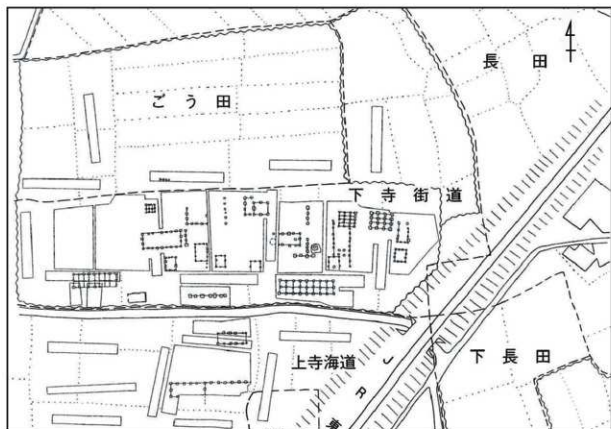


図5-4 竹ヶ鼻廃寺遺跡の官衛建物群(彦根市2007)

その後、6次調査では、遺跡の南東縁部で、平安時代末～鎌倉時代の整地層の下層に部分的に平安時代末の水田、さらに下に平安時代以前の遺構が存在することが判明し、遺跡の縁部では整地層の時期や整地状況が異なることが確認された。11次調査では整地層の検討がなされ、時期や厚さなど、竹ヶ鼻廃寺遺跡のなかでも整地状況が一様でないことが認識された。

また近年行われた15次調査では、古墳時代前期の堅穴建物を非常に堅緻に埋め、掘立柱建物を建て、さらに廃絶後に盛土整地して再度、掘立柱建物を建てた状況が確認されている。同遺跡の官衙推定域以外では、約20cmの厚さをもつ整地層の下に建物の主軸方位を西傾させる建物が検出されている。

今後、竹ヶ鼻廃寺遺跡のみならず、福満遺跡をはじめとする周辺遺跡の遺構と性格の解明のためにも、整地層とその上面に構築される遺構の時期と性格を整理していく必要があると思われる。竹ヶ鼻廃寺の廃絶と整地土については、霊亀二年(716年)寺院併合令の影響等も検討に加える必要がある。

さて、竹ヶ鼻廃寺遺跡で検出された掘立柱建物のうち、南北方位を指向する掘立柱建物群は、整地層との関係から奈良時代後半から平安時代頃と捉えられている。これとは別に遺跡の南東部では、主軸を西に振るもの、東に振るものが存在する。後者は周辺に広く普及する条里方位および河川の影響を受けた方位を指向しており、平安時代末～鎌倉時代以降のものとも考えられるが、一方、前者の主軸を西傾させるものは7次調査で7世紀頃と考えられる東西棟の掘立柱建物が検出されており、官衙的施設にみられる正南北を指向する建物に先行するものである。

このような状況を踏まえ、竹ヶ鼻廃寺遺跡の検出遺構について整理すると、①当初想定されてきた南北地割景観の広がる区画には、発掘調査の結果、寺院遺構は検出されず、遺跡名ともなっている竹ヶ鼻廃寺そのものについては寺院規模や位置等その実態は不詳であり、出土瓦から7世紀後半～8世紀代の年代が与えられている。②当初寺域と想定されてきた区画にはほぼ正南北方位を指向する掘立柱建物がまぎって広範に検出されている。また、この建物群は犬上郡衙の可能性が高いと考えられている。③この南北方位建物群は廃絶寺院の瓦を含む整地土の上に構築されており、建物群は整地層の年代から奈良時代後半～平安時代頃と捉えられる。④この南北方位建物群により構成される官衙的施設の範囲以外では、整地土と遺構の関係が一様でなく、南北方位を指向する建物群の前後の時期の整地および建物が確認されている。縁部では耕地化など建物建築に伴わない中世の整地も行われており、時期を含め具体的様相はよくわかっていない。⑤掘立柱建物群以前に古墳時代前期・後期の堅穴建物群が展開されている。以上のようなことが整理される。

また、竹ヶ鼻廃寺遺跡の変遷は、古墳時代前期の堅穴建物を主体とする集落の出現、古墳時代後期の堅穴建物を主体とする集落の広がり、白鳳期～奈良時代頃に存在した竹ヶ鼻廃寺、奈良時代後半～平安時代頃に廃絶寺院の瓦を含む整地土の上に建造された規則性を持って建ち並ぶ南北方位の掘立柱建物群、その前後に展開される堅緻な埋め立てや盛土整地を伴う掘立柱建物の展開が捉えられる。この中には南北方位建物群に先行して、主軸を西傾させる7世紀頃の掘立柱建物が確認されている。

近隣遺跡の状況 近隣の遺跡についてみると、福満遺跡の南東に接する品井戸遺跡では、ほ

は正南北方位の総柱建物のほか、 $N15^{\circ}W \sim N26^{\circ}W$ に主軸を持つ掘立柱建物が検出されている。いずれも時期は不明である。

また、福満遺跡の西方に近接する須川遺跡では、次期不明の、ほぼ正南北方位に主軸を持つ掘立柱建物が確認されている。

さらに、福満遺跡の北東に位置する道ノ下遺跡では7世紀後半～8世紀前半の堅穴建物および $N33^{\circ}W \sim N34^{\circ}W$ に主軸を持つ掘立柱建物が検出されている。

竹ヶ鼻廃寺遺跡の南東に所在する丁田遺跡は、白鳳期に創建された高宮廃寺跡と云われる遊行塚遺跡の300m程南西に位置する。丁田遺跡では、7世紀後半～8世紀前半に一辺2～3m前後の小型の堅穴建物群が形成され、8世紀後半～9世紀前半には小型堅穴建物に $N31^{\circ}W \sim N40^{\circ}W$ に主軸を持つ掘立柱建物群・柵を加えた構成へと移行し、9世紀後半以降には耕地化が進む様子が確認されている。小型の堅穴建物は同時期の官衙や寺院に伴う工房跡と考えられている。

福満遺跡の掘立柱建物の時期 今回の調査で検出された掘立柱建物のうち、主軸を西に傾ける一群については出土遺物や遺構の重複関係から7～8世紀と判断されるものである。

一方、南北方位を指向する掘立柱建物は7世紀以降と考えられるものの、詳細な年代は今回の調査では判明しなかった。しかしながら、その主軸方位から近接する竹ヶ鼻廃寺遺跡の南北方位建物群との関係が想定され、また同遺跡ではこれに先行して主軸を西傾させる掘立柱建物が確認されていることから、福満遺跡で検出された南北方位を指向する掘立柱建物は、奈良時代後半～平安時代頃とも推定される。

福満遺跡の掘立柱建物群については、A2区で確認された $N30^{\circ}W \sim N35^{\circ}W$ に主軸を持つ一群を丁田遺跡検出の掘立柱建物と同様の時期とすると、A3区およびA5区に広がる $N18^{\circ}W \sim N24^{\circ}W$ の建物群が7世紀頃に構築され、次にA2区で確認された $N30^{\circ}W \sim N35^{\circ}W$ の一群が8世紀後半～9世紀前半に、A5区で検出された $N5^{\circ}W$ が9世紀後半頃に建てられたとも推定される。しかしながら、現段階では直接的関係性を求めるのは躊躇される。丁田遺跡の検出遺構から推定される年代観については可能性というに留めておきたい。

いずれにしろ、今回の調査で確認された主軸を西傾させる掘立柱建物の一群については、出土遺物や遺構の重複関係から7～8世紀のものと判断されるのであり、細分される可能性を持つものの、現段階では、南北方位建物に先行する建物群と捉えておきたい。

福満遺跡とその周辺の整備 今回の調査範囲や周辺には、倉庫と考えられる総柱建物を含む掘立柱建物群が同様の主軸を呈して広がる状況から、当該期には、物資の集約や管理を担ったと考えられる建物群が、福満遺跡周辺に大体的に展開されていたと推定される。倉庫はいまのところ複数棟が建ち並ぶような状況にはなく、一時的保管を行うような施設または、広範囲の物資というより郷など近隣の物資の集約を担う施設と判断される。

また、これら建物群構築に伴う整地も広範囲に行われた。竹ヶ鼻廃寺遺跡の南北方位建物群を主体とする官衙的施設はもとより、福満遺跡周辺においても、飛鳥時代～奈良時代にかけて広範な計画性をもった施設が展開されていた。そして、そうした施設を構成する建物群の中心は、飛鳥時代から平安時代にかけて、福満遺跡周辺から竹ヶ鼻廃寺遺跡に移行したことも想定される。ただし、その性格については、竹ヶ鼻廃寺遺跡の南北方位建物群は官衙的性格の遺構群とされて

いるが、福満遺跡の当該期の建物群は軸をそろえて並ぶ様子などはみられるものの、いかなる性格のものであるかを断定するのは現段階ではいささか困難である。出土遺物には当該期の転用硯と思われるものや鉸具があるが、いずれも河道からの出土であり、福満遺跡の遺構の性格を直接的に示しているとは言えない。しかしながら、前代の建物や溝を埋めた後に倉庫と想定される総柱構造の建物を含む掘立柱建物群が広範に広がる状況は、公的あるいは地域の有力豪族の大掛かりな関与が想定される。

竹ヶ鼻廃寺の建造には、出土瓦の検討から、遺隋使および遺唐使など対外関係における活躍の著しい犬上君御田勤に代表される、犬上郡を本拠地とする郡名を負う犬上氏とも想定されている（北村2001）。竹ヶ鼻廃寺遺跡の官衙推定域の井戸SE-27-1から出土した中国大陸や朝鮮半島で用いられていた木葉形の先端を持つ匙は、こうしたつながりをうかがわせる顕著なものとして認識される。一方、特に7世紀以降には耕地開発をはじめ、様々な公的施策が行われることが知られる。

福満遺跡の当該期の一群の遺構の性格や、開発のあり方、詳細な年代などについては、周辺での調査事例の増加を待ち、今後の解明に期待したい。

(8) 福満遺跡8期 一平安時代中期以降の様相一

今回の調査結果の概要 福満遺跡において、前段階で広く展開されていた掘立柱建物群が消え、耕地化が進む時期である。

今回の調査では、平安時代後期の井戸1基（B区井戸S2）、鎌倉時代の井戸1基（C区井戸S52）・溝3条（一連の溝A3区S3・A5区S3、A7区S367・S368）・河道1条（C区河道S270）・複数の素掘り溝が検出された。溝については、犬上郡に広く普及する条里方位N31°E~N34°Eのものがある一方、現行の地割に即したものがある。犬上川に近接することから、条里の普及後に、洪水などで再開発が行われたものとも推定される。

また、一連の河道と判断されるA1区河道S9・A4区河道S24・A7区河道S263・A8区河道S9・D区河道S9については、縄文時代中期~鎌倉時代の時期幅のある多様な遺物を含み、この間に機能していたものと考えられ、鎌倉時代には埋没したと推定される。なお、同河道からは、縄文時代~鎌倉時代までの幅広い時期の土器とともに、土錘や瓦などの土製品、石鎌・磨石・石斧・石鍋等の石製品、丸木弓・斧柄・未成品鋏・曲柄鋏・横槌・堅杵・田下駄・アカスクイ・タモ杵・木錘・杵・杵・布巻具・槽・壺・鳥形・舟形・刀形・斎串・蹴放といった狩猟・漁撈・農耕に関わる用具、織機・容器・馬具・武器・祭具・建築部材などの木製品、種実類・獣骨等の動植物遺体といった、豊富な種類の遺物が出土しており、また鉸具といった古代役人の装身具も含まれていた。これらは現地性に乏しいと判断されるため、遺跡との直接的関係を言及するのは困難であるが、製作技術や、福満遺跡および周辺遺跡の性格等がうかがえる貴重な資料といえる。

周辺遺跡と福満遺跡 これまでの調査では、1次調査でも井戸がみつかった。また、近隣の須川遺跡では平安時代後半の遺構が断片的に捉えられ、西今遺跡では室町時代の掘立柱建物がみつかった。さらに竹ヶ鼻廃寺遺跡で平安時代末~鎌倉時代の整地層が確認され、中世集落の展開が示唆されている。福満遺跡からはやや離れるが、平安時代~鎌倉時代にかけての集落が国

領遺跡や普光寺遺跡、市遺跡などで確認されており、宇曾川流域に所在する妙楽寺遺跡では室町時代の大規模な屋敷跡がみつまっている。今回の調査範囲には当該期の建物遺構などは検出されていないものの、周辺には集落が営まれていた可能性もある。

平安時代後半以降は、県下では条里が普及していく時期でもあり、当該期の遺構はこうした耕地開発の影響があったことが推察される。今後、集落と耕地の関係など、普及期の具体的様相を捉える事例の増加によって明らかになることに期待したい。

第3節 おわりに

福満遺跡は、1918年（大正7年）に、市立城南小学校北側の水田下1 m程から弥生時代後期の壺が出土したことから、遺跡として認知されるようになった。この土器は地元城南小学校に保管されている。最初に発掘調査が行われたのは、1981年（昭和56年）のことで（第1次調査）、市立城南小学校の増改築工事に伴って実施された。以後これまでに、小学校・保育園・宅地造成・個人住宅・公共文化施設などの開発に伴い、2023年までに30次の発掘調査が行われ、縄文時代前期から鎌倉時代までの遺構・遺物を伴う複合遺跡として知られるようになった。その調査結果からは、今回の調査成果を加えた整理によって、現段階で大別して「福満遺跡1期」～「福満遺跡8期」まで、8つの画期を持つことが確認された。

この間には、生活の場が時代とともに変容し、飛鳥時代頃以降の大規模な造成によって、物資の集約・管理などを行う公的性格を帯びた施設となり、その後耕地となっていく様子が明らかになった。古墳時代の集落の展開、飛鳥時代～平安時代前期の広範における施設の造営には、周辺地域を含め地域の有力豪族の存在、渡来系氏族を含む移住民の関与、公的施策などの大掛かりな事業の存在が想定される。

福満遺跡一帯は、河川の形成した自然堤防を含む犬上川右岸の氾濫原にかけて広がっており、低湿な場所に微高地を含む起伏のある地形に立地している。また、犬上川に近接し、東山道の北東1.5kmほどの位置にあり、水陸の物流拠点として優位な位置にあるといえる。そうした立地を十分に活用しながら、集落や墓域、物資集約・管理施設を展開させていったものと理解される。

縄文時代後期以前の具体的様相は不明であるが、前期末の土器が出土することから、今後、福満遺跡および近隣で、当該期の建物など明確な遺構が検出される可能性を残している。また、後期～晩期の土器が多量に出土することから、今後周辺に集落や生業の痕跡が確認される可能性もある。特に晩期末頃の遺物は、地域における稲作農耕文化受容期の様相がうかがえる重要な資料群となっている。

さらに、弥生時代中期には方形周溝墓群からなる墓域が広がり、後期以降は古墳時代後期まで、方形竪穴建物から構成される集落の営まれる様子が捉えられた。

また、飛鳥時代～平安時代前期にかけては、物資の集約や管理を担う公的性格を帯びた施設と推定される掘立柱建物を主体とする建物群が構築される。今回の調査で確認された当該期のN18°W～N35°Wに主軸を持つ建物群は、飛鳥～奈良時代のもので、倉庫と想定される総柱建物が確認されていることから、地域の物流拠点としての機能を担っていたことが推定される。複数の倉庫が建ち並ぶような状況ではなく、一時的保管を行うような施設または、広範囲の物資というより

郷など近隣の物資の集約を担う施設と判断される。

とりわけ飛鳥時代頃の造成とその後の掘立柱建物の建築は、前時代の堅穴建物や溝が埋没した上に行われた大掛かりなものと考えられ、今回の調査区でも広い範囲で認められる。

一方、主軸を造るほぼ正南北方位の掘立柱建物の構築時期は、竹ヶ鼻廃寺遺跡の整地土と遺構の関係を考え合わせると、奈良時代後半～平安時代前期頃に想定される。

福満遺跡およびその周辺で行われた調査成果は、飛鳥時代～平安時代前期にかけて広範囲に大規模事業が行われたことを示しており、先後関係については検討の余地を残すものの、その中心は福満遺跡から竹ヶ鼻廃寺遺跡へと移行したとも捉えられるのである。官衙の施設とされる竹ヶ鼻廃寺遺跡の南北方位を指向する建物群と、福満遺跡の主軸を西に傾ける掘立柱建物群とは、現段階では性格が異なることも考えられる一方、前身施設である可能性を残す。

この時期の建物群は現段階で少なくとも2時期に分けられ、さらに細分される可能性を持つ。また、各時期の性格については課題を残すところである。

平安時代中期以降には耕地化の進む様子が確認された。異なる主軸方位を持つ溝群が複数確認され、条里拡大期からその後の開発の様子がうかがえるものとなった。

このように、福満遺跡とその周辺では、縄文時代の早い段階から生活が営まれ、弥生時代～古墳時代まで集落や墓域を展開させ、飛鳥時代～平安時代前期には公的性格を帯びる施設へと変貌し、平安時代中期以降は耕地へと移り変わっていった。各期の遺構は近接する竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡・西今遺跡・須川遺跡、そして近隣の丁田遺跡でも広がり認められ、これらの遺跡は一連の群として、広い範囲で捉える必要があろう。

福満遺跡の立地する犬上川流域では、1980年代のは場整備に伴う発掘調査を契機に上流部の左岸扇状地における調査事例の増加と詳細な研究が進んでおり、集落や耕地の開発過程の多くが捉えられるようになった。一方、下流部の氾濫原では大規模調査事例も多くはなく、未だ多くが明らかになっていないのが現状である。こうしたなかで、今回の調査では比較的広範な遺構の広がり確認され、福満遺跡の様相の一端を明らかにすることができた。しかしながら、先に指摘したいいくつかの点については、今後も検討を要する課題であり、これについては、調査事例の増加を待ち、犬上川下流域の実態の解明が望まれる。

(中川)

註

- (1) 本章の記述は以下を参考にした(滋賀県埋蔵文化財センター2021・2022・2023、彦根市2007・2020a・2020b・2021a・2021b・2021c・2021d・2022・2023a・2023b・2023c・2023d・2023e、彦根市教育委員会1981a・1981b・1982・1985・1987・1991a・1991b・1996・1997・2004・2008a・2008b・2009・2010a・2010b・2011・2013・2014a・2014b・2014c・2014d・2014e・2015a・2015b・2015c・2016・2017・2018a・2018b・2018c・2019a・2019b・2019c)
- (2) 近年、近畿地方の大半の地域で、弥生時代中期に繁栄した多くの集落の断絶や縮小が認められること、その原因として災害など自然現象の関与が想定されることが認識されるようになっている(中塚2022、宮崎2022、大阪府立弥生文化博物館2023)。

- (3) 『日本書紀』天智天皇四年二月条に「以百濟百姓男女四百餘人 居于近江國神前郡」同・天智八年是歲条に「男女七百餘人遷居 近江國蒲生郡」とあるなど、国策としての渡来系移住民の存在が知られる。
- (4) 建物床面積の縮小と共にカマドが屋外に突出する傾向が指摘されている（宮崎1992）。
- (5) 県内では遺跡から出土する瓦によって70箇所以上の白鳳寺院が存在したとされている（彦根市2007）。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年次順）

- 京拓良（1990）「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』8 奈良大学文学部文化財学科
大阪府立弥生文化博物館（2023）『弥生時代巨大集落の盛衰』
- 大橋信弥2010「小野妹子・犬上御田兼とそのふるさと」『専修大学社会性開発研究センター東アジア世界史研究センター年報4』専修大学社会性開発研究センター
- 北村圭弘（2001）「近江の山田寺式軒丸瓦と犬上氏」『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史』真陽社
- 桐生直彦（2007）「古代堅穴建物遺構の発掘調査方法—奈良文化財研究所研修講義レジュメ」『土壁』第11号 考古学を楽しむ会
- 佐伯英樹（2015）「煉と瓦を使用したカマド」『季刊考古学』131 雄山閣
- 財団法人京都市埋蔵文化財研究所（2006）『平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡』京都市内埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-14
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1986）『は場整備関係遺跡発掘調査報告書13-2 下之郷遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2007）『一般国道8号米原バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書1 入江内湖遺跡1』
- 滋賀県・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（2022）『一般国道8号米原バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書5 矢倉川遺跡』
- 滋賀県埋蔵文化財センター（2021）『塚本遺跡第1次調査』『令和2年度滋賀県埋蔵文化財発掘調査成果報告集』滋賀県埋蔵文化財センター（2022）『塚本遺跡第2次調査』『令和3年度滋賀県埋蔵文化財発掘調査成果報告集』滋賀県埋蔵文化財センター（2023）『塚本遺跡第3次調査』『令和4年度滋賀県埋蔵文化財発掘調査成果報告集』
- 中塚武（2022）「年輪酸素同位体比を用いた弥生・古墳時代の気候・農業生産・人口の変動シミュレーション」『国立歴史民俗博物館研究報告』第231集 国立歴史民俗博物館
- 林昭男（2020）「犬上川右岸福満遺跡における方形周溝墓群の検出と派生する諸問題」『淡海文化財論叢』第十二輯 淡海文化財論叢刊行会
- 彦根市（2007）『新修彦根市史』第1巻通史編 古代・中世
- 彦根市（2020a）『道ノ下遺跡第2次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第81集
- 彦根市（2020b）『福満遺跡第25次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第82集
- 彦根市（2021a）『山之脇遺跡第2次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第83集
- 彦根市（2021b）『福満遺跡第20次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第84集
- 彦根市（2021c）『山之脇遺跡第3次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第85集
- 彦根市（2022）『塚本遺跡第3次発掘調査現地説明会資料』
- 彦根市（2023a）『第1章田遺跡（第6次）』『彦根市内遺跡発掘調査報告書』第89集
- 彦根市（2023b）『第2章福満遺跡（第19次）』『彦根市内遺跡発掘調査報告書』第89集

- 彦根市 (2023c)「第3章須川遺跡(第7次)」「彦根市内遺跡発掘調査報告書」第89集
- 彦根市 (2023d)「第4章須川遺跡(第8次)」「彦根市内遺跡発掘調査報告書」第89集
- 彦根市 (2023e)「第5章須川遺跡(第10次)」「彦根市内遺跡発掘調査報告書」第89集
- 彦根市教育委員会 (1981a)「品井戸遺跡」彦根市埋蔵文化財調査報告書第2集
- 彦根市教育委員会 (1981b)「竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡(第4次)」彦根市埋蔵文化財調査報告書第9集
- 彦根市教育委員会 (1982)「福満遺跡-発掘調査概要報告書-」彦根市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 彦根市教育委員会 (1985)「竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡(第4次)」彦根市埋蔵文化財調査報告書第9集
- 彦根市教育委員会 (1987)「福満遺跡」彦根市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 彦根市教育委員会 (1991a)「福満遺跡第7次調査」彦根市埋蔵文化財調査報告書第20集
- 彦根市教育委員会 (1991b)「竹ヶ鼻廃寺発掘調査報告書」彦根市埋蔵文化財調査報告書第21集
- 彦根市教育委員会 (1996)「竹ヶ鼻廃寺Ⅲ」彦根市埋蔵文化財調査報告書第29-1集
- 彦根市教育委員会 (1997)「神ノ木遺跡」彦根市埋蔵文化財調査報告書第30集
- 彦根市教育委員会 (2004)「新修彦根市史 編さんにとまう彦根市内遺跡・遺物調査報告書」
- 彦根市教育委員会 (2008a)「福満遺跡X・XI」彦根市埋蔵文化財調査報告書第40集
- 彦根市教育委員会 (2008b)「丁田遺跡Ⅰ」彦根市埋蔵文化財調査報告書第43集
- 彦根市教育委員会 (2010a)「竹ヶ鼻廃寺Ⅳ」彦根市埋蔵文化財調査報告書第45集
- 彦根市教育委員会 (2010b)「竹ヶ鼻廃寺Ⅴ・Ⅵ」彦根市埋蔵文化財調査報告書第46集
- 彦根市教育委員会 (2011)「丁田遺跡Ⅱ」彦根市埋蔵文化財調査報告書第48集
- 彦根市教育委員会 (2013)「竹ヶ鼻廃寺Ⅶ」彦根市埋蔵文化財調査報告書第54集
- 彦根市教育委員会 (2014a)「丁田遺跡Ⅲ」彦根市埋蔵文化財調査報告書第57集
- 彦根市教育委員会 (2014b)「第1章西今遺跡1次」「彦根市内発掘調査報告書」彦根市埋蔵文化財調査報告書第58集
- 彦根市教育委員会 (2014c)「第3章須川遺跡(1次)」「第6章須川遺跡(2次)」「彦根市内発掘調査報告書」彦根市埋蔵文化財調査報告書第58集
- 彦根市教育委員会 (2014d)「第4章道ノ下遺跡(1次)」「彦根市内発掘調査報告書」彦根市埋蔵文化財調査報告書第58集
- 彦根市教育委員会 (2014e)「第5章竹ヶ鼻廃寺遺跡(8次・9次)」「彦根市内発掘調査報告書」彦根市埋蔵文化財調査報告書第58集
- 彦根市教育委員会 (2015a)「福満遺跡第12次発掘調査報告書」彦根市埋蔵文化財調査報告書第59集
- 彦根市教育委員会 (2015b)「須川遺跡第3次発掘調査報告書」彦根市埋蔵文化財調査報告書第60集
- 彦根市教育委員会 (2015c)「第2章竹ヶ鼻廃寺遺跡(10次)」「平成25年度彦根市内遺跡発掘調査報告書」彦根市埋蔵文化財調査報告書第63集
- 彦根市教育委員会 (2016)「福満遺跡第15次発掘調査報告書」彦根市埋蔵文化財調査報告書第65集
- 彦根市教育委員会 (2017)「福満遺跡XⅦ」彦根市埋蔵文化財調査報告書第69集
- 彦根市教育委員会 (2018a)「須川遺跡第4次発掘調査報告書」彦根市埋蔵文化財調査報告書第73集
- 彦根市教育委員会 (2018b)「丁田遺跡第7次発掘調査報告書」彦根市埋蔵文化財調査報告書第74集
- 彦根市教育委員会 (2018c)「彦根市内遺跡発掘調査報告書 丁田遺跡第6次」彦根市埋蔵文化財調査報告書第89集

- 彦根市教育委員会（2019a）「第2章福満遺跡（14次）」『平成26年度彦根市内遺跡発掘調査報告書2』彦根市埋蔵文化財調査報告書第76集
- 彦根市教育委員会（2019b）「第4章竹ヶ鼻廃寺遺跡（第11次）」『平成26年度彦根市内遺跡発掘調査報告書2』彦根市埋蔵文化財調査報告書第76集
- 彦根市教育委員会（2019c）「丁田遺跡第10次発掘調査報告書」彦根市埋蔵文化財調査報告書第79集
- 宮崎幹也（1992）「滋賀県下におけるカマドの導入と普及」『滋賀考古』第8号 滋賀考古学研究会
- 宮崎幹也（2021）「古代における五世紀の移住民集落」『淡海文化財論叢』第十三輯 淡海文化財論叢刊行会
- 宮崎幹也（2022）「弥生時代後期における遺跡様相の変化－近江地域の事例から－」『高山流水－赤澤徳明氏退職記念論集』赤澤徳明氏退職記念論集製作委員会
- 望月精司（2007）「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落」『日本考古学』23 日本考古学協会

表1 土器・土製品一覧

表1-3 残存数

発掘層 番号	出土状況		部名	形状	検出数		数量 (個)		重量 (g)	出土 位置	出土 状況	出土 層	出土 時期	備考
	出土 層	出土 位置			口縁 位置	底面 位置								
1	A1区 S5	1/1	口縁	片断	34	-	36/	36/	36/	表	同層ナテ	同層ナテ	同層ナテ	片断
2	A1区 S8	1/1	口縁	片断	9	(7.5)	9/277.1	9/277.1	9/277.1	裏面	同層ナテ	同層ナテ	同層ナテ	片断
3	A1区 S5	1/1	口縁	片断	-	-	2,577.1	8/0	2,577.1	裏面	同層ナテ	同層ナテ	同層ナテ	片断
4	A1区 S5	1/1	口縁	片断	1/4	(7.4)	1075.4/1	8/0	1075.4/1	裏面	同層ナテ	同層ナテ	同層ナテ	片断
5	A1区 S5	1/1	口縁	片断	1/6	(9.3)	1067.4/1	8/0	5,952.1	裏面	同層ナテ	同層ナテ	同層ナテ	片断
6	A1区 S8	1/1	口縁	片断	1/4	(15.4)	2,577.1	8/0	2,577.1	裏面	同層ナテ	同層ナテ	同層ナテ	片断
7	A1区 S8	1/1	口縁	片断	1/1	(9.3)	7.7	38.7	1078.6/1	裏面	同層ナテ	同層ナテ	同層ナテ	片断
8	A1区 S8	1/1	口縁	片断	1/1	(2.25)	8.4	37.7	38.7	裏面	同層ナテ	同層ナテ	同層ナテ	片断
9	A1区 S8	1/1	口縁	片断	1/2	(2.3)	9.0	2,576.1	8/0	2,577.2	裏面	同層ナテ	同層ナテ	片断
10	A1区 S8	1/1	口縁	片断	1/2	(2.4)	9.5	1078.6/2	8/0	1078.6/2	裏面	同層ナテ	同層ナテ	片断
11	A1区 S8	1/1	口縁	片断	1/2	(2.8)	9.0	577.1	8/0	577.1	裏面	同層ナテ	同層ナテ	片断
12	A1区 S8	1/1	口縁	片断	1/1	(2.4)	7.7	38.7	2,577.1	裏面	同層ナテ	同層ナテ	同層ナテ	片断
13	A1区 S8	1/1	口縁	片断	1/4	(10.0)	3.1	9.4)	38.7	8/0	38.7	8/0	同層ナテ	片断
14	A1区 S8	1/1	口縁	片断	1/1	(13.4)	5.6	7,597.1	8/0	7,597.1	8/0	同層ナテ	同層ナテ	片断
15	A1区 S8	1/1	口縁	片断	1/1	(1.7)	4.35	577.1	8/0	577.1	8/0	同層ナテ	同層ナテ	片断
16	A1区 S8	1/1	口縁	片断	1/5	(2.4)	6.3)	2,577.2	8/0	2,577.2	裏面	同層ナテ	同層ナテ	片断
17	A1区 S8	1/1	口縁	片断	1/2	(1.85)	5.3)	576.1	8/0	577.2	8/0	同層ナテ	同層ナテ	片断
18	A1区 S10	1/1	口縁	片断	1/20	(0.2)	0.1)	-	32.7	裏	1078.6/4	12.0.裏面	同層ナテ	片断
19	A1区 S10	1/1	口縁	片断	1/4	(8.8)	1077.3	12.0.裏面	10787.7	12.0.裏面	10787.7	12.0.裏面	同層ナテ	片断
20	A1区 S10	1/1	口縁	片断	2/2	(8.9)	1.8	-	2,576.1	8/0	2,576.1	8/0	同層ナテ	片断
21	A1区 S10	1/1	口縁	片断	1/3	(13.2)	9.4)	-	578.6/4	12.0.裏面	1078.6/2	12.0.裏面	同層ナテ	片断
22	A1区 S9 北テ 0-20m	1/1	口縁	片断	1/3	(13.2)	9.4)	7,597.1	12.0.裏面	7,597.1	12.0.裏面	同層ナテ	同層ナテ	片断
23	A1区 S9 北テ 0-20m	1/1	口縁	片断	1/4	(9.8)	15.5)	-	579.6/6	8/0	2,579.5/4	12.0.裏面	同層ナテ	片断
24	A1区 S9 北テ 0-20m	1/1	口縁	片断	1/3	(16.3)	9.4)	-	579.6/6	8/0	1078.6/2	12.0.裏面	同層ナテ	片断
25	A1区 S9 北テ 0-20m	1/1	口縁	片断	1/7	(12.8)	9.4)	-	579.6/6	8/0	579.6/6	8/0	同層ナテ	片断
26	A1区 S9 北テ 0-20m	1/1	口縁	片断	1/2	(21.6)	9.4)	-	2,579.6/6	8/0	2,579.5/4	12.0.裏面	同層ナテ	片断
27	A1区 S9 北テ 0-20m	1/1	口縁	片断	1/8	(21.8)	9.4)	-	1078.6/4	12.0.裏面	1078.6/4	12.0.裏面	同層ナテ	片断
28	A1区 S9 北テ 0-20m	1/1	口縁	片断	1/5	(22.7)	13.0)	-	1078.6/4	12.0.裏面	1078.6/4	12.0.裏面	同層ナテ	片断
29	A1区 S9 北テ 0-20m	1/1	口縁	片断	1/19	(9.4)	9.4)	-	1078.6/4	12.0.裏面	1078.6/4	12.0.裏面	同層ナテ	片断
30	A1区 S9 北テ 0-20m	1/1	口縁	片断	1/4	(12.6)	2.9	-	36/	裏	36/	同層ナテ	同層ナテ	片断

規格 番号	加工条件		材料	形状	残存底	寸法 (mm)		位置	位置	位置	位置	加工	加工	加工	加工			
	速度	送り				外径	長さ											
125 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.8	鋼板	天板	天板	1.8	-	(0.8)	-	5.975/1	溝	5.975/1	溝	5.975/1	溝	粗削	内径面	
125 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.8	鋼板	側板	側板	-	-	-	-	7.975/1	溝	7.975/1	溝	7.975/1	溝	粗削	側面	
125 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.2	鋼板	側板	側板	1.2	(0.2)	(0.2)	-	3.5/1	溝	3.5/1	溝	3.5/1	溝	粗削	側面	
125 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.2	鋼板	側板	側板	1.2	-	(0.3)	(0.4)	2.977/1	溝	2.977/1	溝	2.977/1	溝	粗削	側面	
125 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.3	鋼板	側板	側板	1.3	-	(0.6)	(0.2)	3.975/1	溝	3.975/1	溝	3.975/1	溝	粗削	側面	
125 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.4	鋼板	側板	側板	1.4	-	(1.0)	1.8	3.78/1	溝	3.78/1	溝	3.78/1	溝	粗削	側面	
125 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	2.3	鋼板	側板	側板	2.3	-	(1.6)	-	10.978/2	溝	10.978/2	溝	10.978/2	溝	粗削	側面	
125 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.3	鋼板	側板	側板	1.3	(0.6)	(4.3)	-	2.977/1	溝	2.977/1	溝	2.977/1	溝	粗削	側面	
125 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.5	鋼板	側板	側板	1.5	-	(0.8)	(15.0)	3.6/1	溝	3.6/1	溝	3.6/1	溝	粗削	側面	
130 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.8	鋼板	側板	側板	1.8	(2.0)	(2.3)	-	2.975/1.6	溝	2.975/1.6	溝	2.975/1.6	溝	粗削	側面	
130 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.6	鋼板	側板	側板	1.6	(1.2)	3.7	-	2.975/1.6	溝	2.975/1.6	溝	2.975/1.6	溝	粗削	側面	
132 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.2	鋼板	側板	側板	1.2	-	(3.2)	6.0	7.978/1.4	溝	7.978/1.4	溝	7.978/1.4	溝	粗削	側面	
133 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.6	鋼板	側板	側板	1.6	-	(3.0)	(0.0)	2.975/1	溝	2.975/1	溝	2.975/1	溝	粗削	側面	
138 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.2	鋼板	側板	側板	1.2	-	(4.0)	(9.0)	10.978/2	溝	10.978/2	溝	10.978/2	溝	粗削	側面	
138 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.2	鋼板	側板	側板	1.2	-	(3.4)	(9.4)	10.978/2	溝	10.978/2	溝	10.978/2	溝	粗削	側面	
138 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.2	鋼板	側板	側板	1.2	(0.5)	(2.9)	(7.1)	10.977/1	溝	10.977/1	溝	10.977/1	溝	粗削	側面	
137 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	3.4	鋼板	側板	側板	3.4	-	(2.4)	7.3	3.77/1	溝	3.77/1	溝	3.77/1	溝	粗削	側面	
138 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	5.8	鋼板	側板	側板	5.8	(14.0)	5.3	8.2	2.978/1	溝	2.978/1	溝	2.978/1	溝	粗削	側面	
139 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.2	鋼板	側板	側板	1.2	(15.1)	4.9	(7.4)	2.977/1	溝	(0.0)	2.977/2	溝	2.977/2	溝	粗削	側面
140 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	2.3	鋼板	側板	側板	2.3	(5.2)	5.3	7.5	10.979/1	溝	10.979/1	溝	10.979/1	溝	粗削	側面	
141 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.1	鋼板	側板	側板	1.1	(15.3)	3.8	8.5	3.77/1	溝	2.977/1	溝	2.977/1	溝	粗削	側面	
142 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.10	鋼板	側板	側板	1.10	(16.0)	(3.4)	-	7.298/1.2	溝	10.973/6	溝	10.973/6	溝	粗削	側面	
142 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.6	鋼板	側板	側板	1.6	(11.0)	(3.7)	-	3.77/1	溝	7.295/2	溝	7.295/2	溝	粗削	側面	
144 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.2	鋼板	側板	側板	1.2	-	(4.0)	(3.0)	2.976/1	溝	2.976/1	溝	2.976/1	溝	粗削	側面	
144 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.4	鋼板	側板	側板	1.4	-	(2.0)	(0.7)	3.6/1	溝	10.975/1	溝	10.975/1	溝	粗削	側面	
146 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	2.9	鋼板	側板	側板	2.9	-	(2.1)	(6.4)	2.978/1	溝	2.978/1	溝	2.978/1	溝	粗削	側面	
147 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.4	鋼板	側板	側板	1.4	-	(2.1)	(7.0)	2.977/1	溝	2.977/1	溝	2.977/1	溝	粗削	側面	
148 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.9	鋼板	側板	側板	1.9	-	(2.0)	(0.4)	10.972/1	溝	10.972/1	溝	10.972/1	溝	粗削	側面	
149 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.1	鋼板	側板	側板	1.1	-	(2.4)	6.6	2.977/1	溝	2.977/1	溝	2.977/1	溝	粗削	側面	
150 A 1 区 50 溝 0 ~ 20mm	0.2	1.1	鋼板	側板	側板	1.1	-	(2.0)	(0.2)	10.977/1	溝	10.977/1	溝	10.977/1	溝	粗削	側面	

規格 番号	加工位置		材料	形状	保存区	寸法 (mm)		重量 (kg)	位置	公差	位置	公差	加工	公差	加工	公差		
	幅	長さ				外径	長さ											
185 A 1 1E	50	0	1.5	10.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
186 A 1 1E	50	0	1.5	9.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
187 A 1 1E	50	0	1.5	8.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
188 A 1 1E	50	0	1.5	7.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
189 A 1 1E	50	0	1.5	6.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
190 A 1 1E	50	0	1.5	5.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
191 A 1 1E	50	0	1.5	4.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
192 A 1 1E	50	0	1.5	3.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
193 A 1 1E	50	0	1.5	2.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
194 A 1 1E	50	0	1.5	1.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
195 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
196 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
197 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
198 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
199 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
200 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
201 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
202 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
203 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
204 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
205 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
206 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
207 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
208 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
209 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼
210 A 1 1E	50	0	1.5	0.0	(1.5)	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	2.5	7.2	鋼	鋼

種別 番号	加工品名 通称		部材	部材名	積存底	在庫量 (kg)		取付	取付 位置	取付 位置	取付 位置	取付 位置	取付 位置			
	品名	数量				計量	単位									
545	A 3 3R	S231	1.800部	部	口継	1.78	(13.2)	(2.3)	-	3.538(6.6)	取	3.538(5.6)	明視鏡	(取付)	取付	取付
545	A 3 3R	S239	1.800部	部	口継	1.74	(16.0)	(5.1)	-	3.538(6.6)	取	3.538(6.6)	取	(取付)	(取付)	取付
545	A 3 3R	S240	1.800部	部	口継	1.19	(20.2)	(4.8)	-	2.538(7.4)	取	2.538(7.4)	取	取	取	取
546	A 3 3R	S271	1.800部	部	口継	1.74	-	(2.0)	-	1038(7.1)	取	1038(7.1)	取	取	取	取
545	A 3 3R	S271	1.800部	部	口継	-	-	(1.3)	-	2.538(7.6)	取	2.538(7.6)	取	取	取	取
546	A 3 3R	S271	1.800部	部	口継	1.75	-	(1.6)	(10.4)	3.538(7.1)	取	3.538(7.1)	取	取	取	取
547	A 3 3R	S427	1.800部	部	口継	1.71	(15.0)	(4.6)	-	2.56(7.4)	取	2.56(7.4)	取	取	取	取
548	A 3 3R	S445	1.800部	部	口継	1.75	(16.0)	(18.4)	-	1038(7.3)	取	1038(7.3)	取	取	取	取
549	A 3 3R	S460	1.800部	部	口継	1.74	(12.0)	(6.7)	-	2.538(6.1)	取	2.538(6.1)	取	取	取	取
550	A 3 3R	S463	1.800部	部	口継	1.71	-	-	-	1038(7.4)	取	1038(7.4)	取	取	取	取
551	A 3 3R	S480	1.800部	部	口継	1.76	(17.0)	(9.0)	-	2.538(7.4)	取	2.538(7.4)	取	取	取	取
552	A 3 3R	S486	1.800部	部	口継	1.72	(13.0)	(4.6)	-	3.538(7.1)	取	3.538(7.1)	取	取	取	取
553	A 3 3R	S499	1.800部	部	口継	-	-	(6.7)	-	1038(6.2)	取	1038(6.2)	取	取	取	取
554	A 3 3R	S270	1.800部	部	口継	1.71	-	-	-	2.538(4.5)	取	2.538(4.5)	取	取	取	取
555	A 4 4R	S211	1.800部	部	口継	1.75	-	(6.0)	(12.0)	3.538(7.1)	取	3.538(7.1)	取	取	取	取
556	A 4 4R	S146	1.800部	部	口継	1.74	(15.9)	(5.1)	-	2.56(7.4)	取	2.56(7.4)	取	取	取	取
557	A 4 4R	S146	1.800部	部	口継	-	-	(6.4)	-	1038(6.2)	取	1038(6.2)	取	取	取	取
558	A 5 5R	S270	1.800部	部	口継	1.77	(14.0)	(3.1)	-	2.538(6.4)	取	2.538(6.4)	取	取	取	取
559	A 3 3R	S270	1.800部	部	口継	1.70	(17.0)	(2.3)	-	2.538(6.4)	取	2.538(6.4)	取	取	取	取
560	A 3 3R	S270	1.800部	部	口継	1.71	-	(6.0)	-	2.538(6.6)	取	2.538(6.6)	取	取	取	取
561	A 3 3R	S472	1.800部	部	口継	1.71	-	(10.1)	-	2.538(7.6)	取	2.538(7.6)	取	取	取	取
562	A 3 3R	S472	1.800部	部	口継	1.74	(13.2)	(3.7)	-	3.538(7.4)	取	3.538(7.4)	取	取	取	取
563	A 3 3R	S472	1.800部	部	口継	1.76	(16.2)	(2.7)	-	1038(8.2)	取	1038(8.2)	取	取	取	取
564	A 3 3R	S472	1.800部	部	口継	1.76	(22.1)	(5.6)	-	3.538(7.6)	取	3.538(7.6)	取	取	取	取
565	A 3 3R	S472	1.800部	部	口継	1.73	(17.0)	(5.4)	-	2.538(5.3)	取	2.538(5.3)	取	取	取	取
566	A 3 3R	S472	1.800部	部	口継	-	-	(3.4)	-	2.538(6.6)	取	2.538(6.6)	取	取	取	取
567	A 5 5R	S472	1.800部	部	口継	-	-	(6.1)	-	3.538(7.6)	取	3.538(7.6)	取	取	取	取
568	A 3 3R	S473	1.800部	部	口継	1.76	(21.2)	(5.0)	-	1038(8.2)	取	1038(8.2)	取	取	取	取
569	A 5 5R	S270	1.800部	部	口継	1.77	(9.2)	(3.5)	-	3.53(7.6)	取	3.53(7.6)	取	取	取	取
570	A 3 3R	S270	1.800部	部	口継	1.76	(13.7)	(3.9)	-	3.53(7.6)	取	3.53(7.6)	取	取	取	取

項目 番号	施設 名称	上1地区 名称	種別	地位	種別記	建築費 (円)		延床 面積	延床 積算	建築 単価	設備 費	設備 積算	設備 単価	設備 積算	設備 単価	設備 積算	設備 単価	備考	地上 用途
						計画	竣工												
371	A 3 39	S279	児童遊園	野	児童遊園	-	132.0	-	2,377.2	児童	3,577.1	児童	3,577.1	児童	3,577.1	児童	児童遊園	児童	
372	A 3 39	S280	児童遊園	野	児童遊園	-	(13.9)	-	593.5	児童	5,177.1	児童	5,177.1	児童	5,177.1	児童	児童遊園	児童	
373	A 3 39	S280 1 甲	上乗遊園	野	児童遊園	-	(13.9)	-	2,578.6(2)	児童	10,938.1	児童	10,938.1	児童	10,938.1	児童	児童遊園	児童	
374	A 3 39	S280 1 甲	児童遊園	野	児童遊園	172	122.2	2.6	5,886.1	児童	2,537.7	児童	2,537.7	児童	2,537.7	児童	児童遊園	児童	
375	A 3 39	S282(S287)	児童遊園	野	児童遊園	174	116.0	0.30	3,935.1	児童	3,190.6	児童	3,190.6	児童	3,190.6	児童	児童遊園	児童	
376	A 3 39	S302(S307)	児童遊園	野	児童遊園	178	99.0	0.20	3,777.1	児童	327.1	児童	327.1	児童	327.1	児童	児童遊園	児童	
377	A 3 39	S289	児童遊園	野	児童遊園	176	-	(1.4)	100.6	児童	3,197.7	児童	3,197.7	児童	3,197.7	児童	児童遊園	児童	
378	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	172	100.40	5.0	5,777.1	児童	5,777.1	児童	5,777.1	児童	5,777.1	児童	児童遊園	児童	
379	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	178	122.2	3.6	388.1	児童	10,938.1	児童	10,938.1	児童	10,938.1	児童	児童遊園	児童	
380	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	174	122.0	0.21	353.1	児童	3,190.6	児童	3,190.6	児童	3,190.6	児童	児童遊園	児童	
381	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	174	122.2	(3.30)	3,190.6	児童	327.1	児童	327.1	児童	327.1	児童	児童遊園	児童	
382	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	172	122.8	4.1	3,578.1	児童	7,578.7	児童	7,578.7	児童	7,578.7	児童	児童遊園	児童	
383	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	174	133.6	(3.30)	3,190.6	児童	355.1	児童	355.1	児童	355.1	児童	児童遊園	児童	
384	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	174	132.2	2.9	356.1	児童	377.1	児童	377.1	児童	377.1	児童	児童遊園	児童	
385	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	174	122.0	(3.3)	327.1	児童	377.1	児童	377.1	児童	377.1	児童	児童遊園	児童	
386	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	172	133.0	2.8	3,577.1	児童	356.1	児童	356.1	児童	356.1	児童	児童遊園	児童	
387	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	173	133.0	3.6	388.1	児童	367.1	児童	367.1	児童	367.1	児童	児童遊園	児童	
388	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	173	133.6	6.3	3,578.6	児童	2,578.6	児童	2,578.6	児童	2,578.6	児童	児童遊園	児童	
389	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	172	131.2	3.4	2,378.2	児童	356.1	児童	356.1	児童	356.1	児童	児童遊園	児童	
390	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	173	103.3	3.6	3,576.1	児童	377.1	児童	377.1	児童	377.1	児童	児童遊園	児童	
391	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	172	131.2	2.9	3,577.1	児童	10,937.2	児童	10,937.2	児童	10,937.2	児童	児童遊園	児童	
392	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	174	112.2	4.0	3,577.1	児童	327.1	児童	327.1	児童	327.1	児童	児童遊園	児童	
393	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	174	112.2	2.3	10,936.4	児童	2,377.3	児童	2,377.3	児童	2,377.3	児童	児童遊園	児童	
394	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	172	103.0	(3.3)	367.1	児童	367.1	児童	367.1	児童	367.1	児童	児童遊園	児童	
395	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	178	112.2	4.0	2,577.1	児童	2,577.1	児童	2,577.1	児童	2,577.1	児童	児童遊園	児童	
396	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	173	133.6	4.3	5,193.1	児童	3,190.6	児童	3,190.6	児童	3,190.6	児童	児童遊園	児童	
397	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	174	114.0	(3.2)	10,936.2	児童	2,577.1	児童	2,577.1	児童	2,577.1	児童	児童遊園	児童	
398	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	172	131.0	(3.0)	327.1	児童	356.1	児童	356.1	児童	356.1	児童	児童遊園	児童	
399	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	174	114.0	(3.4)	3,576.1	児童	3,576.1	児童	3,576.1	児童	3,576.1	児童	児童遊園	児童	
400	A 3 39	S145	児童遊園	野	児童遊園	172	114.3	2.7	327.1	児童	2,377.1	児童	2,377.1	児童	2,377.1	児童	児童遊園	児童	

附表2 石製品一覧

* (数値): 残存値

掲載番号	出土地点		種類	法量			備考
	地区	道標		長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	
S 1	A 1区	S 10	砥石	(6.2)	5.4	2.0	93.5
S 2	A 1区	S 9	北平 0~20cm	8.1	3.3	1.7	78.9
S 3	A 1区	S 9	北平 0~20cm	10.6	12.2	5.6	1067.7
S 4	A 1区	S 9	南平 0~20cm	口径 (20.0)	高さ (4.1)	—	216.4
S 5	A 1区	S 9	南平 0~20cm	(6.1)	(5.0)	2.6	103.5
S 6	A 1区	S 9	南平 0~20cm	7.0	5.0	2.3	131.0
S 7	A 1区	S 9	南平 0~20cm	(6.1)	(6.0)	2.9	129.6
S 8	A 1区	S 9	南平 0~20cm	(12.1)	7.5	(4.0)	418.3
S 9	A 1区	S 9	南平 0~20cm	15.0	11.8	5.0	1604.3
S 10	A 1区	S 9	南平 20~40cm	3.3	2.6	1.0	7.2
S 11	A 1区	S 9	南平 20~40cm	4.2	6.3	1.4	34.7
S 12	A 1区	S 9	南平 20~40cm	10.2	11.7	6.5	1138.9
S 13	A 1区	S 9	南平 20~40cm	4.9	5.3	3.3	111.6
S 14	A 1区	S 9	南平 20~40cm	10.5	2.0	2.2	82.9
S 15	A 1区	S 9	南平 20~40cm	(4.5)	4.5	1.5	28.5
S 16	A 1区	S 9	南平 20~40cm	(4.7)	3.4	2.7	63.8
S 17	A 1区	S 9	南平 40~60cm	(11.5)	7.3	5.8	680.2
S 18	A 1区	S 9	南平 40~60cm	11.9	(8.7)	6.4	869.1
S 19	A 1区	S 9	南平 40~60cm	(16.6)	7.6	3.9	613.6
S 20	A 1区	S 9	南平 40~60cm	(10.6)	(6.8)	3.1	344.4
S 21	A 1区	S 9	南平 40~60cm	(11.8)	6.2	3.7	352.1
S 22	A 1区	S 9	南平 60~80cm	3.5	6.8	0.8	18.1
S 23	A 1区	S 9	南平 60~80cm	7.2	8.7	5.2	465.8
S 24	A 1区	S 9	南平 60~80cm	器高 (4.1)	幅 (4.9)	2.3	85.9
S 25	A 2区	S 2	1層	2.5	1.8	0.6	2.8
S 26	A 2区	S 2	1層	(10.8)	(8.9)	(5.2)	493.2
S 27	A 2区	S 2	2層	11.9	5.8	3.4	292.1
S 28	A 2区	S 16		2.1	2.7	0.6	3.2
S 29	A 2区	精走		13.2	12.8	9.0	1992.8
S 30	A 3区	S 1	管玉	3.9	0.4	0.4	1.2

掲載番号	出土地点		種類	法量			備考
	地区	遺構		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	
S 31	A 3 区	S 3	砥石	(7.2)	(106)	(4.6)	360.9
S 32	A 3 区	S 201	石鏝	2.5	1.5	0.3	0.9
S 33	A 8 区	S 9	磨石・砥石	10.1	8.2	4.5	683.5
S 34	A 8 区	S 9	磨石・砥石	12.9	(9.4)	7.0	1125.7
S 35	A 8 区	S 9	砥石	(10.1)	13.4	6.5	1231.9
S 36	A 8 区	S 9	剥片	5.7	6.1	1.3	41.7
S 37	A 8 区	S 9	石鏝	(8.5)	(11.0)	2.0	326.9
S 38	A 8 区	S 9	下層有残貫層0~20cm	12.5	7.2	5.0	560.3
S 39	A 8 区	S 9	磨製石斧	9.9	8.6	1.8	300.6
S 40	C 区	S 52	砥石	31.4	9.3	11.4	5020.0
S 41	C 区	S 271	砥石	9.8	7.0	4.4	514.9
S 42	D 区	S 9	磨石・砥石	8.5	9.0	5.2	630.8
S 43	D 区	S 9	砥石	(10.3)	(9.7)	4.5	516.3

付表3 金属製品一覧

* (数値) : 残存値

掲載番号	出土地点		種類	法量			備考
	地区	遺構		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	
M 1	A 1 区	S 2	鉄洋	8.1	4.3	5.1	165.8
M 2	A 1 区	S 9	曲半 40~60cm	(3.1)	2.5	0.1	4.9
M 3	A 1 区	S 9	曲半 60~80cm	17.0	(3.8)	1.0	13.8
M 4	A 1 区	S 9	曲半 60~80cm	15.1	2.1	0.8	20.9
M 5	A 1 区	S 9	曲半 60~80cm	6.5	5.1	2.6	136.1
M 6	A 2 区	S 3	釘	(3.7)	0.5	0.5	1.9
M 7	A 2 区	S 3	用途不明	(5.7)	1.7	0.6	8.8
M 8	A 2 区	S 4	洋	5.7	5.9	2.5	79.7
M 9	A 3 区	S 8	釘	5.9	0.5	0.4	2.5
M 10	A 2 区	S 378	刀子	(8.1)	(1.3)	0.4	13.9
M 11	A 5 区	S 346	釘	5.4	1.6	0.9	10.1
M 12	A 8 区	S 9	中層砂層	7.6	0.9	0.6	3.8
M 13	A 8 区	S 9	中層砂層	10.1	(0.9)	0.5	8.4

付表4 木製品一覧

* (数値) : 残存値

掲載番号	地区		種別	器 種	長	幅・径	厚・高	樹 種	備 考
	期区	市上地点							
W 1	A 1区	S 8 北平 0~20cm	政事用具	下 蓋	(10.4)	0.7	0.3		
W 2	A 1区	S 9 北平 0~20cm	風呂	仲留山下 蓋	8.0	(40.5)	1.5	スズ	
W 3	A 1区	S 9 北平 0~20cm	風呂	仲留山下 蓋	(24.1)	3.7	3.3	ヒノキ属	
W 4	A 1区	S 9 北平 0~20cm	枳殻風呂	下 蓋	(36.4)	7.2	3.5	ヒノキ属	
W 5	A 1区	S 9 北平 0~20cm	枳殻	槽	(7.6)	5.3	2.2	アサナシノ木属	
W 6	A 1区	S 9 北平 0~20cm	枳殻	曲物底板	(33.6)	(13.4)	1.4	アサナシノ木属	
W 7	A 1区	S 9 北平 0~20cm	枳殻	曲物底板	(13.6)	(5.5)	0.8		
W 8	A 1区	S 9 北平 0~20cm	枳殻	曲物底板	径 (14.0)		0.8		
W 9	A 1区	S 9 北平 0~20cm	枳殻	ミカノ型材	(102.2)	12.8	11.8	アサナシノ木属	未製品
W 10	A 1区	S 9 北平 0~20cm	枳殻	ミカノ型材	(56.1)	14.2	11.4	アサナシノ木属	未製品
W 11	A 1区	S 9 北平 0~20cm	枳殻	ミカノ型材	31.9	13.8	10.5	アサナシノ木属	未製品
W 12	A 1区	S 9 北平 0~20cm	枳殻	作業台	41.3	11.3	3.6	スズ	
W 13	A 1区	S 9 北平 0~20cm	枳殻	板材	68.9	10.4	3.1	アサナシノ木属	
W 14	A 1区	S 9 北平 0~20cm	枳殻	角材	(53.3)	5.0	2.0	ヒノキ属	
W 15	A 1区	S 9 北平 0~20cm	枳殻	角材	(72.7)	3.7	1.9		
W 16	A 1区	S 9 北平 0~20cm	風呂	櫛えさし	(24.5)	1.8	1.3		
W 17	A 1区	S 9 北平 20~40cm	風呂	アカスライ	32.1	13.1	6.6	ヒノキ属	
W 18	A 1区	S 9 北平 20~40cm	枳殻	曲物底板	径 (8.5)	0.6	0.2	アサナシノ木属	
W 19	A 1区	S 9 北平 20~40cm	枳殻	板材	6.4	19.1	4.2	スズ	
W 20	A 1区	S 9 北平 20~40cm	枳殻	巾	20.4	1.0	1.0	ヒノキ属	
W 21	A 1区	S 9 北平 20~40cm	枳殻	巾	45.7	1.2	0.9	アサナシノ木属	
W 22	A 1区	S 9 北平 20~40cm	枳殻	柱	(60.9)	径6.1		アサナシノ木属	
W 23	A 1区	S 9 北平 40~60cm	枳殻	杵	54.0	4.2	2.7	スズ	
W 24	A 1区	S 9 北平 40~60cm	枳殻	曲柄平槌	15.2	6.3	1.6	アサナシノ木属	
W 25	A 1区	S 9 北平 40~60cm	枳殻	木槌	13.3	7.7	4.0	ヒノキ属	
W 26	A 1区	S 9 北平 40~60cm	枳殻	木槌	5.3	(7.9)	1.1	フハキ属	
W 27	A 1区	S 9 北平 40~60cm	枳殻	巾	54.0	1.8	1.5	スズ	
W 28	A 1区	S 9 北平 40~60cm	枳殻	角材	54.2	5.2	2.7	フハキ属	
W 29	A 1区	S 9 北平 40~60cm	枳殻	角材	30.8	3.5	3.4	スズ	
W 30	A 1区	S 9 北平 40~60cm	用途不明	板材	26.2	5.5	0.9	ヒノキ属	
W 31	A 1区	S 9 南平 0~20cm	枳殻	曲物底板	径 (14.0)	0.7		アサナシノ木属	
W 32	A 1区	S 9 南平 0~20cm	枳殻	曲物底板	径 (15.7)	高さ (3.7)		トネノキ	
W 33	A 1区	S 9 南平 0~20cm	枳殻	蓋巾	13.3	3.4	0.6	スズ	
W 34	A 1区	S 9 南平 0~20cm	枳殻	巾	44.0	2.3	2.4	ヒノキ属	
W 35	A 1区	S 9 南平 0~20cm	枳殻	巾	(51.4)	2.0	1.9	ヒノキ属	
W 36	A 1区	S 9 南平 0~20cm	枳殻	巾	(69.1)	2.3	1.3	スズ	
W 37	A 1区	S 9 南平 20~40cm	枳殻	枳	(111.5)	径7.6			
W 38	A 1区	S 9 南平 20~40cm	枳殻	木槌	6.8	17.8	2.4	ヒノキ属	
W 39	A 1区	S 9 南平 20~40cm	枳殻	下 蓋	(8.5)	(4.2)	3.0	スズ	
W 40	A 1区	S 9 南平 20~40cm	枳殻	蓋巾	(16.3)	3.4	2.0	ヒノキ属	
W 41	A 1区	S 9 南平 20~40cm	枳殻	蓋	21.3	0.6	0.4	ヒノキ属	
W 42	A 1区	S 9 南平 20~40cm	枳殻	板材	(36.3)	(9.5)	1.2	スズ	

掲載番号	地区		種別	器種	長さ	法器 (cm)		厚・高	材質	備考
	地区	種別				径	幅・径			
W 43	A 1区	S 9	南平 20~40cm	用材	(45.4)	径1.9			イヌマキ	
W 44	A 1区	S 9	南平 20~40cm	杵		径12.3		0.9	ヒノキ	
W 45	A 1区	S 9	南平 20~40cm	杵	30.9	1.4		1.0	ヒノキ	
W 46	A 1区	S 9	南平 40~60cm	曲物	(76.1)	(23.1)		3.5	アカガシ重丸	
W 47	A 1区	S 9	南平 40~60cm	曲物	7.8	(6.3)		0.6	アスナロ	
W 48	A 1区	S 9	南平 40~60cm	曲物	(14.2)	径(15.0)		0.3	ヒノキ	
W 49	A 1区	S 9	南平 40~60cm	曲物	(14.6)	径(15.2)		0.8	スギ	
W 50	A 1区	S 9	南平 40~60cm	杵	(36.0)	径(36.0)		1.3	スギ	
W 51	A 1区	S 9	南平 40~60cm	杖身	(22.6)	(6.2)		2.7	ヒノキ	台の厚さ1.6
W 52	A 1区	S 9	南平 40~60cm	杖身	(22.6)	(5.6)		2.1	スギ	台の厚さ1.6
W 53	A 1区	S 9	南平 40~60cm	杖身	(22.6)	(8.2)		1.4	ヒノキ	台の厚さ1.2
W 54	A 1区	S 9	南平 40~60cm	杖身	(21.0)	0.6		0.4	ヒノキ	
W 55	A 1区	S 9	南平 40~60cm	杖身	(19.8)	0.5		0.4	ヒノキ	
W 56	A 1区	S 9	南平 40~60cm	杖身	(19.8)	0.5		0.4	アスナロ	
W 57	A 1区	S 9	南平 40~60cm	扇	32.5	2.7		1.6	ヒノキ	
W 58	A 1区	S 9	南平 40~60cm	扇	(48.1)	2.6		1.4	ヒノキ	
W 59	A 1区	S 9	南平 40~60cm	扇	(38.7)	2.9		1.5	スギ	
W 60	A 1区	S 9	南平 40~60cm	扇	24.9	1.5		1.1	スギ	
W 61	A 1区	S 9	南平 40~60cm	扇	11.1	2.7		1.0	アスナロ	
W 62	A 1区	S 9	南平 40~60cm	扇	17.4	(6.2)		0.8	スギ	
W 63	A 1区	S 9	南平 40~60cm	扇	(29.4)	5.1		(3.6)	スギ	
W 64	A 1区	S 9	南平 40~60cm	扇	(43.9)	4.3		1.0	アスナロ	
W 65	A 1区	S 9	南平 40~60cm	扇	16.4	8.9		3.9	アスナロ	
W 66	A 1区	S 9	南平 60~80cm	扇	(18.8)	4.5		0.9	スギ	
W 67	A 1区	S 9	南平 60~80cm	扇	(18.8)	11.5		3.5	アスナロ	未製品
W 68	A 1区	S 9	南平 60~80cm	扇	(7.7)	(3.8)		(2.2)	ヒノキ	
W 69	A 1区	S 9	南平 60~80cm	扇	(30.2)	1.3		1.0	ヒノキ	
W 70	A 1区	S 9	南平 60~80cm	扇	18.9	5.0		2.8	アスナロ	
W 71	A 1区	S 9	南平 60~80cm	扇	23.4	2.2		1.6	ヒノキ	
W 72	A 1区	S 9	南平 60~80cm	扇	12.9	4.0		0.5	スギ	
W 73	A 1区	S 9	南平 60~80cm	扇	(23.7)	3.7		0.3	ヒノキ	
W 74	A 1区	S 9	南平 60~80cm	扇	(18.0)	4.9		0.8	ヒノキ	
W 75	A 1区	S 9	南平 60~80cm	扇	220.2	21.5		(5.1)	アカガシ重丸	未製品
W 76	A 1区	S 9	南平 80cm~扇下脚	扇	(3.7)	(3.1)		1.4	ヒノキ	
W 77	A 1区	S 9	南平 80cm~扇下脚	扇	(17.8)	(3.7)		(2.1)	ヒノキ	
W 78	A 1区	S 9	南平 80cm~扇下脚	扇	(31.7)	(2.9)		1.2	アスナロ	
W 79	A 1区	S 9	南平 80cm~扇下脚	扇	49.6	径3.7				
W 80	A 1区	S 9	南平 80cm~扇下脚	扇	30.9	径6.0				
W 81	A 8区	S 9	中国の扇	扇	(20.8)	径4.1		径(小) 2.8	ヒイラギ	
W 82	A 8区	S 9	中国の扇	扇	23.6	4.7		3.4	アカガシ重丸	
W 83	A 8区	S 9	中国の扇	扇	7.9	16.0		4.0	ヒノキ	
W 84	A 8区	S 9	中国の扇	扇	8.3	12.5		4.0	ヒノキ	
W 85	A 8区	S 9	中国の扇	扇	(19.9)	3.5		2.7	アスナロ	
W 86	A 8区	S 9	中国の扇	扇						

掲載番号	出土地点		種別	器種	長さ	法量 (cm)		厚・高	胴 積	備 考
	地区	遺構				幅・径	高さ			
W 87	A 8区	S9	中国の層	赤漆片	(30.4)	4.4	2.3			
W 88	A 8区	S9	中国の層	赤漆片	21.7	16.8	4.8		カエラ	
W 89	A 8区	S9	中国の層	木皿		径(27.0)	1.7		スズ	
W 90	A 8区	S9	中国の層	青砂	(32.7)	(11.1)	高さ(6.1)		スズ	
W 91	A 8区	S9	中国の層	青砂	(59.7)	(15.0)	1.5		アスナロ皿	附51.2
W 92	A 8区	S9	中国の層	曲物底板	65.2	(10.9)	1.4		アスナロ皿	
W 93	A 8区	S9	中国の層	曲物底板	39.7	6.6	0.8		アスナロ皿	
W 94	A 8区	S9	中国の層	青砂		径24.0	1.0		アスナロ皿	
W 95	A 8区	S9	中国の層	青砂		径15.7	0.8		アスナロ皿	
W 96	A 8区	S9	中国の層	青砂		径(17.8)	1.1		コウキヤキ	
W 97	A 8区	S9	中国の層	青砂	(14.2)	(4.0)	0.5			
W 98	A 8区	S9	中国の層	青砂		径(11.3)	0.7		スズ	
W 99	A 8区	S9	中国の層	曲物底板		5.2	0.4		スズ	
W 100	A 8区	S9	中国の層	曲物底板	11.2	3.0	0.5		スズ	
W 101	A 8区	S9	中国の層	曲物底板	(9.4)	2.8	0.6		スズ	
W 102	A 8区	S9	中国の層	漆面下駄	(26.5)	15.4	3.2		ヒノキ皿	
W 103	A 8区	S9	中国の層	漆面下駄	(24.2)	(4.3)	0.9		ヒノキ皿	
W 104	A 8区	S9	中国の層	漆面下駄	(28.5)	(9.0)	2.3		ヒノキ皿	
W 105	A 8区	S9	中国の層	青砂	22.9	2.3	0.9		スズ	
W 106	A 8区	S9	中国の層	青砂	39.1	1.6	1.0		スズ	
W 107	A 8区	S9	中国の層	彫形	36.5	4.7	2.0		スズ	
W 108	A 8区	S9	中国の層	彫形	(7.9)	1.4	0.3		スズ	
W 109	A 8区	S9	中国の層	漆面	(14.8)	1.8	1.1		スズ	
W 110	A 8区	S9	中国の層	武器	丸太子	(68.3)	2.1	1.6	イヌナギ	
W 111	A 8区	S9	中国の層	細工物	用度不明	6.8	8.5	2.6	アスナロ皿	
W 112	A 8区	S9	中国の層	用兵	へう	(33.7)	8.5	1.3	スズ	
W 113	A 8区	S9	中国の層	高杯	漆片	31.9	2.5	1.9	スズ	
W 114	A 8区	S9	中国の層	漆片	漆片	(20.2)	2.0	2.0	スズ	
W 115	A 8区	S9	中国の層	漆片	漆片	18.3	2.0	1.1	アスナロ皿	
W 116	A 8区	S9	中国の層	漆片	角柱	74.5	6.1	2.0	スズ	
W 117	A 8区	S9	中国の層	漆片	板材	13.0	12.3	4.2	スズ	
W 118	A 8区	S9	中国の層	漆片	角柱	2.5	4.2	1.5	スズ	
W 119	A 8区	S9	中国の層	漆片	板材	(8.6)	4.8	1.2	スズ	
W 120	A 8区	S9	中国の層	漆片	角柱	23.5	8.7	5.9	スズ	
W 121	A 8区	S9	中国の層	漆片	髹まじし	53.0	1.9	1.3	スズ	
W 122	A 8区	S9	中国の層	漆片	髹まじし	42.7	2.0	1.1	スズ	
W 123	A 8区	S9	中国の層	漆片	髹まじし	21.4	1.3	0.7	スズ	
W 124	A 8区	S9	中国の層	漆片	髹まじし	15.4	1.3	1.3	スズ	
W 125	A 8区	S9	中国の層	用度不明	用度不明	(10.3)	5.0	1.6	スズ	
W 126	A 8区	S9	中国の層	用度不明	用度不明	8.5	6.9	4.2	スズ	
W 127	A 8区	S9	中国の層	用度不明	用度不明	(1.9)	(9.6)	0.5	アスナロ皿	
W 128	A 8区	S9	中国の層	用度不明	用度不明	(14.2)	3.5	1.1	アスナロ皿	
W 129	A 8区	S9	中国の層	用度不明	用度不明	16.1	1.8	1.8	アスナロ皿	
W 130	A 8区	S9	中国の層	用度不明	用度不明	12.8	2.7	0.7	スズ	

掲載番号	出土地点		種別	器 種	法量 (cm)			樹 模	備 考
	地区	遺構			長	幅・径	厚・高		
W 131	A 8 区	S 9	中層の層	用途不明	(8.3)	1.7	0.6	スギ	
W 132	A 8 区	S 9	中層の層	用途不明		3.8	(3.0)	ワハキ風	
W 133	A 8 区	S 9	中層の層	用途不明	(31.3)	1.5	0.6	ヒノキ風	
W 134	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	長さ32.5	4.0	2.3	ヒノキ風	
W 135	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	(25.4)	径(小)5.7	径(小)3.0	アカガクシ風	
W 136	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	木製	8.5	11.7	4.7	アスナロ風	
W 137	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	木製	8.1	15.9	3.5	ヒノキ風	
W 138	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	木製	(41.3)	3.9	3.3	アスナロ風	
W 139	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅	15.8	11.1	高さ4.5	ヒノキ風	
W 140	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅	73.4	35.0	13.4	ケヤキ	厚3.6 磨付
W 141	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	漆器	(27.7)	(10.5)	5.1	ヒノキ風	
W 142	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	漆器	107.3	26.2	7.5	ヒノキ風	縦板し
W 143	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	52.2	2.8	0.7	アスナロ風	
W 144	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製		高さ1.2		ヒノキ風	
W 145	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製		高さ1.2		ヒノキ風	
W 146	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	31.7	(12.5)	2.1	アスナロ風	
W 147	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	29.4	(7.2)	4.3	アスナロ風	
W 148	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	26.9	1.9	1.8	アスナロ風	
W 149	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	(94.6)	3.7	2.9	アスナロ風	
W 150	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	28.3	2.2	1.3	スギ	
W 151	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	(22.3)	2.3	2.7	スギ	
W 152	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	30.7	1.9	1.0	アスナロ風	
W 153	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	13.8	2.0	1.3	マツ風	
W 154	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	16.3	1.7	1.1	ヒノキ風	
W 155	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	16.5	1.9	1.1	ヒノキ風	
W 156	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	14.5	2.0	1.2	アスナロ風	
W 157	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	22.7	1.6	1.7	ヒノキ風	
W 158	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	銅製	13.1	1.8	1.4	ヒノキ風	
W 159	A 8 区	S 9	下層有機質層40~20cm	用途不明	(18.9)	8.0	2.8	スギ	
W 160	A 8 区	S 9	下層有機質層20~40cm	木皿	(24.5)	(3.7)	2.0		
W 161	A 8 区	S 9	下層有機質層20~40cm	木皿	28.1	(5.2)	1.7	スギ	
W 162	A 8 区	S 9	下層有機質層20~40cm	銅	23.2	2.1	(1.1)	アスナロ風	
W 163	A 8 区	S 9	下層有機質層20~40cm	銅	(9.9)	1.7	1.6	ヒノキ風	
W 164	A 8 区	S 9	下層有機質層20~40cm	銅製	(86.9)	径3.1	1.5	アスナロ風	
W 165	A 8 区	S 9	下層有機質層20~40cm	銅製		高さ1.1		イヌギ	
W 166	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm	銅製	(10.4)	(5.4)	1.1	アカガクシ風	
W 167	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm	銅製	(25.3)	10.0	1.4	アカガクシ風	
W 168	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm	木製	9.2	17.0	6.0	アスナロ風	
W 169	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm	銅製	(29.3)	4.5	3.4	アスナロ風	
W 170	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm	銅製	(40.4)	径1.9		イヌギ	
W 171	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm	銅製	50.3	磨付1.6		イヌギ	
W 172	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm	銅製	(90.1)	4.0	5.0	ヒノキ風	
W 173	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm	銅	126.6	2.7	2.2	アスナロ風	
W 174	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm	銅	(32.0)	1.7	0.9	モミ風	

掲載番号	地区		出土地点	遺構	種別	器種	長さ	法量 (cm)	厚・高	樹種	備考
	A 8 区	S 9									
W 175	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	漆材	(46.1)	3.3	3.1	ヒノキ属	
W 176	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	漆材	(18.8)	4.5	1.8	スギ	
W 177	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	懸えさし	27.5	1.6	1.0	アスナロ属	
W 178	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	懸えさし	29.7	2.1	0.8	アスナロ属	
W 179	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	用途不明	24.0	6.9	3.1	アカガシ亜属	
W 180	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	用途不明	48.7	2.1	1.4	ヒノキ属	
W 181	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	輪受け台	20.6	27.8	8.1	カエデ属	
W 182	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	漆	(92.4)	(4.8)	2.8	スギ	
W 183	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	漆	29.1	(25.3)	2.7	スギ	
W 184	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	高材	(60.0)	4.3	2.9	スギ	
W 185	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	刀形	51.8	2.5	1.1	スギ	
W 186	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	夕立体	(45.9)	榎19.6	(1.3)	イヌガヤ	
W 187	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	碗状	13.5	(10.5)	2.9	ヒノキ属	
W 188	A 8 区	S 9	下層有機質層40~60cm		漆器	丸小	(80.7)	2.1	1.6	イヌガヤ	
W 189	C 区	S 270	下層有機質層120~140cm		漆器	漆	20.9	5.2	4.6	アカガシ亜属	
W 190	C 区	S 271			漆器	漆	(6.3)	3.1	2.0	アカガシ亜属	
W 191	D 区	S 9	15層		漆器	曲物底板	(18.2)	(4.6)	0.7	スギ	
W 192	D 区	S 9	28層		漆器	曲物底板	(8.2)	(1.7)	0.5		
W 193	D 区	S 9	28層		漆器	曲物底板	(10.5)	2.0	0.6	スギ	
W 194	D 区	S 9	28層		漆器	漆	13.3	3.2	1.5	スギ	
W 195	D 区	S 9	28層		漆器	用途不明					
W 196	A 3 区	S 3	0~40cm		漆器	漆器		9.5			熊河につき土層ごと保存処理
W 197	A 3 区	S 3	0~40cm		漆器	漆器		9.3			熊河につき土層ごと保存処理
W 198	A 3 区	S 3	0~40cm		漆器	漆器		(12.0)			熊河につき土層ごと保存処理
W 199	A 3 区	S 3	0~40cm		漆器	漆器		(12.0)			熊河につき土層ごと保存処理

